
バッドエンド・ファンタジー・ワールド

からあげレモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バッドエンド・ファンタジー・ワールド

【Nコード】

N4347P

【作者名】

からあげレモン

【あらすじ】

この小説は北欧神話をベースとしたファンタジー世界を舞台としたオリジナル小説です。

オリジナルの世界でオリジナルの登場人物たちがオリジナルの物語を繰り広げる。そんな小説です。

と、いっても話のパーツパーツやストーリーの材料はどこかで見たありふれたものです。

「勇者」がいて「魔王」がいて、助けを求める人がいて、冒険があるって、世界の平和が訪れる。

しかし、この物語は、それらのパーツや材料をわざと間違っ組み立てた物語です。

間違っているから正しく機能しない。エラーを起こしてしまった物語です。

勇者は勇者でありながら許されない罪を犯して、不安定な精神と殺伐とした現実をさまよい歩き。

魔王は可愛いドレスに身を包み、何もかもから浮遊しながら世界を掌握せんとほくそ笑みます。

助けを求める人々はもはや過去のものです。

なにせもう世界に平和が訪れているのですから。少なくとも人の視界から見える範囲内では。

ですが、この物語の筋道は至極単純なありふれたものです。たとえばやり方を間違えていたとしても。

これは、ひとりの少女が多くの苦難を乗り越えていく物語です。

これは、ひとりの少女が世界を救う物語です。

これは、ひとりの少女がもう一度ひとりの人間として立ち直り、そして大人になっていく物語です。

ブログ（前書き）

この作品はarcadiaでも投稿されている作品です。

ブローグ

メルカトル大砂海 大陸西部に広がる唯一にして
最大の砂漠地帯である。

開拓時代、数多くの冒険家たちがこの砂の海に
露と消えたことから、

畏敬と、そしてその恐怖を忘れぬよう「死の砂漠」と
も呼ばれている。

砂の形質はさらさらとして細かく、旅慣れた冒険者でも踏
破にはかなりの危険が伴う。

大陸を旅する者を束ねる『ロードスギルド』の記録では致死
率は『最高』とされている。

生息するモンスターはその過酷な環境に適応し、
一様に強靱で凶暴。

太古からその姿を変えていない大型種のモンスターが多
く生息するとされている。

王立図書館に蔵書された伝承を参照すると「砦をひと呑みするほどの巨大なワーム状生物」が、

今もその砂の下に息づいていると伝えられている　その
巨大な顎あぎとを隠して。

それでも、その道ならぬ砂の海を横断せんとするものが後を絶たないのは、

ついにこの大陸が「魔王」の脅威から解放されたからである。

侵攻から逃れ、そして故郷
へ帰る者。

荒れ果てた西部を復興しようとする者、一攫千金を狙って
大荷物を背負って赴く者。

その思惑は様々だが、人々は一様に明るく、これまでの重圧から解放された表情をしている。

これは魔王とその配下による侵略　人魔大戦を、人が、勇者が
勝利をおさめたのちの時代。

……その中でけっして許されぬ罪を背負い、心に
深く癒されぬ傷を負って。

裏切り者、臆病者として謗られ、それでも戦い続けた
ひとりの少女と、世界のお話。

戦え、^{たたか}戦え、^{たたか}自分のために

勇者だった少女

『月』の暦1065年

天候：快晴 8月14日

（時刻記載なし）

砂海入り口の村 ドンテカ

ロードスギルド冒険者待合所

「あなたがユノ・ユビキタス？あのユノ・ユビキタス、よね」

灼熱の太陽の下、どこか猜疑の感情を含め、女は話しかけた。

冒険者とその腕を買うものたちの寄り合い所 ロードスギルド
冒険者待合所は人でごった返している。

待合所のテーブルで酒を酌み交す者。談笑する商人の連れ合い。
自分の腕を大声で売り込む傭兵。それを囃し立てるあばずれな娼婦。
その手にもった煙管からは妙に甘ったるい香りのする紫煙が立ち昇
っている。

そのむせかえるような広場の片隅に、小さな少女が座っていた。
古びた壁の残骸に身を預け、行き交う人の群れをじっと見つめて
いる。

その視線が何か魔力でも發揮しているのか それともべつの何
かがあるのか、少女が座る広場の一角はまるでエアポケットのよう
に避けられている。少女1人だけだ。

女が声をかけたのはその少女に対してだ。
それは決して好奇心や慈悲、あるいは好色な願望を持つての行動
ではない。

女と少女はここで逢う約束をかわしていた。

冒険者と依頼人。少女と女。

ユノ・ユビキタス　そう呼ばれた白髪の少女はじろりと、黒目がちの双眸で女の顔を見た。

冒険者の同盟『ロードスギルド』から送られてきた依頼書と女性の顔を見比べる。

気の強そうな女性、というのが第一印象だ。貴族の証である赤毛にしみ1つない白いフード付の外套。首元には銀製のペンダントがかかっている。

右手にはミスリルらしき金属で造られた魔術杖を持ち、大きな旅行カバンを左手に提げている。

月のように蒼白い光を閉じ込めた瞳が羊皮紙の依頼書と目の前のフィオナ・ベルを交互に行き来する。

その視線を嫌がるようにフィオナは顔をそむけた。

（フィオナ・ベル　王都魔術大学大学院所属、赤毛、切れ長の双眸、魔術師の杖を所持。同行者なし、女性冒険者を要望）

似顔絵との一致を確認すると依頼書をポーチにしまい、壁に手をつけて立ち上がる。

少女が身につけたポンチョがわずかに風に揺れた。

「ええ、そうです。お待ちしております。フィオナ・ベルさん」
「………代理人ということではないのね？」

顔をこちらからそむけたままフィオナは尋ねる。

ユノはその冷たい　しかしなんとも気遣いのある言葉に心の中で笑った。

そして、その言葉に少女にしては低く、掠れた^{ハスキー}な声で返答した。

「私の名前を騙ったところで、メリットなんてなに1つありませんよ」

ユノの返答に女性　フィオナはわずかに眉間をゆがませ、硬質な声音で吐き捨てた。

「……自分のことを把握しているようね、短い間だけどよろしくお願いするわ」

握手もしないまま、近くの立ち木に繋げていたドラゴンに飛び乗る。

「これまでの足はどのように？」

「ケイブリスから大陸馬車で、悪いけれど新しく騎乗竜ランドドラゴンを調達するお金はないわね」

一瞬、フィオナの言葉に羞恥が見て取れた。大陸馬車、そして騎乗竜ドラゴン。

そのどちらもあり貴族層が足として利用しない通行手段だ。それを両方利用し、片方を調達する資金がないとなると、あまり貴族としての矜持を気にしないか、前大戦で没落した貴族ということになる。

そう珍しいことではない。戦争は否応なく人の何かを奪いとる。彼女はその被害者で、そしてその地位に甘んじることなく、矜持を保ち続けているのだろう。

矜持を失った人間は恥ずかしがらない。

ユノは特に気にすることもなく日よけのフードを頭にかぶる。

白色の絵の具で染めたような白髪が外海と隔離される。

「わかりました、掴まってください……足元に気をつけて」

「1人で乗れるわ」

「掴まって」

手をフィオナに差し出し、一息に引っぱり上げる。外見にそぐわない腕力に驚いたのか少しだけ動揺した気配が伝わってきた。

そのままギルドの待合所を後にし、ほど近い関所で手続きを終えて村を出る。

村の門を一步くぐるとそこはもう砂の海、人を拒む埒外の領域だ。抜けるような青空に白い太陽に照らされ輝いているようにも見える白い砂漠。

それが視界いっぱい広がっている。

「……………壮観ね」

「来るのは初めてですか？」

答えはない、忘我が無視かの判別はつかない。

ユノは前に向き直るとランドドラゴンの胸を蹴る。

馬のようには嘶かずただ緩やかに加速していく。

無言の内に『メルカトル大砂海横断の護衛依頼』がスタートした。

砂漠　太陽と熱く焼けた砂が支配する死の世界。その広大と呼ぶのも馬鹿馬鹿しい大きな身体は、ちっぽけで脆弱な人類などと飲み込んでいく。

海　未知の深遠を雄大な肉体に内包して横たわる、やはり死の世界。

水に溺れて死ぬか、それともその下に潜む得体の知れない生物のデイナーになるか、人にはその予想も出来ない。

このふたつに限ることはない。山、川、森　人が人の情弱さに気づき文明を築いた時点から人を取り巻くあらゆる自然は凡て死の世界となりえた。

それでもその二つが合わさった世界は一等に危険を孕んでいる。見渡す限りの砂海の下には多様にして恐るべき生態系が築かれて

いる。

「あれは何？」

ドンテ力を出発して大体8時間、背後からはじめて声がかかる。警戒の表情で砂海を見るフィオナを一瞥し、突如出現した砂の津波を見やる。

「心配することはありませんよ、あれは小さなモンスターが群れで砂中を移動しているんですよ　ああやって大きな津波のようになつて、跳躍と潜行を繰り返して大型モンスターの捕捉を難しくしているらしいです」

周囲に響き渡る轟音を立てながら砂の津波が遠ざかっていく。

さらさらと細かい砂の波間に平たい頭を持った蛇が飛んでいるのが見えた。

パラ・カカ。トビウオのような生態を持つ比較的温厚な気質のモンスターだ。

群れを刺激することがない限りこちらに襲い掛かってくることはないだろう。

「本で読んだことあるわ　確か、砂渡りだったかしら？」

「博識ですね、メルカトル大砂海の名物風景のひとつですよ」

「ぞつとしないわね」

「少しスピードを上げます。舌を噛まないように気をつけて」

メルカトル大砂海の名物風景ひとつ

『砂渡り』

その幻想的ともとれる光景は近くに大型モンスターが存在しているという目安でもある。

『月』の暦1065年

天候：快晴 8月14日

（時刻記載なし）

メルカトル大砂海中間中継地点『ギルドベースキャンプ』

焚き火にくべられた木の音だけが、夜の砂海には望ましい。

夜の砂海は日中の灼熱と対になるかのように気温が下がる。

日が翳り、太陽がその姿を地平線に隠すと灼熱の砂漠が一転して極寒の海と化す。

この気温の極端な上下動がメルカトル大砂海の危険度を「最高」と位置づけている理由でもある。

（今日はオーロラは見えないか）

夜の砂海の唯一のとりえ ビロードに散りばめたような満点の星空を眺めながらそんなことを考える。

予定通り横断コースの半分を消費し、夜間はギルド設営のベースキャンプで休息を摂っている。

頑丈さがとりえのコテージが二組と焚き火用の石組みがひとつ。

残りは過去に利用した冒険者達が思い思いに残っていた雑多な物品が転がっている。

ユノは火の番と夜警をし、依頼人であるフィオナはコテージの一室で眠りにについている。

時間短縮のため危険なルートを通過してきた為、同業者はいないようだ。

恐らく他のベースキャンプは冒険者と隊商、その他多勢でおおいに込み合っていることだろう。あまり善くない意味で

冒険者を統括するロードスギルドは冒険者同士の相互扶助を奨励しているものの、現実問題として様々な場での同業者争いは絶えない。

小さな争いからお互いの個人攻撃にはじまりどちらかの逆鱗に触れ、そして腰の得物を構えて決闘 そんな馬鹿馬鹿しいトラブルからクライアントを守るのも重要な仕事のひとつだ。

「今日に限ってはそんなつまらない出来事も起こらない。退屈だけで、楽でいいかな」

誰にいうでもなくそう呟き、マグカップに入ったシエルパティ―に口をつける。

煮立ち過ぎて葡萄の香りがとんでいたが身体は温まる。

夜の砂海では身体を温めることは必須だ。

「ご機嫌のようね」

焚き火の対面にフィオナが座る。白い外套ではなく簡素なローブに着替えている。

細長く白い指で恐らく酒だろう　陶製のゴブレットをもてあそんでいる。

「ああ、起こしてしまいましたか」

「いいえ、勝手に起きてきただけよ」

ユノの言葉を遠慮がちに否定し、フィオナは俯いたままゴブレットの中身を口に運ぶ。

燃えるように赤い髪、知性と憂いをたたえた切れ長の双眸。

その瞳が一瞬だけこちらに向き、口が開かれる。

「ねえ、ひとつ。疑問に答えてもらっても、いいかしら」

ああ、この人も「それ」を聞きにきたのか、とユノは思った。表情に出さず、心の中で笑う。それはユノの得意技だった。

「どうぞ」

「どうして　裏切ったの？」

フィオナの表情を窺う　怒りも、悲しみもユノの感性で見て取れる感情は浮かんでいない。

少なくとも、魔術で消し炭にされることはなさそうだと、無味乾燥とした答えが頭の片隅に沸き出る。

口の中に塩の味を感じながら、口を開く。

「正しいことだと、思ったからです」

「人を裏切って　魔族を助けることが？」

非難の色はない。言葉は淡々としていた。

「彼らは子供まで殺そうとしていた、私にはそれが許容できなかった」

「だから殺したの？」

ユノは今度ははっきりと顔に出して笑う。

何度も何度も、「あの出来事」の引き起こした自分に投げ掛けられる問い。

飽きもせずにも今度もまた繰り返された問いに、ユノは答えるのに飽きていた。

だからはぐらかすように言う。

「血に飢えていた」

「あなたが？」

「私と、そして彼らが」

言葉は少しずつ震え、最後には爆発した。

「それが言い訳になると思ってた？あなたは騎士を20人も殺したのよ！英雄たちを！自分の部下を！！」

フィオナは立ち上がり、怒りで双眸を染めて　すぐに何かを諦めたかのように佇まいを直し、コテージへ戻っていった。
ユノは口を歪めて、ただ焚き火の炎だけ見つめていた。
それでも手はすぐにでも抜剣できるように腰の後ろに来ていた。
無意識のうちに染み付いたその動作に気づいてユノは心底笑いたく
なった。

（彼女が理性的な人物だなんて、ひとめで判るだろうに）

ああ、浅ましい。

ランドドラゴンが灼熱の太陽の下を駆ける。

ベースキャンプを発ってから数時間、幾度かのモンスターとの遭遇はあったものの運良く捕捉されることもなく乗り切れた。

手を翳して西の方角を見ればもう遠くに聳える山々と森林地帯が見て取れた。

もう馴染みの風景だ。

（大砂海をこんなに往復してる冒険者なんて私くらいのものだろうな）

ふ、と息を吐くように笑って、昨日と同じようにドラゴンに跨るフィオナを窺う。

昨日の怒りは微塵もない。ただ冷然とした表情で砂で出来た水平線を見つめている。

何を考えているのかなんて見当もつかないし、想像もしたくなかった。

ただ眠りについてるうちに消し炭にされないだけで充分に感謝に値するとユノはひとりごちる。

「それじゃあここでお別れです」

「ここで?」

「ここから先は危険モンスターは一層されていますから危険はありませんよ」

ユノは大砂海を抜けたすぐ近くのキャンプでフィオナを降ろした。
ユノとフィオナ以外に人の姿はなく、まだ他の冒険者や隊商は到着してないようだった。

「ここからすぐに整備された街道があるので　そこを道なりに進めば最初の街、グレゴールがありますよ」

「そう、ありがとう・・・あなたは来ないの?」

「食糧も水も足りてますから・・・それに私にとっては街だって危険な場所ですから」

「・・・」

フィオナは少しだけ哀れむような色を表情に浮かべて、キャンプの出口に歩いていった。

ユノは特に感慨も抱かぬまままたランドドラゴンに跨る。他の冒険者にあってもトラブルの元でしかない。すぐにドンテカに帰るつもりだ。

と、背後から声が聞こえた。

「・・・私の兄は、騎士だった」

振り向くと、フィオナがキャンプの入り口でこちらに背を向けたまま立っていた。
表情は見えない。

「正義感に溢れて、優しい人だった。魔王なんていなければきっと民に愛される領主になっていた　そんな人だった。」

「……………」

「魔王に国を蹂躪されて、エインヘリヤルに志願した。もう判るわよね？」

「　ベルガモンド・オーディニ・ベル卿」

「そう、あなたは、私の兄を殺した」

心は、動かなかった。

ただ無感動に彼女の肩が小さく震えるのだけを、ユノは茫洋と見つめていた。

腰に手は伸びない。

「私を、殺しますか？」

「いいえ、そんな意味のないこと私はしない。あなたに依頼をしたのも大学の研究の為だし、格安だったから　どの道私はあなたに叶わない。勇者に勝てる人間なんていない。」

「……………」

「でも、これだけは言わせて」

肩の震えが収まり、赤髪の頭がこちらを向いた。

熱を伴った風がユノの銀の短髪とフィオナの赤髪の間を通り抜ける。

「生きて罪を償いなさい。私のような感情を持つ人間にも、モンスタ―にも殺されることなく、生きて生きて、うんと苦しみなさい

もし自分で命を絶つようなことがあれば」

「……………あれば？」

「あなたの死を徹底的に汚してあげる。死体も魂も遺されたもの全てをこれ以上ないくらい侮辱の対象にしてあげるわ、ベル家の総力をあげて」

そう一息で言っ、フィオナはその美しい顔にほんの少し怯えを含ませた。自分の発言に自分で動揺している。

その表情を見てユノはどうしようもなくむかついた。

もし彼女に悪意だけがあつたなら、ユノはいつも通りせせら笑って受け流すことが出来たのに。

フィオナは表面上冷徹な復讐者を装っているのに、はつとするほど無垢な怒りと悲しみが仮面から罅割れ、漏れ出していた。

それでもなんとか、言葉を返すことは出来た。

「それは、楽しみですな」

「それじゃあ、お別れね　もう二度と会うこともないでしょう」

フィオナが西の街、グレゴールの方角に歩き出す。

ユノはもう何も気にすることなく、逃げ出すように砂の海へランドドラゴンを走らせた。

（ああ、ちくしょう）

風が強く、砂と一緒にユノの顔に吹きつける。

砂嵐の兆候だ。でももうそんなことに頭は回らなかった。

ただひたすらランドドラゴンの背の上で姿勢を低くし、耐えるようにして顔を下に向けて手綱に力を込める。

もうたくさんだと思った。

好きで勇者になったんじゃない。

好きで魔王に立ち向かったんじゃない。

好きで裏切ったわけでも、殺したわけでもない！

ちくしょう、ちくしょう、と声を押し殺して呟く勇者の1人　ユ

ノを、灼熱の太陽だけが見ていた。

生活の終わり

『月』の暦1065年

天候：快晴 8月17日

（時刻記載なし）

砂海入り口の村 ドンテカ
村外れにひっそりと佇む小屋

（おまえのせいだ）

（おまえのせいで、我らは）

（裏切り者）

（許さぬ、許さぬぞ小娘）

ユノは疲労困憊している。

それは足元に絡みつく泥と、着慣れない金属鎧のせいだ。

雨も酷い。そもそも雨とはこんなにも血生臭いものだっただろうか？

顔に降りかかる雨はどこか赤い色を帯びているような気がする。

血のような、雨。

背後に忍び寄る気配に、振り向きながら剣を振り下ろす。

「勇者の加護」によって必要以上に強化された剣の一撃が、槍を構えた騎士を一閃する。

槍ごと切り裂かれた騎士は悲鳴すらあげず、泥の中に崩れ落ちる。

ああ、剣が重い。

ユノは一足に跳躍すると斧を構えた騎士と、それに守られて弓でこちらを狙う騎士に肉薄する。

力任せに振り回される斧を籠手で払いのけ、刺突。

そのまま絶命した騎士の身体を盾にして強引に弓を持った騎士に近づく。

振動、矢が放たれたのだろう。鉄の鎧と筋肉はそうそう貫通しない。

用済みになった「盾」を捨てると距離を開けようと後退した騎士を押し倒し、剣の柄で殴る。

がん、だか、ごん、だか小気味のいい音を立てて兜がひしゃげる。生暖かい泥だか血だかが顔に飛んできて気持ちが悪い。

シャワーが浴びたい・・・シャワーって何だったっけか

何か大事なものだったような気がするが、と首を傾げながら立ち上がる。

ああ、それにしても、とユノは泥にまみれた大地を歩きながら考える。

（あの子たちは逃げれたかな？逃げて、出来れば生きて欲しい）

雨に紛れて近づいたのか、軽装の騎士が猫科の動物を思わせる跳躍と共に剣戟を入れてくる。二刀流。コンビネーション。

連続で振るわれる刃と刃を剣と籠手を使って受け流す。

なかなか手強い。

少しでも隙を見せれば致命的な一撃をもらいかねない。

足元のぬかるみと身体を大地に縛りつける鎖のような雨。この悪条件がなければ状況はもっと目の前の騎士にとって有利に動いていただろう。

ふっ、と下からの風を感じて咄嗟に上体をそらす。反応できたのは間違いなく幸運だった。次の瞬間に見えたのはブーツに包まれたつま先。

危つく首の骨を折られるところだった。

姿勢を落として身体をねじりながら騎士のふともも付近を裏拳で一撃する。鉄と鉄の擦れあう音が響き、騎士が体勢を崩す。その頃にはユノは腰を落としたまま泥の上で体勢をたて直し騎士に身体ごと突進し、剣を首に突き刺す。

骨を突き砕く感触がいやに残った。

騎士はびくん、と1度だけ大きく震えるともう動かなくなった。荒い息を吐いて、騎士の身体を泥に横たえる。

重い体。汗で滑る剣。血のような雨。熱い泥。
何もかもが不愉快で、最悪だった。

（おまえのせいだ）

（おまえのせいで、我らは）

（裏切り者）

（許さぬ、許さぬぞ小娘）

（ああ、クソ、うるさいな　自分たちが悪いんでしょ）

がしゃ、がしゃ、がしゃ、がしゃ、鉄の擦れあう音がする。
雨を通して伝わるその音はユノとその周りの死体を包囲するよう

に近づいている。

数は特定できない。少なくとも20よりは多い気がする。

ひとりきりのユノにあるのはどうしようもなく重い体と鈍器と化した剣のみ。

もう何もかもたくさんだとユノは思った　剣を投げ捨てて跪けば楽に逝けるだろうか？

それとも、十字架にでも架けられて火炙りにでもされるだろうか

「　　ユノちゃん」

とても懐かしい呼ばれ方をした。誰だろう、そんな呼び方をするのは

いつの間にか雨が止んでいる。体の重みも、プレートに束縛される圧迫感もない。そのかわりに胸が痛かった。

きゆう、とこみあげるような逃げ出したくなる痛みがユノの薄い胸の間で火傷のように熱を発している。

「　　どうして、こんなことを」

懐かしい声！懐かしい顔！二度と聞きたくもない！

ユノの目の前に「彼」が立っている。さらさらの黒髪、やさしげな目。細いがけてひ弱ではない体を不思議な光沢を見せる鎧が隠蔽している。

あいもかわらず似合わないマントが揺れている。勇者らしい、と言ったと困ったように笑っていたっけな

「彼」はいつもの通りに、誰にでも優しく平等な視線を悲しみに歪ませて。

今にも泣きそうな　捨てられた子犬のような表情でこちらを見つめている。

「気づいてあげられなくて、ごめん」

ユノは臆面もなく悲鳴をあげて 意識を失った。

「うわあああああつ!!!」

がば、と身体を覆っていた布 のようなものを蹴り上げて、その反動で何か固い床のようなものにしたたかに身体をぶつけた。心臓が早鐘のように鳴り響いて、視界が明滅している。歯の根も合わず、どこか頭の中の冷静な部分が「脳みそが危険な物質を分泌し過ぎています、沈静すべきです」と自己診断を下していた。

無意識に腰の後ろに手を回している。通常ならばそこに護身用の短剣を差している筈だが

ない。その事実だけでユノはパニックになっていた。

（武器だ、冷静になるには武器が必要だ。）

「あ、ユノさんおはようっス」

「.....!?!」

突然の声、推測するに女性の、声。位置はユノの正面で大股2歩分の距離。

敵かそれ以外か、そんな判断は働かなかった。ひたすら獣のような動きで顔すら確認しないまま突進し、押し倒す。

首元を狙った右手は目測を誤ったのか何か柔らかくて暖かいものを掴んでいた。

ふにゃあつ!?!

ずいぶんと間拔けな悲鳴だ……。と、そこまで動いてから
ユノはぴたりと体の動きを止めた。

「いやん ユノさん朝から大胆ですねー……。でもわたしもユノさん
も女の子だし、もっとお互いを知ってからこういう関係になった
方がいいと思うんですよ、両親への挨拶も済ませてないですし」

「……どうして私の部屋にあんたがいるのよ」
「そりゃあ、郵便配達人ですし」
「入ってくんなよ、なおさら」

散らかった小屋の中心で、豊満な胸を鷲掴みにしたまま半人半獣
の女性アリカとユノは夜這いのような姿勢でそんな会話をしていた。

「はい、コーヒー」

「……ありがとう」

「もっと可愛らしく感謝してください」
「嫌」

ハプニングから数分後、当たり前のように家に居座ったアリカは
日課といわんばかりにユノの文の朝食を作っている。手馴れた様子
でスクランブルエッグを作るその姿に通い妻という言葉が浮かんで
きて背筋がぞつとした。

「」
「」

機嫌よさそうに料理をするアリカをぼんやりと見つめる。

アリカ・マイルズ。リザードマンと人のハーフ。亜麻色のふわふ
わとしたセミロングに大きな金色の瞳。瞳孔が縦長で見る人によつ

ては怖いかもしれない。いつも笑みを浮かべた口元からは尖った牙が見え隠れし、口の中は染めたような青色だ。

背はユノより高く（大抵の人はユノより高い）豊満な胸と引き締まったウエストが男性には魅力的かもしれない。身体のところどころに生えた緑色の鱗さえなければどこかの金持ちのぼんぼんでもつかまえて公爵夫人にでもなっているだろう。

ユノとの経緯はじつにくだらないものだ。

村に武器の修理にいった時に酒でも飲もうかと思いたち近場のバーに足を踏み入れた。ユノの顔を知らないもののねっとりとした視線と知ったものの警戒の視線に苛々としながら席に座りエールを注文しようとしたさいに背後から悲鳴が聞こえた。

バーという場所は基本的に暇を持て余した冒険者や傭兵が多く溜る場所だ。特に近場にメルカトル大砂海という大きな「金」が転がる場所には腕もたつが自尊心も強い連中が多く集まる。

そういった連中の中には馬鹿騒ぎと迷惑行為を履き違えている輩が時としている。

そんな連中にバーの隅に連れ込まれ今にもウェイトレス服を脱がされかかっていたのがアリカその人だった。腕を押さえ込まれ、胸を揉みしだかれている。必死に抵抗しているもののパンツを降ろされるのも時間の問題だろう。

助けて！と叫んでも誰も助けようとしなない。

アルコールに酔っ払い過ぎて耳が悪くなったり、賢明にも無関心に一瞥したり、好色そうな視線を向けてにやにやと口角を歪ませたり、その日に限ってはそんな連中ばかりだった。

その日の機嫌の悪いユノはバーのマスターに一瞥を向ける。

枯れ木のような老マスターは人生とはそんなもんだとばかりに首を振るばかりだった。

ぺっ、とつまみのオリーブの実を吐き捨てて隣で恐々とユノの方

を窺っていた若い男女のワインボトルを拝借する。

なにやら文句を言っていたようだが半眼で睨みつけるだけで沈黙してくれてありがたかった。

そんなに広くもないバーをスタスタと渡りきり、まだ未開封同然のワインボトルの首を棍棒でも握るように持ち替える。

あとに起こったことはシンプルだ　振り下ろされたボトルはパンツを脱がそうと背を向けていた馬鹿の頭を一撃し、顔を赤くして剣を抜こうとした胸のほうの馬鹿は股間を「パンシール卿のデイリ―ワイン」のラベルに描かれた濃い顔の貴族にキスされてバーの床に沈んだ。

その後は後ろの方でおずおずとこちらを見やる若い男女にワインの代金を渡してバーは出入り禁止になった。ユノの廃人同然の生活で起こった　実に瑣末でくだらない1日のドラマだった。

ただアリカの方にはどうも大きな出来事と認識されたらしく「一生の恩人です！」と感謝された後にずるずると　唯一の友人ともいえるポジションになってしまっている。

ウェイトレスからギルドの郵便配達人に転職した理由を問うと「プライベートでも仕事でもユノさんに会えるからです！」と返されてしまった経験がある。

レズではないと思いたい。ただのリザードマン種族独自の性格らしい「強い人間には性別の関係なく敬意を抱く」というものであつて欲しい。

そうでない困る。

臆病なユノには「アリカってもしかしてレズ？」とは決して聞けないのだ。

「何か失礼なこと考えてます？ユノさん」

「気のせいでしょ」

「まあいいや　はいスクランブルエッグとスープとパンですよ

「ありがと」

えへへ、と牙を見せて笑うアリカに簡素に礼を言々と朝食にとりかかる。特別旨いわけではないものの冒険の依頼をこなす以外は狩りか飲んだくれるかという暮らしを送っているユノにはとてもありがたいものだった。

だが同時に「これでいいのか」とも感じている。ユノは王都の大半の人間からは「魔族に組して英雄たる騎士を殺害」した大罪人であり、「みんな」やギルドを媒介した王都とのある契約によりなんとか死刑を免れている身だ。

そんな人間の横にはどんな人間もいるべきではないとユノは思う。ユノには勇者として与えられた力があるがアリカは弱い女性だ、ユノに特別な悪意と復讐心を持つ者の中には彼女を殺すか汚すかすることとユノの罪を断罪すると考えるものもあるかもしれないのだ。先日のフィオナ・ベルのような理性的な人間はあまり多くない。

そんな事になってしまったらもうユノは人間にも勇者にもなれない。きつと魔族よりよほどたちの悪い存在になってしまうだろう。

しかしユノにはアリカを突き放すことが出来なかった。ユノに信頼の目を向けてくれる彼女。廃人同然だった生活を立て直してくれた彼女。絶妙な距離で接してくれる彼女。

浅ましいことに ユノはアリカのことが好きなのだ。

「あ、そういえばユノさん」

「何？」

「あなたに手紙が来てるんですよ、それも珍しいことにギルド郵送ではなく普通の手紙！ユノさんも普通の文通相手とかいたんですね」

「・・・・・・・・」

否定する気にもなれずユノはアリカからその手紙を受け取る。かなり上質な封筒で、ギルドからいつも送られてくる粗雑な茶封筒とは明らかに違う。

と、封筒の裏側に流麗な書体で書かれた名前を見てユノの手は固まった。

テーブルを挟んでコーヒーを飲んでいるアリカに小さく訊ねる。

「アリカ」

「なんですかー？ユノさん」

「中身……見てないよね？」

「さすがのユノさんでもその発言はどうかと思いますよお、郵便配達人の誇りに賭けて手紙の封は切つてませーん！」

「……そっか」

懐かしい文字。確か「こっち」に來た後にみんなと一緒に習ったっけな

真っ白で、どこか花の芳香が薫る封筒の裏にはこう書かれている。

あなたの永遠の親友 セリア・ランバルディア・イヴヴァルト
より

ユノは今にも泣きそうな表情で、その手紙を見つめている。

再会と予兆

『月』の暦1065年

天候：曇り 8月16日

12時23分 神を信仰するものならばまず食前の礼拝をするべき時間

ドンテカ外れの小屋、ユノの自宅

時々 彼女がいない間に部屋を掃除することがある。

それはアリカがいない間に脱ぎ散らかされた衣服だったりとか床に転がった酒瓶だったりする。両方の時がほとんどだ。

ハーフリザードの少女アリカははたきで棚の上の埃を落としながら、ほんの2時間前に立っていったこの小屋の主について思考していた。

ユノ・ユビキタス ユノは本名でユビキタスはあとから付けた名前らしい。

その理由を問うと曖昧に答えをにっこされてしまったからあまり触れないほうがいい話題らしい。

一見、かawaii雰囲気を持つ少女だ。小柄で華奢なシルエット、丸みのある白い顔の中にはこの世でいちばん小さな月がふたつ浮かんでいる。

顎のラインで切りそろえたショートヘア。のび放題で放置されていたのをアリカが無理やり椅子に座らせて手入れたものだ。

ここまでは王都ランバルディアにも貿易都市カスツールにも魔法使いの国エルムトにもいそうな普通の少女だ だが、その髪も瞳毛も「白」

年を取ると魂が少しづつ髪から抜けて白くなる老化の白ではない。何にも相容れない孤独な、純白すぎる白。

生まれつきではないらしく元々は黒髪だったよ、とユノは乾いた笑いを浮かべながら話すことがあった。

「白」になった原因について訊ねると　ふさわしくないものが間違つて勇者になってしまったときの色なんじゃないか、とユノが自嘲気味に呟いていたがアリカは、そうは思わなかった。

ユノは確かに勇者　おとぎ話や伝承に詠われるような昔の勇者たちのように清廉で勇氣に満ち溢れ、純粋な正義のために「人」を脅かす「魔」との戦いを先導する。そういった伝説の存在と同じであるとは、世間知らずのアリカでもイエスとは言えない。

いつも疲れたような表情に歪められた瞳。引き結ばれた唇からは年相応の少女らしい言葉も英雄っぽい発言もなく粗暴で時として自虐的な皮肉が吐息のように呟かれる。

戦いに明け暮れ、酒に漬れて、眠るときは剣を抱きながら獣のように身を縮めて眠り、悪夢や幻覚で昨日のように暴れることもある。勇者とはほど遠い。戦いに疲れ果て病んだ少女兵士の姿だ。

それでも　そんな姿でもアリカにとっては誰よりも「勇者」だ。

戦いに生き、そして死ぬ種族リザードマンと人の間に生まれたアリカは、種族の苛烈なあり方についていけなかった。

闘争の中の勝利と敗北によって自己を確立する　温厚なアリカにはその価値観は血生臭くて15のときに生まれ育った集落を出た。そして人の街で新しい人生を始めたが、今度は人として生きるにはリザードマンの特徴が枷になった。

運の悪さというのもあるだろう　人として暮してもいまひとつ馴染めなかった。

リザードマンとのあいの子というだけで区別され、時にははつきりと拒絶され働き口を転々とした。身体目当てで言い寄られ乱暴されそうになったこともあった。

なにひとつうまくいかず、遂に性質の悪い冒険者にひどいことをされそうになったときに　ユノが現れた。

眠たげに細められた目に、逆手に握られたワインのボトル。剣も抜かず拳も使わずあつと言う間に冒険者二人を沈めて颯爽と消えてしまった。

……一目惚れしてしまった。

誤解を招く表現だがこれが一番的確で、自分の将来に夢も希望もなかったアリカが人の暮らしの中で唯一見つけた光だった。

それはきつと清廉な、優しく暖かな光ではなかっただろう。

強い、近づけば焼き殺されかねない、強く、暴力的な光。

しかしアリカにはその光が自分に必要なものに感じられた。

闇を、暗い日常を、感情を吹き飛ばす強すぎる光。

気づいたときにはその小さな背中を追って酒場を飛び出し、勇気を持って話しかけた。殺気立ったオーラを醸しだしていて怖かった。でもアリカのことを嫌がらず拒絶せずに話を聞いてくれた。一生懸命お礼を言ったら照れたように笑って「別にあんたを助けたくてやったんじゃない。苛々してただけ」そう言った。

その発言は確かに真実だったのだろう。アリカはその後無理やりのようにユノと関わり、冒険者らしい利己的な面も見れば粗暴な面も見えた。

そして彼女の心が半ば、ある種の狂気と同居していることにも気づいた。

しかし　もしかしたら彼女自身は気づいていないかもしれないが、月のような瞳の奥にはいつも理不尽を憎み、障害を踏破せんとする意志があった。

それはアリカが幼いころに本を読んで夢想した「勇者」の瞳だ。

ふう、と吐息をついてアリカは小屋にひとつしかない窓を見やる。「大事な用件が出来た」と言っ、今朝方いちばん早い馬車で رفتてしまった。

何かに決意する表情で　きつと過去のなにかを片付けに行つたのだらう。

（それは、いいことなんだよね）

でも、とアリカは口に出して呟く。祈るように

（　　傷つかないで、ほしいな）

好きな人が前に歩き出したという期待。先の見えない不安。アリカの縦長の瞳の中には、緩やかに太陽を覆い隠す雲が浮かんでいる。

『月』の暦1065年

天候：曇り　8月16日

12時23分　神を信仰するものならば食前の礼拝をするべき時間
大陸馬車103号（ドンテカ発王都ランバルディア行き）

ユノは大陸馬車に揺られながらセリア　聖女にして王姫、セリア・ランバルディア・イヴヴァルトから送られてきた手紙を読み返している。

手紙には封筒と同じく上質な便箋が2枚。もうひとつはロードス

ギルドから発行される『王命通知書』だ。不変を象徴する伝説の植物であるロードスの葉が描かれ、その下に重要かつ決して抗命してはならない書類であることを表す印が捺されている。

文章はたった一行 『王命により契約を無期限に停止する』

（契約）

ユノはその二文字を いくらかの苦味と共に想起する。

「勇者でありながら魔族に組して英雄たる騎士を殺害」言うまでもなく大罪である。

ユノの主観では食い違いがあるものの結果は変わらない。過去の過ちは覆らない。

本来なら、神罰として王都でもっとも残虐かつ苦痛を味わう方法で処刑されていただろう。

しかしユノには、どんな考えであれ助命を求める「みんな」がいた。

その結果が契約だった。

“ 死がその身を滅ぼすまで無償で戦いに赴くこと。 ”

魔王が倒されその王民たる魔族の大半が地上から姿を消したとはいえ、この大陸は平和ではない。

魔王が放つ魔力で凶暴化したモンスター。ゲリラ活動を続ける魔族軍兵士。誑かされユノと同じように魔族を助ける反乱者。戦場の狂気から帰れず、無差別に死を撒き散らす狂戦士たち。

「反逆の勇者」が死ぬ場所などたくさんあった。

この2年間で何度死に掛けたことか あまり考えるのはよそう。感情がコントロール出来なくなりそうだ。

白い便箋を開く。

親愛なるユノ、そして「向月ゆの」へ

あなたがお父様と契約を交わしてから2年の歳月がなりました
王宮のほうは相変わらず慌しく私も最近ではお父様の政務を手伝
っています。

あなたや皆と会えない日々が続いていますがあの頃とは違う。目
に映るものすべてを美しいと感じられるような、そんな日々を送っ
ております。

今回の突然のお手紙には戸惑われていると思いますがどうしても
あなたに伝えたいことがあるのです。

王宮ではあなたの2年間の功績を通して少しずつではありますが、
あなたに対する意識が変わりつつあるように思えます。

もちろん未だにあなたを神罰に基づいて処断すべきであるという
声もありますが たしかにあなたの罪はあなたの頑張りによつて
少しずつ許されていると思えるのです。

そこで私とお父様の間で話し合いをして あなたにひとつ頼み
ごとをしたいと思うのです。

この手紙では他人の目に触れるおそれがあるため書きません。

あなたには是非ランバルディアの私のところまで来て、直接話し
を聞いて欲しいのです。

ギルドには既に通達して契約を停止してあります。

最後にいつまでも頑固なあなたへ

私もみんなもすでにユノのことを許しています。

当時はみんな魔の気配と戦場の空気で心が荒み、あのようなこと
になってしまったのです。

この2年間わたしたちは幾度も、夜も昼も話し合いお互いの過ちを認め合いそして前を見て進むことを決意したのです。

あとは、ユノ　あなただけなのです。あなたが誰よりも罪を重く受け止め、交わした契約以上のことをして自分を死に追いやるような莫迦な真似をしているのをわたしは知っています。

それはとても悲しくて、わたしにはつらいことなのです。

罪を忘れるとはいいません。ただ、みんなに向き合って　共に前を向いてほしいのです。

はあ、と息をついてユノは便箋を封筒にしまう。

重い、とても重い内容だった。そしてそれは刃のように尖っていた。

その手紙に描かれているのは確かに赦しだろう。ユノが犯した罪に苦しんでいることを理解し　受け入れてくれる。

しかしユノには手紙の主セリアの広げた腕に飛び込むことは、できない。

もし純粹に罪に苦しんでいるのならいい。己の犯したあやまちを心底反省し、どんな言葉にも真摯に向き合い、贖罪をし現状を打開する方向を向いていけるなら

ユノは違う。自分は心の底で「自分は悪くない」　そう思っ
しまっている。

（なんで私が責められなきゃいけない？）

（私は私の正義で行動した。一方的に罪だと押し付けられた）

（何故子供まで殺す必要がある？人でなければ何をしてもいいの？）

（私の命令を無視したのはあいつらだ。殺されても当然じゃないの？）

（死ぬまで戦え？それは結局死ねることだろう！）

（そもそも私は勇者なんてやりたくもなかった！）

ああこれはいけない　黒々としたナニカが腹の奥底から溢れて湧いている。普段は色々な重石で蓋をした壺。目を逸らしたくても叶わない感情。

憎い　憎い　憎い　憎い

がたん、と馬車が揺れる振動ではっ、とした。同時に自分が息をしていなかったことに気づく。腹の底から膨れ上がった感情が形を得て肺を圧迫したかのようだ。

息を吸う、にがい。

馬車に備え付けられた窓から外を見る。もう王都が近い。

（来て、しまった）

王都ランバルディア　この大陸における現在唯一の王制国家であり一大強国である。

広大な農作地と豊富な鉱山を背景に近代的な装備を整えた常備軍を持ち、勇者率いる国を超えた魔王討伐軍「エインヘリヤル」も多くがランバルディアから選出される。堅牢さと壮麗さを兼ね備える都市は「戦乙女の都」とも呼ばれることがある。

しかしその繁栄を極める王国の王室は　退廃的な側面が見え隠れする。

その原因のひとつは「戦の優るものが第一後継者」という信仰からくる王族の内政不振。

軍事力にばかり目が向くせいかそれ以外の重要な案件がふいにされ易い、とユノは聞き及んでいる。くわしく見聞きしたわけではないが中立地帯であるドンテカにまで噂が聞こえるあたりあからさまなのだろう。

もうひとつは貴族　内政下手の王族に代わりその臣下たる貴族が政治を主導する形になっているが…そこは貴族の独断と専横の場であるという。耐えかねた王民が王族に訴えを申し出ても貴族は言葉巧みに王族を騙し、また違う形で利益を自分のものとする。

戦うことにしか興味のない王族とその目を盗んで民の上で舞踏する貴族。

「こつち」に来てから2年で得た印象はそんなものだ。

『麗しの王都ランバルディア到着にございます…次回も大陸馬車のご利用をお待ちしております』

馬車が王都正門の停留所に止まる。

大陸馬車は「あつち」でよく利用していた「こうそくばす」によく似ている。

王都からどこかへ旅立つ人間がより集まって自分が乗るべき馬車の到着を心待ちにしている。馬車を運営する組合員が、大声と身振り手振りで客をたくみに誘導し馬車に人を押し込め、剣を背負った冒険者も豪華な服の商人も、粗末な服の労働者風の家族も平等かつ迅速に馬車に乗車させられていく。トラブルも頻発するが足の踏み場もない喧騒と屈強な衛兵によってすぐさま騒動は喧騒に消えていく。

王都からどこかへ旅立つ人々と入れ替わりになるようにユノは王都に入っていく。大抵の人よりも背が低いユノにとってはこの時間は不快以外のなにものでもない。

ドンテカとは比べ物にならないほどの喧騒さと明るいエナジーに辟易しながらも中央に聳えるランバルディア王城　リーンベルネの方向へ歩いていく。

喧騒のなかへ消えていく白髪の少女の背中を、風船を持ったピエロがじっと見ている。

泣き笑いのように化粧した顔のまま、道化服の襟元についた「何

か」に向かつて呟いた。

『道化より 灰かぶりの王都入りを確認。繰り返す灰かぶりの王都入りを確認。状況に移行せよ』

子供と母親が風船をもらいに寄ってくる。するとピエロはいつものようにサーカスの興行があることをひょうきんに報せながら子供に風船を手渡した。

『月』の暦1065年

天候：曇り 8月16日

13時40分 昼が終わり各々が仕事に戻るべき時間

王都ランバルディア王城リーンベルネ

バラックの訓練場の土を、鋼のブーツが躍る。

その華麗な足捌きの持ち主はまだ年若い 十五前後の少女だ。

貴族を表す赤毛はあまり手入れされず後ろ頭にひつつめている。

蒼い双眸に引き結ばれた小さな口元。その頬に残る大きな刀傷がなければ、城下の吟遊詩人あたりが美貌を褒め称える詩でも歌っていたかもしれない。

ブーツと同じ鋼の首当てに鉄の輪を連鎖して造られたリングメイル。軽装を重視しているのか細いしなやかな腕は二の腕まで露出されている。

グローブに包まれた両手には特徴的に湾曲した細い剣が上段と逆手に握られている。

長さの違うそれを巧みに操り、まるでダンスでも踊るかのよう訓練相手の黒い甲冑の騎士に剣戟を加えていく。

上段の振り下ろし　逆手の首を狙つてのなぎ払い　瞬時に持ち替え、股間から天辺まで流れるようなスラッシュ。

その瞬間、少女は猫のようにしなやかに空中を伸び上がっている。相手役の甲冑の騎士も巧みな剣技で少女の剣を捌いていたものの最後の一撃に耐え切れず剣を弾き飛ばされる。

そして打つ手のなくなった甲冑に騎士が剣を突きつけて　勝利の宣言。

「殺^とった！」

「はい、殺^とられました」

ひゃー、とその姿に見合わないコミカルさで甲冑騎士が手を上げて降参する。

その騎士の様子に少女は満足したようにうむ、と頷くと剣を腰のベルトに吊り下げる。

「いやあ、ルビイなんだか今日はいつにも増して気合入ってるねえ」
「当たり前だ！」

間延びした口調で少女　ルビイに話しかけたのは黒甲冑の騎士だ。

やれやれとフルフェイスのヘルメットを脱ぐとそこには浅黒く、健康的でいかにも人の良さそうな青年の顔が覗いた。汗ひとつかいていないその顔には見る人を安心させるような笑みが浮かんでいる。

「今日こそ姉さまの仇を討つ！私はそう心に決めているのだ！」

「いや、まずいんじゃないかい？相手は勇者だろ？姫様のご友人だぞ」

「わかっている…だから殺しはしない」

ぐ、と周囲に聞こえるくらいグローブに包まれた拳を握り締め、決然とルビィは呟く。その目には炎が燃えさかり、今にもその「仇」を燃やし尽くさんばかりだ。

「だから！」

「だから？」

「半殺しにする……！」

「決然ということじゃないよねルビィ」

「もうそろそろ到着する頃だ……ゆくぞついてこいフリード！ 弔い合戦だ」

「ねえ聞いている？ 僕の話、ちょ、痛いからひっぱらないでよ痛い痛い」

どこかずれた雰囲気のある 親子のような身長差の2人の騎士、騎士団の期待のルーキーにして双剣技の使い手ルビィ・ギムレット・アンテローズ。

そのお転婆な振る舞いに付き合わされる人のいい平民騎士、フリードリヒ・ヴァイセン。

その2人の登場により、物語はひとつ進んでいく。

ドッグ・デイ・アフタヌーン ？

かつて、世界には神が二人いた。

一柱は、凡てを照らす太陽の瞳と猛き雷をその身に纏いし力強きドンナー。

一柱は、深き海の肉体と生と死の円環を束ねし雄大なるミドガルズオルム

いつからそうだったのか、いつからその神が大地と天空を別って争いをはじめたのかその理由は語られていない。

ただ厳然たる事実として 神と神、その二人の神に付従う人と人大陸を二分して大きな争いがあった。

神が雷を纏いて槌を振り上げ、神がその身を世界を包むほど巨大な蛇へと身を変え、お互いを殺しあう。

天と地が揺るぎ、人が剣と槍で人を刺し貫き、獣は吼えたてて地を駆け巡る。

その当時世界には「平穏」などというものはなく地の一端から一端天に浮かぶ水の一粒から一粒。海中の一液から一液あらゆる場所すべてで戦が繰り広げられていた。

戦乱を厭うものなどおらずその理由を問うものもなく己の敬愛する神のために死ぬことを本望とする。

後世はこの時代のことを「ウォー・エイジ」と記述している。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月16日

（場所記載なし・詳細不明）

黒々とした大地が、続いている。

空は晴れだというのにどこか暗い雰囲気を感じており生気が感じられない。

まばらに生えた植物はどこか歪んだ、悪意を感じるような形状のものが目立った。

それらが群生する場所には窪地があり、そこに土を含んで半ば泥のようになつた水源が存在している。

それは一見、雨水がたまつたぬかるみのように見えた。

しかしある程度魔法の栄養や勘の鋭いもの、もしくは注意力に優れたものか感受性の強いものならそれがまともな水源でないことが分かる。

うつすらと絵の具が流れるように、水から黒い煙 瘴気が立ち昇っている。

それらの瘴気は人間には不愉快な感覚をもたらし、また人間と全面的に対立するある種族には甘美な美酒のように思える

どこか歪んだ気配を孕む黒い大地で、人と魔族が死闘を繰り広げている。

多くの人型魔族が地に倒れ伏し、雑兵と見受けられる小柄な亜人魔族が奇怪な言語をかわしながら、及び腰で4人の人影を遠巻きに包囲している。

戦力差は大きい筈だが人間4人が圧倒的に優勢に見える。

「そつちにいったぞ！ナオキ！」
「任せろ…そりゃあああああつ」

また一匹、蒼く燐光を発する刃に角を生やした巨大な魔族が切り裂かれる。

一刀両断。毒々しい色をした魚燐の肉体がふたまたに別れ、地へと崩れ落ちて蒼い光となって宙に溶けて消えていく。

それを見届けた亜人魔族が悲鳴のような号令と共に退却を始める。
4人の人影はそれを追うことはせず、各々の戦闘体勢をとったまま背中合わせに周囲を警戒している。

しばらくして、どこか人懐っこい雰囲気を持った少年　ナオキが息を吐く。

不思議な光沢を持つ鎧とまるで生物のようににはためく長大な朱のマントに身を包んでいる。

あきらかに地に引き摺ってしまふほどの長さのそれはまるで地に触れるのを嫌がるように少年の背ではためいている。

手に握られた剣もまた普通の代物ではない。

その刀身は針のように細く、消えることのない光る炎に包まれている。

刀身にはびつしりとルーンが刻まれておりそれらひとつひとつが精緻に組み込まれた魔法術式として効果を為し、強力な「聖」と「炎」を剣から発している。

二つの属性に極端に弱い魔族などは見るだけで怯えて逃げ出すほどの力だ。

魔法を付加した剣、というものは魔族との戦争が本格化して以来多くの国で量産されてきたものの、「その剣」の力はそれとは比較の対象にもならない。

「魔法」が付加されているのではない「魔法」が剣の形をなしているのだ。

「お見事！弱いヤツラは逃げ出したみたいだ」

ナオキの背中を守っていた体格のいい少年ケンヤが快活に声をあげる。

「…自分たちの“神殿”の上に人間が、となるとヤツラも積極的になりますわね」

しなやかな肢体をドレス風の騎士鎧で包み、貴族をあらわす赤髪が特徴的な少女ハイネが呟く。

「……魔力がもたないな」

ローブに眼鏡、背中に大量の“蔵書”をリュックに背負った線の細い青年、アライスは杖を下げる。

「おつかれー！」

最後に面々から少し離れた高台から小型魔族を撃ち落していた弓使いの少女、エレノアが元気に手を振る。

この5人こそが2年前に「魔王」を倒し、封じ込めた勇者たちである。

異世界から召還され、神と剣に選ばれた少年、神城ナオキ。その悪友にして快活な性格と豪快な戦いぶりで兵たちからの信頼も

厚い東条ケンヤ。

もつとも古き騎士の名門ミルニル家のご令嬢にして強力な剣士ハイネ・オーディニ・ミルニル。

魔法使いの国エルムト出身のビブリオマニア兼最年少の知識の賢者アライス。

正確無比な射撃の腕前と野生児のような無邪気な性格の竜に育てられた少女エレノア。

この世界を救った5人の中にはかつて　小柄な白髪の少女戦士もいた。

『月』の暦1065年

天候：曇り　8月16日

14時05分

王都ランバルディア王城リンベルネ

ユノはリンベルネに向かうにつれて、どんどん気が重くなっていくのを感じていた。

まず、人の密度がドンテカとは違い過ぎる。どこに目をむけても人、人、人。

2年間で砂漠や荒野といった場所に慣れてしまった感覚がどうにも窮屈さを感じさせた。

荒涼とした大地は孤独ではあるものの　どこまでも自由である。赤い髪で豪華な服を着た貴族。仕事にせいを出す土木屋。定食屋の呼び込みビラを配るエプロン姿の少年。親密な雰囲気の男女。小

難しい議論を交わしながら何処かへ去っていく修道士たち。どれもこれもユノには生のエネルギーに満ち溢れすぎていて居心地が悪かった。

（そもそも私の格好が、浮いてる）

今現在、ユノは冒険者と呼ばれる身分だ。ギルドの認可を受けて報酬と引き換えに様々な荒事をこなすなんでも屋、ゴロツキ、根無し草。

言い方は色々だが、ひとことで言えばアウトローだ。

その様々な荒事は一般的には「村がモンスターに襲われているから助けてこい」というものや「盗賊に狙われているから守ってくれ」といった、人のためになることだ。

しかし、時には「が気に入らないから殺せ」や「の息子を攫ってこい」なんていう明らかなウェットワークも、数多く転がっている。それらは表向きはロードスギルドの誇り高き冒険者の掟によって検閲されているものの、依頼者がちよつと袖の下で金袋でも渡せばすなりとどこかの金に目がくらんだ冒険者が必ず飛びつく。

最悪ギルドすら仲介せずに直接冒険者に話を持ちかける者も多々いる。法律上、縛り首だ。

つまり何が言いたいか、というと 基本的に冒険者は天下の界限には好ましくない存在なのだ。

はあ、と溜息をついてユノは己の姿を省みる。

汚れや傷。ところどころに古くなった返り血が付いたアニマルハイドのポンチョ。プレートと合成皮で間接部分を補強した年季の入った白いレザーアーマー。ぼろぼろの黒いインナーウェア。

腰のベルトには幅広の直剣と短剣が一本ずつ挟みこまれている。

これだけでも充分に冒険者の姿だが、ユノの場合は二の腕と両足の横に備え付けられたスローイングダガーのベルト。一抱え程度の岩石なら碎ける手投げ式の爆薬を6個。ポンチヨの内側にもいくつか武器を隠し持っている。

おまけに背中にはデイベックと一緒にドワーフの王国、ニザヴェリルで製造された「魔術を撃ち出すライフル」を背負っている。

魔術伝導率が高いミスリルで作られたその砲身の内側には「物体を加速させる術式」が螺旋を描くように、外側に「物体を直進させる術式」が円周に沿って刻み込まれ、大抵相手を粉々にするような物騒な魔術を封じ込めた円筒えんづつを装填できる仕組みになっている。魔術の発動は筒に簞められた術式が行うため適正のない者にも扱える。「個人による威力制圧」というコンセプトで作られたそれは「こちら」のテクノロジーからは埒の外にある存在だ。

（もっと普通の格好してこれば良かった）

すれ違った修道士の集団がユノの姿に怯えて身を避けていった。

「リーンベルネへようこそ…ご用件は？」

「姫様への謁見を、許可証ならここにあります」

「ご拝見いたします…少々お待ちを」

軍装に身を包んだ門番が城門の中へ消えていく。

ユノはそれを見送って、2年前と姿の変わらない城を見上げる。王都の中央。王城リーンベルネは堅牢な要塞だ。壮麗な装飾でたくみに覆い隠されているものの城壁から覗く銃眼（弓矢や銃を構えるための城壁窓）や有事の際には王都の魔術師たちが防衛に使用する

トーチカ。空中を飛ぶ敵勢力を叩き落とすための高射砲台などまるで戦争中の要塞であるかのように防衛施設が城と一体化している。長らく魔族の侵攻に正面から立ち向かったランバルディアの歴史を体言するような城だ。

と、門番が戻ってくる。

「確認いたします、ユノ・ユビキタス様でよろしいですね？」

「ええ」

「不明をお許し下さい…それではお進みください。」

（いい兵士だ）

折り目正しく礼を執る門番に軽く答えると城門をくぐる。

（帰ってきてしまった）

ぐ、とポンチヨの胸元を掴む。

城の中はなにも変わっていない。青を基調とした屋根と白いレンガで作られたパレス。

城の四方を囲むように建てられた尖塔には弓を持った兵士たちの姿が見え隠れしている。

城門を進んだ正面には花と緑で彩られた石造りの噴水がある。

噴水にはお抱えの楽士や召使。謁見を待つ貴族達。談笑する軍の騎士。図書館を訪れた学院生たちの姿がある。

その中央の噴水から道が分かれ、王族の住む宮殿。王立の図書館。騎士たちのバラック。王城に住む人々のパレス。修道士や神の巫女のいる礼拝堂へと繋がっている。

（なつかしい）

「世界を救うため」と、「こっち」に召還された場所がリーネル

ネだった。

ユノ・ユビキタス、今はそう呼ばれる「向月ゆの」がこの世界に訪れたのはもう4年前だ。

今でも憶えている。帰りの「でんしゃ」の中から突然景色が変わり、魔方阵が描かれた城の一室になった光景。

大陸中央に堂々と構える歴史ある大国家、ランバルディアの礼拝堂の祭壇。

ユノと同じようにこの世界に召還されたのが少年　神城ナオキとその友人の筋肉質な少年、東条ケンヤだった。

突然の事態に戸惑い怯える「向月ゆの」たちに召還の儀式を取り仕切った王女にして神の巫女　セリア・ランバルディア・イヴヴァルトが言った。

「お願いです勇者様　どうか私たちの世界をお救い下さい！！」

（そう、所謂異世界ファンタジーの王道中の王道　「魔王を倒すために召還された勇者たち」になってしまった。）

「異世界での冒険」という「ユメモノガタリ」に突き動かされて半ばわくわくとしながら冒険をはじめ　すぐにこれは勧善懲悪の異世界王道ファンタジーではないな、とユノと二人は気付かされた。

世界情勢は思った以上にハードだった。

200年前に海中に封印されたはずの魔王とその配下たちは西部の国々を瞬く間に滅ぼし、一片の光も射さない闇の世界へと変えてしまった。

魔族の侵攻を逃れた人々も、西部と中央を遮るように横たわるメル

カトル大砂海にその骨を沈めた。

それと同時に、魔王の魔力を受けて異形と化したモンスターが人々に確かな敵意をもって襲い掛かった。

おとなしい筈の愛玩用のモンスターが子供を噛み殺し、仲間を読んで村を滅ぼした。

隊商のランドドラゴンが狂ったように咆哮を上げて走り去った。

巨大なオーガーとトロルの群れが通常ありえないような統率を持って要塞を夜襲した。

いくつもの村や都市が滅び、たくさんの人々が死んだ。

目の前でモンスターに人間が容易く殺され、暖かい臓物が顔に降りかかってようやく、ようやく「向月ゆの」は「今」がどうしようもないくらい「リアル」で途方もないくらい現実である事を痛感した。そんな血なまぐさい最悪なファンタジーの中を3人は必死で駆け回った。

騎士団とロードスギルドの教官たちからスパルタで教育された。

早々に音をあげかけた。

貿易都市カスツールで盗賊団を相手に大立ち回りを演じた。商人に顔が利くようになった。

船を容易く丸呑みする巨大なテナクルスから商船を守った。

沈んでいく怪物の死体と夜明けの空が忘れられない。

海の向こうにひっそりと佇む神秘の都パルメキアで僧侶から世界の事を学んだ。平和を取り戻してあげたいと本気でそう思った。

ジャングルの奥深くに眠る加護の地で勇者の加護を受けた。授かった力の大きさに怯えた。

ドワーフの王国ニザヴェリルで武器をもらった。子供たちに懐かれた。

国のためなら死ぬる、と大陸中から集まった魔族討伐軍「エインヘリヤル」をランバルディアの王から享け賜った。

そして あとは果てのないほどの戦いの日々

ビブリオマニアの魔法使いと、プライドが高く、ナオキに恋する騎士を仲間に加えて

国と、人と、仲間と、なにより自分を守るために殺し続ける日々。人の赤い血と、魔族の蒼い血が大地に河を作り、死体と死骸が弓と魔術を防ぐ防壁と役割を換える。

怯え震える心を奮い立たせるために歌を叫び歌いながら戦場を駆け巡るエインヘリヤルの騎士とその配下の兵士たち。

地の平和を永久であれ 絆は鉄の鎖であれ 王国万歳！

光を胸の中にもて かのものの血と死で 死せる戦士の鎧を染めよ

闘え 闘え 神と王国のために 闘え 闘え 恋人と正義のために

進軍のときは今ぞ 死せる戦士たちよ こうべをあげよ 王国万歳！

（ああ、やめよう）

深呼吸をする。動悸が早まっていた。

2年前から ユノは「闘い」から帰れなくなった。

平和なはずの日常の中でもどこかに戦場の空気を感じて、ずっと心が高ぶったままになるのだ。

街に聞こえる談笑の音が魔族の奇怪な嘲りに聞こえ、道行く衛視が死んだはずの兵士に見えるときもある。背後からの奇襲を常に警戒し、遠方からの狙撃に備えて広い場所へ出たくなる。少しでも拳動のおかしい人間を見たら魔族の擬態を疑う。

幻視幻覚。完全に病気だろう。

そのせいで随分とアリカに迷惑をかけている、とユノはドンテ力で待つハーフリザードの少女の顔を頭に思い浮べる。

この前のようにパニックになってアリカに襲い掛かりそうになったことも1度ではないし、幾度も実は魔族のスパイじゃないか、とか暗殺者や賞金稼ぎではないのかと疑ってかかったこともあった。

そうして正気に戻るたびに、悔いた、泣いて謝ったこともあった。

そのたびにアリカは許し、時には怒り、正気を保つ術と一緒に考えてくれた。

助けたはずの少女にユノはずっと助けられていた。

また「闘い」に飲み込まれそうになったら ユノはこうアリカのことを思い出すようにしている。

なんとか心の昂ぶりを抑えて、ユノは噴水の正面を抜けようとする。

噴水を囲む群衆の中から、鋭く澄んだ声が響いた。

「この神聖なリンベルネの御庭に、そのような不逞な格好で何様か」

ざわり、と群衆が凍り、ざざと何人かの人影が身を引いた。

そこに立っていたのはユノと同じくらいの背丈の、つまり同じく

らいには背の低い少女だ。

騎士の姿をしている。

貴族を表す赤毛はあまり手入れされず後ろ頭にひつつめている。蒼い双眸に引き結ばれた小さな口元。その頬に残る大きな刀傷がなければ城下の吟遊詩人あたりが美貌を褒め称える詩でも歌っていたかもしれない。

ブーツと同じ鋼の首当てに鉄の輪を連鎖して造られたリングメイル。軽装を重視しているのか細いしなやかな腕は二の腕まで露出されている。

鋼鉄で出来た腰当には湾曲した形状の剣が交差するように二本。グローブの甲にはどこか見覚えのある紋章が刺繍されている。

（二刀流？）

赫怒を滾らせながらこちらを睨む少女の後ろにはもう1人大柄の騎士がいる。

こちらも年の若い騎士だ。典型的な若い騎士といった風情だ。鎧はが錆止めに黒く塗られているところを見ると叙勲していない自由騎士だろう。こちらは軽装の少女と違い防御に徹するスタイルの騎士と見えた。顔に人の良さそうな笑みを浮べているもののその瞳はユノの姿を油断なく見ている。侮りも驕りもない善い瞳だとユノは思った。

「王女とのお話がある。道を開けてもらいたいのですが」

「知っている　しかしその前に少し私の用件に付き合って貰おう」

「あ、ちなみにセリア様でしたら沐浴中ですので今は王宮ではなく神殿におりますよ」

「余計な口を挟むなフリードオ！」

くるりと小柄な身体が反転し、後ろで笑いながら指を立てた騎士

（フリード？）の脛に痛烈な蹴りを入れられる。

がん、と鉄と鉄のぶつかる音がし、大柄な騎士が脛を抱えて飛び跳ねる様子にユノは少し拍子が抜けていた。

「用件とは、なんでしょう騎士さま」

「只の冒険者のフリなどして貰っても困る。貴様はユノ、ユノ・ユビキタスだろう」

「……」

「沈黙は肯定と見るぞ　我が親族の仇、貴様の血で慰めさせてもらいたい」

「ボクはその立会いです」

ざわ、と噴水の間を取り囲む群集が沸く。

「あれが？あれがかの“灰かぶり”か？」

「騎士を……殺したというあの？」

「おぞましい！真に白ではないか」

「ひ弱な少女に見えるぞ、何かの間違いではないのか」

「門番は何をしておる」

へっ、とそれまで作り続けていたユノの少女の仮面が割れる。

その下にあるのは　もうすっかり染み付いて取れなくなった冒険者の貌だ。

俯いたその表情は対面にいる騎士の少女には見えない。

「その双剣、見覚えがある。そう確か“アンテローズの白薔薇”」

「貴様の口が我が姉の名を紡ぐな、騎士殺しめ」

「それは失礼……あなた様が赤い薔薇の方でございますか」

「その通り、王都守護騎士団ルビィ・ギムレット・アンテローズ。

これ以上は無駄口、さあ剣で語ろう」

「せっかちは嫌われますよ、お嬢ちゃん」

ああ“捌け口”ができた、とユノの脳裏でなにものかがそう囁いていた。

もう既にアリカへの思考はどこかへ消え去っていた。

聖母の如き貌を浮べる鱗の目立つ少女の立像は「闘い」を途方もなく愛する不定形の塊に追いやられる。

それを最低だ、と他人事のように誰かが呟いた。分裂しているのを感じた　王都に入ってから胸に出来ていたしこりが消え去り、ずいぶんと楽に息が出来る。これは、きっと戦の空気だ。やっぱりもう「向月ゆの」は戦場から帰れない。

心のどこかでたくさんの自分が何かを言っている。

（セリアには、悪いことするなあ）

（でも、でもしょうがないよねだって仇だもんね）

（闘おう、闘おう、闘おう）

（もう駄目だ、こんなことをしてはいけない…だめだ…だめだ…）

（目の前の敵は軽装、早さを重んじる…今の装備のままでは少し不利）

ユノは煩くなつて自分の声^{コノ}を無視した。

はああ、と息を吐いて、腰のベルトから剣を引き抜く。

「上等、上等だよ騎士のお嬢ちゃん」

「……何だ？」

「ところで仇討ちってお嬢ちゃんは神聖なものだって考えたりしちやってる？でもねそれって違うんだよ」

「ルビィ、少し様子がおかしい。気をつけた方がいいぞ」

黒い鎧の騎士　フリードが一抹の危機感を感じて少女に警告する。

騒ぐ群集たちを退かせながら二人の少女の中間点、立会い人の立ち位置まで移動する。

それを受けた騎士の少女が流れるような動きで二刀の剣を引き抜き顔の前で交差させる。

「ちつ、バラックでやりあつつもりだったが…諸侯！少し噴水の間を貸して貰うぞ！」

「仇討ちってさ面倒くさいだけなんだよね　家が燃えるわ、アリカが危ない目にあいそうになるわ、ギルドの依頼書がなくなるわ、金もなにも私の手に入らない」

「何だ！貴様は何を喋っている！」

「飽きてるんだよね、私、そう仇討ちってのはもう飽きてるんだよ」

ばつ、とユノの白髪が踊り、それまでルビィに見えていなかった貌が顕になる。

そこにはルビィのはじめの一声に答えた、どこか疲れたような少女の面影が消えている。

凄絶な、「たった今のいままで戦場で敵を斬り殺していた戦士の表情だ

その視線に少しだけルビィは恐怖を覚える、が、次の瞬間には不敵な笑みを浮べている。

「まあそれでもいいや、その仇討ち、買っよ」

「上等……アンテローズの赤薔薇」推して参る……！」

二人の少女が、ゆつくりと歩を進め、それは早足へと変わり最後には突進へと変わる。

ユノは剣をだらりと下げたまま。

ルビィは顔の前で交差させたまま。

そして二人の距離はゼロになり　その瞬間にリーンベルネの庭が剣と剣の合いする音に支配される。

群集が驚愕の声を上げ、すぐに静まりかえる。それは未だあどけない幼さを残す“灰かぶり”の勇者の、その力任せを体言した嵐のような剣筋に息を呑み、その表情があまりにも楽しく笑っていたからだ。

対する赤い髪の少女騎士も負けてはいない。その可憐ともいえる双眸を凄絶に歪め、まるで舞踏のような剣捌きと足運びは命を刈り取る死のダンスだ。

「あはっ」

二人の少女のどちらかが　否、どちらもがそっくりな笑みを浮かべた。

ドッグ・デイ・アフタヌーン ？

『月』の暦1065年

天候：曇り 8月16日

15時22分 この時間に当てはまる言葉は、この世界にはない
王都ランバルディア王城リーンベルネ、噴水の間

噴水の間、群集の中にいる一人の学者は考える。
騎士と騎士、もしくは戦士が剣で切り結ぶさまを、剣で語ると表現
することがある。

その日、ただ戦うただけに鍛え上げられた技と精神のぶつかり合
い。その時のみ人は言語を失い、「剣で殺しあう」という人類でも
つとも強烈なコミュニケーションの虜となる。

それは敵対者の否定であり、同時に肯定でもある。
人が普段纏っている体裁という名の衣服が剥がれ、感情のない技巧
と獣のように無垢で無知な本能が対話を始める。

しかし、これは、目の前のこの「語り合い」は 何を語っている
のだろうか

白髪の勇者が笑いながら剣を天から地へ叩きつける。

それを危なげなく避した赤髪の騎士にもまた、どこか楽しそうな笑
みが浮かんでいる。

罵りあいなのだろうか、しかし両者の間に浮かぶ笑みはたわいのな
い遊びに興ずる街娘のようである。

それでは、談笑なのであろうか、しかし振るわれる剣の一閃には漲

るような殺意が溢れている。剣に素人の学者ですらそう見えた。おおお、と群集の悲鳴のような声に、はっ、と顔をあげる。

赤髪の騎士の剣（湾曲した、悪趣味な形をしているように見える）が白髪の勇者の動きを封じたのだ。

勇者の振るった直剣を湾曲した刃の一振りが絡めとり、もう一振りが盾の変わりをしている勇者の籠手と拮抗している。

両者は膝を折り曲げ、歯を食いしばり鏢迫り合いの体勢だ。

一目には赤髪の騎士が優勢に見えるが、勇者もまた巧みに体勢を変えることで剣先と籠手に来る力の流れを受け流している。

二人の少女の顔はまるで接吻をするような距離まで近づき、笑っている。

自由騎士　フリードは立会人を何食わぬ顔で務めながらも、その心中は穏やかではない。

目の前の決闘は、確実に命の奪い合いへと発展している。どちらかが負傷し、倒れて勝者が敗者に止めの一撃を振り下ろす。

そうなる前に止めることがフリードのこの場での唯一無二の役割だ。しかし、この「闘い」は自分に止められるだろうか？

フリードの手はベルトに差したピストルに伸びている。

家柄に関係なく、戦争の勝利への貢献と功績で認定される自由騎士にのみ与えられる名誉の武器。

いつでも白髪の勇者か、ルビイのどちらかの動きを止めることの出来るよう動きに注視する。

もちろん殺す気は毛頭ない。足元か、それとももっと直接的に剣を弾き飛ばす。

この距離なら、ルビイの手を握ったりするよりかは遥かに簡単に来る。その筈だ。

「はあっ！」

「はっ！！」

裂帛の気合と共に二人の少女が踊る 罅迫り合いからの急激なターン。

ルビィは猫のように軽々と跳躍し、勇者の頭上をとる。即頭部を狙った逆手からのスラッシュは左手に嵌めた籠手に阻まれる。

地に伏せるように低く姿勢をとった勇者は籠手で頭上をガードしながらルビィと対面になるように位置を入れ替える。

距離が離れる。身長190のフリードの大股6歩分の距離だ。

と、ルビィが着地すると同時に勇者がおかしな挙動をする。

体勢を獣のように低くしたままポンチョの内側に手をつ込み、「何か」を引き抜く。

一瞬、フリードにはそれが只の鎖の束に見えた、が、違う。鉄の鎖で編まれた「投網」だ。

（やばい…ルビィ！）

勇者の狙いをすぐさま認識したフリードは赤髪の少女騎士へ視線を向ける。

瞬く間に投網が投擲される。放り投げるように投げられたそれは重さを感じさせぬ速度でざあつ、と音を立てて広がる 狙いは、着地した瞬間の僅かな硬直。

「ぐっ！？」

直撃を喰らわなかったのは、ルビィの反射神経と身体能力の賜物だろう。湾曲した剣の一振りですぐに投網にを掬い上げて叩き落とす。

もし胴体や顔面にもろに喰らっていたら鉄の鎖の重みと衝撃で石畳

に転がっていた筈だ。

（だが犠牲はゼロじゃない）

左手の剣を損失する。中空で迎撃された鎖の網は重力とその重量に遵って石畳の上に落ちる。絡まり、歪曲した剣の刀身を絡め取る。ルビィは舌打ちして左手を引き上げる。網は剣を飲み込んで音を立てて散らばる。

「いい判断、ハナマルをあげましょう」

「…っ」

決闘の場になにわかに静寂が生まれる。

「いい判断、ハナマルをあげましょう」

痺れる左手に歯噛みしながらルビィは片手の剣を身体に引き寄せるように構える。

侮っていた 目の前にいるのは王宮や騎士の間で悪し様に叫ばれるような「魔族に組した卑劣で狡猾な騎士殺し」ではない。

王族に身体を売って身の安全を買っていた？ 冗談ではない！ ましてや姫様のご友人だから生かされ悠々自適な隠棲生活 そんな王宮まで侮辱するような唾棄すべき陰口は目の前の「事実」には何も効力をなさない。

間違はなく、そう間違はなくあの「契約」はしっかりと守られている。

「騎士殺し」の被害者家族、つまり姉を殺されたルビィなどに公布された 国のために死ぬまで戦う“死の契約”

単身でのモンスター退治。単身での砂海での護衛奉仕。単身での盗賊団制圧。単身での魔族討伐。

この目の前の白髪の元勇者は魔王の死後2年間ずっとその馬鹿げた冒険をしていたのだ。

それも殆ど平民の労働者階級ひとりの生活を保障する程度のはした金で

並大抵の精神力と腕前では到底達成できない 敬意など持てない。
正気の沙汰ではない。

（いや、正気ではないのか？）

目の前の元勇者 ユノ・ユビキタスに動きはない。決定的なチヤンスだったはずだ。

片腕と足を封じられればルビィの「速さ」と「手数」のアドバンテージは消失する。

絡まった投網から剣を諦めるまでの間に距離を詰めて一撃を放つことはできたはずだ。

そうすればルビィは大きなダメージを負う。

ルビィは元勇者を観察する。

何が楽しいのか、笑っている。かわいらしいとも表現できる造作の顔を皮肉げに歪めている。瞼の降りた黒の双眸。歪んだ口角。どこか少しだけ泣いているようにも見えた。

右手の直剣と籠手に包まれた左腕を下げ、無防備のように見える。

しかしその体勢から暴風のような一撃が繰り出されるのだ。

身に纏ったポンチョは風にはためかない。よく注視すれば不自然な「重み」で下に引つ張られているのが見て取れる。

投網だけではない、まだ何か武器を隠しもっているのは確実だ。もし次もまた武器を封じられることがあれば終わりだ、ルビィは双剣以外持ち歩くものはない。

（臆するな…目の前にいるのは姉さまの仇！剣1本でも目的は果たす！）

「いい判断、ハナマルをあげましょう」

ユノは目の前の少女　確かルビィという名前だったか、にそう呟く。

「ハナマル」とは一体なんだったか、それはもう忘れてしまったが確か満点とか最高得点とかの意味だったはずだ。

実際、目の前の少女、ルビィは「いい」

小柄な身体と柔軟さを最大限利用した隙の少ない剣の技。姉の“白薔薇”ほどの一撃の重みはないものの身軽さと回避への意識はルビィに軍配があがる、とユノの冷静な部分は評価した。

彼女の姉、ダイナはエインヘリヤルの中でも飛びぬけて強く、そして聡明な女性だった。

落ちていた物腰と「こちら」の世界には珍しい命を大切に考える方。恐らくあの魔族の村で行われた虐殺にも加わっていなかった筈だ　しかし死んだ。他でもないユノが殺した。

彼女は仲間である騎士を守る立場をとった。目の前で憎しみと怒りを籠めた“赤薔薇”と同じく。湾曲した双剣をその手に持って。

何故、何故ですユノ様！何故このような事をっ！

こいつら子供も殺してた、女の子に酷いことした、おじいさんを吊るしてた。

……っ、魔族ではありませんか、正氣に戻り下さいませ！！

魔族なら、人間じゃあないならあれを許してもいいって……
そう考えるんだ、ダイナもさあああああ！！！！

血のような雨、熱い泥、着慣れぬ金属の鎧。汗で滑る剣。
いつもの悪夢を振り払う、せつかくのイイところなんだ、あとに
てよ。

ふっ、と小さく息を吸い、剣を構えて肉薄する。
それを迎え撃つようにルビイもまた逆手に剣を持ち替えて突進して
くる。恐らく切り結ぶ気はないだろう。

アッサシンの如く一撃で致命を狙ってくる戦い方だ。

二人の剣が殆ど同時に振るわれる。

ユノの放った払いの一撃はチェインメールの肩口を斜めに薄く切り
裂くだけで終わる。剣の先端ぎりぎりでの上体のそらし、雷鳴のよ
うな反射！

剣を大きく横に振ったユノの内側にルビイが侵入する。ほとんど身
体をくつつけ合うような距離、湾曲した刃が肩口から心臓を貫く角
度で突き出される。しかし咄嗟の判断で上体を大きく捻ったユノに
その刃は当たらず、レザーアーマーの胸甲部分だけを切り裂くだけ
に終わる。

次の一撃が来る　逆手に構えた短剣は狭い空間でアドバンテージ
を発揮する。

肩から胸まで振り下ろされた刃が、その道筋を辿るようにユノの顎
元へ

「残念」

「！！」

爆発。それはそんな音だった。実態はユノの籠手に包まれた左の拳がルビイの胸の中心に叩いた音だ。腕一本分を伸ばす距離もない、それも無理のある体勢からねじ込まれた「鎧に阻まれる」筈の拳打。しかし、それはルビイの息を詰まらせ、身体を浮き上がらせるほどの衝撃を与えていた。

歪曲した剣が石畳に転がり、赤い髪の少女騎士は“灰かぶり”に膝を衝く。

ああ、と観客と化した群集が息を呑む。

「この籠手はさ、一応勇者の武具なんだ。他のものは全部没収されただけ、これだけはどうしようもなかった。」

「かはっ……はあ、はあ……っ！」

「自分の手を自分で握りつぶしちゃうからさ、これ “グラーベルの鉄籠手” を付けてないとろくに剣も握れない。」

そう独り言のように呟きながらユノは籠手に包まれた左手を開閉する。

不可思議な光沢を持つ鉄の表面には雷雲と古代の植物を模した意匠が刻まれている。

“グラーベルの鉄籠手” 勇者に与えられる「巨人を殺せるほどの怪力」を得られる加護の防具だ。

「あうっ」

ルビイの手から離れた武器を探す手はユノの足にすぐさま阻まれる。

軽い、もう戦う気のない蹴りだ。

「何故だ…何故殺さない!!」

「駄目だよ赤い薔薇の騎士さま、もうこの決闘はおしまいだよでしょ？」

ユノが振り向いた先で、額に汗を浮かべながらピストルを構える自由騎士フリードが頷いた。

「神聖な御庭で決闘など　騎士フリードがついていながら、どういった見です！」

「いえ、ほんとおっしゃる通りでございます、ほらルビィも謝ろ？ね？」

「……ふんっ」

「あ、あなたという人は…!!今日という今日は許しません!騎士隊長だからといってなんでも思い通りになるとの考えは大間違いですよ!!!」

「……………」

本来は城内の人間の憩いの場である噴水の間を借りて決闘、など許されるはずもなく、ルビィとフリードは騒ぎを聞きつけてきたセリアお付きの侍女にこっぴどく叱られている。

自由騎士は先ほどピストルを構えていた勇ましさはどこへやら「せいざ」のような格好でひたすら謝りたおしている（かなり謝り慣れているように見えた、この侍女に対して）

もう一人、敗北を喫したルビィの方はというと貴族の子女にあるまじき胡坐を掻いて、ひたすら不機嫌そうに顔を背けていた。時々ユノの方を睨みつけ、すぐに目をそらす。

相対していた時の戦士の顔はなく、年相応、いやもつと幼い表情が頭になっている。

ユノはそれを遠巻きに見つめている。少し気まずかった。

「闘い」の発作は消えていた。あとに残るのは疲労感と後ろめたさだけだ。

目の前の騎士二人相手に素行の悪い生徒を叱るような侍女をユノは知っている。

「とにかく、お二人にはしばらく頭を冷やしてもらいます！もうちゃんとイスラ様にはお話がいますからね、厳罰は免れないと思いますい！！」

「厳罰だと？ふん、どうせ武器庫の手入れだろう今月に入ってもう三回やったわ」

「自慢げにいうことじゃないよね、ルビィ」

汗だくで駆けつけた衛兵を伴って、ルビィとフリードが退場する。フリードの方は落ち着かない、しかしどこか安堵したような表情で、ルビィの方はというところを睨みつけながら「次こそは」「必ず果たす」と、唇の動きからそう読み取れた。

ユノはその親子のような身長差の二人の背中を奇妙な感情で見つめる。

仇討ち、復讐。どうもユノがこれまでで体験してきたような、どろどろとしたドス黒い情動は感じなかった。家を焼き、闇討ちし、大切な何ものかを人質にとって「目的」を完璧に果たそうとするような、ある種の「真摯さ」を感じなかった。

溢れるような怒りはあった。しかし、そのみだった。

「ご足労をかけながらとんだご無礼を…お久しぶりでございますわユノ様」

「ウルスラ」

ウルスラ、それが侍女の名前だ。

「こつち」の世界には珍しい黒髪黒瞳、彫像の如き美貌。白いふくやかなシルエットのドレスを身に纏い、頭に「聖女セリアに選ばれた証」である花飾りを付けている。ただの花ではない、10年に1度開花するらしいフライヤの花だ。

フライヤの花には一般に普及する魔法^{マジカル}やエルムト出身の者のみが扱うことのできる魔法^{ウィザードリー}魔族たちが人と違う体系で生み出した妖術^{ソーサリー}のいずれにも当て嵌まらない奇跡のような力が籠められており、あらゆる毒・洗脳・呪いを跳ね返す力があると言われている。

ユノ達が授かった“勇者の加護”と同じ力なのかもしれない。

花の奇跡に守られ、王家と姫に選ばれた6人の侍女は特別な権力を持ち、死ぬまでその側に仕えるらしい。

だから「こつち」に召還された当時からユノはウルスラを知っている。

「みんな」と同じようにユノを擁護してくれる数少ない一人だ。

「それでは行きましょうユノ様 セリア様がお待ちですよ」

「……………うん」

リンベルネの西庭にひっそりと佇む白亜の建築 礼拝堂の一室。

そこに幾人かの侍女を従えて、一人の女性が居る。

王家に位置するものを顕す金髪は顎のラインで切り揃えられ、今にもさらさらと音を立てそうな細やかさだ。意思の強さを感じさせる深い蒼の瞳、どこか緊張したような匂いを漂わせる唇は桜色だ。

被服は白を基調としたドレス 周囲を固める侍女のものによく似ている。しかし目ざといものであればそのドレスには「守護」を機

能するルーンが縫いこまれ、周囲のマナに呼応して淡い光を発しているのに気づくだろう。

「フライヤの花」よりも一段と強い力を持つ強力な魔術式だ。

「セリア様、ウルスラがユノ様を連れてこちらに参ります」

「そう…わかったわ」

周囲を固める5人の中でも一段階級が高いと見える侍女がセリア

セリア・ランバルディア・イヴヴァルトに耳打ちする。

それを受けて聖女と名高い姫君は緊張を一層と強めたまま立ち上がる。

白い薄手の長手袋に包まれた指先を落ちつかなげに胸元で組み合わせている。

期待と不安　その二つのよく似た感情が蒼い瞳の中で揺れている。

彼女は、ユノはどう変わってしまったのだろうか。

2年間の「契約」　それを提案したのは他でもないセリアだ。

間違った判断をしたとは思っていない。ユノは大きな罪を犯した。

勇者という人類の守護者でありながら、魔族を助け「エインヘリヤル」の騎士を殺害する。それも殺された20人の騎士は大陸の主要国の有力な貴族たちだった。ランバルディア出身のものもいる。貴族の感情としても国民の感情としてもどんな「理由」があつたとはいえ許容されるものではない。

（でもユノが、わたしの友達が、死んでしまうなんて耐えられなかった）

それは傲慢な考えだろう　彼女の二年間を思えば。

セリアは父であるランバルディア王と交渉して「契約」をユノに課することにした。

死ぬまで、文字通りモンスターが魔族か、はたまた人間かに殺されるまで無償で戦い続ける。

あくまで「戦いで死ぬ」ことが前提だ。それ以外の死因。つまり病による死や飢餓による死は含まれない。

王宮の癒し手がすぐさま傷病を取り除く。

老衰も同様だ。もつとも、勇者の加護がある限りユノが老けることはない。

自殺は、魔術によって出来ないようにさせられている。

仲間もなく、孤独と死の危険だけを味わい続ける。生き地獄。

しかし、その「契約」が唯一貴族が権限の手を伸ばし得ない不可侵のものだった。

ランバルディアの王族は貴族の傀儡だ。他でもないセリアはその考えを持っている。

古来より戦争による勝利で発展してきたランバルディアの王族は、いつからか国の運営を貴族に任せるようになった。立法も、司法も、行政も、経済も、国の運営という運営を貴族が受け持つことになった。

だからこの国は一見王族に全てが従っているように見えるが、実体は貴族が支配する国だ。

気がつけば。セリアの幼少のころから、王族は国を実質的に支配出来なくなってしまった。

しかしそんな状況の中でも、どんな重要なポストにいる貴族であれ頭を垂れて遵わなければいけないものもある。

それはウォー・エイジ、王族の始祖に主神ドンナーが与えた「神の法」だ。

5つの石版からなるその中に「契約」は記されている。

『戦の中で、許されざる罪を犯せしものには、安楽な死を奪い永遠

に闘争を与えよ』

それをセリアが見つけ ユノに課した。

その「契約」は貴族たちがユノに課そうとした罪 つまり拷問の
末火炙りにして死罪。

それよりも位が高い刑なのだ。

貴族は王族を操作出来るが、神とその巫女の考えは変えることは出来ない。

セリアは意を決したように歩きはじめる。5人の侍女達はしず
ずと彼女の背後に付き従っている。

居室を抜け、石造りの回廊を抜ける。回廊の天井には主神ドンナ
ーと海に封印された悪神ミズガルズの争いが描かれている。雷を纏い、
鉄の槌を振りかざすドンナーと巨大な蛇に姿を変えたミズガルズの
姿。その下では筋骨逞しい人間たちが己の神の勝利のために果ての
無い戦いを繰り広げている。

そして装飾が施された扉を開け その中に白髪の少女の背中を見
出す。

小さな背中、傷だらけのポンチョに包まれた肩。手がぎゅつ、とズ
ボンの裾を握り締めているのが見えた。

開いた音を聞きつけてか、少しだけ肩が震え、ゆっくりとその背中
が眩く。

伺うような、怯えるような色をその声にセリアは幻視した。

「こんな格好で来て … 怒る？」

「いいえユノ、そんな事はないわ」

「嘘、きつとしかめっ面をしてるわセリア」

「そんな事ない、そんな事、ないわ」

「…… ひ、久しぶり、セリア」

「ええ、ええ、おかえりユノ！」

胸の中に熱いものがこみあげて、堪らずセリアは少女の背中に飛びついた。

そして彼女はもう一度この門をくぐった。

年数・日時共に詳細不明

その世界は、昏黒に満ちている。

深海 封印された神ミズガルズの領域。

主神ドンナーの瞳である太陽の光が届かぬほど深遠。得体の知れない光源で照らされた白い海底は空虚で、

ごぼごぼと水中を泡が漂うような音のみが静寂を埋めている。

動くものは存在しない死の世界 人がその世界を幻視したとするならば、そう形容するだろう。

しかしそれは間違いだ、その世界には幾多もの生命が息づいている
多様で、脅威的な

カッテ ウレシイ ハナ イチモンメ
マケテ クヤシイ ハナ イチモンメ

ソウダン シヨウ ソウシヨウ

カッテ ウレシイ ハナ イチモンメ
マケテ クヤシイ ハナ イチモンメ

ソウダン シヨウ ソウシヨウ

それは唄だった。あどけない抑揚で唄われる子供のおそびうた、その唄はこの世界には、この世界のあらゆる歌集にも、古文書にも、

ましてや神の遺物にも存在しない筈の　　遙か遠い、観測できない世界の唄だった。

その唄を鈴がふるえるような声音で唄っているのは、一人の少女だ。

美しい、と表現できる少女だ。艶やかな黒髪を可愛らしい朱のりボンで結び、小さなイエロータイの付いた漆黒のゴシックドレスに身を包んでいる。白い手袋に包まれた手はバランスを取るように大きく広げられている。

黒と青のストライプボーダーのソックスから覗く足はこの世のものとは思えないほど白い。

靴だけはその少女の印象に不釣り合いな「ぱんくめたる」を意識してデザインされたような攻撃的な代物だ。

少女は笑みを浮かべながら、前に歩を進め、足を蹴り出し、あとずさり　踊りのような動作を反復している。足を蹴りだすたびにぱつ、と白い砂が雪のように舞った。

それはありえない光景だろう。海底、それも高い水圧と日の光が射さない故の低水温の深海層で少女が踊り唄っている。水の中だというのに少女は一片の苦しささえ見せず、自分の庭のような気楽さで存在している。

何もかもから、少女は“浮遊”して在る。

「勝ってうれしい花いちもんめ、負けてくやしい花いちもんめ、相談しよう、そうしよう」

少女の唄が唐突に終わる。静寂　いや、幽かな海の音声に混じって何処からかざわめきのような声が、その場を支配していた。

人間の言葉ではない、奇怪な声音と発声で紡がれる人類には忌むべき言語。

それが深海の暗闇の中、少女を中心にして蠢いていた。

少女がすう、と息を吸って大きな声をあげる　水中だというのに
その声は善く通る。

「負けて悔しい子はだあれ？相談しよう、そうしよう！この指と――
――まれ！！！」

ざああ！

そんな音がした。大勢の何かが歓喜するような、感情のある音。
それと共に深海の暗闇が光で満たされる　青白い巨大な光。それは少女の遙か頭上に月のように二つ、いや、生物の目のように並んでいる。冗談のように大きい、青白く発光するなものかの瞳。

それに照らされて、百や千では効かないが異形の軍隊が少女の周囲に現れる。

奇妙な鱗のような形状の鎧を身に付け、あるものは槍を、あるものは剣を、あるものは旗を掲げている。大蛇の姿をしたミスガルズの旗　魔族が掲げるものだ。

そう、それは魔族の軍勢だった。その軍勢を構成する兵士は全て魔族。死人のように白い肌と黄色く発光する瞳。瞳孔が蛸のように横長になっているものもいる。位の低いと見えるものは海の生物と融合したように　魚鱗やぎざぎざとした鮫の歯、蛸の足、蟹の鋏。

人の形から離れていく

かつて　神代の時代、永き戦いの終焉に主神ドンナーはミスガルズを打ち負かし、海へと放り投げた。未来永劫、地上へ戻る事が出来ぬよう鎖で身体を縛り、二つの目を奪って。

自らの神が海へと没するのを見て、その信徒たる人間達が次々と海へ身を投げた。

それがウォー・エイジの終わり　そして種族としての“魔族”のはじまり。

ミズガルズに付き従い、海へ適応した人間を、海へと消えていった神とその信徒のことなどすっかりと忘れ果てた地上の人間は魔族と呼んだ。

歓喜する魔族の軍勢を、腰に手を当てて満足げに少女は見つめている。

「お初にお目にかかりますわ、四軍団長とその配下の皆様」

少女の声に呼応して軍勢の歓喜の声が止むと共に、その中から4人の魔族が軍勢の先頭に進み出る。重層鎧に固めた禿頭の巨人。線の細い女性。杖をついた老人。剣を提げた少年。

その4人は一見人間のように見えた、が死人のように白い肌と発光する瞳がそれを否定している。

「此度の戦、じつにじつに残念な結果に終わってしまいました。かつてのように国王様は人間の勇者に倒され、我々はまた地上奪還の夢を挫折しようとしている。」

少女の演説が始まる。海底を埋め尽くす異形の軍勢　その中には人間の少女程度なら小指で捻り潰せるほどの巨体を持つ者もいる。それに対してドレスに身を包んだ少女は堂々と、演劇の役者のように朗々と言葉を紡ぐ。

「それで皆様は満足ですか？ウォー・エイジの終わりと同じように、王の死を嘆き、悲しみの鎖に囚われ、絶望に眼を奪われ海の藻屑となりますか？御役目を忘却し、無為な生と退廃の果実を貪り喰らう人間共に地上を明け渡したまま？」

おおお、と怒りの声が深海を震わせた。

その音は水の中でもり、反響し、ひとつの巨大な生物の咆哮のようだ。

「ならば皆様、征きましよう。二千年の敗戦の歴史は本日で御終いでございますわ、その為に我々は敗走を偽装し、潜伏し、浸透し、人間どもを勝利の毒杯に酔わせている 凡ては布石にございます」

軍勢の歓喜は最高潮を迎える。槍を高く掲げ、剣を頭上で振り回し、ミズガルズの旗はちぎれんばかりに振られる。少女の演劇の台詞のような宣言がひとつの種族を一個の巨大な生物へと変えてしまったかのようだ。

その狂気とも呼べる歓声のなか、四軍団長と呼ばれた魔族達が少女の眼前へと迫り、ゆっくりと 臣下が王へ忠誠を誓うように、片膝を着き頭を垂れる。

そして異口同音に、少女へ確信的に、決定的に「ある言葉」を投げかけた。

「感激の極み、第一軍団“リンドブルム”これより貴女様へ無限の忠誠を誓います」

禿頭の巨人が岩石を擦り合わせたような野太い声で宣言する。

「同じく第二軍団“レヴィアタン”あなたを王と認めましょう」

黒髪の女性がたおやかに、優雅な一礼と共に宣言する。

「第三軍団“ニドヘグ”この老骨、あなた様のご親征を知の力を持つて支えさせて頂きます」

老人が柔和な表情の中に抑えきれぬ歡喜を交えてそう宣言する。

「えっと、第四軍団“ローレライ”新たな国王様を歓迎いたします」

最後に少年が緊張した面持ちで少女に早口で宣言する。

「確かに、その御言葉承りましたわ さあ皆様」

少女は満足げに頷き、ひらりと白い手袋に包まれた手を翳す。軍勢を照らしていた光源が移動をはじめ、少女の背後に聳える巨大な「なにものか」の姿を顕にした。

それを目視した魔族たちは一瞬の間沈黙し、それはざわめきに変わり、すぐさま歡喜の雄叫びへと変わる。

国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！

国王様！国王様万歳！
国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！国王様！国王様万歳！
国王様！国王様万歳！

「なにものか」が振動をはじめ　ぱらぱらと石片と砂が舞い散り、深い海の世界を振るわせる。巨大な生物の目覚め。
或いは動力に火が灯った機械。
少女は堪えかねたように笑い、その口元を可愛らしく手で隠しながら呟いた。

「ニュー魔王参上」

それが、ユノ・ユビキタスが姫と再会した現在なのか2年前の魔王の死後直後の過去なのか　どのみち地上に、人間に、知りようはない。

『月』の暦1065年

天候：曇り　8月16日

18時20分　仕事帰り、早いものだとしエスタの真つ最中
王都ランバルディア王城リーンベルネにある礼拝堂の一室

セリアはあまり王族らしくない、ユノは改めてそう思っていた。
まず礼拝堂に設けられた彼女の居室からしてそうだ、石造りの壁に

白い布の天蓋のあるベット。いくつかの魔術書が丁寧にしまわれた本棚が二つ。祈祷に必要な道具が収められた棚。あまり衣服の納められていないクロゼット。

たとえセリアが巫女という身分であることを鑑みても、非常に簡素な部屋だ。王族や貴族の女性、といえばユノ自身は数えるほどしか関わったことがないが、凄。生活のあらゆるものに贅を尽くしている。勇者のひとり。ハイネの生家を訪れた時はみんなと一緒に面を喰らったものだ。

そう 「みんな」と一緒に

セリアの部屋、ベットのすぐ横の壁面にはかつて魔王退治のときに身に着けていた衣服が大事そうに飾られている。サファイアの飾りがついた王家御用達の魔術杖。ランバルディア王家の紋章と守護のルーンが縫いこまれた外套とローブ。修繕のあとが目立つミスリル製の胸当て。どれもこれも記憶の中に染み付いた彼女の服装だ。ユノとセリアは簡単な軽食を摂りながら、この2年間の事について話した。

魔王が消えたあとの国の様子。

王家での生活のこと。昔の冒険の思い出話。

“契約”で旅した街や土地のこと。2年間の冒険の話。

ある半人半獣の少女の話。南へと旅立っていった貴族の女性の話。昼過ぎの決闘の話。

セリアは早口で、どこか落ち着かなげな嬉しそうな様子で話し、ユノは淡々と、脚色のない言葉を選んで話す。

それが二人の出会った時からの常態だった。

召還された当時から、セリアは遙か遠い異世界の話。かつて召還

された勇者は巫女にあまり故郷の話をせず殆ど文献に残っていないらしい。を聞きたがったし、そうでなくても幼少の頃から王城をあまり出ず、主神ドンナーの巫女としてランバルディア王家の姫として生きてきたセリアには対等に話せる友人。という人間はユノが初めてだった。

対してユノは「向月ゆの」だった頃から基本的に誰に対しても同じ話し方をしていた。言葉に感情を載せず、必要以上に言葉を飾らない。より善く話を伝えようしたり、自分を賢く見せようと言葉を飾ると却って話は本質を見失って意味が通らなくなる。

はじめはそうでなかったのかも知れないが 「向月ゆの」 はあまり年頃の少女らしくない、そんな人間だった。

王家の姫として、家族のまるで伝承のように脚色された武勇伝を聞かされたり、貴族や有力商人達のふんだんに着飾った美辞麗句ばかり聞かされてきたセリアにはユノの話し方は新鮮で、好ましいものに映った。

「へえ、それでその子と同居を？まるで恋人同士のようにじゃない！
いじらしい」

「こ、こいびと…背筋が寒くなる事を言わないでよ」

「あらごめんなさい、でもリザードマンはあまり性別を気にしない、
というのには本当なのよ？昔の伝記ものにもむくつけき大男の騎士と
リザードマンの恋物語があって、そのリザードマンの性別は最後まで
で語られない あら、どこかで聞いた話ね？」

「やめてよそういう話は…」

「それでね、聞いているユノ？」

「うん、聞いているよ」

「そう良かった。その貴族の方ときたら、一方的に話しておいて私

が話す段になるとてんで耳を貸さないのよ、あれで領地の経営なんて勤まるのかしら」

「それは…王族のセリア相手に相当な度胸だね、まあ有力な貴族になればなるほど不都合な話に耳を貸さないことがうまくなるみたいだけだね」

「そうなの？」

「見た目は悪いけどね、そのパラ・カ力は意外と酒にあうんだよ」

「へえ、王宮にも取り寄せられるかしら？」

「ドンテカの酒場ではどこにも置いてあるし、あ、でも神経性の毒があるから調理には細心の注意を払わないといけない」

「ど、毒があるのにお店で出すの？」

「毒にさえ気をつければ干物でも刺身でも塩漬けでもおいしいんだよ？ちゃんと調理出来てない店で食べて療養院に担ぎ込まれるのは月に何人もいるようだけどね」

「……理解できない世界だわ」

他愛のない話で日は傾き、夜が更けていく。

そろそろ本当の「話」を聞かなければならないとユノは思った。

「それで、私をどうして此处に？」

「……」

「私が、そう、私は前を向いてこの世界で生きていかなきゃならない。それは判る。しかしそれは私の考え方の問題であって“契約”を無期限に停止する必要はない筈だ　何か、あったの？」

「そ、それは……」

「言いにくいことなの？」

セリアの蒼い瞳に、翳りが見えたのをユノは見逃さなかった。瞳の中にあるのは不安の雲だ。

大きな、今にもどしゃぶりになりそうな、何かに対しての不安。

手元はそわそわと指と指を組み合わせている。それは目の前の聖女が何か心配事を考えるときの「くせ」だ。

「それは、わたしに関係することなの？その、みんなで解決できる問題ではないの？」

「……」

「黙っていては、わからないよセリア」

「み、んなが」

沈黙

「5人から、連絡が途絶えました」

「！」

ユノはその発言を衝撃を受けながらも、頭の中で分析する。

みんな、とはユノとセリアが共に魔王に立ち向かった仲間のことだ。神城ナオキ、東条ケンヤ、ハイン・オーディニ・ミルニル、アライス、エレノア。

その5人は、少なくともユノが持ちえる情報源では未だ魔族の残留兵や凶暴化したモンスターが残る大陸西部の沿岸。魔族が地上侵攻ルートに使った場所で戦っている筈だ。言葉は悪いが残党狩り、しかし高位の魔族に対抗できる人間が限られている以上それは必要な事だ。

詳しくは知らないが、荒れた国を復興するために王宮に戻ったセリアとみんなはニザヴェリルで開発された通信用のマジックアイテム「ラタトスクの耳飾り」を通じて連絡をとっていた筈だ。

ユノはというと 受け取るのを拒んだ。何も考えたくなかったし、みんなと何を話していいのかすら、判らなかつたからだ。また自分の事に行きそうになる意識を、目の前で俯くセリアに向ける。

（魔族に倒された？あの5人が？それはありえない。勇者の加護、勇者の武具。その二つがあれば普通の高位魔族程度なら束になつても叶わない。そうでなきゃ魔王は未だに生きて西部を支配している筈だ。）

5人が残留した魔族程度に殺される。その可能性はない それでは何か別の理由があつたのか。

「それは、いつ頃の話？」

「1週間前の晩…いつものようにナオキにあちらの様子を聞こうとすると、距離が離れすぎていて言葉を伝えられない、と」

「完全な無反応じゃない、ラタトスクでは伝えられない距離まで離れたと…」

「ですが！それはありえないんです…あの耳飾りは地上である限りどんな場所でも声が届くもの！みんなに、何かあつたとしたら私は……！！」

「落ち着きましょう、セリア」

セリアは顔をくしゃくしゃにしながら、泣く。不安定になりかけているとユノは感じた。

目の前の聖女 セリアは特別勇者の「みんな」を気に掛けている。それは自らがこの世界に召還したという責任感と、これまで平和に暮していた人間に「魔王を討伐する」という危険な戦いを結果的に強い、という罪悪感からだ。

本来なら「そんなもの」に主神の巫女が気づくことはない筈だが、

勇者と共に冒険し戦いを共にし、一人の勇者の崩壊を視た王族の少女には目の逸らしようなない事実として心に重く残った。

それでも、それでもセリアは前を向いて、全てがいい結果になるように頑張っている。

優れた巫女として国の復興に尽力し、王族としてユノの減刑を先導し、聖女として国民の期待に応える。責務。責任。任務。使命。タスク。それを背負うことをやめたしまったユノは　だからこそセリアを尊敬している。

「私は、確かめてこればいいのか？」

「…」

「セリアのことだ　まだ、大半の王族にはその事実を隠しているんでしょう？今、この国でその話は大きなタブーだ。勇者の消息不明。それは、魔族に勇者が殺されてしまったかもしれないとの解釈を生む。そうすればどうなるか…国の、混乱」

「そう、です」

「ロードスギルドに話を持っていくわけにもいかない。あそこの上層部は私も信頼できるが、実際の冒険者たちはそうとは限らない。騎士団も同様」

「ごめんなさいユノ、わ、わたしはまた、ま、またあなたを」

「いいの、私は感謝している。セリアが気に病むことはない。そう、セリアの考えの通り、私が行けばいい。私は一応勇者だから縛られるものは少ないし、何よりこうしてセリアとの繋がりもある。みんなとの繋がりも…そう、私が“それ”が何なのか、確かめてこればいい」

ユノは泣きじゃくるセリアを抱きしめながら、自分の意識がひどくクリアーになっているのを感じた。不安。焦燥。危機感。それは一切感じない。ただ目の前にいる親友　セリアの心配事を解決できるようと、ただそれだけに思考が使われていた。

過去の重さも、「闘い」の狂気を今は関係がない　これが「前向き」になれていることなのかもしれない、と頭のどこかでユノは感じていた。

必要なものは、新しい仲間と未知の何かに対抗できうる装備。

あとは　ドンテカで帰りを待つ、少女との別れ。

必要なことは、必要な時にやらなきゃならない

『月』の暦1065年

天候：曇り　8月18日

23時12分　こんな時間に何かをするというのは、狂気の沙汰だ。

王都ランバルディア王城リーンベルネ、守護騎士団のバラック。

「あーっ！！！！ちくしょうっ！！」

どかん、とエールのジョッキが割れんばかりに机に叩きつけられる。どこかぼろぼろになったバラックの一室がその振動に揺れ、

チュニツク姿の人の良さそうな青年 フリードを怯えさせる。

「ル、ルビィ、もっと静かに、静かにね？負けて悔しいのも判るけど騎士団の皆起きちゃうからね？」

「ふん、だからどうしたってんだ。どうせ文句しかいえない連中だ、好きに言わしときやいいだろう」

「ああ…なんでこの子はこんな風に育っちゃったかなあ…ホントにもう」

顔を赤らめ、座った目つきのルビィと、おろおろとしたフリードがいるのは守護騎士団のバラックだ。

下級兵士がすし詰めにされる簡素で不衛生な一戸建ての兵舎と違い、三階建ての上級仕官個室のあるものだ。ルビィとフリードが居るのもその一室となる。石造りの建築と魔術のランプ。端正に磨かれた鎧に槍と剣。娯楽用のチェスやカードなどもある。

「だいたいだ、加護だか籠だか知らないがあれはズルイと思わないかフリード！あと勇者の武具だかもズルイ！あんな効果があつてはおちおち取っ組み合いもできない！」

「うんそうだね、でもルビィ普通に取っ組み合いしてたよね、自前の筋力で」

「それは私がゴリラだと言いたいのか？うん？どうした言ってみるフリード！」

「いひゃい、いひゃい、ほほをひっはらなひでえ」

ぐいぐいと余計な発言をしたフリードの頬をルビィが抓る。彼女の服装もフリードと同様のゆったりとしたチュニツクだ。開いた袖口から脇が大きく露出し、フリードの視線を誘導しまくっている。健康的に焼けた腕とは裏腹にルビィの脇の下は、白い。

（腋、ワキ、いや胸見えそだよ、やべえ、やべえっすよ親方）
「とにかくだフリード、あの勇者がこの城にいるうちに私はもう一度再戦したい。」

「え！？あ、まあそうだよな」

「次はバラックの闘技場で、万全の体調を整えて挑む。あいつの戦り方はわかった、次こそは一太刀」

「い、いやルビィ…」

「次こそは、なんて考えているからおまえは“お嬢ちゃん”なんだよ」

「！！」

ルビィの部屋の戸口に、壮年の男が立っていた。ぼさぼさの赤髪を一本にまとめて流した、垂れ目が特徴的な男。赤いチュニツクの胸には守護騎士団長の地位を表す赤と黒のツートンカラーの盾が刺繍されている。

休息中だと言うのに腰には剣を提げている。もっともここにいるフリードもルビィも、それぞれ腰の後ろにピストルと二本の短剣を提げている。

規律上、違反だ。

イスラ・ウルズ・アンゴシユ。守護騎士団の団長にして、天下無敵のルビィが唯一頭の上がない相手だ。

「なんだ団長、何か用でもあるのか」

「敬語、敬語使おうね？ルビィ」

「傲慢で増長したガキが二階でなんか喚いてるからわざわざその間違いを潰しにきてやったんだよ」

「なんだと・・・？」

「だいたいだ、フリード。コイツのお守は貴様の役目だぞ、お守つてのは側にいて言うこと聞いているだけじゃなくて時にはドタ

マぶん殴ってやんなきゃ駄目なんだぞ」

「い、いえしかし……」

「おまえだって分かってたんだろ？ あーゆう結果になることくらいは」

「何だ！ 何が分かっていたって言うんだ、答えろ！！」

いきり立つ赤髪の少女を威圧するようにイスラは見下ろしながら言う。

ルビィもまた激昂しながらも相手が決して殴りかかりたり刃を向けてはいけない人物であることがわかっている。

イスラの口元には笑みが浮かんでいる。

「ブザマに負けることくらいだよ、アンテローズ。」

「貴ツ様……！！！」

「うん？ 無様じゃないと言えるか？ アンテローズ、自慢の双剣で――太刀も有効な攻撃をすることもできず、

しかも“拳で胸を衝かれる”なんて明らかに油断してました、って負けかたをするのはさ」

「イスラ様、それは、言い過ぎでは」

「おまえはこのガキに甘すぎるぞフリード。いや、そもそも刃を交えて負けという次こそは、なんて発言が出てくるのは俺の指導力不足なのかねえ、それとも“ゴツコ遊び”をさせ過ぎたか」

「言わせておけば……！！！」

激怒を通り越し、ついに立ち上がったルビィが目の前のイスラの顔に殴りかかる。イスラはその拳をこともなげに受け止めると、ダンスでも踊るかのように腕を捻り反転させ、エールのジョッキが並ぶ机に叩きつける。1秒とかからない早業だ。
ぎゃん、と可愛らしくない悲鳴が上がる。

「いいかアンテローズ。この状態から俺はおまえを殺せる、剣を抜いておまえの心臓を貫くことが出来る。他にも首の骨を折ることも、このままボコボコに殴って失血死させることだって出来る」

「おやめ下さい！イスラ様 ルビイにはまだ！」

「駄目だ、そろそろ教えなきゃならん。今のおまえの状態はあの決闘の終わりと同じだ、ユノ・ユビキタスはおまえの首を刎ねることも心臓を貫くことも、その他の残虐な見世物みてえな殺し方をする事が出来た」

「ッ」

「それを何故しなかったか？あんなモン、戦いじゃなくてお遊びだからだ、本当の戦いに次なんてない。おまえはあそこで諦めずに持てる手札で最大限勝負しなきゃならなかった」

「イスラ様」

「あの場に立っていたのがおまえじゃなくてフリードだったなら、あの勇者ともっと互角に闘えたかもしれねえなあ」

「！！！！！」

ルビイは身体を拘束されたまま今の発言を反芻する。フリードが？あの勇者と？

いつもいつも私に引っ付いては弱気な発言をするこの騎士が？

（私は、フリードより弱い？）

「フリードはおまえが思っている以上にエゲツないぞ、敵の油断を誘う。挑発する。隙を作る。騎士の世界では卑怯と唾棄される手段を幾らでも簡単にとれる」

「……やめて下さいイスラ様」

「何故かって？そりゃ勝つためだ。有利な立場で敵をブツ殺すためだ。どんなに追い詰められていようとな」

「……そうか」

「分かりかけてきたか？」

目を閉じて、ルビイは考える。あの戦いを思い出す。ルビイは対等に戦う、という点に囚われ過ぎて突発的な攻撃に対応出来なかった。ほとんど未知数の敵にも正々堂々とした戦い方を求めてしまっていた。

鎖で作られた投網も「グラールベルの鉄籠手」の一撃も、あの場から立て直す手段は幾らでもあった筈だ。

諦めて「次」なんてありもしない幻想に囚われてしまつてこだった。

「必要なことは、必要な時に、やらなきゃいけない、ですね」

「お？」

「私はあそこで負けを認めるべきじゃなかった。死ぬ寸前まで、戦うべきだった。あの勇者の隙について、歯でも指でも喰らいつくべきだった」

「ルビイ……」

「私は、あたまが悪い　団長、今ので、あっています、か？」

ぐ、と抑えつけられる圧迫感が無くなり、今度は肩を掴まれて反転させられていた。

そこには垂れ目な緑青の双眸がある。満足げな笑顔。

「半分正解、半分間違いつてトコだな」

「そうですか……」

「そう気を落とすな、及第点だ。満点合格の為にいまにひとつ辞令が下ってるんだな、これが」

「……？」

「もつともかなり急な話で、正直。無茶な話だ」

きょとん、と椅子に座るルビイとフリードにイスラは面倒くさげに丁寧に折りたたまれた文章を渡す。上質な紙の便箋　見覚えのあ

るものだ。

「姫様の、手紙？」

「そうだ、開けて読んでみる。それでおまえがどうするのかは自由だ」

「うわぁルビィ、ボク今、物凄い嫌な予感がするよ」

「???」

きよとん、と年相応の表情を浮かべながら、ルビィは「こそ」と手紙を広げる。

なんだかはじめてのクリスマスプレゼントをもらう子供のような、とフリードとイスラは密かに和んでいた。

上質な紙に綴られた流麗な文体。間違いなくセリア・ランバルディ・イヴヴァルト。ルビィが敬愛してやまない姫様の文章だ。

「えー、守護騎士団騎士隊長ルビィ・ギムレット・アンテローズ…本日でその任を解任…し、勇者ユノ・ユビキタスの…任務に同行…

…せよ!？」

「うわぁ、予感、当たっちゃったよ」

「で、どうすんだ？アンテローズ。お前はここで燻ってるか、それともお前を負かしたあの勇者の従者になるか、決めるのはおまえだぞ」

「……………」

必要なことは、必要な時にやらなきゃならない

『月』の暦1065年

天候：雲ひとつない快晴 8月19日

7時33分 朝、もしくは二日酔いに苦しんでいる時間

王都ランバルディア、正門

ざつ、ざつ、ざつ、ざつ、と

二人の少女が大腿で歩いていく。

その視線は前だけを向き、決して横に居並ぶ白髪の少女と、赤髪の少女に視線を合わせようとしない。

白髪の少女、ユノの眉間にはシワがより、既に疲れたような表情をしている。

冒険者らしい旅装に適した格好をしている。傷の目立つアニマルハイドのポンチョに合成皮と鉄板で補強された白のレザースーツ。左腕には奇妙な光沢を持つ鉄製の籠手を嵌めている。

背中に大きく膨らんだデイベックとニザヴェリル謹製の魔術を撃ち出す長銃を背負っている。

赤髪の少女、ルビィは明らかに怒りを抑えきれない様子で口を引き結んでいる。目が三角になって愛らしいと表現出来る双眸を台無しにしていた。

いつもの二の腕まで露出したチェーンメイルと湾曲した双剣。背中には実に不釣り合いな可愛らしいデザインのバッグを背負っている。明らかに嫌そうだ。

その少し離れた後ろを黒い鎧を身につけた自由騎士、フリードがお

どおどしながら追従していく。

二人の少女の威圧に押されて道を譲ってしまった人々に謝りながら。

（この子、置いていきたい）

（コイツ、いつか殺す）

「すいません！違うんです…あ、いえ、そういう訳じゃなくて、あ、二人とも待って！ちょっとおー！？」

消息を絶った仲間を探しに、灰かぶりの勇者は再び旅立つ。
自分の罪の一端の少女騎士と、苦労人の青年騎士を従えて。
ミズガルズの領域で、密やかな企みが進行する。

ルビィ・ギムレット・アンテローズについて

『月』の暦1065年

天候：雲ひとつない快晴 8月20日

12時20分 つまり昼飯時

大陸馬車293号（ランバルディア発ケイブリス行き）

ユノが赤髪の少女騎士 ルビィとフリードを仲間にしたのは理由がある。

ひとつは単純な腕前の良さだ、高い身体能力とユノの一撃を避けたセンスの良さ、双剣を自分の手足のように扱う技能の高さと咄嗟の判断力。

ルビィの生家、アンテローズ家は歴史は浅いものの戦争や魔族との戦いでは先鋒を勤める花形だ。独特の双剣術の三次元的な戦闘スタイルと手数多さは対人、あるいは人の形をした魔族には有効だった。

全てを強引に袂に開け、戦局を1人で左右するような、彼女の姉“白薔薇”ほどの圧倒的な強さはないものの、その性格に似合わない慎重な戦闘スタイルは優れた軽装戦士になれるだろうとユノは踏んでいる。

彼女の副官フリードの場合は自由騎士であること 自由騎士は戦場での功績を評価された兵士や傭兵に与えられる名誉称号だ。騎士のように身分や領地が与えられるわけでもなく、冒険者や傭兵を統括するロードスギルドから専用の騎士鎧とピストルが与えられるだけだ。

しかし、腕前を買われて貴族と個人契約を結ぶ者も多い。

色々その他の事情もありそうだが、フリードもその手合いだろう。アンテローズ家と契約を結んでいるという点でその腕前は保障されているようなものだし、昨日の決闘で銃口を向けられて　直感的にはあるが「躊躇無くやれる」手合いの人間だと感じた。

騎士という人種には「正々堂々、清廉潔白」な事を美德とする文化がある。

特に騎士というものの存在意義の壱ともいえる「闘い」においてはその傾向は強い。

卑怯な手段を忌み嫌い、正面から一対一の実直な斬り合いを望む。その精神は昨日のような決闘の場やそう定められた場所では評価されるものだが、戦列が崩壊し、人馬入り乱れて混乱の極地にあるような戦場では不要だ。

相対する相手の手札は剣や槍だけでなく銃や弓といった遠くから一方的に攻撃を行うものが主流だし、地形や天候を利用して圧倒的有利で最小限の被害で敵を壊滅させる手段　計略といったものもある。

そうでなくとも一面を瞬く間に焼け野原にしたり、氷の槍を雨のように降らす「魔術」がある時点で「正々堂々」など不要どころか邪魔だ。

その点で、フリードは「良い」

少なくともルビィとの戦いに集中していたユノを背後から打ち抜けるだけの度胸があると見える。

ユノがルビィとの決闘を終わらせたのも彼の銃口の先端からくる殺気を感じたからだ。

（まあ、もつとも）

大陸馬車の窓から、昼食がわりの林檎の芯を投げ捨てる。車窓から投げ捨てられた芯は地面で数回バウンドして視界から消える。

外には延々と麦畑が広がっている。青々とした小麦の谷間にはのんびりと畑を手入れする農夫の姿がちらほら見える。

ランバルディアの印象派の画家達が絵画にでもしそうな、平和そのものの光景だ。

4年前のことを思い出す　このあたりは焼け野原と死体転がる無常の地だった。

西部を闇の世界に変え、メルカトル大砂海を迂回し、沿岸から上陸した魔族の侵攻はランバルディア王国　大陸内地付近まで及び「みんな」と共に旅をしていた、まだ普通の「ちゅうがくせい」だった「向月ゆの」はその光景に戦慄していた。

はじめて、ここで大地が業火に焼かれる音を聴いた。

はじめて、ここで無残に殺された人の亡骸を視た。

はじめて、ここで死体が焼けて灰になる匂いを知った。

泣きじゃくり胃の中の物を吐き出しながら、この世界は夢に溢れるファンタジーの世界なんかじゃない。

自分じゃ敵わない手の施しようもない陰惨な世界だ　そんな感想を抱いていたことを思い出し、笑う。

まだ4年しか経っていないのに、ユノの意識はそれを遠い過去として捉えていた。

経験というのは、いいものばかりじゃない。

「いいか？フリード：今あいつは窓の外を視てる、合図するから背後から襲いかかれ、私がトドメ刺す」

「いやルビィ、ボクは君が何を言ってるのかわからないよ？」

「？仇討ちの続きに決まってるだろう？なに言ってるんだ？」

「そんなほんとうに不思議そうな顔しないでよ」

（人格って、重要だ）

ランバルディアから旅立って1日と少し、既にユノはこのパーティーの明らかな相性の悪さに後悔を憶えはじめていた。

夕刻、ケイブリスまであと半日の街道

「鉄道の破損？」

「はい、大変申し訳ありません…明日には復旧のめどがつくと思われるのですが」

「うーむ、それは困ったな」

「おい、どうする？歩いていくか？」

「急ぐ旅でもねえし、野宿しようや相棒」

「そんな、この辺はよく夜盗が出るって」

「おいどうするつもりだ！安全は保障できるのか！！」

平謝りになる大陸馬車の乗務員の周りに人だかりが出来ている。考え込む商人、たくましく野営の準備に入る冒険者グループ、おろおろとする若い平民の夫婦。乗務員に喰ってかかる赤ら顔の成金。

大陸馬車に乗っていた乗客だ。

大陸馬車は現在大陸でもっとも主要な交通機関だ。

街道沿いに鉄のレールと枕木を敷き、建設された鉄道を屈強な重量馬が車両を引いていくというシステムだ。当初は前線に物資や兵員を迅速に輸送するために前時代の勇者が「再現」したものだっらしい。魔王の死後、平穏な時代にはモンスターに捕捉されることなくこの時代としては革命的に早い時間で都市間を移動できる為、非常に有用な公共交通機関として生まれ変わった。

余談ではあるが、大陸馬車の基礎を築いたその勇者は魔王の討伐後は馬車の運営組合を発足し、前時代のランバルディア王国で莫大な富と社会的地位を築いたらしい。

死後も国に大いに貢献したとして、聖人に列挙されているらしい。車両は基本的に貴族や騎士が乗る貴賓車と普通の冒険者や平民たちが乗る大衆車に分かれて編成されている。

もつとも車両が街道上で停止してしまった今は貴族も平民もまるで関係ない状態だ。

三人はその人だから少し離れて座っている。

不機嫌な表情で腕を組んでいるルビィと大柄な身を縮めるように座っているフリード。

元勇者のユノは「人目に触れるのはトラブルの元」だと言ってポンチョのフードを目深に被って顔を隠している。

「逆に怪しさが増している」とルビィは腹立ちまぎれにそんな感想を抱いている。

（やっぱり、気に入らない）

ルビイは口を引き結び、睨むようにして元勇者 ユノ・ユビキタスの様子を観察する。

セリア姫から拝命したという「任務」に同行して1日半、ルビイはイスラの教えを自分なりに解釈して実践することになっていた。それはとにかくこの勇者を徹底的に観察すること 前のような「決闘ごっこ」ではなく本当の殺し合いをする為に身体の癖や隙、あわよくば弱点を見つけようと思いついたのだ。殺されずに生き残って、次の戦いのために有利に作用する手札を探すのは間違ではないはずだ。

その観察の中でルビイにまず分かったことがある。

それはこの勇者、ユノ・ユビキタスはどんな時でも隙がない、という事だ。

どんな姿勢、あらゆる状況でも動きに無駄がなく常に鞘から剣を抜き出し、奇襲に対してカウンターすることが出来る。旅の途中にルビイは何度か背後や食事中、もしくは仮眠中に攻撃（あくまでも軽く石を投げてみたりした程度だ）を試みたが、なんなく止められてしまった 完全に眠りながら箆手で石を弾かれたときは仰天した。どんな鍛錬をしたか想像もできないが、大陸の主要国の中でも誉れ高いランバルディアの騎士でもそんな所業が出来るのは 守護騎士団団長のイスラくらいだ。

ランバルディア守護騎士団団長イスラ・ウルズ・アンゴーシュ。騎士や戦いに赴く者達からは息をするように敵をなます斬りにしていくさまから「シェフ」と畏敬の念を籠めて呼ばれている。

戦場を、敵を、ディナーでも作るみたいに調理していく死の料理人

だ。

現在は過去の戦いで負った傷で後身の身となったものの今でもその腕は衰えていないらしい。

4年前に召還された勇者達にも訓練を施し 特にその影響を受けたのが目の前の元勇者、ユノ・ユビキタスらしい。

あくまでルビィはそれを人づてに聞いた程度だが、実際にユノと戦ってその手段に囚われない戦闘スタイルは確かに「シェフ」の調理風景に通ずるものがあると感じた。

しかしだからといって この勇者を公平な目で見ることはルビィには出来ない。

どれだけ強く、過去に功績があつて「ある一点」で尊敬している上司の片鱗があつても、ルビィ・ギムレット・アンテローズには「家族の仇」であり「アンテローズの敵」でありルビィ個人の感情でも敵だ。

実の姉を殺した人物と仲良くできるほど、赤髪の少女騎士はオトナじゃない。

「今夜はどうしましょうかユノさん」

窮屈な馬車の座席から抜け出し、フリードがユノに今後の方針を訊ねる。

外を見つめていたユノは顔をフードで隠したまま、呟くように答える。

「……ここで野営、明け方になったら修理を待たず移動しましょう」「修理を待たずにか？それならば今からケイブリスを目指したほうがいいのではないか？時間の無駄だろう」

ルビィが疑問の声をあげる、幸い街道は整備されている。

夜通し歩けば目的地のケイブリスには容易に到達できる筈だ。

「いや、ルビイ、夜の街道は危険が多い。野盗も野犬もこの辺りはよく出るし、モンスターも夜の方が活発だ」

「出たら蹴散らせばいいんじゃないか？楽勝だろう」

「却下ね、わざわざ要らないトラブルを抱えるのはごめんだわ」

「……」

二人に反論され沈黙したもののルビイはその結論が納得出来ない。中規模の野盗程度ならルビイは傷ひとつ負わずに壊滅できるし、フリードも同様だ。ユノに関しては野盗どころか神話クラスの魔族の兵团となんども戦ってきた筈だ。王都近くの盗賊やモンスター程度なら圧倒的な実力差をもって、笑って倒せるのは明らかだ。

それにセリア姫から拝命した「任務」もある。任務の詳細はルビイとフリードには伏せられているものの、騎士隊長とその副官。そして姫様のご友人で現在は罪人で冒険者とはいえ「勇者」であるユノ・ユビキタスが準備もろくにしないまま駆り出されるというのは、とんでもなく急を要する事態なんじゃあないのか、とルビイは胸中で不安交じりに思う。

それにユノの意見にフリードが全面的に納得した、というシーンがどうにもルビイに疎外感を感じさせていた。

ばちばち、と焚き火の炎が揺れている。

停止した大陸馬車の近く　　ちょうどいい岩場を見つけてそこにコテージを張っている。

ユノではなくフリードが騎士団の備品庫から持ち出してきたものだ、用意の良さに旅慣れたユノも感心したものだ。

夕食は携行食のビスケットとインベル（大陸全域に生息する牛に似たモンスター）の干し肉だ。貴族の「お嬢さん」のルビイは文句のひとつでも言うかと思ったが手早く食事を済ませて付近の哨戒をしている。意外と野営するような経験があったのかもしれない。

大陸馬車の乗客たちはなんだか言って馬車の中で一夜を明かすようだ。冒険者の二人組みはやっぱり馬車の乗務員と契約を結んで護衛についているようだ。ユノ達もまた頼まれたが「消極的に協力する」という事で納得してもらった。騎士二人を従えた人間に強く出ないあたり、冒険者の二人組みも大陸馬車の乗組員たちもなかなか懸命なようだ。

「zzz…」

人気のない岩場にはじつに暢気なフリードの寝息だけが響いている。

焚き火にあたりながら眠りこけている。もう少し浅い眠りを心がけるべきだと思うが「勇者」が近くにいます。ということが安心感をもたらしているのかもしれない。

どちらにせよ悪夢も幻覚もなく、剣を抱いたまま獣のように縮こまってしか満足に眠れないユノには少し羨ましかった。

背後で足音がする　幸い聞き覚えのある体重と足運びだ。

「帰った」

「そう、お疲れさま」

ルビイの不機嫌なような報告に背中ごしで応答する。どちらも少女には似合わない硬質な声音だ。

「次はフリードの番だ、おい！起きろフリード！」

「…もつと丁寧に起こしてあげたら？」

がん、と鉄のブーツで背中を蹴られたフリードが「えっ？なに？なんなの？死ぬの？」と、うろたえたまま哨戒に出かける。

鎧をきつちりと着込み剣とピストルの携行を忘れないあたり意識はしっかりしているようだ。

じやり、とブーツの音を響かせながら、直立したままルビイが無言でユノを見やる。

その眼には最初の決闘のときほどではないものの敵愾心がある。

ユノはその目線を見無視するわけにもいかず、吐息まじりに言葉を吐き出す。

「…どうしたの？」

「今日もだ」

「？」

「今日も、手合わせ願いたい」

今日も　　というのは、ルビイは少し時間が空くたびに軽い剣闘を申し込んでくる。

刃が身体に触れたら終わり、程度のものだが、ルビイは真剣に、最初の決闘の頃にはなかった真摯さでユノに打ち掛かってくる　　今のところユノの勝率9割といったところだ。

やっぱりか、と眉根を寄せながらユノはかぶりをふる。

「却下よ、体力を消耗するわ。それに不測の事態があったときに対応できない」

「解かっている。しかし、頼む　　手解きが欲しい」

「…むう」

少し俯き気味で、そうルビイが頼んでくる。少し顔を赤らめるところを見ると「仇敵に手解きを頼む」とことに羞恥を感じているのだろう。

貴族がそうでない人間、例えば冒険者に頭を下げるというのは顔に泥を塗るのも同然だ。

そうまでして　と結局ユノは折れる。

「わかったわ、でも疲れない程度。いいわね？」

「ああ、感謝する」

ユノは剣を腰のベルトから抜き、岩場のある程度広い場所まで移動する。

ルビィもまた湾曲した双剣　ショーターを交差した鞘から抜き出し、対面に立つ。

ユノは特に構えず剣をだらりと下げ、少しだけ上体を屈める。それがユノのスタイルだ。

ルビィはショーターを顔の前で交差させ、腰を低く落とし、踵をあげる。

合図は特に訪れず、二人の吐息が夜の闇の中を転がる。

先手はルビィからだ。

一足飛びの跳躍から流れるように強襲をかける。縦斬り、横薙ぎ、逆手に持ち替えて切り上げ、身体を回転させ、背後に回りこみながら一撃。

一撃一撃の威力は小さいものの動作に無駄がなく、素早い。足運びにも戸惑いがなく、実に洗練されている。

ユノは初撃を剣でいなし、横薙ぎを常体をそらしてぎりぎりで避ける。喉元までせりあがるような切り上げは籠手で弾き、背後の回りこみからの一撃は剣で防御する。

腕力で劣ることに自覚したのかルビィは以前のように鏢迫り合いはせず、すぐに跳躍して距離をとる。

ユノはそこに踏み込みながら一撃を叩きつける　避けられる。

しかしカウンターをとらせないままユノはさらに踏み込み、叩きつけるように剣を振るう。

ルビィは口を歪めて重い一撃に耐えながらも反撃の一閃をユノに叩きこむ。

一撃。一閃。一撃。一閃。層を重ねるようにしてルビィとユノの剣戟は激しさを増して続く。

およそ剣の合わせが二十合に達した時、ユノが呟くようにルビィに話しかける。

「ねえ」

「なんだ、勇者」

「わたしを、殺したい？」

沈黙、剣戟は止むことも激しくなることもなく、どこか倦怠を感じさせながら続く。

「いきなり、何を言い出す」

「憎くて、こうしているのかってことよ」

「……」

「わたしが、憎い？」

きん、と火花を散らしながらユノの直剣とアンテローズの薔薇印が刀身に掘り込まれたショールテルが接吻を交わす。

その太刀筋には動揺がない。

「憎い、ああ、憎いな」

「……」

「わたしは姉が好きだった。わたしのように頭も悪くなく、聡明で
きつとアンテローズ以外の家に生まれていたならば善い夫人に

なっていたらと思う」

「……」

「アンテローズは、戦うことでしか己の価値を示せない貧しい家系だ。金や権威の問題じゃない……戦い以外に何も持たない、それが貧しい……ダイナ姉はそうじゃなかった、詩も花も知っていた。そこがわたしは好きだった」

「ダイナの唄はわたしも聴いたことがあるわ、とても、いい唄だった」

「そう、でももう聞けない。おまえが奪ったからなっ……！」

シヨーテルが異なる軌道を描きながら、ユノに叩きつけられる。

ユノは箠手と剣で弾き返し、距離をとる。

「おまえの裏切りがなければ……姉は帰れたんだ！きつと！きつと帰って、いい婿でも見つけて、名族のバンタール家の子息か？同じような境遇のレナデス家の一人息子でも良かったなあ！生まれた子供を抱きながら！子守唄でも唄いながら死ぬまで気楽に過ごせただ！でももうそんな未来は永遠に訪れない……！」

「そうっ、ならわたしを殺す？」

「ああ殺す！でもそれは今じゃない　わたしはおまえを殺す、でもおまえが考えているような卑怯な、唾棄すべき殺し方はしない！そんな殺し方でおまえの白髪のざんぎり頭を獲ったところで、姉は喜ばない……」

「……」

ルビイの動きが止む、ユノもまた静止した。相対する少女騎士は剣を下げ、俯きながら耐えるように、言葉を吐き出している。

「姉は教養もあつたが、それ以上に武人だった。正々堂々と、誠実を信条にして、弱き者の為に剣を振るう。危険を冒すものが勝利を掴む、といつも姉が言っていた。おまえの前にも堂々と立ち塞がっただろう姉は」

「……ええ」

「だから、わたしは正々堂々とおまえを殺す。姉に倣って、これまでもずっとそうしてきたように……」

「……ルビィ」

「気安く名前を呼ぶな、だが覚悟しておけよ！おまえはわたしに殺される。わたしの、アンテローズの双剣でこの世から葬られる。今は無理でも、必ずな！」

「期待して、待つておくわ」

勢いよく、啖呵を切るようにそう言い放ったルビィにユノは薄く笑みをこぼしてそう答えた。

悪い気分じゃない、もちろん姉を殺された親族から責められるという罪悪感はある。しかし、その親族たる妹にこうも堂々と爽やかに殺害宣言をされると、なんだが嬉しくなってしまう。

ユノがこれまでに相対してきた復讐者は、みな「真摯に」卑怯だった。憎しみに燃え、計略を練り、時には味方を装って笑顔を浮かべながらユノに近づく。そうしてユノが少しでも隙を見せれば、形相を変えて殺しにかかってきた。剣、弓、銃、毒薬、爆破、落石、魔術。ありとあらゆる手段を選び抜いて、それだけならばいいものの、ユノと関わる人物。アリカや畏れおおくもセリアにまで手を出そうとすることもあった。人を雇って差し向けてくる場合も多い。酷いときには1日に7回、アサシンに殺されそうになった。

もっとも、ユノに手を出してきた人物。特にアリカやセリアに手を出そうとしてきた貴族はメルカトル大砂海に棲まう巨大モンスター。の胃袋だ。骨すら残らず、失踪という形になっているだろう。

目の前で不適に笑うルビイにはそんな「真摯さ」はない。己の価値を貶めても、親族の仇をとろうとするような、ある種の犠牲心が存在しない。

騎士として、誇りを持ったまま旧来の時代のように正々堂々と一対一の「闘い」で決着をつけようとする　そういったまっすぐさに殺されるなら、と自分は嬉しくなっているのかもしれないな、とユノは思った。

（そう簡単に殺されてあげない、けど）

「とりあえず終わりでもいいかしら？　なんだが、止まってしまったし」

「ああ、興が醒めた。貴様があんなことを言わなければ……」

「ふふ」

と、なんとなくユノが笑みを浮べた時、夜の帳を切り裂くような悲鳴が上がった。

高い、女性の声　恐れ戦き、助けを求める声だ。

ユノとルビイは表情を固くし、ほぼ同時にその声の聞こえた方角へ顔を向ける。

岩場から馬車まではそれほど距離はない、耳を澄ませば複数の人間の重い足音と怒号、悲鳴が聞こえる。剣戟の音と弓の風切り音が聞こえることから察するに武装した人間の集団　盗賊団の可能性が高い。

「馬車の方向つ　！」

「行くぞ――！」

ユノはそれまで脱いでいたポンチョを手早く羽織り、剣を鞘に戻し、ニザヴェリルの魔術銃を手に取る。

腰に備え付けられたポーチから魔術が籠められた鉄製の円筒を幾つ

か取り出し、装填する。

籠められたルーンは“麻痺”当たり所が悪くない限り死なず、適当に撃つても当たれば身体を自由を奪うという対人には有効な魔術だ。ルーンが刻まれたミスリルの砲身は中折れ式で、最大4発までの魔術円筒を籠めることが出来る。火薬は使わず“物体を直進させる”と魔術と“物体を加速させる”魔術で水平に滑空する。雨の日も問題なく使える優れたものだ。

ルビィは身につけるものが少なく、既に駆け出している。

着たままの二の腕まで露出するチェインメールとショーテルの双剣のみ。

もちろん背中にバックは背負わない。

いち早く馬車の近くに辿り着いたルビィはそのまま突撃しようとする。

しかしそれはユノに肩口を掴んで止められる。

睨みつけるルビィの目を見つめたまま、ユノは小声で早口に呟く。

「ルビィ！そのまま討って出るのは得策じゃないわ！既に待ち伏せされているかもしれない！」

「しかし、乗客がつ」

「解かつてる、プランを立てましょう。といっても難しいものじゃない。ルビィはそのまま突っ込んでくれてもいい」

「はやくしてくれ！こうしてる間に乗客が殺されるかもしれない」

「ルビィは出来る限り目立つ動きをしながら戦いなさい。それに釣られた馬鹿をわたしが背中から撃つ、オーケー？」

「解かった！」

「倒すことより乗客を助けるように動いて、あとは弓使いに気をつけなさい…行けっ！！」

「無論だ！！！！」

息を吸い込み、無音でルビイが駆ける　　足音がない、無音の疾走。

視界の先には馬車が止まっている。40ラウン（大陸のメートル単位、メートル換算で4メートル程度）の木造の大衆車両。それが鉄の部品で連結されて二つ繋がっている。

車両の前方には馬が4頭いるが、怯えて竦みあがっている、動けないようだ。

乗客は馬車の中に籠っているらしい。先ほどの悲鳴は窓がひとつ割られた際の音かもしれない。

盗賊と見える人影は確認できる限り4つ。馬車にとりついた男が1人。少し離れて弓を馬車に射掛けているのが1人。近くで囃し立てるように笑っているのが2人　　岩場から一番近いのはこの2人だ、1人は松明を持っている。

こちらに背を向けていた薄汚れた皮鎧姿の男　　盗賊を背後から突き刺す。

その横で今にも松明を馬車の窓に投げ込もうとした男が動きを止めて、崩れ落ちる仲間を見つめる。

しかし驚愕する暇もなく、ルビイが続けざまに放ったなぎ払いの一撃で、声もなく胴体と首が分かれる。あまりにも素早い剣速に血も出ない。

その一部始終を目撃した盗賊が訛りのひどい言葉で何事か叫びながら弓をルビイに向けるが、闇にまぎれて飛来した「何か」に意識を奪われる。

馬車の窓枠を取り外そうと車体に張り付いていた男が音に気づいてはっ、とこちらを見るが、それもまた飛来した“麻痺”に自由を奪われる。

ルビイが馬車に近づき、窓からそつと内部を見やる。

複数の怯えた視線が重なる。見覚えのある商人と夫婦に赤ら顔の成

金とその他の男女数人。

赤ら顔の成金がルビイの姿を見て何やら喚きたてようとしたが、同じように窓を覗き込んだユノの「しー」のジェスチャアに気の利いた数名の乗客によって押さえ込まれる。

姿勢を低く、と手の平を下に翳すサインを送ると素直に従ってくれたようだ。

ルビイはまだ被害が出ていないことをドンナーに感謝しながらふうと馬車に身体を預ける。

ユノはその横で、姿勢を低くしたまま馬車の向こう側の様子を伺っている。

手の中に構えられた魔術銃のミスリルが月を照らして無感動に輝く。

「倒した人数は4、まだいるわね」

「勇者、馬車の向こう側にまだ騒ぎがある」

「護衛についた冒険者がまだ戦ってるかもしれない 慎重に」

「ああ」

ルビイは目の前の勇者に少しでも胸中で感謝する。

もし、もし馬車の近くで野営せずにケイブリスを目指していたら馬車は盗賊に好きなようにされていただろう。

乗客は力任せに引きずりだされて、金品を強奪されるか誘拐されて奴隷市場に引つ張られるか、惨たらしく殺されるかしていただろう。ルビイはその事を知ってきつと死ぬほど後悔したはずだ 自分の考え方のせいで、自分の考えが浅いせいで、と。

もっとも目の前の勇者とフリードがこの事態を予期していたかまでは分からない。

しかし実際に目の前で惨劇を回避するチャンスを得られたのだから、感謝に値する。

（そういえばフリードはどこに行った？）

「おい勇者」

「なに」

「フリードはどうしてると思う…この近くを警戒していたならこの事態をもう察知しているはずだ…殺されてなけりゃ」

「そんな心配そんな顔しないで大丈夫」しっ、心配なんかしてないっ！」

「…まあなんにせよ、ほら、馬車の向こう側を見て御覧なさい、いい教本になるわ」

「？」

ひょい、とルビィが馬車の向こう側を覗き込むと、そこには自分の副官にして、幼いころからの下僕　フリードが彼女に見せたことのない氷のような表情で「闘って」いた。

フリードリヒ・ヴァイセンについて

しくじった　と、大陸馬車を襲った盗賊団の男は脂汗をたらしながら歯噛みする。

男はこの一団の知恵者だ。

力だけは強い、人間よりもゴリラに近いような親分の代理で野放図で自分勝手なならず者たちをまとめている。

事前に獲物の情報を仕入れて損のないように、儲かるように計画を練る。

苦勞な役回りに見えるが実は一番甘い汁も吸っている。

男が立てた襲撃の事前計画に穴はなかった。

馬車の鉄道をあたかも自然に壊れました、と工作して乗務員の警戒を解いて停止させる　工兵くずれが仕掛けた偽装は完璧だった。

狙った獲物も手ごろだった、それなりに身なりがよくて無力な平民ども、油断しきった冒険者2人組み。カモに葱がしよった頭の悪そうな成金。金が命で買えることを理解した賢明な商人。偵察の段階では金銀財宝とまでは行かないがそれなりにいい稼ぎは得られそうな「獲物」だった。

一攫千金など夢は見なくていい、可もなく不可もなくでヤバそうな気配がしたら逃げる。生き残る秘訣だ。

しかし襲撃の実行にふたつ失敗があった。ひとつは乗客を完全に把握していなかったこと、この目の前の黒騎士はヤバイやつだ。事

前の偵察の時は姿がなく、いないものとして数えられていた　先遣に出したやつのみすだ。

そしてもうひとつは今、目の前のヤバイ黒騎士は正面にいる。白煙たなびくピストルを軽く掲げ、血に染まった鈍器のような剣を片手に提げて、悠然と立っている。

その足元には仲間の死体とその一部がカスツールの魚市場のアラミたいに転がっている。

親分もその中の一部だ。しかしまあ、悼む余裕も今はない。

森の中に潜ませた弓使いたちの支援もない。

このバケモノが森からいきなり飛び出してきたことを考えると既に森のコヤシと考えた方が現実的だ。

しかし　このバケモノが仕掛けた「網」から逃げられない。

不可視の、この馬車の周辺に満ちる手に触れれそうな殺意。

踵を返して森に逃げ込んだとしても、背後から斬殺される想像しか浮かばない。悪夢だ。

（だが、だがしかし）

歯の根が合わなくなるような重圧を感じながらも、男は笑う。

まだこちらには男を含めて7人いる。馬車を包囲するように囲んでいる。車両の向こう側にもあと4人はいた筈だ。

人数差というアドバンテージは「まだ」ある。

幸い背後には人質もいる。この黒騎士がどれだけ強かろうとその事実には勝てない筈だ。

それに男には切り札がある。ひとつだけ、値は張るものだがひとつ、少なくとも男ひとりだけでも無傷で逃げる方法がある。

腰の後ろのポーチに挟みこまれた「それ」をバレないように確認しながら男は車両の一番近くの壁まで後ずさった　仲間を壁にするために

人は己の本質を隠す仮面を、なんらかの形で被っている　と、銃口からたなびく白煙を眼で追いながら、自由騎士フリードは考える。

仮面を持たない人間はいない。

何も知らない赤子や無垢な白痴でもない限り、必ず己を取り巻くどうしようもない現実から自分を隠蔽するために、仮面を成型して被る。

大人になればなるだけ、必要な状況に応じて仮面は増え、終いには自分の素顔がどんなだったかを忘れてしまう。

この持論には証明がある　それは自分自身だ。フリードには少なくともふたつの仮面がある。

ひとつは、愛する少女騎士の前で被る、素顔のような仮面だ。情けなく優柔不断で、苦労人の青年の顔。

少女への思慕は偽りではない、高慢で非常識なところはあるものの勝気で愛情深く、これまでに逢った誰よりも純粋で、自分を信頼し背中を預けてくれる　それが愛おしく、羨ましい。

でもそれが自分の素顔だったかという確証はない。

もうひとつは今被っている　凍りついた「黒騎士」の仮面だ。

フリードは戦いに赴くときは、この仮面を被る。敵の罵詈雑言にも仲間の死にも無力な平民の嘆きにも心を動かさない氷のような鉄の仮面。

戦うことに余計な感情は不要だ。相対している“的”の気持ちなんて知らなくいい。

その方がとても楽だ。背負う荷物は少ないほうがいい、兵隊は何も考えない。

これが自分の素顔だとは　あまり思いたくない。

（もつとも、今日の前にいる的にはそんな気遣いはいらぬよね）

フリードが盗賊の襲撃を察知したのは森に入って10分程度だ。前方に森の枝を揺らす音が複数　この時点でフリードは腹這いになり、森の闇の中に溶け込んだ。

様子を伺うと、それは数人の盗賊然とした男達だった。弓と刀剣で武装し、多少粗末ではあるが夜陰に乗じるのに適した服装をしている。夜戦に知識のある兵士くずれだろうと推測した。

フリードには気づかず、馬車を包囲するように薄く広がっている。護衛についた冒険者のことについて考えたが既に始末されて森の動物の餌にでもされたのだろうとあまり深く考えないことにした。

ルビィと勇者の身の安否にも気が向いたが、あの二人なら奇襲されたとしても問題なく排除している筈だ　もう既にこの襲撃を察知して鎮圧に出ている可能性もある。

フリードはそういった懸念事項から思考を外し、自分の“仕事”に入る。

腹這いから中腰の姿勢になり、足音を消しながら盗賊の背後に回りこむように近づいていく。

幸いあちらは馬車に完全に意識が逸れている。

「行け…野郎ども、仕事だあっ!!」

「おうっ!!!」

「へへへへへっ」

「女がいるぞあ？売れるか？それとも使うかあ!？」

「行けえーっ!!!」

野太い声が森の中に響き、それに呼応するように下卑た返答があちこちから聞こえてくる。

刀剣を持った一団が森から抜け出して馬車を囲むように包囲する。何事かと馬車の幌つきの行者台から顔を出した乗組員は矢に撃たれて地面に転がる。

驚いた馬が嘶きを響かせながら暴れようとするが素早く近寄った男の剣に怯えて縮こまる。

悲鳴。中で寝ていた乗客が気づいたようだ。馬車の車体に取り付き盗賊の1人が棍棒で窓を割ろうと試みている。

そこまで目視したフリードは馬車の方に威圧するように射撃していた射手のひとりに近づき　口元を押さえて背中から剣を突き刺す。

男が最期に見るのは自分の腹から突き出す鋼鉄の刃の姿だ。

ロングソードの肉厚な刃は容易く男を失血させ命を奪う。

フリードはそれをゆっくりと地面に伏させる。

フリードは笑うことも侮蔑することもなく、淡々と哀れな“的”に呟いた。

「グ・ナット（おやすみ）」

他の射手を始末するのは簡単だった、背後から近づいて同じことをすればいい。

有利な状況にある、という安心感は感覚を鈍らせる。男たちはもうこの襲撃がほとんど成功したものと思い込み油断しきっている。フリードの動きに誰も気づかない。

6人の射手を片付けたあたりでフリードは森から出た、おおよそ弓を持った盗賊は始末できたと判断したからだ。

馬車に直接の襲撃を加えてるのは10人。車体に取り付いて窓を外そうとしたり、斧で扉を破壊しようとしているのが7人。それを少

し離れた場所で見ているのが　この盗賊団のボスらしい男とその供回り2人。

ボスは熊のようなシルエットの素肌にプレストアーマーを着込んだ髭面の巨漢だ。

岩のような腕には入れ墨が彫られ、手には大きく反り返ったカッタスを携えている。

筋肉で盛り上がった山なりの肩が供回りの男が持った松明に照らされて、てらてらと赤銅に輝いている。

「なんだあ？まだ片付かなえのか、オイ」

「へへえ乗客が必死に抵抗してるみてえでさあボス」

「無駄なて、てえ、テイコウ？つてやつですなあ」

一番はじめの恐ろしく大きい声はボスだ。野太いだみ声だ。

次が右にいる松明を持った小男。ハイトーンな声の中に権力者への媚が見え隠れしている。

最後の発言は左のずんぐりとした男。人間よかオークの方が近そうな感じだ。

フリードは特に奇をてらうこともなく、腰のホルスターから自由騎士のピストルを抜く。ニザヴェリルのドワーフ達の技術を使わず、ランバルディアの武器鍛冶たちが受注を受けて丹精に造り上げた一品だ。魔法ルーンや特殊なナニかはないが名誉が籠っている。

大陸で主要なフリント・ロック（火打ち石式）ではなく「勇者の技術」が使用された物だ。

リボルバー、と呼ばれる代物だ。回転する弾倉を持ち、6発の弾を同時に装填することが出来る　過去に召還された「自由の国」から来たという勇者がこれを愛用していたらしい。勇者はこの世界に訪れる前はその国の自由を守るためにこれで戦っていたという。具体的にどんなモノと戦っていたかはフリードにはあまり興味ない

が。

親指で撃鉄を起こすと躊躇いなくボスの頭を狙って発砲する。
ハンマーが炸薬を叩き、軽い破裂音が夜のしじまに響く。

「あ？」

「え？」

「……！」

間抜けな声を上げてボスの巨体が倒れる。後頭部から侵入した弾は眉間を貫いた。

どんなむくつけき巨漢の大男だろうとそこを失ったらもう御終いだ。巨木が倒れるような音。2人の供回りが呆然と自分たちのボスの巨体が前のめりに倒れていくのを見つめている。

「弾がもったいないや」

一足飛びに二人の男に肉薄する。

慌てて振り向いて剣を構えるが遅い、突進と共に振るわれた剣が右側の小男を肩口から斜めに切り裂く。血がぱつ、と飛び散った。

もう片方の男が奇声をあげながら鞭のようなものを振るってくる。

鎖で出来た鞭。

しかしそれは全身鎧を着込んだフリードには大きな効果はない。顔を狙えば多少のダメージはあっただろうが、焦ったのか鎧の胸甲に当たって終わった。

逆にピストルを持った手で掴みとり、男をぐいと引き寄せる。

「ひっ……ヒィー……！！！！」

「うるさいぞ」

悲鳴と共にこちらに倒れこんだ男の腹に膝蹴りを叩き込む。くぐもった音。

男の何かを碎いた感触があつたが、念のために剣のヒルトで男の横面をぶん殴る。

ごつ、と濡れた音と共に男のオークにソックリな面が回転する。身体はフリードの方だが頭は馬車を向いた、仕上げは終わりだ。

「なッ……!!」

「……!」

「???」

「ボ、ボスが」

驚愕の声が夜の闇の中に転がり落ちる。

複数の視線がフリードの方に向いている。

馬車に取り付いているのは7人。

フリードは侮蔑も驕りもなく、淡々とした表情のままピストルを軽く掲げた。

ユノは少し口角を歪ませて自由騎士 フリードが作り出したキリングフィールドを見守っている。

やっぱり「良い」

射手を始末していく手際の良さから一番先に無力化する敵の判断。

ピストルに頼り過ぎないのも良い、弾薬は高価だ。

節制の心がけは冒険者には大切な鉄則だ。

（それにあの容赦のない倒し方、騎士にあるまじき無慈悲っぷり）

心の中の「不定形の塊」が拍手喝采を送る。戦いを愛して止まないユノ自身の分裂した一部、いつもは大嫌いだがこの場合は素直に同意見だ。

馬車の正面にいた3人が排除されたことでユノはもう少し大胆に行動することにした。

銃を身体に引き寄せるように保持したまま馬車の壁面にぴったりとくっついて、反対側を覗き込む。

刀剣を構えた男達7人　及び腰だ。人数と背後の人質を盾にまだ強気を保っているもののフリードが大きな動きを見せれば潰走しかねないだろう。屠殺寸前のブタと一緒だ、明日には市場の店先に吊るされる。

ユノはいったん魔術銃を馬車壁面に立て掛け、鞘から剣を抜く。

「ルビィ、側面から行こう、反対側について」

「……」

「ルビィ？」

返事がないことに訝しがり、背後のルビィを見やる。

壁面に身体を預けた姿勢のまま、暗くてわからないが俯いているように見える。

ショーテルの柄を握った両手がぎゅっ、と強く握り締められてるのがわかった。

どこか様子がおかしい、とユノは思ったが今は気にしている場合ではない。

「ルビィ？聞こえている？反対側をお願い」

「…ああ」

「何を思っているかしらないけど…しつかりね？」

返事はない、が反対側に移動したのを確認してユノは正面に向き直る。

体勢を低くしたまま馬車の横側に出る。盗賊とフリードは何か会話をしているようだ。

「降伏すれば命は保証してやる。武器を捨てろ」

「ふざけるなよてめえ！こっちには人質がいるんだぞ！！！」

「ば、ばかにしやがって…お、おい一斉にかかるぞ！」

「お、おう」

「…逃げた方が」

「ふっざけんな腰抜けえ！！一人相手に何いつてやがる！！！！！」

「……」

7人が口々に罵詈雑言を捲くし立てる。はじめの言葉はフリードだ。ピストルを集団に向け、いつでも撃てるようにしている。

ユノは剣を地面に突き立てるとフリードの方に剣を斜めに傾ける。月明かりを反射してきらりと刀身が輝く。場所を報せるための合図だ。

きらっ、きらっ、と二度輝かせたあたりでフリードがウインクするのが見えた。

合図を認識してくれたようだ、目聡い。

ユノはすう、と息を吸うと馬車の壁面を思い切り籠手で殴りつける。どん、と大きな音を立てて馬車の車体が揺れる。ルビィへの突撃の合図だ。

「よいドン」

地面を後方に蹴り飛ばしながら、ユノは馬車の正面へ踊り出る。武器を隠した重いポンチョは風にはためかない。

7人中、3人はユノが起こした馬車の振動に意識を逸らしている。フリードが2発続けざまに発砲する。乾いた破裂音が2回　眉間と肩を撃ちぬかれて2人無力化される。

ユノの正面でルビィが1人の盗賊と斬り結んでいるのが見えた。既に1人血を流して倒れている、相変わらず速い。

「…このアマア！！」

ユノの方にも2人、剣を振りかざしながら男が肉薄してくる。

叩きつけられる鈍器のような剣を身を屈めることで避ける、男にはユノの姿が消えたように見える。

「んな」

「残念」

ごん、と顎の骨を砕かれながら男の身体が宙を舞う。“グラールベルの鉄籠手”のアップーだ。

と、もう1人の方が宙を舞う仲間に目もくれずユノに掴みかかろうとしてくる　いい判断だ。

腕力で勝てると思っているのだろう。ひきつったような笑みを浮かべながらユノを押し倒そうと試みる。

だが予想に反して小柄な白髪の少女はビクともしない。根が生えてるようだ。

白けたような視線が男を釘付けにする。

「…あれっ？」

「見た目で判断しちゃいけないってお母さんに教わらなかった？」

盗賊の男は逆にユノに胸倉を掴まれ、宙を舞うことになる。情けない泣き笑いの顔で固まったまま地面に頭から激突して意識を失う。ふう、と顔を上げるとルビィが盗賊をX字に斬り裂くところが見えた。

フリードは余裕を見せたままピストルを構えている。

無力化6人　残り1人。

「動くなあつつ!!!!!!」

最後に残った1人　年かさの盗賊が悲鳴のように叫ぶ。

手を高く掲げ、何を握っている。ルーンが刻まれた球形。

ちっ、とユノは舌打ちする　盗賊がそれを持っているとは思わなかった。

「へっへへへへ、う、動くなよてめえら!?てめえらなら知ってるだろこれ？」

恐怖に引きつりながらも、勝利を確信したように盗賊が喋る。

「毒の霧：ルーン爆弾か」

フリードがわずかに緊張を滲ませて唸る。

「卑劣な…!!」

ショーテルを構えたままルビィが齒噛みする。赫怒が赤い髪をざわざわと震わせている。

ルーン爆弾　正式にはファリエと呼ばれるそれはニザヴェリルの魔術銃と同じ原理で造られた「魔術を籠めた爆弾」だ。

炸薬ではなく罨められた魔術が発動する。既に魔術ルーンが発光しているところを見るともう地面や壁に触れただけで発動する筈だ。罨められた魔術は“毒の霧” 30ラウン程度の空間に肺に入れただけで息の根を止める霧を発生させるものだ。5秒程度で効果は消えるものの、密閉空間に投げ込まれれば恐ろしいことになる 例えは窓で塞がれた馬車のような。

「た、高かったんだぜこれ！？本当に！本当に高かったんだ！バテイア（娼婦街）の貴族向けのが2人好き放題できるくらいに！でも、でも備えてて本当に良かったなあ！？」

「……」

「……武器を捨てやがれ！」

ルビイがショーターを捨てる。

フリードがピストルと剣を捨てる。他に武器は持っていないようだ。ユノもまた直剣を捨てる。

「なめてんのか、白髪のアマ……そのポンチョも脱ぎな、なんだったら俺が直々に裸にしてやってもいいんだぜ」

「……嫌われるわよ」

盗賊の血走った視線に呆れた言葉で返しながらポンチョを脱ぎ捨てる。がしゃがしゃと重い金属音が重なる。

スローイングダガーのベルトと後ろ腰に差した小剣も同様だ。

それで男は安心したのかひひひ、と笑いながら馬車の壁面を背にしたまま後ずさる。

そのまま側面に回って逃走する気だろう。

先ほどの襲撃で馬車の窓がほとんど破られた状況を見ると 見逃すしかないだろう。

「う、動くなよ、動いたらすぐにでも窓に投げ入れるぜ　そしたらどうなるかわかってるよなあ？市民を愛する騎士様がたよあ」
「卑怯者のクズめ…っ！！恥ずかしくないのか！？」

ルビィが声に悔しさを滲ませて叫ぶ。

「恥ずかしい？あっははははは！自分たちを棚にあげてそりやあないでしょうよお貴族さまあ？あんたたちだって今しがた俺の仲間を後ろから皆殺しにしたんだ…それに生き残るのにこーいう手段は卑怯もクソもないでしょうよお？？？」

盗賊が肩をすくめ、ルビィに向かって笑いかける。完全に余裕を取り戻した、人を馬鹿にした笑みだ。

「……ッ！！」

「まあ…同意見かな、ボクは」

フリードが溜息を吐きながらそう呟く、ルビィがショックを受けた顔で呆然と自分の副官を見つめている。

ああ、そういうことが、とユノは先ほどのルビィの様子のがんがいがい

「間違っちゃいないわね　でも…」

「あ？」

「切り札を持つてるのは、こっちだって同じ」

ユノの口が言葉を紡ぐ。

“ドンナーは雷を纏い駆け出した 迅い 迅い 我の眼に影すら視得ず、矢のごとき疾風 もはや誰にも止められぬ”

古代 ウォー・エイジの言葉で紡がれたそれは「力ある言葉」
かつて“加護の地”で主神ドンナーの意志に拝謁した際に与えられた“勇者の加護”を発動するワーズ・ワース。
ドンナーとミズガルズの闘いを唄ったそれは、ユノに急激な変化を齎す。

『世界の停止』

時間が限りなくその秒針を刻むのを放棄する。風に揺れる森の枝葉が、夜空の雲の動きが、その眼下の3人の人間が、ユノ・ユビキタスを除いて平等に静止する。

時間の次に失われたのは音だ、何もかもが自発的に音声を発するのを止める。

最後に失われたのは光だ ユノとファリエを持った盗賊の男。その2人の人物だけが世界に取り残される。

ユノはゆつくりと足元に落ちた剣を拾い上げる、その場にいる誰もその行動を咎めない。

「いち、にい、さん」

この力を使うのは久しぶりだ　とりわけ慎重に定められた“歩数”を数える。

勇者が授かる加護の力の本質は「ズル」をすることだ。この世界を動かしている条理の眼を誤魔化して不可能を可能にする。マナを対価にして世界に陳述している魔術や魔法とは少し異なる力だ。対価はないが、ルールを守らなければならない。

ユノがこの『世界の停止』で守るルールは“歩数”だ。静止した世界の中で6歩以上動いてはいけない。

動けば「ズル」を察知した世界に殺される　そう知識として報らされている。

「よん、ごお、ろく」

大腿で、飛ぶように6歩目跳躍する。フリアエを掲げた男がユノの眼前にある。

勝利を確信した表情のまま彫刻のように固まっている。てらてらと汗と油で顔が光っている。

ユノは剣を奔らせながら、呟く。

「時間よ、戻れ」

ルビイとフリードは信じられない光景を目の当たりにしていた。ほんの僅かに瞬きをした次の瞬間　勇者がフリアエを持った男の眼前にいた。

ポンチョを脱ぎ、簡素なレザーアーマーと黒いアンダーウェアだけになっている。小柄な、どこまでも細い肢体。

肩まで覆う鉄の籠手が不釣り合いなやせっぽっちの少女の姿。

声を出す間もなく剣が振るわれる。

肩口から腰の横まで斜めの剣筋。異様な豪腕で振るわれた必要以上に強力な一撃は、男に死んだ自覚も後悔する時間も与えず命を奪う。上半身と下半身が斜めに裂かれる。血しぶきすら上げず上半身は落下し、下半身は1歩、2歩と前に歩いて倒れこんだ。趣味の悪い人形劇のようだとフリードはどこか冷静に思った。

「……ば、爆弾は？」

ルビィが呆然とした様子で訊ねる。爆弾とはフリアエのことだろう。振り向いたユノは無言で口角を上げて籠手に包まれた手を広げる。まるで凄い力で圧迫されたようにぐしゃぐしゃになっている。

刻まれたルーン文字はもはや判別がつかず、発光しない。文字が意味を成さなくなったのだろう。機能停止だ。

ユノはのんびりと、人気のない大陸馬車の壁にもたれ掛って林檎を齧っている。

しやり、と瑞々しい音と、共に甘さと爽やかな酸味が口の中に広がる。「向月ゆの」だった頃も林檎が好きだったのだろうか？ユノが昼飯かわりに選ぶのは林檎が多い。

大陸馬車の窓の外には背丈の低い林と、二つの巨大な岩山を利用し

て造られた巨大な街　　城砦都市ケイブリスが聳えている。

ケイブリスは大陸内地に位置する街だ。

城砦都市と呼ばれる由縁はかつてはこの街全体が魔族と戦う為の巨大な前線基地だった事に由来する。堅牢な門に街の各所に立てられた前哨塔。類焼を避けるために細かく分けられた街の作り、あちこちに残る避難用の防空壕　飛行モンスターによる爆撃を避けるためだろう。

そんなかつての戦いの痕が残る街は現在では国を越えて様々な人間が集まる人種のるつぼになっている。

大陸の主要な国からだいたい中間に位置し、中継地点として最適な場所に存在しているからだ　なので多くの需要と供給が集まる。

この街には差別がない。あるのは人の流れと物の流れだけだ。あまり治安が良くないのか、定住には向かないようだが。

屈強なランバルディアの材木商達が客に呼びかけをする横で、魔法使いの国エルムトの魔法使いたちがマジックアイテムの露店を開いている。それを怖いもの見たさで覗くのはまだ街に慣れてないと見える若い獣人だ。怪しげな雑貨屋に並んだ精力剤になるアモール茸の干物を真剣に見つめているエルフの女性もいる。

大陸中に住む種族を一箇所に集めたような騒ぎ。それがケイブリスの常態だった。

もつとも、今回は滞在する理由がユノにはない。旅装品の準備を終えたらすぐにドンテカへ行かなければならない。

と　そこまで思ったユノは少し離れて座る二人、ルビィとフリードを覗き込む。

「……うーん」

「……」

椅子に凭れて、平和な吐息を立てているのがフリードだ。腕を組み、眼を閉じてむにやむにやと口元を何事か動かしている。

それを横で、ユノは少し近すぎるように感じたがー ルビィが顔を覗きこんでいる。

本人は真剣そのものの表情で、何かを確かめるようにじつ、と年若い青年の寝顔を見つめている。

先程から 正確には昨日の騒動が終わり、近場の村に助けを求めてギルドに連絡をとって、事態の收拾やその他諸々を終え、替わりの馬車に乗り込んでからずっとこんな調子だ。

何をするわけでもなく、確認するようにルビィがフリードの顔を覗きこんでいる。

まるでその平和な寝顔が 本当の素顔が見定めるかのように。

ユノはそんな様子の少女に声をかける気にもなれず、先程から少し居心地の悪い思いをしている。

ユノは溜息を吐いて最後の一口を齧ると、芯になった林檎を窓へ投げ捨てた。

年数・日時共に詳細不明

闇の中に、ごぼごぼと泡を立てる音だけが響いている。

深海、ミズガルズの領域 その暗闇の中に「部屋」がある。何か

巨大な建造物の一室。

丸く象られた窓が「部屋」と深い水の牢獄を隔てている。

その中に、1人の小柄な少女がいる。

人間の感覚では得体のしれない装飾がふんだんに散りばめられた長椅子に座っている。

この世の美を集約したような、それも蟲惑的な美だけを集め、人の形に成型したような少女だ。艶やかな黒髪を可愛らしい朱のリボンで結び、小さなイエロータイの付いた漆黒のゴシックドレスに身を包んでいる。白い手袋に包まれた手袋は膝元に置かれ、黒と青のストライプボーダーのソックスに包まれた足は長く、椅子の上で組まれている。

靴は「ぱんくめたる」を意識してデザインされたような攻撃的な代物だ。

頭には色とりどりの珊瑚で創られた小さな冠を斜めに被っている。少女はにやにやと悪戯つこのような笑みを浮かべながら、その「部屋」に控えた一人の影の返答に応えた。

「へえ、出来たんだ？思ったより、早かったね」

少女に笑いかけるように話しかけられた少年　白い肌に発光する黄色い瞳、小柄な身体に不釣り合いなほど細長く、螺旋状になった奇妙な剣を提げている。緊張した面持ちで、答えを返す。その外見さえ無視すれば、年相応の少年らしい声だ。

「はい国王様　ヴェー、シギユン、スルト、3個体とも調整次第出撃が可能です。ただ、あの、ヴェーはソーサリー適合の不具合による意識の混濁。シギユンは改変に耐えられず…元々の意志は殆ど消え去った状態となっています」

「えー大丈夫なのおそれ？」

「あ、戦闘テストの結果は上々ですよ！まあ戦線に組み込むにはまだ少々の調整が必要ですが単体での制圧力はかなりのものです！！」

「そんな力説しなくてもいいよ、プシユケくん　ふふふ」

「こ、国王様」

「国王なんて仰々しい呼び方しなくてもいいんだよプシユケくん…ね？チ・ヒ・ロ」

「えっ？」

「チ・ヒ・ロ…そう呼んでみて？」

「チ、チヒロ」

「あっはははは！可愛い、可愛いわ！プシユケくん…！」

耐えかねたように少女　ーチヒロは口元に手を当てて笑う。震える黒髪が異様なまでに艶かしい光沢を放つ。

プシユケと呼ばれた少年は白い顔を赤くして、俯き黙り込む。

「ふふふ、笑っちゃってごめんね？でもこれからはチヒロって呼んでね？わたしとあなただけのお約束。他の四軍団長にはナイショ」

「チヒロ様とぼくだけの約束…」

「そう　それじゃ、プシユケくん、その3体のうち、どれでもいいから“あの子”にぶつけて？」

「は、はい！！」

「もちろん殺しちゃ、駄目よ？それだけは駄目、あれは　“あの子”

は魔族が地上を再興する上での大事な大事な贈り物。

絶対に殺しちゃいけないわ」

「はっ！」

「よろしい…ふふ」

少年　プシユケが臣下の礼を執る。人間の騎士と同じ、立膝で手

を胸に当て、こつべを垂れる。

それを満足げに、どこか恍惚を滲ませて少女
と笑った。

チヒロはくすくす

ケイブリス、ドンテカ

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月22日

13時10分

城砦都市ケイブリスの一角

盗賊団の襲撃から一夜、ユノ達3人の姿は城砦都市ケイブリスにある。

ケイブリスでは闇市場が盛んだ。ランバルディア国法で定められた商売に関する法律、例えば刀剣取り扱いの許可やマジックアイテムの販売制限。国外人に対する税率法。4年前の戦渦のさなか兵士や騎士の遺品、あるいは研究対象にある魔族側の様々な軍制品の売買の禁止。それが全部、この街では存在しない。

悪名高い奴隷市こそないものの、他の場所では見つければ即お縄の商店が半ば公然として存在している。

都市には当然中央から派遣されてきた役人官使がいるものの、街を戦前 古くは2、3度前の魔王侵攻のときから牛耳るマーケットギヤングによる“手厚い”歓待を受けて骨抜きになっているのが現状だ。

貴族という人種が実質取り仕切るこの国の癌が垣間見える光景だ。市民を守る義務があるものや、ランバルディアに忠誠を誓う者は憤るべき現状ではあるが、それが生活に直結していたり、とても便利であったりするとそうも言っていられないのも真理だ。

特に望む望まずに関わらず、人の常道から外れてしまったような人間にとっては。

「えー、ミスリル材用オイル1個に官給メシ3缶…あとはペラ酒1瓶にチーズが1塊。占めて300マルクだね」

「200でどう？」

「値切る気かいお嬢ちゃん…250」

「200じゃ駄目？300はちよつとツツカケ過ぎ、傭兵団でも雇うつもり？」

「話にならんね、250、これ以上は負けんぞ」

「じゃあこれは？」

白髪の少女 ユノはポンチョの中から一枚の金貨を取り出す。ランバルディアで使われているマルク貨幣ではなく隣国、魔法使いの国エルムトで使用されているシージ貨幣と呼ばれるものだ。

それまで値段交渉をしていた闇市雑貨の店主、髭を生やしたヒスシ一人（メルカトル大砂海の北側に住む遊牧民族）の商人の目が輝く。

「ほ、ほ、お嬢ちゃん！そりやもしかしてシージじゃないのかい？」

「そ、5シージ貨幣、200とこれでいかが？」

「うーん巧いなあ、お嬢ちゃん…いいよ、持ってきな！」

「ありがとう」

「また頼むよ！」

ほくほく顔の商人に薄い笑顔を浮かべながら別れたユノは、約2人分の冷たい視線に晒される。

可愛いバックを嫌々背負ったルビィと、テントなどの大荷物を背負わされたフリードだ。

「おい…」

「あの…ユノさん」

「ん？どうしたの？」

「シージって取引禁止だよな？つか持ってたならそれだけで牢屋行きだよな？」

「正しくはエルムトへの渡航許可かつ商業権を持つ人間以外です、政商とかそういう」

「ああ」

合点がいった、といった顔でユノが頷く。

隣国、という要素もあるものの魔王という大陸全体の脅威が存在していない時分、ランバルディアと魔法使いの国エルムトの間は陰悪だ。

そもそもエルムトはかつてランバルディアに仕えていた魔法使いたちが独立して出来た国だ。ユノはあまり事情は詳しくないものの、当時の魔法使いたちを統括する大賢者ルグナーソスがランバルディアに愛想を尽かし、弟子の殆どを引き連れて行ったのだという。

そして当時未開の大地だった東部にエルムトを築いた。

当然ランバルディアの王族とルグナーソス率いるエルムトは戦争状態に入った。

しかし、エルムト領土となった東部の偉大なる龍族の存在や、長年ランバルディアに聖域の森を脅かされ続けてきたエルフ達の結束があり、魔法使いたちが抜けて国力が落ちたランバルディアはエルムトをそう簡単に押し潰すことが出来なくなった。

それでも領土を巡って幾度かの小競り合いがあつたものの、200年周期で訪れる魔族の地上侵攻で協力せざるおえない関係と、研究者色が強い魔法使いたちの厭戦志向により、近年では「仲が悪い」と捉えられる程度の関係になっている。

といつても、それは国家間の関係で市井の人間が気軽に行き来できたり、商売をしにいける状態ではない。外交関連の役職に就く貴族や何らかの王命を帯びた騎士、もしくはランバルディアの為に取引を行う特別な商人に限られている。

それ以外の人間がエルムトの貨幣　　シージを持っていたら禁止取引の疑いかスパイ容疑で牢屋行きだ。

それが此処、ケイブリスになると話が違ってくる。闇市場でそういった法律は一切通用しない。街を取り仕切るマーケットギャングの采配が法律だ。

この2年でシージ貨幣はおおよそ10倍以上の価値で取引されている。エルムトでパンと水1瓶が買えるか買えないかの値段が、ここでは中品質の魔術が付与された剣一本の価値まで跳ね上がる。

あのヒスシー人の商人もうまく立ち回ってギャング相手に儲けるだろう。

そんなにエルムトの金を集めてどうするのか、と思うが　まあ、何かの悪巧みに使うのだろうとユノは他人事のように思っている。

だからこんな発言もできる。

「便利でいいじゃん」

「貴様…騎士の目の前で公然と違法を…!!」

「そもそもボクたちがここにいる事自体マズそうですよね」

「ま、そうだね…移動しようか」

明らかに納得していないルビィと、疲れた顔のフリードを連れてユノはケイブリスの大通りを歩く。

ケイブリスには四つの大通りがあり、それら全てが街の中心部市役所や神殿などの行政区に繋がっている。

大通りからは毛細血管のように横道が派生しており、迷路のような

構造をしている。街の区画は大きく分けて商店や宿酒場が連なる商業区、街の運営に関わる行政区、雑多な人間が住む居住区、バディア（娼婦街）や、賭博場のある歓楽区に分かれている。

どこもかしこも喧騒で溢れかえっている。

煉瓦で造られた建物に、細かく入り組んだ石畳。

大通りは直線ではなく、緩く蛇行を描いて造られており、外部から侵入した敵に惑わす為のつくらしい。

通りには時折堅牢な鉄扉が開かれたままになっており、有事の際にはこれで区画を封鎖する造りになっている。

手押し式ではなく、ルーンで自動に閉まる仕組みになっているようだ。

ユノはがやがやと賑わう大通りのひとつ “ 剣楯 ” 通りの中で、2人にそつと告げる。

「上、見て？」

「上？」

ルビイがくい、と頭上を見上げる。

「上っていうか、ほら、前方の陸橋」

「人がいますね、通りの人間を監視しているように見えますが」

フリードが眼を細めながら言う。大柄なこの騎士には見えたようだ。前方の建物と建物を繋ぐアーチ状の橋の上に黒い服に身を包んだ人影が3人見える。

布で顔を隠し、性別までは分からないが、それぞれ帯剣し行きかう人ごみを尊大に腕を組んで眺めている。

ルビイもその姿を見つけ、怪訝そうな顔でユノに問う。

「あの3人か？あいつらがどうしたというんだ？」

「このケイブリスを取り仕切っている奴らの私兵。憶えておくといい、真ん中にいる奴の腕に注目」

「？」

ルビイとフリードが視線を動かす。中央の黒服の露出した腕にタトゥーが彫つてあるのが見えた。鎧を着た3人の人間が並んだような図案。その下に「x」が装飾的に記されている。2本の短剣が組み合わさっているように見える。

「あの図案は一種の警告。あれの場合「私は騎士を3人殺しました」ってサインね」

「騎士を」

「…殺した？」

「そ、まあ本当に貴族階級の騎士なんて殺せばどうなるかは眼に見えてるから、金も領地もない騎士くずれでしょうね」

「噂には聞いている盗賊騎士、といった手合いか」

ルビイが忌々しい、といったふうには吐き捨てる。

騎士とは粗暴な盗賊やモンスター、ときには魔族といった脅威から人を守り、仁義を尽くす。

王侯貴族からは信頼され、平民には尊敬される一種の聖職といってもいい。

しかし長きにわたる魔族との戦争の中で、領主も領地も失ってしまった騎士というのが多く現れ、その多くは復讐の意志に突き動かされてエインヘリヤルに志願し、死んでいくか、平民として荒れ果

てた国の復興に参加していった。

しかし怪我や病気などで最前線から引き離され、死ぬことも希望を見出すことも出来なくなってしまった者も多かった。

彼らに残されたのは「自分が騎士」であるという名誉とやり場のない怒りのみ。そうなってしまうた者の何割かは王国から離れた地方に潜み、村や行商人や冒険者を盗賊同然に襲い金品を強奪している。ルビイもその何人かを自分の手にかけたことがある。もはや言葉も理屈も通らない。名誉と金、生と死に憑かれてしまった欲望の権化だった。同じ騎士としては憐れと思うが、自分の名誉と金の為に関係ない無力な平民を虐げるのは許せなかった。

「そう、それでも示威としては充分という事ね、平民であれ貴族であれここでは皆同じ　そう言いたいらしいわね」

「…随分と詳しいな、勇者」

憤りを秘めたルビイのその一言にくすり、とユノは眼を閉じて笑う。背後の2人には見えないが、その笑みは空虚さを孕んでいる。世の中の苦味を飲み干したような、年相応では決してない笑み。

「2年間大陸中を歩き回ったもの、色んな、そう色んなモノも見えてくる　望む、望まずに関わらず、ね」

ルビイには前を歩く白髪の勇者の背中が、いつもより一層小さく見えたような気がした。

旅装品の補給を終えたユノ達は大通りを横に逸れた比較的衛生が良さそうな飯屋に入る。

家族経営らしいこじんまりとした店だ。それなりに流行ってるのかちらほらと客がいる。

庶民の飯屋に入るのがはじめてなルビィが多少戸惑いを見せたが、フリードがさりげなくフォローして特にトラブルは起こらない。

が、盗賊団襲撃のときに何か感じることもあったのかルビィが少しフリードを警戒しているように見える　むしろ戸惑いとも呼ぶべきか。

「ルビィ、その料理はシエラ（大陸で主要な香草の一種。爽やかな酸味をもつ）が入ってるからやめておいたほうがいいよ…どしたの？お腹でも痛い？」

「い、いや大丈夫だフリード……子供か私は！？」

フリードは一貫して出会った当初、もしくは副官としてルビィに付いていた今までと同じ、気弱な好青年のままだ。

盗賊を一方的に追い詰めた冷徹な表情はそこにはない。

ユノはそんな微妙な距離な2人を尻目に料理を注文する。

数刻も経たないうちに、湯気を立てた皿が腕つぶしの強そうな女将の手で運ばれてくる。

「なんだそれは？」と、聞いたのはルビィだ。興味津々といった表情でユノが頼んだ料理を見つめている。

ちなみにルビィとフリードが頼んだのは王都にもある鶏肉とチーズのパエリアだ、仲良くエールをジョッキで頼んでいるあたり警戒しきれてない。

「ん？マンドラゴラと茸のアイリース風炒め」

「マンドラゴラって…」

「毒草ですよね？わりと危険なタイプの」

「調理方法による、それに私にはどんな毒も効かないよ」

「“勇者の加護”か、便利なものだな」

“勇者の加護”は主神ドンナーに与えられた勇者だけの特権だ。

それは盗賊襲撃のときに見せた『世界の停止』だけに限らず様々な恩恵が与えられている。

ユノの身体はどんな毒も受け付けない。一般的な薬物による毒から魔術・魔法による毒。モンスターの持つ生体的な毒。

魔族が使うソーサリーによる毒。あらゆる毒が効かない。

毒だけではない、命を刈り取るような呪法や精神を操る洗脳の類も効かない。

この特性にはこれまでかなり助けられている 戦争中も戦争後も。

「勇者、そろそろいいのではないか？」

エールのジョッキを傾けながら、ルビィが呟く。

天井に吊るされた魔術の照明を入れた硝子瓶がチリチリと音を立てている。

店内は全体に埃っぽく、砂の香りがする メルカトル大砂海近隣の街はどこもそんなふうだ。

「何が？お勘定？」

「誤魔化すな、そろそろこの旅の目的を教えろ」

「冒険者ユノ・ユビキタスと共に任務に同行せよ、期限不明。目的

不明。確かにそろそろ教えてもらいたいですねえ」
フリードがパエリアを切り分けながら喋る。

ふむ、とフードの下でユノは考える。

そもそも何故この2人に任務、セリアの願いのことを伏せたかという、王都の貴族連中の耳に入るのを避けるためだ、貴族の大半はユノの存在を認めていない。

常に監視の目を張り巡らせ、恐るべき悪事に加担している証拠が魔族と裏で通じている様子を血眼になつて探している。“契約”ですら逃げられないほどの罪人であることを証明しようとしているのだ。流石に2年も経てばそういった「動き」は緩んだものの、一時期はかなり辛かったことを憶えている。常に何者かの気配を感じ、生活の全てを観られ続けている不快感。

少しでも何か不用意な行動をしたら殺されてしまうかも知れない焦燥感。セリアの助けやアリカの存在がなければ、本当にユノは勇者でも魔族でもない「なにものか」に変貌していただろう。

今回の行動も貴族たちのそういった「動き」を活性化させる危険があった。

何せ魔族に加担していた人間が魔族軍が残留する西部に行こうというのだ、目的を知らない人間にしてみればその残党と「何らか」のコンタクトを執ろうとしているのだ、と解釈されても仕方ない。そういった出来事はこれまでもあった。

それは聖女セリアの真摯な説得で止められてきた。しかし、今回はそうも行かない。旅の目的が目的だ。

「勇者が消えた」などと知れ渡れば大変なことになる。

召還された当初のユノは知る由もなかったが、「勇者」の存在はこの大陸の大きな精神的支柱だ。

魔族とは人にとって対抗すらままならない恐るべき存在。実際に雑魚を除いた魔族の大半はただの騎士程度では相手にならない。「聖」と「火」の属性を魔術か魔法によって強化した武器で身を固め、戦いへの恐怖心を薄れさせる“エインヘリヤルの加護”を受けて、ようやく立ち向かえるような存在だ。

それらをいとも簡単に屠っていく「勇者」は英雄ですらなく、神の使いだ。主神ドンナーが遣わした救済の顕現　勇者として召還された当人たちの気持ちはどうであれ、そんな認識だ。

だからこそ、それが裏切られたときの反動も、恐ろしい。

「誰にも漏らさない？」

小声で、対面に座る2人に顔を寄せる。

ルビイは片眉をあげ、フリードは「うへえ」といった表情になった。当然だろう、と言う顔と重大なことに首を突っ込んだ、という表情だとユノは解釈した。

「はじめにしておく、この話を聞いたらもう完全にあんたたち2人は一蓮托生。もうしばらく国に帰ることもできないし、場合によっちゃ永遠に帰れない。途中で逃げ出すことも出来ない、私が殺すからね、まだ仮定の話だけど」

「……」

「げえ……」

「仮定の話だけど、あんたたち2人はもしかしたらランバルディアが、国の根幹がねこぞぎブツ壊れていく騒動の、いちばん中心になっちゃうかもしれない……まあ、全てが徒労なら、ただ“灰かぶりの勇者”と仲良くしたって貴族会の査問に掛けられるくらいで済む」

「…それ嫌だな」

「どっちにしても悪い方向にしか転がらないってことですよね、それ」

「そ、聞く？」

「私の意志は決まっている」

「異存はないです」

ユノは2人からいちど身体を離し、店内を見回す。

木造のカウンターとテーブル。壁に掛けられたタペストリに時計。昼を少し過ぎて客はまばらだ。ユノたちから遠く離れたカウンターに2人。テーブル席に4人。

さきほど料理を運んできた女将はキッチンに引っ込み、店員は鉄製の水差しを持って客を回っている三つ編みの少女くらいか。この店を経営している家族の娘だろう、女将と髪の色が同じだ。間諜と思しき人間の姿は見られない。彼らはある意味、わかりやすい。

ユノは乾いた唇を舐めてから、話す。

「2人はセリアと私を除いた勇者　ナオキやケンヤとの面識は？」
2人は顔を見合わせる。フリードは首を振って答えた。

「ミルニル家のハイネならば騎士学校で先輩だった、がナオキ様やケンヤ様とは…直接お見かけしたのはエインヘリヤル出征の際と、ご帰還の際か、前者では貴様も居たな」

「そう、まあ2人ともほとんど知らないという事ね、てゆうか私は呼び捨てなのね？」

「様づけして欲しいのか？」

「…背中に氷を入れられたみたいになりそうだから、やめとく」

ユノはすう、と息を吸う。言葉を発するのに少し勇気が必要だった
この事実を伝えるだけで、二人の人間の運命を変えてしまうか
もしれない、と畏れがあった。

しかしどちらにせよこの2人には言わなければならない、もし「最
悪の事態」となったならばユノ1人では太刀打ちできないのだから。

「私以外の勇者が、この地上から消えた」

沈黙。

沈黙。

まず、口を開いたのはフリードだった。好青年の顔は消え、冷静で
火の通わない表情になっている。

「それは、比喩的な表現ですか？」

「ある意味、直接的だよ。セリアが定期的に行っていたラタスク
を使った“対話”の距離外にいる」

「ニザヴェリルの魔術道具には詳しくないですが、ボクの記憶だと
それは大陸全土まで通じるものです、よね」

「その通り」

はあっ、とルビイが息を吐いた。そしてすつつ、と大きく息を吸い込む。

「こちら」にその概念があるかは知らないが、それは深呼吸に似ていた。

「つ、まり、それ…は」

「地に隠れたか、天に昇ったか、海に潜ったか？もしくは」

「死んで、しまわれた、ということか？」

ユノはじつ、と正面に座る少女騎士を凝視する。顔を俯け、テープルの木目を睨むようにしている。衝撃と動揺、その他の様々なリアクションを精神力で自制しているように視えた。

この少女　ルビイ・ギムレット・アンテローズにとって「勇者」とは多くのランバルディアの人間と同じように、大きな崇敬の対象だったのかも知れない。

主神ドンナーに遣わされた、人を闇から光へと導き、人を魔族の手から救済する神に選ばれしもの、勇者。

4年前の「向月ゆの」は確かに勇者だったが、ユノ・ユビキタスはもうそんな重すぎる「責任」は背負っていない。いつかのどしゃぶりの雨の日に、騎士20人の命と一緒に棄ててしまった。

「そうとは言い切れない、何らかの事態でラタスクが故障しているのかも知れないし、実際に地底や海に潜っている可能性もある。

第一、魔王のいない魔族にあの4人は殺せない」

「しかし、その確証もないから確かめに行く…そういった理由ですか」

「そう、他の人間には任せられない…最悪の事態であった場合に、

ね」

フリードがルビイの肩に手を置く、それでいくらかルビイは落ち着いたようだ。

「後悔した？」

ふっ、とルビイが笑う。口元だけ歪めるような、少女には似合わない笑み。

「甘くみるなよ、勇者　しばらくは、退屈しないで済みそうだ」

「ははは…」

「フリード、あなたは？」

「ボクはルビイの副官ですからね、御大將が死地に向かうならそれに従うのが騎士の誉れ、ってヤツでしょう」

そのおどけた発言にユノはくすり、と笑う。

破天荒で、実直な少女騎士とその副官。ユノはほとんど実際に剣を交えて感じた実力だけでこの冒険に引っ張ってきた。性格は二の次の不安の残る人材。

しかしこの2人で間違ってたかもしれない、とユノは思った。

「それではこれからメルカトル大砂海を越えるので？」

「いや、その前にドンテカによる。砂漠の入り口の街で、あー」

「おまえの今の住まいがある場所だったな？」

「そ、前の家が燃やされちゃったからね」

「…」

飯屋を辞したユノ達の足はケイブリスの西門へと向かっている。

西門に面した大通りは宿泊宿が多い、これから西部に旅立つ旅行者向けだ。

他にもロードスギルドの支部が設置されており、そこで冒険者が護衛の売り込みを行っているのが常の光景だ。

現在は特にメルカトル大砂海の護衛が必要があり、それ専門に装備を整えた冒険者などもちらほら見える。

ユノの服装もどちらかといえば砂漠向けのものだ、フード付きのポンチョは暑い日差しを遮るのに有効だ。

ユノはルビィとフリードを西門付近で待たせると、冒険者と旅行者でこったがえすロードスギルドの支部へと立ち寄った。

「ロードスギルドケイブリス支部へようこそ！ご用件は？」

支部は近代的なつくりをしている。魔術による“冷氣”が常時掛かっていてひんやりとしている。暑い外から冷えた室内へと入ったせいでアンダーウェアの下で汗がふき出すのをユノは感じた。

冒険者と旅行者の間を縫ってカウンターへ近づくと、赤色の制服に身を包んだ受付嬢の女性がにこやかに営業スマイルを浮かべる。

「冒険者登録番号一〇二二五二一、大砂海の気象予測を知りたい」

「はい！気象予測ですね、少々お待ち下さい…登録番号…」

受付嬢の書面をめくる手が止まるのも、既に儀式のようなものだ。戸惑いと恐れを浮かべながら書面とユノの顔を見比べる受付嬢にユノは半分うんざりしながら声を掛ける。勤めて優しい口調で、と試みてるが成功しているかユノには判断がつかない。

「別になんでもいいから女子供を20人以上は大量に一方的に虐殺できる依頼はありませんか？と聞いているわけじゃないでしょ？出来れば早くして欲しいのだけれど」

「ひっ」

どうも失敗してしまったらしい。受付嬢は目に涙を浮かべながら、後ずさるようにカウンターの奥へ消えていく。とりあえず対応はしてくれるらしい。

待つこと5分程度、浅黒い長耳族のギルド職員が受け付けに出てくる。

制服の襟にロードスの葉のバッチが付けられている所を見るとこの支部の長だろう。

名前は知らないが、このケイブリスではもうユノと顔馴染みの人物だ。

「おまたせしました、ユノ・ユビキタス様。ご用件はメルカトル大砂海の予測情報でしたね？」

「そ、危険モンスターの目撃情報も合わせてお願い」

「畏まりました。こちらの方になります 代金の方はランバルデア本部宛で？」

「それをお願い、悪いわねいつも」

「相互扶助こそがロードスに組する冒険者の精神、当然のことです御

座います」

亜人の職員が折り目正しく一礼する。

メルカトル大砂海の気象予測　巨大なサンドストームや砂霧などの危険な天候をまとめた帳面に目を通してながらユノは門の前で待つ2人へ歩いていく。

「それじゃ、お母さん。少し出てくるねー」

「あいよー！帰りに牛乳お願いね！」

「」

ケイブリスの“剣楯”通りから少し外れた横道。そこを少女が歩いていく。

先程、ユノ達が食事をした飯屋の娘だ。三つ編みに健康的に日焼けした肌。三角巾とエプロンドレスが相まって素朴な印象を与える少女だ。

少女は上機嫌に鼻歌を唄いながらケイブリスの小路を歩いていく。石造りの建物に囲まれた路地は日の光があまり入らず、建物と建物を利用して掛けられた洗濯物も相まって暗い影となっている。

少女はふんふん、と鼻歌を歌いながら路地の階段を小走りに駆け昇り、隣のブロックへと続く陸橋を駆けて行く。

すれ違う顔馴染みの露天商や同年代の少年をあしらいながら少女は少しづつ街の影へ影へと入っていく。

暗いながらも明るい印象があつた小路とは違い、ケイブリスの裏道はどこか殺伐とした雰囲気漂わせている。

建物の窓は割れているか、普請で塞がれていて時々何かを殴るような音や女の悲鳴が聞こえる。

すえたような匂いもする。その不快な匂いの正体は、短気でかんしやく持ちな裏路地の住人が殺した犬の死骸だったり、街を取り仕切るギヤングがなにかろくでもない理由で「おもてなし」した人間の末路だったりする。

幸いながら少女の入った裏路ではそんな裏社会の日常生活は行われておらず、生きてるのか、死んでるのかわからない乞食が階段の隅で蹲っているだけだ。

少女はそんな陰惨な裏路地をにこにここと駆けていき、ある1つの建物の扉を開けて入った。

建物の中は暗闇で、日も差さない。調度品はないように見える。

何もない窓ばかりの寂しい建物だ。

「やまー」

「かわー」

そこに居るのは複数の人間だ。半裸の老人、黒い服を着た筋肉隆々のギヤングの私兵、頭に籠を乗せた中年の女、少女よりも幼く又イグルミを抱えた少年。

整合性のない、どこにも関連のなさそうな人間が建物の中で思い思いに座っている。

老人と女がサイコロとカードを使った遊びに興じており、又イグルミの子供は殺風景な建物の壁に石灰の棒で落書きをしている。

ギヤングの私兵はマスコット銃を脇に抱えたまま、壁際に座って湿気た煙草を吸っている。

少女が建物の中に入ると、老人がにつこりと皺深い笑みを浮べて言う。

「それじゃあ定期報告会としようかのぉ」

その一言の後の、変貌は異様だった。

虫の脱皮のように老人の背中が割れ、中から角を生やした乱杭歯の怪物が出てくる。

と、思えば屈強な私兵の男がまるで両側から見えない壁でプレスされたように細くなり、黒い布を纏った烏賊のような怪物と化する。マスケット銃が砂の溜った床にばさ、と落ちる。

中年の女の身体がどろどろと溶けて籠に吸収され、酷くおおざっぱな造形の人面を貼り付けたクラゲにモーフイングする。

少年はほとんど変化しない。只、顔が巨大な鮫に変わったただけだ。

そして飯屋の少女はというと、人魚のような姿になっている。服も擬態の一部だったのか、三角巾を除いた被服が全て魚鱗と化し、少女の下半身へと吸収されていく。

それぞれ個別に、異様な変形を遂げた彼らの共通点、それは黄色く光る眼と白い肌だった。

魔族　人はその姿を視て畏怖と恐怖を籠めて、そう呼ぶ。

「ええと、ソレデハ皆さんお疲れ様デス」

「ゲゲルル」

「オツカレ」

「オツツウ」

「グゲルグゲル…」

それぞれが人語と奇妙な言語を混ぜた言葉で返答を返す。

老人に擬態していた“乱杭歯”がリーダーなのか、彼を中心に「報告会」は進行する。

「案件Yについて、誰か有益な情報ヲ得たモノは、イマス力？」

「ナイ」

「グラグラ」

「サッパリです」

「アタシ、アルヨ！案件Yノ、サ、サイジユウヨウ人物？がお店ニ
キタヨ」

飯屋の少女に擬態していた“人魚”が誇らしげに手を上げる。

「オ、ナイスナイス、報告オネガイします」

「ヌガヌガ！」

「コウイウ時って流石！ってイエばイインだっけ？」

「ググレ」

“人魚”が身振り手振りを交えて、彼女の“潜伏先”に来たサイジユウヨウ人物？について報告する。

人間の言葉と、奇妙な魔族の言語が交じり合ったそれを“乱杭歯”がフムフムと頷きながら羊皮紙の巻物に記していく。30ラウン近い巨体が身を屈めて小さな巻物と向き合う様は滑稽を通り越して異様ですらあった。

報告を聞いた“鮫頭”が満足そうに喋る、あどけない少年の声だ。

「ソツカー、以外二ハヤカタネー、予想ヨリモ1週間ハハヤイヨ」
「グルグルゲグル…予定ノ、立テ直シ、必要、オモウ」

「それでスネー、デキレバ作戦Aノ発動ノ前に作戦Vも処理シテおきたイデスねー」

「V?Vってなんだっけ?」

「Vは、アレだよ!“復讐”」

「アー、国王様ノ考エタ作戦カー」

ぱんぱん、と“乱杭歯”が手の平を打ち鳴らす。その音でそれまで好き勝手に喋っていた魔族たちが黙る。

“乱杭歯”は満足したように頷く。

「ハイ、報告ありがトウございました、ソレじゃあ今後の活動ヲ伝えマス」

「ハ―イ!」

「ゲラゲラ」

「アイボスとレレルゾはココに残って、諜報の続き。エンヘソは西部、アーヴィーは王都の仲間と合流デ、任務にカンシテはそれぞれの隊長ノ命に従うコト、アトばれない、コレ最重要ネ」

「ゲゲルゲルゲル…了解、隊長ハ?」

「ワタシは案件Yノコトをプシユケ様にゴ報告にアガル…初メテアレ”に入ルミタイだからちよつと緊張スルね!」

「イイナー!ワタシもイキタイ!国王様ミテミタイ!」

「ゴラゴラ」

「潜伏先ノ後始末モ忘レルナヨー」

どこか気の抜けた漫才のような口調で、魔族達のひそやかな企みが進行していく。

「サテ、それじゃアそろそろ、解散トいうコトで」

「ゲゲルル…隊長、御武運ヲ」

「気合イレテキマシヨ、国王サマと地上奪還ノタメニ」

「ゲルガゲルガ」

「ハ―イ！ソレジャあ…ミドガルスの御神とローレライの旗に誓ッテ！」

ざ、とそれぞれ形が大きく異なる魔族達が一斉に何かの礼をする。人型に近い魔族は右腕を胸付けて、左の掌を右の拳に添えている。 “クラゲ” や “烏賊” は触手をそう見えるように折り曲げていた。 “乱杭歯” が礼を解くと、腕を振って言う。

「じゃ解散デ」

まるで時間が巻き戻るかのように異形が人間へと戻っていく。

“乱杭歯” が老人の皮を釣りズボンでも履くかのように着用し、スポンジを水で戻すように “烏賊” が傲岸不遜な面構えのギャングの私兵に膨れ上がる。 “クラゲ” も同様に籠を乗せた物憂げな中年の女に戻り、少年はもはや鮫の面影さえない。

少女は顔の造作をにこにここと固定したまま、身体だけ人に戻っている。

それぞれの魔族が “役割” に戻り、ケイブリスの住人をまた演じは

じめる。

老人はよぼよぼと杖をついて表の扉から出て行き、それに少女と少年が続く。

物憂げな中年の女は楚々とした動作で散らばったサイコロとカードを籠にしまい、また頭に乗せて出て行く。

最後に残ったギャングの私兵が煙草を砂の上に落とし、裏の扉から

少女の入ってきた扉側から出て行く。

誰もいなくなった建物の暗がりには、大小様々な人間の髑髏が5つ無造作に並べられている。

奇妙で、恐るべき精度の擬態を用いて人の暮らしに溶け込んだ魔族達。

それは魔族軍第四軍団“ローレライ”諜報部隊の、どこか滑稽で異様な集会だった。

ブイ・フォー・ヴェンデッタ？

あの日から、私はすべてを喪ってしまった。

富も名誉も領地も、私を信頼して付いてきてくれた者達も。

そしてわたしの、私のすべてを築いてくれたあの人も

人形のように、唯々諸々と操られるまま生きてきた私を解放してくれたあの人を。

負け続けの私の人生に、手を差伸べてくれた私の天使を

身体が熱い、燃えるように

まるで体内に詰まった五臓六腑が溶岩に変わってしまったようだ。実際にそうなのかもしれない。私はもはや人間ではない。

人は、国は私を責めるだろうか？

きつと責めるだろう、私は責め立てられ絞首台の上でドンナーに慈悲を乞わされるのだ。

自分ですら思う、私の所業は正気ではないだろう。

しかし、私の中の何者かが囁くのだ　燃え盛るような黒い怒りを籠めて。

彼奴らが、ドンナーが、貴様に何をしてくれたというのだ？

貴様は長年彼奴らの為に尽くしてきた、身体をすり減らし心を折り、文字通り粉骨碎身で尽くしたろう。

私と貴様は同じものだ、いまさら謙遜することもあるまいて？

しかしそれで一度でも貴様は相応の報いを受けたか？

あの人を、己の全てを賭けて自分のものとしたあの人を喪った貴様に、彼奴らは何をしてくれた？ドンナーはどんな慈悲を与えてくれた？

あの肥えた太った豚共は貴様になんと言った？幾ばくかの金を渡してこう言っただけではなかったか？

哀れんだフリをして、好色そうな唇を歪ませて。

君。きみの心の穴は天使たちが癒してくれるだろう、地上に舞い降りた天使たちがね

彼奴らは何も理解しようとしなかった、貴様の悲しみも、あの人がどれだけ貴様にとって大事であつたかを。

貴様のかけがえのない物を、言葉で汚された怒りも。

答えられぬか？哀れな、哀れな私よ！

燃やせ、燃やしてしまえ

我が身体と同じように。

燃やせ、焼き尽くせ 体温を喪失したあの人のために、火を灯せ。全てを燃やしてしまうのだ。燃やして燃やして、あの人がいる天上まで熱を届けるのだ。

冷たい雨の中、震えるように亡くなった哀れなあの人を、貴様の熱で包むのだ。

地上にある全てを暖炉にくべてしまえ、燃やせ、燃やせ、灰にしておしまえ！

報いを与えるのだ。

あの人を喪わせた国に

貴様を理解せず、何も与えてくれなかった貴族どもに

そして

そして、あの人を煉獄に突き落としたあの女に。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月22日

18時50分 ドンナーが瞳を閉じる時間

砂海入り口の村 ドンテカ

ドンテカはこの大陸で唯一、死の領域である砂の海の恩恵を受けた村だ。

もともとはヒスシー人との部族抗争に負けた遊牧民族が拓いた村だったらしい。ろくに耕作もできない砂まじりの大地に、乾ききつた気候。

厳しい環境の中、日々を生きていくことすらままならない遊牧民族たちは部族の安寧の為に近代国 ランバルディアやエルムト、西部の今は亡きアリストピアと交渉を行った。

それはメルカトル大砂海で生きる民族たちの様々な生活の知恵、横断のノウハウ、生物についての知識などの、部族の根幹ともいえる全てを開示し、売り渡すこと。

それは大博打だった筈だ、知識は複製され、研究により明快になる。大国の智者たちがそれらの知識を集積してしまえば元の、部族たちは必要なくなる。

しかし、その博打は成功した。3国はそれぞれ規模は違うものの

部族の知識に見合った対価を提示した。商業での優遇、他部族からの庇護、魔術による土壌の改善　村は繁栄し、現在では主要国の何処にも独占されない、独立した中立村となっている。

西部が魔王の支配から解放されたここ2年では旅行者向けの宿や露天。仕事を求める冒険者が集まり、活気に湧いている。

「身分証明をみせ……てめえか、死んでなくて実に残念だ」

「そりやどうも、夜分遅くまでご苦労さま門番さん」

ドンテカ入り口の検問　フードを脱いで顔を見せたユノに、門番の兵士が不快げに顔を歪めた。

この掛け合いももうだいぶん慣れっこになっている。親しみとは全く正逆の侮蔑に近いものだが、ユノは涼しげに眉ひとつ上げない。門番の兵士はふん、と不満げに鼻を鳴らすと、白髪の少女の後ろに従う騎士2人　いきなりの一言に吃驚としているルビィを見やる。

「あー……失礼しやした、そちらの騎士様方は？」

ルビィが一瞬気後れしたあと「堂々たる騎士」に可愛らしい顔を整えて、進み出る。手には騎士の身分を示す証明書を持っている。

「ランバルディア守護騎士団のルビィ・ギムレット・アンテローズだ。従者はその自由騎士フリードリヒ・ヴァイセン。このユノ・ユビキタスと任務を共にしている」

年相応ではない凜としたルビィの口上に門番の兵士が佇まいを直し、敬礼する。

「はっ！確認しやした。それではどうぞお通り下さい……ドンテカへおいでくださいやして感謝の極みでありやす」
「宜しい」

満足げに頷いたルビィとフリード、最後にユノが村の門をくぐる。と、ゲートの脇に退いた兵士がユノに、ユノだけに聞こえるように呟く。

「また殺すのか、アバズレめ」
「お生憎」

前だけを向いてあしらうユノの後ろ姿を、けっ、と悪態をついて門番の兵士が睨みつける。

「嫌われているのだな、貴様は」
「……まあね」

ユノ達3人を、まるで死神か伝染病の病人でも見たかのように村人が避けていく、親らしい女が遊ぶ子供の手を引き、家の扉を閉め、ごさを敷いて干物などを売っていた老人が何かの魔よけのような動作をユノに向かってしている。酒場のラウンジで屯する冒険者たちがバカ騒ぎを中断し、腰の剣に手をやりながら鎮まりかえる。

ほとんどモンスターや盗賊と同じような扱いだな、とユノの小さな後ろ姿を見やりながら自由騎士　フリードは独りごちた。
フリードは特にユノについて特別な感情を抱いていない、怨みも

なければ親愛の情もなくほとんどこれまでの仕事相手や、同胞の自由騎士たちと同じ程度の親近感があるのみだ。

ユノにしても同程度だろう。おそらく戦闘に関しては一定の信頼を得られていると思うが、ほとんどルビィの付属品くらいの認識だろう。それについて特に不快に思うこともない。

しかし、この現状を見て　フリードは少しだけ不安に似た感情を得た。

たしかに彼女は罪を、とても許されないような罪を冒しただろう。しかしそれはもう2年も過去のこと、その間“契約”によってかなりの償いがされている。

フリードはユノに同行するにあたって、少しだけ彼女の2年間の足跡を調べた。

魔王のマナで凶暴化したままのモンスターの討伐。世の混乱に乗じて跋扈する盗賊団の殲滅。諦め悪くゲリラ活動を続ける魔族軍の討伐。彼女と同じく、何かの理由で魔族に組した内通者の特定と排除。

どれだけ優秀な冒険者や騎士でも、過去にそれだけの冒険をし、生き延びた人間はいないだろう　生還し、功績を立てる者は。

それなのに、彼女は全くといっていいほど評価されていない。直接、親族を殺されてしまった者達は良いだろう、殺された20人の騎士の中には国の重要な位置にいる人物や家長も居た。心の喪失だけでなく、実質的な損害を受けた家も多かったはずだ。

しかし、直接関係のない　とどのつまりフリードのような、全く助けられるばかりだった人間が声高に彼女を批判し、石を投げるのはフリードの、国に対しての敬意やドンナーへの信仰を除いた視点からすれば集団の力を借りた暴力だ。

暴力は人を磨耗させ、ときには爆発させる。
もし、ユノ・ユビキタスが爆発してしまったらこの国はどうなる
のだろう。

（ま、ボクにどう出来る話でもない、か）

彼女の火薬を湿らせるのはフリードの役目ではない。親友らしい
セリア姫や、これから逢いに行くという「ハーフリザードの女性」
人の感情に疎いフリードの予感ではあるが、我が愛しのルビィも
また、ユノ・ユビキタスという“兵器”を人間のままにする要素か
も知れない。

我ながら 最低の発想だ。

「……何を視ている、フリード？」
「ん？」

周りの状況が気に喰わないのか、横を歩くルビィは少し不機嫌だ。
猫科の肉食獣をおもわせる双眸を歪ませ、同年代の少女より比較的
凜々しい眉を寄せている。

口元は苦い薬を意図せず飲み干したような感じだ、侍女のウルス
ラに怒られてるとき、こんな表情をしている。他者への憤りの表情。

「ユノさんは、今の現状をどう思っているんだろうと思ってね」

前方を威風堂々と 少なくともそう見える白髪の勇者に聞こえ
ない声で返す。

別に聞こえたところで何かが起こると思えないが。何の気なしに
そうした。

ルビイはその言葉を聞いてじつ、と覗き込むようにフリードの顔を覗き込んだ。

しばらく、フリードが黒兜の下で正体不明の居心地の悪さを憶えるくらいの長さで、思い直したようにかぶりを振って前を向き直る、フリードはその一連のルビイの様子に首を傾げるばかりだ。

ユノは周り全ての色々な視線を、いつもの様に無視しながら歩く。はじめこそとても辛く、悲しかったことを憶えているが、人は慣れる。戦場ではじめ死の恐怖に怯え泣き叫ぶばかりだった新兵が、先に死んだ戦友の亡骸を、眉根ひとつ動かさず盾にして戦い続けるベテラン兵士に変わるのと同じだ。成長であり麻痺、人によってはそれを欠損と呼ぶかもしれない。麻痺か欠損か？それは当の本人にはまったくどうでもいいことなのだ。

壊れていても果たさなきゃならない目的があれば、心臓が止まらない限りは人は生きていなければいけない、ユノはそう思っている。

ドンテカの外れに続く道を歩くユノの今の関心は　おそらくユノの自宅で待っているはずのアリカのことだ。

ユノは剣の振り方は知っていても、自分を慕って、これまで支えてくれた人間への別れ方を知らなかった。どう言えばいいのだろう？どう言葉を使えば、彼女を傷つけずに別れを切り出せるだろう。

自分はこれから、長い冒険の旅に出る。その間、アリカを1人きりにしておくのは心配だった　ユノへ復讐の念を燃やす何者かが、魔の手を伸ばすこともありえる。

ある程度の相手なら、金で雇われた暴漢程度や冒険者は大丈夫だ

ろう。アリカはリザードマンという「戦闘種族」との半人だ。どれだけ本人の気が弱く、争いを好まなかつと高い身体能力と生命力で乗り切ることが出来る。護身と逃走の心得はユノが教えた。

冒険者に関してはある意味もつとも安全だ。彼女の今の職業はロードスギルドに所属するギルド便の配達人。どんな冒険者であれギルドの運営側を害せば即刻懸賞金付きになる。オオカミよりも鼻の効くバウンティハンターたちが速やかに掟を破った馬か鹿を食べにくるだろう。

問題は、権力を持った復讐者。貴族の騎士だ。彼らには上記2者にはない権力という力がある。個人を言葉で服従させ、支配する力。1人ではどうにもならない力。

ユノは大丈夫だ。セリアという強い「権力」を持つ友人が側にいる。しかしアリカには、アリカには何もない。故郷を捨て、ギルドの一端に所属する程度の地位。この国で一番の重罪人、騎士殺しの勇者ユノ・ユビキタスと暮らす女性。

（ああ、ちくしょう）

ユノはそこまで考え、今さらながら後悔に歯噛みする。

やはり自分たちは長く一緒にいるべきではなかった、いつかの酒場でのあの日に冷たく突き放すべきだった。アリカは気は弱いが芯の強い女性だ、きっとユノと関わっていないければあんな安酒場なんてすぐに辞めてもつといい働き口を見つけ仕事して、人と出会って半人半獣なんて気にしない気概のいい男性と一緒にいる。そんな未来があつた筈だ。

それを、ユノが狂わせてしまった。

自分を取り巻く環境をもつと良く考えるべきだった。

寂しさや怒りに惑わされず、自分だけの人生を生きるべきだった。そうすれば　こんな懊悩を抱えずに済んだ。

（後悔しても、仕方ないか）

ぐ、と砂まじりの唾を呑み込み、俯いていた視線を上げる。

村の外れにいくにつれ冒険者や旅行者で連日賑わう酒場や宿屋の灯が消え、寂しいばかりの砂中の村が姿をあらわす。

石造りの老朽化した家屋が続ぎ、中には魔族の侵攻で持ち主を失って瓦礫のままの家もある。たいていそういった場所には宿に止まる金もない野宿者や逢引する娼婦、禁制の薬で陶酔する集団が屯していたりする。ユノの住処はそこを越えた先だ。

砂海の闇の中に、ぽつりとひとつだけ灯がついている。

それを見つけたルビィがユノの横に並びながら呟く。

「あれが貴様の家か？」

「そ、静かな場所よ」

ルビィが目凝らすと、一見廃屋のような、そうでないような家が闇夜に浮き出てくる。

小さな家だ。植物の蔓が絡まる石造りの外壁に修繕の痕が目立つ屋根、広いばかりの敷地は木の柵で区切られ、井戸と動物の皮や肉を吊るした狩猟台。キューザック（ドンテカの周辺に自生する薬草の一種。野菜としても重宝される）などが栽培されている畑が2面横には農具と可愛いイラストが描かれた如雨露が転がっている。

「ウチの物置に似ているな」

「……そりゃどうも」

半眼でルビイに振り返りながらユノは自宅の敷地へと入る。

家の柵には獣脚型のランドドラゴンが縄に繋がれている。首には

「タマ」と書かれた首輪が付いている。

「タマ」は身体を折り曲げて目を閉じて寝ている。ユノ達3人が近づくと眼を開けて煩げにこちらを見やった。

ユノがその鼻先に軽く触れながら微笑む。

「ただいま、タマ」

くるる、と特徴的な鳴き声を上げて「タマ」が少女の手にマズルの長い顔を擦りつける。親愛の印だ。

飼い主と飼い竜の再会を果たすと　ユノはいよいよ、といった風に緊張した面持ちで家の扉に向かう。ルビイとフリードはそれに後ろから続いていく。フリードは飄々とした佇まいだが、ルビイは近くでは初めて見る「平民の生活」に多少興味を憶えてきよるきよると辺りを見回している。

(……?)

ユノは扉に近づき、正体不明の違和感を抱いた。

何かがおかしい、衣服のボタンを掛け違えたまま着てしまったような感覚だ。ユノは扉のノブに手を掛けたまま、考える。

自分は家を出たときに「タマ」をどこに繋げただろうか？

場所は 合っている。ユノはいつも「タマ」を家の柵の前に繋げている。基本的にユノとアリカ以外に懐かない「タマ」はいい番犬にもなる。

しかし、セリアから手紙が届いて、自分は歩いてドンテカの大馬車乗り場へ行っただろうか？確か「タマ」に乗って、ドンテカのランドドラゴン用の竜舎に預けたのではなかったか？

それならなんで 「タマ」はここにいる？アリカは、「タマ」に1人じゃ乗れない。

「
ツツシィッ！」

心臓が急速に萎み、一気に爆発するように増幅する。同時に、圧縮された酸素が激流のように2つの肺に流し込まれ、奇妙な音がユノの喰いしばった口から漏れる。

世界が不可思議なまでにスローに視えている。

ユノは“グラールベルの鉄籠手”で目の前の扉をブチ破ると、姿勢を獣のように低くして半ば転がるように自宅へと入室する。ばらばらになった木片が虫の死骸のように散らばる。

手は自分でも気づかないほど無意識に腰の剣を抜刀していた。

視線だけを動かして、自分の家 否、今や敵地になっているかもしれないぬ部屋を睨みつけた。

ユノの右目は広くもない室内の右側を確認した。

木造の室内に丸いテーブル、椅子が二つに食器棚と流し台。

ユノの左目はそれ以外の全てを捉えた。

月明かりが差し込むカーテンの開いた窓。机、棚。ベッド。そこに横たわったアリカと、側に佇む黒い人影。

その人影に対して、ユノは誰何の声を挙げなかった。それは無意味な問いだからだ。家主の許可なく、わたしの家へ足を踏み入れたものはみんな「敵」だ。

「敵」へのリアクションはひとつしかない。

「!!!!!!」

声にならない言葉を発しながら、ユノはその人影目掛けて跳躍する。

低い体勢からの天井ぎりぎりへのジャンプ。猛禽類の飛翔。

“グラールベルの鉄籠手”に包まれた左手は手の平を広げ、すぐさま「敵」の動きを捉え、頸骨を握りつぶそうと前に押し出されている。右手はまるで弓か、それとも投槍でも構えるかのように引き絞られている。

ぎりり、と背筋がなめしたての革を擦ったような音を立てる。

そこに握られているのは弓の弦でも槍でもなく短く、太い刀身を持つ直剣だ。封印された“勇者の武具”に代わって手に入れた名もない剣。魔術の輝きも、戦士の心を奮わせる逸話もないが、並み居る敵の素首をたたつ切るには充分な武器。

逆手に構えられた剣の先には「敵」の脳天か心臓を突き立てられるよう力が籠められている。

暗闇の中の「敵」が、自然な動作で壁際まで下がる。手には短い棒のような物が握られ、影になった顔が何ごとか呟くのをユノの耳

は聞いた。

（詠唱　魔法使い！！！！）

意外なほど若い声が「力ある言葉」を紡ぐ。

「エクスリブリス・コルタナ五篇断章。シルバーチェイン」
「！！！」

次の瞬間、ユノは空間から現れた鎖に絡めとられ、動きを止められる。

現れたのは「魔法」で造られた鎖だ。銀色の燐光を発している。鎖はまるで知性を持った蛇のようにユノの五体を拘束し、空中に縫い留める。

ぎりぎりと金属の感触を持つ鎖にユノはクツと呻く。
それを視て、魔法使いの「敵」は杖を下げる。

「ご連絡なしに訪問したことは謝ります、ですけど」

ハイトーンな、声。

「敵」の顔が月明かりに照らされて顕になる。
若い、ほとんど少年といってもいいくらいだ。幼さを残す顔立ちに切れ長の瞳。髪は典型的な大陸人のこげ茶だ。前髪はかなり長く、ほとんど隠れているといってもいい。

被服は示し合わせたような黒一色、痩せぎす気味の身体を黒の口
ブで隠し、何かの図案が刺繍された襟巻きをしている。刺繍系に
光沢のある糸を使っているのか月明かりを反射してきらりと輝いて
いる。

手に持った杖は取り回しの良さを重視する魔法使いが好むタクト
型の魔法杖だ。

「魔術」の媒体として使われ易いミスリルではなく、若木を加工し
た杖だ。

恐らくエルムト領内のエルフの森にしか生えない「エーテル樹」
の枝だろう。

選ばれた魔法使いしか使えないその材質を杖としているというこ
とは この魔法使いはエルムトの魔法使いでもかなりの上位者と
なる筈だ。

「突然殺しに掛かるのはいかなものでしょうねえ？ ユノ・ユビキ
タス」

「……魔法使いが何用だ！ アリカに何をした！！！」

ユノの怒りを籠めた誰何の声に、少年はやれやれとかぶりを振る。
背後でばたばたと音がした。ルビィとフリードがユノを追いか
けて部屋に入ってきたのだろう。

双剣を抜く金属音と、ピストルの劇鉄が上がる音がほぼ同時に響
く。

「勇者！ そいつは敵か！？」

ルビィが鋭い声をあげる。

その横に並ぶフリードは両手でピストルを保持し、すぐにでも撃

てる体勢を整えている。

「エルムトの魔法使い……！」

フリードが緊張気味に呟く。魔術の素養のない平民にとって、魔術師や魔法使いは畏怖の対象だ。それが戦闘に赴くものになればなおさらだ。

戦場において魔術師はただの平民兵士の20人分。魔法使いならば60人に匹敵する戦力となりうる。

「あー……待った！」

ユノ達3人の殺意を向けられた魔法使いがどこかおどけたような口調で「降参のポーズ」をとる。

ぼとりと魔法杖が落ち、床に軽い音を立てて転がる。

「どうも誤解があるようだから言っておくが、僕は味方です味方、ランバルディア王からあなたの旅に同行するよう申し付かった者です」

「……王陛下から？」

ユノが拘束されたまま疑問の声をあげる、まだその視線は警戒を孕み、ベットの上で眠っているようにみえるアリカとその横に佇む魔法使いを焦燥まじりに見つめている。

「ええ、ちなみにこちらのアリカ嬢には何もしちゃいけませんよ、僕はあなたより早くコチラに着いたので家の方で待たせてもらおうと思っただんですよ」少年は手を顔の横でひらひらと振りながらそう囁く。「忍びこんだのは申し開きがないですけどね」

「何故王陛下がエルムトの魔法使いを派遣する？もつとマシな嘘をついたほうがいいんじゃないか」フリードが呟くように言う「杖を

捨てるだけじゃなく頭の上に手を当てて後ろを向くんだな、じゃないとおまえの脳天をブチ抜くぞ」

「そりゃ怖い」

フリードの脅迫まじりの警告に魔法使いの少年はぶるつと震え上がるような子芝居をしながら素直に従う。

「おい、勇者の拘束も解け、変な真似をすればおまえの頭と胴体が今生の別れを告げることになるぞ」

「はいはい、ああ怖い怖い」

少年が頭の上で手を振るとユノの拘束が解かれる。鎖は銀色の煙と化し、溶けるように消えていく。どすん、と見た目に似合わない重さで着地したユノは真っ先にベットの上で眠るハーフリザードの少女に駆け寄る。

「アリカツ」

肩を掴み揺する。重力に従ってアリカの豊満な胸がぼよんぼよんと揺れた。その光景を目の当たりにしてルビィが少年に剣を突きつけながらも自分の胸と見比べ、眉根を寄せる。

圧倒的な戦力差だった。

ひとしきり揺すられた少女はうーん？と眼を擦りながら覚醒する。

「あーユノさんだー、おかえりなさいー、むにゃ」

「アリカツ、大丈夫？怪我は？このくそつたれに変なことされてない？」

「くそつたれってそんな下品な言葉使っちゃ駄目ですよーむにゃ」
「がくんがくんとユノに揺すられながらアリカが暢気そうに返事をする。」

ユノはその様子を見てようやく安堵の表情を浮べる。

心底泣きそうだった。異変に気づき、家の中に突入した段階からユノの脳裏では 最悪の事態 この少女の死か「それよりも酷いこと」がぐるぐると駆け巡っていた。

安心でへたり込みそうになるのを抑えながら、ユノは表情を変えて魔法使いの少年に向き直る。

少年は無抵抗だ。頭を上で組み、ルビイに剣を突きつけられながらフリードに乱暴に身体検査をされている。優れた魔法使いらしく予備の杖が2本に魔術ルーンが刻まれた短剣が1本、あとはローブの懷から魔法使いが「魔法」を行使するのに必要な蔵書^{ビブリオ}が出てくる。黒蛇皮で装丁されたシンプルな表紙には「コルタナ五篇断章」と記されている。「魔術」にも「魔法」にも素養のないユノは詳しくは知らないが「コルタナシリーズ」と呼ばれるビブリオは七篇からなる物語調の術書で、五大元素を操ることが主流な魔法の中では少し毛色の違う魔術に近い性質を持つ呪文が多く記されているらしい。

これは勇者の1人にしてエルムトでも有数らしい“ビブリオマニア”アライスの蒔蓄から知ったことだ。

その当時はファンタジーの王道たる「魔法」が使えないことに拗ねていた為、そんな蒔蓄はほとんど聞き流していたような状態だったが。

ユノはぐ、と“グラールベルの鉄籠手”に包まれた左手を前に出しながら少年に近づく。

「……目的は？」

少年がフリードに身体をまさぐられながらも涼しい笑みを浮べる。うさんくさい笑みだ、とユノの中の「冒険者」が警告を発する。

「これは尋問？まあいいや、先程いったようにユノ・ユビキタス、僕はあなたの旅に同行するように命ぜられた。詳しくは王宮にお問い合わせ」

ユノの拳が少年の腹に突き刺さる。かなり手加減した一撃だがふ、と苦悶の呼気を吐きながらも少年は笑みを浮べている

「つつつ……失礼、セリア姫の報告をお聞きになられた王が不安になつてあなたとこちらの騎士方お2人のお目付け役を送ることを決められた。あくまでも王宮上位者とギルドの信用できる幹部にしか今回の話は伝わっていませんよ」

「証拠がない」

「その隅に転がっている鞆の中を見てください、王命通知書が入つてる」

ルビィとフリードが顔を見合わせ、フリードが部屋の隅にひっそりと置かれていた鞆を手にとってくる。開けてひっくり返すと雑多な旅装品に混じり見覚えのあるロードスの葉が描かれた書類が出てくる。

「王命によりユノ・ユビキタスの護衛と監視を命ずる」フリードが月明かりを頼りに書類を読み上げる。

その間アリカはというと見覚えのない人物たちと、突然の緊迫した状況にベットのうえできよんとしている。いつものネグリジェを着ている所を察するに本当に今の今まで寝ていたのだろう。

「フリード、どう見える？」ルビィが鋭い視線のまま訊ねる。

「透かしが入っていますね、少なくとも“これ”は本物のようです」ロードスギルドで発行された書類には全て特殊な加工によって「透かし」が入っている、偽造対策だ。

ユノはそれを聞き、目線を少年に戻す。

「なるほど、証拠があるのはわかった。しかし“あなた”は何者？なぜエルムトの魔法使いがランバルディアの王命を聞く？」

それは当然の質問だ、とばかりに少年が頷く。

「自己紹介が遅れてしまいましたね、僕はスコルピオ、家名はありません。あなたと同じ首輪のついた冒険者で、この任に就くまではエルムトへの諜報活動を行っていました」

「エルムトへの諜報　まさか“詩の蜜酒”の者か？」ルビィがはつとしたように声をあげる「存在自体知っているものは少ない筈だ」

ユノが無言で、視線だけでルビイに問いかける、ユノはその単語を知らなかった。

「ランバルディア所有の密偵団の名だ。前王陛下がさる大貴族の不正を暴くために結成した組織だが、噂じゃ組織員の何人かがその大貴族との繋がりを持ってしまい全員処刑されたと聞くが」

「その通り！ですけど全員が始末されたわけではないですよ、王陛下は人材というヤツの重要性を知ってるお方だ。使えそうな何人かは死んだコトにされて市井に紛れて密偵家業をしてるんですよ、御国の為だね」

少年がにへら、と胡散臭い笑みを浮べる。これまで闇に隠れて見えなかったが黒く大きな眼の下に黒い蠍のタトゥーが入っている。純粹に趣味が悪いとユノは思った。

「それとおまえがエルムトの魔法使いであることはどう結びつく？」目ざとくフリードが質問する。素性は確かになったが何故エルムトの魔法を使えるのか説明されていない。

「それは 言っているのかな？コレ…… 僕がエルムト側の密偵だったから、ですよ」

沈黙が降りる。

「ま、ヘマをして投獄されていましたがね 処刑寸前で“詩の蜜酒”のお誘いがありましてね、僕は国への忠誠よりも自らの生を選んだというわけです」

その芝居がかった口調に正義感の強いルビイがおおいに顔を顰める。

「おい、どうするのだ勇者、コイツを信用するか？」吐き捨てるようにルビイが続ける「私としては今すぐにも斬り捨てたいところだ」

ルビイとフリードの視線を受け、ユノは考える。

「とりあえず一時保留 アリカが、怖がってるから」

戸惑いの中に怯えの色を含ませはじめたアリカに気を使い、疲れと安堵を滲ませながらユノはそう呟いた。

「さあキリキリ歩け、スコルピオとやら」

ルビィがフリードを引き連れ、スコルピオと名乗る少年に軽く剣の腹を押し当てながらユノの自宅を出る。去り際にルビィが振り向きユノに言う。

「勇者、とりあえず私たちは街の方の宿に泊まる。それで構わんな？」

「分かった、明日の明朝6時にここへ」

ユノは壊れた戸口の前で頷く。完全に目の醒めたアリカの「また扉を壊しましたね？」という痛い視線を背中を感じながら、それをやんわりと無視する。

去り際にルビィに剣を突きつけられ、横をフリードで固められたスコルピオがユノに振り返る。

「ユノ・ユビキタス、無断でああなたの家に侵入したことは重ねて謝罪します。ですが今回のことで“あなたが側にいないアリ力嬢”がどれだけ無防備か、実感されたのではないですか？」

ユノは視線を鋭くし、しかし言い返す言葉がないことに歯噛みした。

「実際、あなたが到着するまでに僕はこの街に1日逗留していましたが、その間に3度ほど“同業者”に遭遇しましたよ　貴族側のね」

「……それで？」

「一部、この家へ何らかの工作を仕掛けていたのがいましたんでね、僭越ながら始末させて頂きました。今頃パラ・カカドゥラー（砂海に棲む巨大なサーペント）の団欒でも養ってることでしょうよ」

「……………感謝する」

ユノは小さくそう呟く。

意外だと思ったのか少年は目を丸くしたが、意外と人好きのする笑みを浮かぶりを振る。

「いいえ、お礼されるほどではありません。とにかく、僕の言いたいことはアリカ嬢を、あなたの大切な友人をここに1人で居させることだけは、やめた方がいいということです。あとギルドが彼女を守るという幻想は捨てたほうがいい、上位の幹部陣や高貴な方々は“あなた”のことは批判擁護含め注視しているがアリカ嬢には何ら価値を見出していませんよ」

「……ずいぶんと詳しい」

「一時期はあなたの監視もやっていましたからね、あなたと彼女の関係もある程度知っています。それを踏まえて言いますが、アリカ嬢を大切に思っているのは他でもないあなたと、あなたの力ワイイ泣き顔がみたくてたまらない貴族の一部ですよ、まったく逆の意味ですがね」

そう一息に喋り、胡散臭げな視線がわずかに真剣な色が帯びる。

「姫様を頼ることを僕はお奨めします。人間関係を品評するような言い方をしますがあなたとセリア姫の結びつきは万金にも代え難いものです。決して裏切りのない関係という意味で、彼女もその輪の中に加えた方がいいと、差し出がましいかもしれませんがそう忠告します」

そう言って、スコルピオは前へと向き直る。痺れをきらしたルビイにふくらはぎを蹴られたのだ。

「痛っ、ま、それじゃ本日のところは失礼します。一夜語り明かしてどうすべきか考えるといいんじゃないかと思えますがね」

ルビイとフリードそしてスコルピオが去り、虫の音だけが夜の帳に響く。

ユノは一度息を大きく吸うとゆっくりと家の中のベットに腰掛けてこちらを見やるアリカに向き直る。

「アリカ」

「ユノさん」

どこか茫洋と、お互いの名前を呼び合う。

アリカは静かな日常が戻ってきたことに一瞬安堵した表情を浮かべたが、すぐに不安をその顔に滲ませた。

「その、ただいま、アリカ」

「おかえりなさいユノさん、その、今の方々は？」

少女の縦長の瞳孔を持つ瞳が不安に揺れている。

「王都の騎士と、魔法使い。騒がしちゃってゴメンね」

ユノは笑顔を浮かべながら部屋にひと組しかない椅子の片割れに座る。

重いポンチョは脱ぎ、テーブルの上に載せた。

沈黙が降りた。

アリカはいつもと違う雰囲気、何か重大な決め事をしたと見えるユノの表情に戸惑いと不安を覚えている。いつもの通りただ冒険から帰ってきただけならば、何の気なしに土産話がはじまったり、旅先で見つけた珍味や酒なんかを酌み交す平和な時間が訪れる。

しかし今日のユノは表情は固く、手はズボンの横を掴んでいる。幾ばくかの躊躇の後に、乾ききったユノの唇は言葉を紡いだ。

「また、旅に出ることになった」

旅。聞きなれたはずのその言葉にアリカは違和感を憶えた。

ユノはいつも旅をしている。ギルドから依頼を受けたり、時には自発的にふらりとどこかへ出かける時もある。

だから目の前の白髪の少女はいちいちアリカに言うことはない。長引いても一ヶ月かそこらで、そんな時はギルドの配達をこなしながらも今度はどんな冒険譚が聞けるのか楽しみにするのが日課になる。

それなら、今にも目の前で泣いてしまいそうな少女のその言葉は、なんなのだろう。

「長い、旅になるんですか」

「……わからない、旅がいつ終わるのかもココに帰ってこられるのかもわからない」

「そんなの、いつものことじゃないですか」

アリカはベットから腰を上げ、ユノの対面に座る。殺風景な部屋の中、月明かりとランプだけが光源だ。

ユノはそれを聞いて、何かを言おうとした。けれども言おうと思う言葉が見つからないのか、それとも多すぎるのかわからず、苦悶している。

ユノは別れる為にドンテカへ戻ってきた。スコルピオ 密偵の少年に忠告などされなくても、このドンテカにアリカを残したままにするのは危険なことだ。

ユノが蛇蝎のごとく嫌われているのと同じでアリカはこの街では変人扱いだ。ギルドの配達を終えては町外れの「騎士殺し」の家に入り浸るハーフリザードの女。

ギルドの配達人という立場がなければ街の荒くれ者や冒険者に手を出されてもおかしくない。

それにユノの存在も大きかった。元勇者で大罪人のまるで正気ではないような冒険ばかりする狂った少女。そんな得体の知れない存

在との関わりで彼女は、守られていた。

それはユノ自身もそしてアリカも自覚していることだった。

「きつと、生きて帰ってもここに帰ってくるのは、すぐく後のことになる、わたしは、そう“みんな”に、会いにいくんだ」

それは嘘で、真実だ。

「前に、進むんですね、ユノさん」

アリカが喜んでいるような、悲しんでいるような、どちらにもとれない表情をした。口元は笑っているのに、眼には悲しみばかりが漂っている。

亜麻色の髪がひとふさ、顔の前に垂れた。

「いつまでも、待っていますよ」

「駄目だ」ユノは首を振る「わたしたちは、お別れしなくちゃならない」

「なぜ？」

「わたしたちは長く一緒に居過ぎた。私が殺してしまった人達の親族が、アリカまで狙ってる　これまでもそんなことあったけど、これから、私は側にいて守ってあげれない」

「ユノさんが、いなくてもわたし、大丈夫ですよ？」

アリカが努めて笑顔で、そう言う。

「ユノさん、わたしねこの前ついにヒーラーの資格取れたんですよ、前にも話しましたよね？癒し系魔術師！これからは人の怪我とか、病気を治してお金もらえるんです！」得意げに胸を張る「すごいんですよ？魔術って、棒を振りながらルーン描いて呪文唱えたら火傷とかみるみる内に消えてくんですよ、わたし、才能があつたみたいです」

沈黙。

「だからユノさん、全然、全然心配いらなですよ、ていうか忘れられてるかもしれませんけどわたしユノさんより2つも年上ですからね！？自分1人で、生きていくくらい、なんのことないですよ！」

がたん！アリカが立ち上がり、椅子が倒れた音だ。

「だから！お別れなんて言わないで下さい！まるで今生の別れみたいな、もう二度と会えないみたいな言い方しないで下さい！」

「アリカ」

「旅！？いくらでも行けばいいですよ！ユノがここに帰ってくるまでわたしはギルドの仕事してヒーラーして月に何度かこの家を掃除しますよ、これまでと同じように！だいたいユノは自分に味方がいないないって考え過ぎです！お金さえ払えばここにいる冒険者は幾らでも私のことくらい守ってくれます！それに貴族なんてあんなトロくて砂海をひとめでもみたことあるか怪しい連中に、わたしが捕まえられるわけがないでしょう！」

一息で怒りを吐き出し、アリカは肩で息をした。疲弊している。手はぎゅうと固く握り締められ、ネグリジェに包まれた肩は震えている。身体のところどころに生えた緑色の鱗が赤みを帯びていた。興奮している証拠だ。

「だから、心配しないで、前に進んで下さい。きつと何もかもうまく行きます　悪い事の後にはきつと善いことがあります、世界はそういう風に出来ているんですから」

「アリカ……わたし、は」

頬に冷たいものを感じた。

「ああほらほら、泣かないで下さいよユノさん……あ、そうだ今夜は飲みましょう？門出のお祝いです。題してユノ・ユビキタス友を訪ねて三千里！引きこもりの少女ユノが寂しくなっちゃってお供のポチと一緒に昔の友達に会いにく感動巨編……イタッ、なんで叩くんですか」

「ばか、アリカのばか」

ユノはもう目の前が見えなくなってしまうた。恥も外聞もなく、

顔は涙でぐしゃぐしゃだった。なんとかそれを隠そうと顔を手で覆うが“グラーベルの鉄籠手”の金属は涙を吸収するには頑な過ぎた。テーブルにばたばたと塩辛い雨が落ちる。

「ああ、全くしょうがない勇者さんですね　ほら、ユノさんの好きな青ビアとオリーブの味ですよーすぐに茹でるんで待っててくださいねー」

白髪の少女の嗚咽と、ハーフリザードの少女の優しい声だけが、どこか温かみを帯びて、ドンテカの夜に吸い込まれていく。

「ああ、感動的　虫唾が走るったらありやしない」

吐き捨てるようにそう言ったのは黒衣の少女だ。

チヒロという「この世にそぐわない」名前の魔王。

いつもより少し簡素なドレスに身を包み、人間の感性では不気味で得体の知れない装飾のソファに寝転がっている。

艶かしい白い素足が、スカートの裾から太股まで露出している。

少女の眼前には、妖術の操作が施された鏡が置かれていた。少女の美貌を映し出す為ではなく、それはどこか遠い、砂海の懐に佇む村の一軒家を映し出していた。

遠ざかるそのビジョンを口ぶりとは違う楽しげな表情で見つめながら少女は指を鳴らす。

暗闇の中、ふたつの青白い光源が現れた。それは奇妙な紋様の衣に身を包んだ魔族のソーサラーが生み出す光で、その横に1人ずつ魔族軍二軍団“レヴィアタン”を率いる魔族デアシュと、四軍団“ローレライ”の長プシュケが佇んでいる。

「状況は？」

チヒロが言う。

デアシュ　黒髪をサイドテールに纏め、ぴったりとした黒のドレスに身を包んだ女性が抑揚の少ない声音で答える。

「配置完了です、ご命令の通り我が軍精鋭のスラッド兵たちが作戦開始の合図を今か今かと待っておりますわ」陶製の人形のような顔が笑う「国王様の一言で全ての作戦が動き出しますよ」

ふーんとつまらなさそうにチヒロは頷くと今度はプシュケに声を掛ける。

「プシュケくん、作戦Vはどういう手筈？」

魔族の少年が気合まんまんに1歩前に出る。

「はっ！“スルト”の出撃準備完了しております！最終テストにも問題なく当作戦では十二分のポテンシャルを発揮できるものと思います！！！」

「声が大きいわプシュケ」

「はっ、も、申し訳ありませんチ……国王様」

耳を押さえて可愛らしく文句を言うチヒロにあたふたとプシュケが謝る。それらをデアシュは系のように細い眼でにこやかに見ながら、言う。

「ふふふ、それでは国王様、兵が今か今かと待っておりますので、合図のご用意をよろしくお願いいたします」

そうしてデアシュはまるで闇に溶けるように消える。ソーサラーが唱えた転移術だ。

「あ、デアシュ待って……そ、それではこく、くっ、チヒロ様！私も行きます！」

「はいはい」

同じように闇に溶けていくプシュケにチヒロはぶんぶんと手を振る。手首に付けられた悪意を感じる形状の花のコサージュが揺れた。

にっこりと、魅力的で退廃的な笑顔を浮かべ、チヒロは立ち上が

る。

ぺたりと黒い床に素足が着陸する。

「さー、それじゃあはじめましょうか！楽しい楽しい“嫌がらせ”のはじまりはじまり」

やおらそう言って、チヒロはソファに屈んで備え付けられた収納スペースを開ける。その中には「こちら」では伝説の物質であるプラスチックで作られた薄いケースが幾つも収められている。

本の様な形状のその表紙にはこの世界の技術では到底不可能なほど鮮やかな写真や絵が描かれている。

DVD 「あちら」の世界でそう呼ばれるものだ。

「えーっと、どれだったかな？」

乱雑に放り投げるようにしてDVDを抜いていく。目的ではなかったものは黒い床にばさばさと軽い音を立てて転がっていく。

『リリカルなのは劇場版』『エヴァンゲリオン』『妄想代理人』『博士の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』『カリガリ博士』『マトリックス』『田園に死す』

脈絡のないラインナップの「アニメ」や「映画」が床に散らばっていく。

「ああ、これこれ、あつたあつた！」

1つのDVDを手に、チヒロは立ち上がる。

赤を基調とした背景に、微笑みの仮面を被った黒衣の怪人が短剣をXに交差させている。

その下には女優の顔と街並み、怪人の扮装をした群衆が斜めに描かれている。

それを掲げるようにして持つと、異様なまでに綺麗な声音で「その題名」を読み上げた。

「ブイ・フォー・ヴェンデッタ」

一度言葉を切り、付け足す。

「作戦かいしっ！」

ブイ・フォー・ヴェンデッタ？

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月23日

22時32分 朝焼けにはほど遠い

砂海入り口の村 ドンテカ

宿の環境はなかなか良好だ、とルビイは割り当てられた部屋をざっと見回してそう結論した。

木造の部屋には砂埃は見当たらず、吸う空気も砂漠周辺の街特有の砂っぽい気配はない。

メイドがきちんと掃除している証拠だ。

ベッドは多少固く感じるもののブラックの汗と埃が染み付いたベツドに比べればどうということはない。

顔を埋めて匂いを嗅ぐと太陽の香りがした、眠気を誘われる。

ルビイはふーっ、とため息を吐いてごろりとベッドに寝転がる。

普段のリングメールではなく寝巻き用のチュニツク、鋼のブーツはそのまま腰の後ろには短剣を2本差している。

どちらもそれほど眠るのを阻害しないものだ。

しばらくそうしてベッドに寝転んでいたが、なんとなく眠る気は起こらず、上体を起こしてベツトの横にある窓を開ける。

乾いた夜気と共に、冒険者の馬鹿騒ぎや旅行者の楽しげな声が部屋に飛び込んでくる。もう深夜も近いというのに人の気配は絶えず、通りに面した窓からは行きかう人と様々な食べ物を売る露天。顔を真っ赤にして笑いあう冒険者たちの姿が見える。

まだまだこの街は眠らないようだ。

「……疲れたな」

ルビイはそう独り呟いてもう一度ベッドに転がる。

旅の疲れで節々が痛んだ身体が柔らかいシーツの感触を喜んでいるのを感じた。

フリードとスコルピオは1階の部屋で同じように休んでいることだろう。スコルピオに関してはユノ・ユビキタスのいった通り「保留」だ。言動と王命通知書で一応の信頼はあるものの完全な裏が取れない限りは手放しでメンバーとして加えることはできない。

フリードによればロードスギルドで通知書の真贋確認とスコルピオが本当に冒険者であるか確認出来るらしい、開店時間までは敵か味方かの判断は保留だ。

そこまで考えて少女騎士の脳裏に副官　フリードの顔が浮かぶ。

（フリード、か）

フリードリヒ・ヴァイセン　守護騎士団第6部隊隊長補佐。戦争で功績を立てた“自由騎士”称号の保持者。アンテローズ領の獵師の息子。幼いころからの遊び相手。

ルビイとフリードがはじめて出会ったのは10年前のアンテローズ領内の森の中だ。

ルビイは幼いころは気性の荒いアンテローズ一族の中では内気な部類に入る子供だったらしい。

今のように豪放に、人の眼を気にせず振舞えるようになるのはだいぶん後の話だ。

父母の鹿狩りについてこさせられたルビイは、子供特有の無鉄砲さと好奇心の強さで姉の手を離れ森の奥深くまで入って、当然ながら迷って出れなくなった。

ひとりの不安と、夕暮れの森の怖さに泣きじゃくりながら木の側でうずくまっていた所に現れたのが、2歳年上の獵師見習いの少年

フリードだった。

フリードは笑わない少年だった。

無表情で、狩ったばかりのウサギの首を握り、山刀を手に現れたフリードは恐怖の対象だった。

ルビイは悲鳴をあげて木の後ろまで後ずさり、眼を閉じてドンナに祈った。

突然現れた見慣れない獵師姿の少年が幼い5歳のルビイには「悪い子を攫いにやってくるオバケ」だと思えたからだ。

そんなルビイに少年のフリードは無表情な双眸に戸惑いと若干の怯えを滲ませながら、なんとか警戒を解こうと口下手に話をはじめた。

生まれてから祖父と山中の小屋でひっそりと暮していたフリードは今の快活な性格と違って人が苦手で喋るのも苦手だった。

それでも自分に怯え、泣きじゃくる少女をなんとかして宥めた。

内気だが好奇心の強いルビイを泣き止ませるのに効果的だったのは、森の中で稀に遭遇する妖精や不可思議な生態のモンスターたちの話だ。たどたどしいながらも、実体験を交えた不思議な御伽話は森の暗闇を恐怖から、幻想の対象に変えさせた。

そうやって父と母と姉、お付きの従者達が大慌てで駆けつけてくるまで、ルビイとフリードは仲良く旧来からの知り合いのように話しこんでいた。

山を離れたその後も貴族の子女とその領民という身分違いの関係にも縛られることなく、ルビイとフリードの友達付き合いは続いた。海より復活した魔族が西部を闇の大地に変えてしまうまでは。

200年ぶりの魔族の侵攻に騒ぐ国の中で、特に早く動き始めたのがアンテロース家だった。もともとアンテロースは自由騎士から本物の貴族まで為りあがった家だ。

“戦うことしか知らない家”そう揶揄されることも厭わず、寧ろ

誇りにさえ思いながら、アンテローズ家は魔族との戦争にいち早くはせ参じた。

姉さま、ダイナ・ギムレット・アンテローズの出陣。

それと同時にルビイも騎士学校へと入学させられた。次世代を担う人材としてかなり厳しく躰けられたのを憶えている。今は勇者の1人として崇拜されるハイネ　ハイネ・オーディニ・ミルニルの一見高慢ちきな振る舞いに腹が据えかねて喧嘩を売り、見事なまでにボコボコにされたのもいい思い出だ。

その間フリードはしばらくアンテローズ領で猟師生活をしていたものの、魔族との戦争が激化するにつれて徴兵され西部の戦線へと行ってしまった。

それを知ったルビイは泣いた、兵士として戦争に行くということに死ぬことと同義だ。それがたとえ必要な犠牲であつたとしても寂しさや悲しさ、ともだちが死んでしまうという喪失感是否定できなかった。

その後は人が変わったようにルビイは騎士になる為に頑張つた。毎日誰よりも早く朝稽古をはじめ、一般の訓練兵に混じって行軍や野営の教練にも積極的に参加した。

とにかく“仇”をとってやろうという想いで心が一杯だつた。勉強は苦手だつたが“闘う”ことに関する学問ではいつも上位の成績をキープしていた。

武者修行もやつた。同輩にも先輩騎士にも負けない実力があるとわかり多少傲慢になつたかも知れない　もつともそれは守護騎士団に入ってから団長イスラにだいぶ矯正された。そして死んだと思つていたフリードと再会した。

（そう、ともだち）

男女の関係には2種類しかないと、人は言う　恋人かそうでな

いか。

ルビィとフリードの間に恋愛感情はなかった。

ルビィにしてみれば“レンアイ”なんてものは本の中の遠い出来事だったし、フリードという男は 例えばルビィが薄いネグリジエを着て、薄く化粧し髪を解いて、いつものと違う小悪魔のような表情でしな垂れかかろうともきつと襲うまい。 それどころかそんな事をすれば病院か教会かに連れてかれ医者の方か神父の悪魔払いを受けるのがオチだ。

身分違いのともだち、それがルビィとフリードの関係。

（これまでは、そうだった）

戦争から帰ってきたフリードに、違和感を感じたのはいつごろからだったか。

自由騎士となったフリードは昔と違い明るく快活な青年になっていた。 口も巧く世渡り上手、でルビィには到底思いつかない貴族への小粋な美辞麗句や平民が好みそうなジョークをふたつもみつつも知っている。

戦地でどんなことがあったのか知れないが、獵師のフリードと自由騎士のフリードはルビィと同じように人が変わっていた。

それに関して、ルビィは悪いと思ったことはない。

少年時代の環境が作った暗い性格が明るくなるのはいいことだし、騎士学校時代の武者修行のせいで敵が多く、同輩にも友人の少ないルビィは守護騎士団の隊の運営でフリードの人受けの良さや口の巧さでおおいに助けられている。

（そう、その代わりに あいつが時々、怖い）

それはきつと小心だろう。 しかしルビィの脳裏に盗賊団襲撃のときのフリードの顔が浮かぶ。

それはどう形容すればいいのだろう、ルビイは使える語彙が少ない。鉄のような、氷のような、感情がまるでないような、血が通わない　人ではなくなってしまったような。

そんな顔をしているときが、時々ある。

森で1人きりのルビイを助けたときの暖かな、感情の出し方が不器用なだけの無表情ではなく“何か”を隠蔽することに長けた無機質な仮面。

これまで、守護騎士団の隊長と副官として共に働いていて感じることもあったが、実際にしっかりとそれを目の当たりにするのはこの前の襲撃の出来事が初めてだった。

「ああ、くそ！らしくない」

上体を勢いをつけて起こし、手で頬をぱんぱんと叩く。

こうやってうじうじと悩むのはルビイの性に合わない。不思議なことや怪しいことがあったら遠慮なく躊躇なく突っ込む。それが例え罨だったとしてもその罨を全力で叩き潰す。

それが自分であり、アンテローズの家訓だ。

（そう、直接本人に聞けばいい！おまえはどんなことを考えているのかーって！）

ぐっ、と拳を握り鎖く。

思い立ったら吉日とばかりにルビイは部屋を出る。フリードはまだ起きている筈だ。

多少狭さを感じる廊下を渡り、階段を下りる。照明の光が弱く、気をつけなければ足を踏み外しそうな薄暗さ、窓から入る月明かりと街の灯が気休め程度には緩和しているか。

2階の部屋　203号室の扉をノックもせず開く。

「おい！フリードまだ起きてるか？……あ」

勢いこんでいた心がへにやりと曲がるのを感じた。

フリードは一見窓の横にある椅子に腰掛け、ベットに横たわるス
コルピオと名乗る少年魔法使いを監視しているように視えた。

が、眼を閉じて眠りにについているのがわかった。近づいてみると安
らかにそうな寝息を立てているのが聞こえた。

念のためスコルピオの方を確認すると手を後ろで縛り上げられ、
そのまま器用にぐうぐうと眠っている、顔に似合わず豪胆な性格の
ようだ。

押収した杖やビブリオなどの魔法具はフリードの足元にあるのが
わかった。

まとめて黒い紐で縛っているのは容易に取り戻すことの出来ない
工夫だろう。

ルビィはそこまで視て、ため息を吐いてフリードの対面に座る。

「はあ……」

テーブルに頬杖をつき、じつと幼馴染の自由騎士の顔を眺める。
ルビィにはよく分らないが貴族の婦女の間で噂になる程度には
ハンサムらしい。彫りは深く、彫刻のような顔立ちをしているが全
体の印象はさっぱりとした明るい印象を持っている。

男臭さとかそういうのとは無縁だがそれは好みの問題というもの
だろう。

どちらにせよ、ルビィはまだ異性に恋をしたことは一度もない。

「わたしも いつかは恋をして子供を生むんだろうか」

“ 姉のかわりに ”

そんなひとりごとを言いながら、何の気なしにフリードの頬に手

を当てる。

砂海のひんやりとした夜気に当てられてその髭の少ない頬は冷たい、ひんやりとした石のように。

フリードは頬に当たる手の感触に気づくこともなく安らかな寝息を立てている。

一見無防備だが“本当の危険”に対してはフリードは非常に敏感に反応する。優秀な兵士であり天性の獵師だった、ということなのだろう。

「おまえは、どんなことを考えているんだ……？」

自分への問いかけのような少女の言葉に返答の声はなく、薄暗い宿屋の一室を砂海から来る冷たい風だけが通り抜けていった。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月24日

12時00分 ミズガルズが喪った瞳の痛みを訴える時間
ドンテカで3番目に大きい酒場『ロッソ・ベア』

「おいロバートお」

「なんスカ兄貴い」

泥酔した酔っ払いだけが残った静かな酒場のラウンジで2人の冒険者がいる。

この2人も例外なく腰の短剣と自分の一物がわからないほど泥酔し、テーブルに足を投げ出して夜の空をぼおっ、と仲良く眺めている。

る。

“兄貴”と呼ばれた顎に傷のある大男がふらふらと夜空を指差して隣の弟分ロバートに告げる。

「なんかよお、空おかしくねーか」

「そりゃ兄貴の目が酒で曇ってんでシヨーがよー、いつも通りいい眺めの空じゃあないでスカ」

馬面の背ばかり高いロバートがなはは、と赤ら顔で笑いながら兄貴に答える。

「莫迦野郎、手前だって酒瓶と女の尻間違えるくれえ酔っ払ってんだろぅが」にやりと“兄貴”が笑う「で？柔らかかったか？」

げへへ、と幸せさ半分下種さ半分といった度合いの笑みをロバートが浮べる、馬面の頬にはくつきり綺麗な紅葉が咲いている。

「いやあ、ご同業の女つたあやつぱり筋肉が固くつていけねえや、やつぱりバディアの天使じゃなきやあねえ……ん？」

そこでロバートは隣に同じように足を投げ出して座る“兄貴”が空をじっと見つめているのに気がついた。

その視線に酩酊はなく、普段の　つまり盗賊やモンスターと相対しているときと同じ程度の警戒を表している。

「あ、兄貴？」

「空を見る、ロバート」

がたん、と派手な音を立てて“兄貴”が椅子にしっかりと座り直す。

ぎしり、と古い木の椅子が鎧分の重量がプラスされた体の重さに悲鳴をあげる。

手の平を眉間に当て、眼を細めて黒一色の星のない空の中に何かを見つけようとしている。

「なにが見えるんです？」

「なんかおかしいぜ……俺の勘がそう告げた……！」

ついには椅子から立ち上がり、酒の様子など微塵もなく立ち上がる。濃い横顔には焦燥と警戒がロバートにはありありと見て取れた。あわてて同じようにロバートも立ち上がるうとするが、足がふらついて普段どおりには動けない、なんとかラウンジの柱に寄りかかって空を見上げるくらいだ。

“兄貴”のザルにつき合わされ過ぎた、と自分の不幸を呪った。

“兄貴”は非常に勘の鋭い冒険者だ。純粹な剣や腕っ節の強さだけならドンテカの冒険者の中ではそこまで強い部類ではないが、ただ強くてマツチョなだけの連中にはないセンス 第六感が長けている、らしい。

らしいとはいったが、実際に長く“兄貴”の相棒をやっていて“兄貴”が「危険だ」と感じた依頼や場所には必ず何らかのトラップがあった。例えば「ペットが逃げ出したから捕まえて欲しい」という成金商人からの依頼で実はそのペットとやらが人を10人は殺してそうな巨大なコーンベア（鋭い一角のある熊。最大で40ラウンまで報告されている）だったり、何の変哲もない街道沿いの廃砦が知る人ぞ知る生きては帰れない“悪霊砦”と異名されるアンデットモンスターの巣窟だったりしたことがあった。“兄貴”が察知して野宿を止めていなければ確実になんの装備もなく強力なアンデットと戦うハメになっただろう。

（今回、ヤバイな）

酩酊した意識の中で、ようやくロバートは「何かヤバイ事態」に自分たちが巻き込まれようとしていると認識した。

よくよく耳を アルコールで聞こえが悪くなった耳を澄ませば

村のあちこちで犬の唸り声が聞こえる。

ドンテカにはモンスター避けに犬を飼う風習が古くからあるが、その犬が、ドンテカ中のすべての犬が至る所で狂ったように空に向かって吠え立てている。

獣は吠え立てて地を駆け巡る　ウォーエイジの有名な一節。
ぞくり、と体中の産毛が総毛だつのを感じた、異様な気配が風に漂っている。

こんな事態はこれまでの長い冒険生活で一度も見たことも聞いたこともない。

「ロバート！空を見張れ、何かあったらすぐ報せろ」

「兄貴はどうするんで！？」

今にも腰の剣を抜き放ちそうなほど“兄貴”は殺気立っている。

酒場の扉に手を掛け、勢いよく開ける。

薄暗い魔術照明だけの店内に月灯が差し込む。

「おい！ガンプオードの爺！！外の様子を見てみる！！」

薄暗い酒場の中に“兄貴”の濁声が響く。

心地いい酩酊と倦怠に包まれていた冒険者や情婦が煩げに眼を醒ます。

が、その中でも実力者にランクされる何人かは村の異様な雰囲気
をいち早く察し、窓際から外の様子を伺っているのが視えた。もつ
とも我の強い連中だから協調は望めないだろう。

カウンターでグラスを拭いていた熊のようにゴツイ店主が怪訝そ
うに“兄貴”に尋ねる。

「なんでえプリンス、揉め事かあ？」

「俺はプリンスじゃねえ、兄貴と呼べ　とにかくガンプオードの
爺を起こせ」

「へいへい、てーかあのヒス女が割った酒瓶代払えよ……」

ぶちぶち言いながら店主がカウンター席で酔いつぶれていたこの村一番の老兵　ガンプオードの肩を揺する。

どんなこだわりかは知らないが旧ランバルディアの兵士の格好をした風変わりな老人で、酒が入ると嘘か真かわからない豊富な冒険譚や知恵などを得意げに披露する。

娯楽欲しさの旅行者や単純に冒険の話が聞きたい物好き、それなりに信頼性のある老兵の知恵を求める冒険者なんかが集まる一種の『ロツソ・ベア』の名物のようなものだ。

錆の浮いたサレットを被ったガンプオードがセイウチのような口髭を震わせながら起き上がる。

「なんじゃあ、今日はもう話は終いじゃぞ」

「そりゃプリンスに良いなジイさん、呼んでるぜ」

老人の灰色の瞳がぎよりと動く。

ふらふらと意味のない手の動きをさせたあと、酩酊した足取りで
“兄貴”　本名プリンス・ウェールズのいる店の扉までやってくる。

「あゝ？なんじゃコラ、プリンスの坊主」

「やかましいプリンス言うなジジイ……それより空、視てみる、なんかおかしいぞ」

店主とガンプオードに恥ずかしい本名を何度も呼ばれて額に血管の浮かんでいる兄貴　プリンスだったが、それよりも外の異様な状況を聞くことが先決だ。

ガンプオードはいままでこそ耄碌しているものの若いころはこの大陸を旅しつくした冒険者のひとりだ。前時代の勇者たちの冒険を助けたこともあると豪語している。

村の冒険者なら話半分に聞いて笑い飛ばすようなハナシだがプリンスはそれを真実だと知っていた、かつてひっそりと自費出版され

た勇者自筆の冒険記の中に「前　ランバルディア兵の格好をした男」と共に伝説として語り継がれるワイバーン“不浄なるピュートーン”を討伐したと記述されている。

偶然その冒険記を手に入れたプリンスはその「前ランバルディア兵の格好をした男」がガンプオードだと確信している。

だから今のこの異様な状況について、豊富な冒険の経験を通じて何か知っているかも知れないと踏んだ。

前例を知っていて正体がわかれば上等、さらに対策が立てられれば万々歳だ。

「とにかく早く外を見てくれ！知恵を借りてえ」

プリンスのただならぬ様子にむ、とガンプオードは髭の下で唸り、視線鋭く扉を抜けてラウンジを出る。

店内で俄かに起こった騒ぎを傍観していた他の冒険者たちもただならぬ様子を察して身を固くしているのがみえた。

ガンプオードの後ろについてラウンジに出ると、ロバートがひどく慌てた様子でプリンスを呼ぶ。

「あ、兄貴！」

ラウンジの柱にへばりつくようにして空を見つめていたロバートは何か信じられない、もしくはとても忌まわしいものでも視たようにがたがたと震えている。

この涼しいというのに顔は汗にまみれ、眼はぎよるぎよるとして血走っている、齒の根も噛みあわない様子だ。

そんな弟分のただならない様子にプリンスは動揺し、大声を出す。

「なんだ……何かあったのか！」

「あ、兄貴、そ、そら」

「空がどうしたってんだ！」

嫌な風が吹いているのが、もうはつきりと判った。

プリンスもラウンジから身を乗り出し、黒々とした空を睨むように見つめる。

そしてロバートの悲鳴のような言葉と同時に、プリンスもその“異常な事態”に気づいた。

「空が、落ちてくる……！」

そう、まるで水気をたつぷりと含んだ絵の具がカンバスの上を滑るように　夜の　黒々とした暗闇が地上に“垂れている”

油のような粘性をもったそれは地上の、ドンテカ内の至るところにどろどろと堆積し黒い汚泥の沼を形成していく。

遠くに響き渡る犬の吼え声と相まってその奇妙な光景は、プリンスに恐ろしく不吉な予感を与えた。

腰の剣を抜き放ち、警戒の態勢をとりながらプリンスはガンプオードに叫ぶ。

「ありや　一体なんだ！？」

ガンプオードの返答は、しばらくの沈黙の後、震えるような声音でかえってきた。

老兵の灰色の瞳がぎよろぎよろとせわしなく動き、眼が血走っている。

「……ぞく、じゃ」

「何？」

「魔、族、魔族が攻めてきたんじゃ……！」

その言葉にプリンスは耳を疑った。

今のこの時期、この場所にそいつらがここにいるわけがない！
呆然とするプリンスと震えるロバートを置き去りに、ガンプオー

ドが齡90近い老人とは思えぬ俊敏さで店の中に戻ろうとする。

「いかん、早く火を点ける！！ありったけの火を点けにやならん！
！火と光を！そうでないと、奴らは」

「あゝ」

どす、とプリンスの背後で濡れてぐもった音がした。

びしゃり、と何かの液体が頬にかかり、プリンスはおそろおそろ
背後を振り向く、そこには恐怖で足腰が立たなくなった弟分が、ロ
バートがいた筈だ。

「あ、あにぎ……」

確かに先程とかわらず、ロバートはそこにいた。柱にへばりつく
ようにしてようやく立っている。少し深酒に付き合わせ過ぎたのか
酩酊がひどくまともに立てなかったのだろう。

プリンスはどこか冷静な面持ちで、ロバートに対して剣を構えた。
ロバートの右目の上から、黒い錐のようなモノが飛び出ている。

ぼたりとラウンジの木の床に落ちたのはロバートの血、何故か赤と
黒が混じってひどくグロテスクになっている。

よくよく見ればその黒い錐は植物の蔓のようにロバートの身体を
柱に縛りつけ身動きが取れないように拘束している。

触手の食い込み具合から、もうロバートは助からないとプリンス
は判断する。

正体不明な脅威への対処のひとつとして　　剣を振るう。

「だあつ！」

木の床を踏み壊さんばかりに勢いをつけた剣の一撃が、ロバート
だったものの胴体と柱を薙ぐ。

血と臓物を撒き散らしながら倒れるロバートと真つ二つに切られた柱だけが崩れ落ちる。

プリンスの剣より一瞬早くその場から離脱した奇妙な黒い「何か」は、触手から黒い油のような液体に形態を変え、ラウンジの床に滑り落ちる。

と、プリンスが次に見たものは信じられない この異常な状況下の中でさえ、奇妙な現象を目視した。

液体が沸騰したように煮立ち、人に、瞬く間に人型に形を変えていく。

子供の工作のような拙い人型から、コマ回しのように造形を精細にしていく。

身長185のプリンスより高い。腕が猿のように長く、太股は丸太のような、筋肉質な肉体。

それは“兵士”だ、プリンスの直感が告げた。

肉体から浮き出るように形成された黒の魚鱗を象った鎧、漆黒の材質不明な螺旋状の槍。頭とおぼしき場所から硬質化した2枚の板状のモノが平行に湧き、プリンスの方を つまり対峙する標的方向に向かつて交差しながら合体する。

球面状に膨れ上がったその板には覗き穴とおぼしき楕円状の穴が3つつ空いており、人間ではありえない色彩の瞳が、黄色く輝く瞳がプリンスを睨みつけている！

「う、うわ、うわあああ！！」

原始的な、魂に刻み込まれたような恐怖を覚えてプリンスは恥も外聞もなく逃げに走る。

剣を捨ててきびすを返して『ロッソ・ベア』の中に逃げ込もうと足を動かす。

たった5歩の距離だというのに恐ろしく遠く感じる。

幸運なことに背後のバケモノはプリンスを追ってこず、身体の調

子でも確かめるようにぐるぐると肩を回している。高い知性を持っている証拠だ。

勢いこんで『ロッソ・ベア』の扉を開け、妙に薄暗い店内へ駆け込む。

籠城だ。この店は頑丈だし、他の冒険者も大勢いる。もしかしたら実力者たちは事態に気づいてもう何らかの防衛策をとっているかも知れない。

勇者と一緒に旅をしたガンプオードをいる　これなら、大丈夫。

「……え？」

ブーツが、ぬるつとした泥のようなものを踏む。

まず見えたのが、カウンターに乗り出すように突っ伏した店主の姿だった。その背中からは黒い錐状の針が生えている。熊のような顔は驚愕の形に固まり、目が飛び出さんばかりになっている。

さきほど駆け込んだ筈のガンプオードは床に倒れていた。いや、それはもはやガンプオードというより　前ランバルディア兵の“衣服のぼろぎれ”だ。

他の冒険者も、常連の力自慢の脳筋馬鹿も、痩せぎす眼鏡の魔術師も、化粧の濃い女弓使いもみんな　身体はどこかしらから錐を生やし、死んでいる。

その光景にプリンスは思考を奪われ、背後に近づく巨大な影に気づかなかった。

どさ、と人間の男　おそらく冒険者と呼ばれる類の戦士が崩れ落ちる。男の死因になったのは後頭部に刺さった錐槍の穂先だ。赤い血が床に流れる、人間の血は触りたくない。

プリンスを背後から殺した魔族はぐるぐると喉もとで奇妙な唸りを上げたあと、奇妙なイントネーションを持つ魔族語で店内の部下たちに呼びかける。

『分隊、整列』

酒場のいたるところで“タール”になったままの部下達が一斉に人型へ形を戻す。

9人の分隊員たちが酒場の中央に集まる。
その様子に満足げに隊長格の魔族はうなづく。

『各員、身体に異常はないな？』

『良好です』

『問題ありません、隊長』

『異常ありません』

各々の言葉で返答を返してくる。隊長含め分隊員9人全員問題なしだ。

唯一気がかりだったそれを確認すると、隊長格は手首に付けた奇妙な飾りの装置に話しかける。

『こちらEイス分隊、浸透成功』

手首の飾り　妖術通信球が明滅し、司令部から言葉が届く。

『了解、粛々と作戦を遂行せよ』事務的な言葉のあとに、通信役のソーサラーが球ごしに笑うのがわかった『ああそれと十人長、落着成功の報告は君の分隊が一番のりだ、生還した暁には国王様から褒美が与えられるそうぞぞ』

その言葉を聞いて隊長格の魔族が低く笑う。

『それは素晴らしい……通信、終了』

にやけを抑え、待機する分隊員に命じる。大声で叫ぶようなことはしない。彼らは「静かな制圧」を至上目的とした兵隊なのだから。

『全スラット兵部隊落着成功　現在のところ作戦進行に支障、ありません』

誇らしさの混じる、といっても顔の下半分が蛸の触手になっている、笑みを浮べて通信球を操作していたソーサラーが報告する。それを聞いて慌しく魔族の士官たちが行き交う部屋の中央に座っていた少女がにこりと笑う。

「よろしいっ」

その一言を聞き通信役の蛸のソーサラーは顔が真っ赤になった。感激しているやら照れているやら興奮しているのだけは確かだ。

その様子を見て少女の横に控える糸目の女性　デアシュが呆れ笑いを浮かべながら注意する。

「ああほら、口から墨が垂れていますよ、ご自重なさい」
『はっ！？た、たいへん失礼しましたっ！！！』

口元から垂れる墨をぐしぐしと拭きながらソーサラーは慌てて仕事に戻る。

人間に置き換えれば鼻血みたいなものだ。

その様子に国王　チヒロはくすくすと笑い、手に持った扇子で口元を隠しながら横のデアシュに訊ねる。

珊瑚で創られた小さな冠に人間の王が着る様なガウンを羽織っている。下は白いブラウスに黒いミニスカート。異様なまでに白く長い素足がたんたんと一定の間隔でリズムを刻んでいる。

「それで？デアシュ、あの玩具は一体いつ使うつもりなの？」

「あら玩具というのは酷いではありません？プシユケが一所懸命に創った一品ですのに」

「まあいいじゃない」ペろりと唇を湿らす「あれも投下するんですよ？」

わくわくとした様子の王にデアシュはあらあらと笑うと部屋作戦室中央に浮かぶ「砂の箱庭」の前へと招く。

「砂の箱庭」は深海の砂を触媒として特定の空間の状態をリアルタイムに再現しつつづける一種の立体地図だ。

平面の地図のように文字などの情報は載せられないものの細部まで精細に立体空間を再現できることと何よりも「動き」を捉え続けることはできるのが強みだ。

人間の技術では構想はあっても未だに実現されていない魔術装置だ。

「ごらん下さい国王様

」

現在は「V作戦」の領域である“ドンテカ村”が再現されている。ドンテカは砂海の外延に沿うように横長になっており、低い平屋の建物がほとんどで2〜3階建ての建物は目立つ。村の入り口付近になるほど階層建築の建物が多くなり、逆にメルカトル大砂海側になると平屋ばかりになっていく。

主要な建物は村長のいる役場やロードスギルドの支部、療養院、衛兵詰め所だが、それらは既にスラット兵たちの迅速な浸透作戦に

より沈黙・無力化されている。

数件のある程度規模の大きい酒場　飲酒文化がない魔族たちの間では酒場は非正規戦力、つまり冒険者などが集まる場所として捉えられている　も万が一の為に制圧してある。

冒険者という奇妙な連中の中には、騎士などよりよほど強い存在が時として存在していることがある。

優先度は低いが排除の対象だ。

「村の機能をいち早く無力化し、現在は遭遇した人間を処理しながら」デアシュが「砂の箱庭」の一点を指し、ぐるっと円を描くようにしなやかな指を回す「案件Yの居住地を包囲する手筈になっております」

デアシュの指先が示した地点に、だいぶ他の建物と孤立するように立った家がある。砂で再現されたそれは屋根の修繕痕が目立つ平屋で、敷地前の柵にはランドドラゴンが繋がれている。

砂で作られたランドドラゴンは異様な気配を察知したのかマズルの長い口をぱくぱくと上下させているのが見えた。

ふーんとつまらなさそうにチヒロが相槌を打つ。それをたいして気にせずデアシュは続ける。

「包囲網が完成し次第　この中心に“スルト”を投下、戦闘を開始させます」

スラッド兵たちを象った砂の人形が家を包囲した後、大きな立像が砂で出来た家の前に立ち現れる。スラッド兵の人形に比べると一回り大きい。

それを視てチヒロが質問する。

「あら、こんな使い方でプシケは満足だって？」

「まあ彼にしてみれば一対多での情報が欲しいでしょうが、どこまで勇者に通用するか、というのもまたいい情報になるんじゃないでしょうかね」

「ふーん」

口元を扇子で隠しながらチヒロはにやりと笑う。

ほとんど思いつきではじめたような嫌がらせ作戦だったが、シチユエーションとしては充分だ。包囲する黒衣の軍隊に燃え盛る炎、戸惑う「あの子」の前に過去からの復讐者が現れる。

実に主人公らしい、救いのない終わり（バッド・エンド）のありそうな筋書きだ。

チヒロが「あの子」を見つけてからずっと描き続けてきた絵図が、完成し易くなるだろう。

いや、完成させなければいけないのだ、私は。

「……いいわ、それじゃあデアシュに任せるね」

「はい、ありがたき幸せに御座います」

出来の良いマネキンのような人間味の無い顔に上品な笑いを浮かべ、うやうやしくデアシュが跪く。

「砂の箱庭」を離れ、いつもの部屋に戻ろうとしたチヒロだったが何か思い出したように振り向き、簡単なお使いでも頼むようにデアシュに言う。

「あ、それと勇者は殺しちゃダメだけど一緒にいる女は殺しといてね」

デアシュが意外そうに片方の眉をあげる。

「あら、いいのですか？」

「うんいいよ、別にアレは私にはいらなしい　興味も、ないからね」

そう「害虫が迷惑だ」くらいの軽さで言い切ったチヒロだが、その黒々しい瞳の奥底には嫉妬、あるいは羨望に近い感情がちりちりと小さく燃えている。

糸目の女　デアシュは主人のその感情を把握したが、わざわざ触れることはしない。

それに、一見気さくに見える我が王さまの奥底には深海の怪物にも見劣りしないほど醜く、グロテスクな「何か」が潜んでいるのだから。

そのあぎとに自ら踏み込むような真似をとるのは愚かというものだ。

（どちらにせよ、わたくしには理解が及びませんわね）

「御心のままに、国王様」

デアシュは頭を垂れ、スカートの裾を摘む。

黒いドレスがふさ、と音を立てて広がる。

その姿は黒を基調とした床と相まって怖気がするほど調和していた。

高貴なものから神聖なものへの、優雅な臣下の礼、形は違えど人と魔族に大きな違いはない。

王と従者、神と巫女、将と兵、臣と官、官と民。

意思を持つ存在である限り権威とは存在し、権威が階級を創り上げる。

しかし魔族もまた同じように、その権威に対して心のままに頭を垂れているかはその本人しかわからない。

うやうやしく頭を垂れたデアシュの唇が綺麗に下弦の月を描く。

糸のように細い瞳からは、なんの感情も読み取れない。

天候：晴れ 8月24日
12時10分 ドンナーの助けは期待できない時間帯
ドンテカ中心の高級宿『テレーゼ』

「……？」

すぐに部屋に帰る気にもなれずぼう、とフリードの寝顔をみながら過ごしていたルビイは奇妙な感覚に襲われた。

よく身に覚えのある感覚だ。身体の中に氷で出来た刃を入れられたような 危険な感触。敵対者の不意打ちの刃を危機一髪で避けたときや、勇者の不必要なまでに 強力な斬撃を不安定な姿勢で受けたとき。死の気配を孕んだ「何か」に遭遇したときこんな感覚をルビイの身体は知覚する。

がたん、と椅子から立ち、窓の方に向かおうとして 背後から呼び止められる。

「窓の側によるのは、やめておいたほうがいいですよ“アンテローズの赤薔薇”さん」

「！？」

眠っているものだとばかり思っていたスコルピオが上体を起こし、手首を揉んでいる。

見解が正しければルビイがこの部屋に入り、ベットのすぐ側に座ったルビイに気づかれることなく縄を解いたことになる。

ぼうつとしていたことは認めるが、平時なら1000ラウン先の鳥の羽ばたきを察知することの出来る自分の横でそれを成し遂げたのだから悔れない。

微妙に得意げな顔をしているのがむかついた。

「さすが密偵、といったところか？」

「ま、これでオマンマ食べてますからね　と、狸寝入りもそろそろ疲れたんじゃないやありませんか？騎士フリード」

「……なんで今このタイミングで言つのさ？」

「なっ！？フ、フリード？」

「……おはようございますママ」

慌ててルビィが振り返るとどこか困ったような表情でフリード座っている。眠たげな感じは一片もなく、つまり眠っていないかった様子だ。

それを認識してルビィの脳裏で部屋に入ってから自分の動作が鮮明に呼び起こされる。顔がかああ、と熱くなるのを感じた。

よくよく考えてみれば、自分が今のいままでしてた行動はとんでもなく恥ずかしいものだったんじゃないのか？

1人で悩み、納得し、人の部屋に押しかけた拳句テーブルの対面に座ってじつ、と10分以上幼馴染の顔を悩ましげに見つめつづける。

自分がとんでもなく、こう、オトメちつくな動きをしていたことに戦慄する。

変な汗が首まで赤くしたルビィの顔をだらだらと流れていく。

こんなときの対処法は　きつとひとつしかない。

「ちょ、ル、ルビィ？たしかに10分以上顔を見つめられるのは身動きとれなくて辛いなあー、と思ったけど別に悪い気分じゃ、いやむしろ顔が近づいたときにいい匂いが」

目の前のフリードの戯言は聞かずつかつかと歩み寄る。そして親子のような体格差を完全に無視して胸倉を掴むとがっくんがっくんと揺する。

「痛っ、ちょ、ぐえっ、ルビィ、首当て締まってる、絞首刑のロープより絞まってるうっう」

震える声でルビィは言う。顔は俯いているが林檎のように真っ赤

だ。

「い、いい、いいかフリード、おまえは今の今まで寝ていたな？」

「いや、そんな恥ずかしがらなくても」

「おまえは寝ていたな？」

「ちよ、窒息というより首の骨のほうがしんぱ」

「寝・て・い・た・な？」

おもちゃの人形のように、危険な角度でがつくんがつくんとフリードの首が激しく揺れる。

うわあ、と1人蚊帳の外のスコルピオが半笑いで後ずさる。

「は、い……ね、ねでした……」

「発言のあとにママをつける騎士フリード」

「ね、ねてましたママ！」

「宜しい　おまえは、ね、寝ていたし私はここで密偵の監視をしていた、それで間違いないな！？」

「間違いないですママ！」

どさ、とフリードが解放される。ルビイははあふう、と荒い息をつき、背後に引きながら佇むスコルピオにぎしりと音を立てながら振り向く。

「密偵……貴様もわかつているな？」

異様なプレッシャーに押され、慌ててスコルピオが首を縦に振る。

「も、もちろんですともアンテローズ、それよりもこの“異常な気配”に対処することで先決ですよね！」

弛緩しきった場の空気がようやくシリアスな雰囲気を取り戻す。

ルビイは腕を組み、鋭い視線でスコルピオに再度訊ねる。

「それで？」夜の暗闇だけが見える窓に眼を向ける「窓に近づいていけないワケはなんだ？狙撃手にでも狙われるか？」

「いいえ、違いますよ　強いていえばもつと性質が悪いものがこの村にやってきた、と僕の霊感が告げています」

エルムトの魔法使いたちは魔術の上位系である「魔法」を操る以外にも様々なスキルを持っている。スコルピオの言う「靈感」もうさんくさい加持祈祷の出鱈目の言葉ではなく、エルムト内で確立された知覚能力のひとつだ。空気中のマナの流れを行き交う精霊の力を借り、隠蔽された秘密や遠く離れた場所の遠視、ごく近い未来ならば予測することすら出来る。

しかし多大な精神力とマナを消費することがデメリットとして問題視されている。

「あなたが窓に近づいたその瞬間、何者かがこの部屋に人間が居ることを察知するのが視えた」胡散臭げな笑みもなく、淡々と少年は告げる「この部屋の明かりが微弱であるのが幸運でした、彼らは強い光しか認識できないようです」

「彼ら？」ルビイが形のいい眉を寄せる「彼らとはなんだ？」

「その前にそろそろ僕の商売道具を返してもらっても？丸腰だとはり落ち着きません」

フリードが判断を仰ぐようにルビイに目配せする。まだ顔が熱いルビイであったが、気合でそれを無視して「返してやれ」と指で指示する。

スコルピオの杖と短剣。蔵書^{ビブリオ}が床の上を滑る　ほっ、と屈んでそれをキャッチするとスコルピオは手早く短剣を腰に差し、杖を右手にビブリオを左手に持つ。

狙いを定める魔法杖と魔法の供給源となるビブリオ。魔法使いの基本的なスタイルだ。

「彼ら、という言い方をしましたがそれは僕にも詳しくはわかりません。僕の靈感は彼らの視界を覗きみる形で機能したので、正体については何も」

「そうか……」

まだこの密偵の少年については完全な信頼は出来ないものの、今の村を取り巻く“異様な気配”に対処するのに魔法使いは有用だ。感覚から察した印象でしかないがこの気配を発する存在は強敵だ。凡百の人間やモンスターが出せるようなものではありえない。明確な悪意と隠し切れない禍々しさを撒き散らす存在。

それはもしかすると

窓の外から、先程よりも近い距離で気配を察知した。

ルビイの感覚が正しければ60ラウンの距離。この建物の外壁のすぐ側を「異様な気配」が移動している。

鋭敏な感覚を持つフリードと「靈感」持ちのスコルピオもルビイと同じく気配を察知し、何よりも早く窓から見えないように、遮蔽物へと身を隠す。ルビイとフリードはテーブルと椅子の影に身を縮め、スコルピオはベッドの脇に伏せる。

ずるずるずる……

粘性を持つ何かが這いずるような音が薄暗い部屋の中に響く。息を吐くことすら放棄し、とにかく宿の外壁を這いずる「それ」に見つかからないことだけを考える。

指示したわけでもないのにフリードとスコルピオも同様に気配を殺すことに専念しているのを感じた。

部屋に差し込む月明かりが奇妙なシルエットに遮られる。

その形を形容するのは難しかった。モンスターのスライムが一番近いだろうか、不定形の液体のような塊が、意思をもって収縮しながら動いている。しかしスライムにしてはあまりにもそれは大きすぎる。

息を潜めながらも、ルビイは何とかして「それ」の正体を探ろうとゆつくりと、爬虫類が獲物に忍び寄るほどの緩慢さでテーブルの陰から頭を出す。

「……！」

気をしっかりと保っていなければ悲鳴をあげていただろう。「それ」の姿を視た瞬間、魂を鷲掴みにされるような恐怖を感じた。

スライム、という形容は当たりだ。液体状の生物がちょうど窓の上を通過するのをルビイは視た。しかしスライムの緑色や青色などとは違いその色は黒。てらてらと不愉快な光沢を持ち、それでいて月の明かりを半透明な身体が通り抜けていた。

なによりもルビイが恐怖を感じたのは「それ」の眼。眼だと理解できたのはそれが人間の眼球のごとくぎよるぎよると部屋の中を見回しているような気がしたからだ。

幸いルビイと2人に気づくことなくこの部屋を「無人」と判断したようだが、もしこちらの気配を察知され、窓から侵入されるようなことがあればまともな精神状態で戦えたかどうか定かではない。しかしこの観察には価値があった。正体についてはもう確信もてる。

（こいつらは魔族、それも木っ端じゃない上位階級のヤツらだ）

かつて騎士学校で習った「魔族学」の座学が蘇える。題材に反して退屈な授業だったが、真面目に授業を受けていた自分に感謝した。

（上位の魔族になればなるほど海の生物とのユウゴウが少なくなり、最上位になればもうほとんど人間の姿と判別がつかなくなる。また、上位に数えられる魔族の中には自分の形態を海の生物というくくり

に囚われることなく自由に变化させることが可能となのもいる)

だいたい要約すればそんな内容だったはずだ。

窓の外の気配が薄まったことを確認して、3人は安堵と共に息を吐く。

そして小声で 無意識にそうならざるおえない。今のことについて話あう。

「……今の、わかったか？」

「十中八九、魔族でしょうね」スコルピオが汗をぬぐい、力なく笑う「しかし勇敢だ、僕ではアレを直視していたら悲鳴をあげていたかもしれない」

「何故、魔族がこんなところに」

フリードもまた高い鼻筋を流れる汗を拭いながら疑問の声をあげる。

「奴らは、滅んだはずじゃ」

フリードの腕がぶるぶると震えているのが見えた。ルビィは彼の肩に手をかけ、落ち着かせる。

西部の前線に兵士として参加したフリードは魔族の恐ろしさを一度体験している。だからこそこの3人の中でもっとも精神的な動揺が強い。

「落ち着け、フリード……とにかく、こうしてはいられない。勇者と合流しよう」

「そうですね 彼らが何故ココにいて、滅びもせず存在しているかという議論は置いていてもユノ・ユビキタスが彼らの目的である可能性は高い」

復讐。そんな二文字がルビィの脳裏に浮かんた。

ユノ・ユビキタスは人から忌み嫌われ、復讐の対象とされる存在であるがそれは魔族にとっても、いや、魔族のほうに「自然」な対

象だ。

なんせ勇者は魔族を殺し、その王を倒す為にこの世界にやってくる。人の同程度の知性があるのであればユノ・ユビキタスもまた奴らにとって「悪魔」だ。

「裏切り者」であり「悪魔」

自分も姉を殺され、いつか命を奪うと誓った復讐者なのに、ルビイは何故だかあのいけ好かない、無愛想な勇者がひどく哀れに思えた。

幸運に恵まれたのかこの宿を魔族は素通りしていったらしい。廊下に出て警戒しながら自分の部屋へと装備を取りにいったルビイだったが、人間にも魔族にも遭遇することなく目的を達成することが出来た。

人間に関してはもともとこの宿の宿泊客が少ないの和其他の泊り客が懸命　ルビイたちと同じようにベットの下などに隠れとにかく息を潜めているらしい。

とんとん、とためしに手ごろな部屋の扉をノックしてみたルビイだったが「ひっ！」とか「見つかるだろ！？ほっといてくれ」とか怯えに怯えた声ばかりが返ってくるだけだった。

軟弱者め、と毒づいたルビイだったが、ルビイは騎士で彼らは民だ。守る者と守られる者ではその意識は違うだろうと思ひ直した。

薔薇の紋章が入った“アンテローズの双剣”を確かめるように振る。くるとルビイの手の中で踊った対の刃は、薄暗い照明の中でも頼もしく自己を主張している。

刃に感情はない、恐れなど感じず、その鋭さは鈍ることはない。

ルビイは203号室に戻ると準備を整えた2人に声を掛ける。

「待たせたな、準備は？」

スコルピオは変わらずタクト状の杖とビブリオを持ち、窓の外を見ながら頷く。飄々とした視線には警戒は感じたが恐怖は見られない。

この密偵の魔法使いの力は未知数だが、あの恐るべきバケモノと相対する際には不可欠だ。今回に関しては全幅の信頼で背中を預けなければなるまい。

フリードも大丈夫そうだった。魔族にたいしての恐れはあってもそれが混乱に繋がるような感じはなく、固い表情ながらもいつでも腰のピストルを抜き放てるように体勢を整えている。人間らしくないとか、そんなルビイの勝手な葛藤は今では忘れておく。

ルビイはすうつ、と息を吸い、静かに今後の目標を確認する。

「わたしたちがやるべきことは2つ。1つは出来る限りドンテカの民を助けること。中立村の人間といえどそれに関しては変わらない。2つは勇者との合流。勇者自体は大丈夫だろうがあのハーフリーザードの女は心配だ。勇者の支援と彼女の護衛。それでいいな？」

「ランバルディア騎士団への支援要請は？」フリードが質問する。「事態を大きくすべきではないだろうけど、正直ボクたちだけではこの村の平穏を取り戻すのは無理だ」

「それは優先しない、もうこの騒ぎがはじまって30分以上たったが村は静かなままだ、村の人間の騒ぎ立てすら聞こえないとなるとこの村は包囲され、連絡手段も使えない可能性が高い」

そう、村が静か過ぎるのが気がかりだ。こんな異様な気配を放つ魔族が闊歩しているのに村が混乱に陥っていないのはおかしい。村人と旅行者は叫びながら逃げ惑い、馬は嘶き、冒険者や荒くれどもが戦ったり火事場泥棒していてもおかしくないというのに。

その理由は魔族たちの目的がこの村を「静かに滅ぼす」ことだったとしたら？

この静けさの理由としてじっくりくる。可能なかわからないが奴らは村の人間全員を静かに皆殺しにし、誰にも知られることなくドンテカを占領する気なのだろう。

そしてここを拠点としてじわじわとケイブリス、そして東部へと侵攻していく……。

（そんなコト、許すわけにはいかないな）

「多少のリスクはありますが、魔法による信号を使ってみては？」
スコルピオが提案する。

「僕の魔法のひとつにライトボールという強い光を打ち出すものがあります、それを空に向かって打ち上げ続けて異常を伝えましょう　ランバルディアのワイバーンライダーズかエルムトのウィッチ飛行隊が確認に来てくれるかも知れません。」

ふむ、とルビィは思考し、いい手段だとあたりをつける。魔族をおびき寄せる危険性を大きいが救援の手がくる可能性もゼロからプラスになる。やらないよりはマシだろう。

「なるほど、それも目標に入れよう　そのライトボールは地上からでも届くか？」

「いえ、やはり飛距離的には高い建物に昇ってから撃った方が確実に届きます」そこでエルムトの魔法使いは申し訳ないといった表情をした「本来ならばテレパシーなどで仲間に連絡もとれるのですが、今はそのビブリオを持っています……申し訳ない」

魔法というのは強力だが、ひとつ大きな制約がある。それは魔法

を使用するには対応するビブリオがなければいけないことと、どれだけしっかり暗記していようと使用していくことに忘却がされていくことだ。

その理由は「魔法」という力はもともとは「神」の奇跡を無理やり人間用にダウンサイズしたもの。その為、魔法の使用で消費されるマナは人間にとって払いきれない対価ではなく、数刻と立たないうちに木乃伊と化してしまうのだ。

その大きな対価を軽減することが出来るのが「忘却」だ。全てのビブリオに組み込まれたそれは魔法の発動時に詠唱者の頭の中にある魔法に関する記憶を消去していく。消去した分のマナは詠唱者からは支払われずにすむ、といった仕組みだ。

習熟すれば簡単な魔法であれば自分の手足のように使うことも可能だろうが、常の魔法使いは基本的に数十回も魔法を唱えればもう一度ビブリオを読み直さなければならぬ。

「まあ、仕方ない　では手ごころな建物を見つけたらそこでらいとぼーる？を上げる、そういうことにしよう」

微妙に怪しい発音でルビィが作戦案をまとめる。

「異論ないです」

スコルピオが気合充分、といった感じで頷く。

「……大丈夫、行こうルビィ」

少し顔の青いフリードが頷く。

「よし、それでは行こう………仕事のはじまりだ」

ブイ・フォー・ヴェンデッタ？

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月24日

12時40分

ドンテカ村内

魔族の襲撃に晒される砂漠の村の中を、ルビイたち3人は駆けていく。

劣勢の者達が執る一般的な手段として 静かに、音を立てないように、発見されないように、しかし決して緩慢にならず駆けていく。大きな通りは避け、建物の外壁に貼りつきながら村の中心を指す。騎士と密偵の3人のコンビはさながら熟練したアサッシンようだ。

小柄で足音を消す術に長けたルビイが先行し、危険か安全かの判断を行う。その次に気配を消すことに長け、いつでも魔法を行使できるようにしたスコルピオがカバーする。最後尾は重層鎧に身を固め、中距離に強力な攻撃手段を持つフリード。役割は万が一のときの退路の確保だ。

宿と酒場の僅かな隙間に身を潜めたルビイは慎重に姿勢を低く、大通りの様子を伺う。

村の入り口から続く大通りは凄惨な様相を極めていた。夕刻ごろにユノと共に通った通りだ。

一見して静かに寝静まっているようにみえるが、ばらばらに壊れた木組みの屋台や横倒しになった馬車。首輪と紐だけが残された犬

小屋。扉が開いたままになっている酒場や、宿の窓から何かを引きずったとおぼしき黒い痕　血痕が夥しく残っている。

そのくせ目立つ場所に人間の亡骸が一切転がっていないのがひどく不気味だ。

（死体を処分しているのか？騒がれないように？）

少数が大勢警備のいる敵地に潜入し、邪魔な敵を殺したあとに発覚させない為に死体を処分することはある。しかし、襲撃した魔族たちは大通りの様子からみても大きな、統率のとれた集団だ。チームワークのある集団が、夜陰に乗じてたいして兵士も駐留してないような村を制圧するのに死体を処分する必要性は薄いはずだ。

そもそもこのドンテカは主要国から離れた中立村。もしも運のいい誰かがケイブリスに逃げ込み事態を知らせたとしてもまとまった数　まともに魔族を滅ぼせるだけの集団が救援に来るのは早くて明朝だろう。

つまり、村を襲撃している魔族にとってここは「狩場」であるはずだ。どれだけ騒がれようが抵抗されようが全て滅ぼしてしまえば気づかれる要素さえない。

（ただ単に几帳面なだけか　それとも別の意図があるか）

敵に几帳面もおかしいなと、苦笑しながら後衛のスコルピオとフリードと呼ばうとしたその時、ルビィのから見て正面の大通りを挟んだ建物、ロードスギルドの支部から黒い人影が出てくる。

人より一回り大きい、ルビィは慌てて背後の2人に静止、警戒の合図を送る。

3人はそのときようやく　襲撃してきた魔族の姿をはっきりと見た。

ルビイの印象として、それは“兵士”だと思った。人より一回り大きい体躯に猿のように長い腕。大きく膨らんだ太股にはひとめで筋肉が詰まっているとわかる。対照的に足は鳥のように細かった。

装備は「魔族学」の教本の挿絵でみた“隊伍を組む魔族軍兵士”よりかなり軽装だ。魚鱗のような板金の胸甲鎧に、穂先が螺旋状になった奇妙な黒槍。もっとも奇妙に映ったのが二枚の内側に反り返った板を組み合わせたような兜だ。バシネットに似ているが、頭为天辺にあたる部分は保護されておらず、先程窓の外を這いずっていたのと同じ光沢と透明感をもつ黒い塊が覗いている。目にあたる部分の覗き穴は6つ。

その奥から人間ではありえない大きさの、黄色く発光する瞳が覗いている。

その瞳を視たとき、やはり恐怖が心の底から湧きあがってくるのを感じた。

説明不可能の原始的な恐怖。

チエスならばポーンに値する“兵士”でさえ足が竦むような重圧を感じる。

人間の脅威 魔族。

（姉さまは、勇者は、こんなモノと闘っていたのか……！）

“兵士”は周囲を警戒するように見回したあと、穴ぼこだらけになった人間の亡骸を引きずって出てくる。ギルドの制服姿、女性だ。顔は絶叫の形でゆがみ、光のない目がルビイをじっと視ているように思えた。

魔族への怒りと手のだしようがないことに憤りを感じながらも、ルビイは「兵士」の観察を続ける。

“兵士”は単独のようだった。

ギルドの女性職員の亡骸を引きずりながら、大通りを奥に村の中

心に向かつて歩いていく。血が砂まじりの土と混じっていいようのない不快さを放つ黒い筋として残る。よくよく見れば宿の窓や酒場の扉から続く血の線も村の中心へと続いているようだった。

「死体を集めて、何をしているんでしょうアレは」

スコルピオがルビイの横に並びながら疑問に首を傾げる。最後尾を固めるフリードが腰の剣とピストルを保持しながら声を低く呟く。「村の中心にあるのは……役場だね、この村で一番大きい建物のはずだよ」

「そこを死体置き場のかわりにでもしてるのか？クソ、救援を呼ぶのが難しくなるな」

スコルピオの提案したライトボールでの連絡には高い建物が必要だった。屋上のある4階以上の建物。平屋の多いドンテカでは該当する建物は尖塔のある役場か、監視塔のある衛兵詰め所のみだ。

しかしこの魔族が軍団で、知能の高く統率のとれた精鋭兵となると 既に衛兵詰め所は制圧されている可能性が高い。よって少しでも遭遇する危険性が低い役場を目指していた。

吐き気やら怒りやらを意図的に無視してルビイは冷静を保つ。意識してそうしていないと、胃の中身をぶち撒けそうな気分の悪さだった。

死者は、たとえ生前がどんな悪人であっても安らかに葬られるべきだ。生前と変わらぬ姿に整え、ドンナーの元へ上がる際にも恥ずかしくないように正装し棺桶に入れられるべきだ。死者を辱めるような行いをルビイの感情は許すことが出来ない。

一矢を 報いるべきだ。

どこか気だるげに女の亡骸を引きずる「兵士」の背中を見つめ“アンテロースの赤薔薇”は口を歪めるように嗤う。

ルビイの「冷静」はそう長く続いたためしがない。

「密偵、何か魔法による加護を、フリードは発砲を控えて私についてこい」

「加護といっても色々ありますが……何をするつもりで？」

明らかにわかっている口調で怪しげな笑みを浮べてスコルピオが尋ねる。

「決まっている、アイツを殺る」

「馬鹿な！ルビィ、考え直してくれ……魔族は人間より遥かに強大だ！ボクたち3人程度じゃないっこない。戦闘は避けるべきだ！」「かつ！と音を立てて石造りの壁が粉塵を上げる。フリードの一言にルビィが拳を叩きつけたのだ。

「臆病者！」

ルビィは静かに、しかし確かな怒りを籠めてフリードを叱咤する。突然の剣幕に黙ったフリードにルビィは赫怒を滾らせる。

「いいかフリード、わたしたちは騎士だ。主君に忠誠を誓い、弱きを助け悪しきを罰する。その勤めは神聖で、どれだけ国が腐敗しようが大貴族どもが肥太ったブタだろーが関係ない。“それだけ”はなにものにも犯されず、そして“それだけ”しか私たちに意義はない！」

齢15の少女騎士は朗々と語る。静かに、鋭い刃のような静謐さを籠めて。

それは前時代的で、暴論で、理想論だった。

騎士はたしかに誇り高いものだ。王に、領主に仕え忠誠を誓い、弱くあわれな民の為に命を懸けて剣を振るう。

しかし全ての騎士がそんな崇高な使命を守ってるわけもない。身持ちを崩し盗賊行為に走るものもいる。商人や大貴族に飼われ、領民を脅すものもいる。民がモンスターや賊に脅かされているというのに自分の城に籠って遊興にふけるものもいる。権力と富は人を容易に変える。

彼らが“意義”を放棄したのは、地位と金を得て守るべきものが増えてしまったからだ。

自分の領主。自分の領地。自分の家族。自分の領民。自分の命。得たものがあり過ぎて、結果として弱くなり、傷つくことを恐がるようになったのだ。

しかし騎士としての誇りがあるから　それを満たすために権威は振るう。

それがランバルディアの騎士の实情。

しかしそんな現実やしがらみをばっさりと切り捨てて　ルビイは理想を語った。

理想的な、古臭い騎士の姿を、ここにいるべき騎士の姿を。

弱きものを助け、悪しきものを挫く。それだけの存在。

姫を助けるために、たった一人で悪いドラゴンをやっつける童話の中の勇者。

「民を守る。それだけしか意義のない私たちがこの場にいて、なんでビクビクしている必要がある？ 遥かに強大？ 敵わない？ 関係あるものか！」

ルビイは2人に背を向けたまま、腰に交差するように差したシヨ―テルを引き抜く。

薔薇の紋様が刻まれた刀身が月明かりにわずかに煌く。

「それにつ」

その小さな背中とは異様なまでサマになっていた。

「敵う、敵わないなんて、結果が決めるものだ」

「本気、なのか」

フリードがひどく眩しいものでも視たように目を細め、問いかける。

それにルビィはにやりと、素敵な笑顔で答えた。

「もう分かっているだろう？ 私はいつだって本気だ」

右手のショーテルを逆手に持ち替え、静かに、砂を踏みしめる音すらさせず大通りへと出る。

（貴様らが勇者へ復讐するというのなら　私は殺された民の想いを代弁してやる）

（いいね、イカレてる、僕好みだね）

紅顔の美少年　そう形容されてもおかしくない相貌に、どうしようもなく胡散臭げな笑みをスコルピオは浮べた。

アンテローズ家の少女騎士。ルビィの主張はやはりどれだけサマになっていようと感情的な暴論だ。稚拙と言ってもいい。なんの論拠も持たない主張は、子供が駄々をこねているのと変わらない。

しかし生まれてからこのかた享樂的に生きてきたスコルピオにと

って、そっちの方が好みだ。自分には「もの」は好ましい。

それにエルムトの実践派魔法使いとしては、どれだけ自分の魔法が魔族に対して通用するのか、というのはなかなか得ようのない命題だ。

故郷を長く離れていようと、なかなか魔法使いの根幹にある「知識の探求」を忘れることはできない。

そもそも密偵という後ろ暗い職業になったのも外の世界への興味からだ。

自由は、いや、縛られていないということは素晴らしいことだ。

音もなく先陣を切るルビイとその横をカバーするフリードの背後につきながら、スコルピオは「魔法」を唱える。要求されたモノとは違うがなかなか役に立つはずだ。

「エクスリブリス・コルタナ五編断章。アイアンヴァイト」

聴覚が鋭敏なのか “兵士” がこちらを振り向くのが視えた。

肝が冷える。

汗が噴き出る。しかも魔法は唱えられ、2人の騎士は剣が充分に届く距離まで呐喊している。

「@<O!!!??」

異様な魔族語の悲鳴が上がる。それはきつと驚愕と鋭い痛みを感じてだろう。

アイアンヴァイトは奇書「コルタナシリーズ」の中でも相当エグイ部類に入る魔法だ。本来なら尋問などの目的に使われるそれは

両肩、両腕、両足の位置に鋼鉄のトラバサミが突如として現れ、瞬きを許す暇もなく、容赦なく「顎を閉じる」

魔法で創られたトラバサミはちよつとやそつとの力ではビクともしず、マナを用いて空間に固定しているので動かすことも出来ない。不意打ちという条件下で、反撃も許さないという状況になるとこれ以上なくイイ魔法だ。

「なかなか面白い魔法だ！褒めてやる密偵！」

猫のように伸びやかに、ルビイが跳躍する。なんの魔法も使っていないというのに助走だけで20ラウン近い“兵士”の頭上を越えた。

狙うは魚鱗の鎧とバシネットに似た兜の隙間　生物ならば急所の集合点である首だ。

（固い！？）

首を狙った一撃は大成功だ。振り向いた“兵士”の首の中心に寸分たがわずショーターの刃が突き刺さる。しかし予想外に固い手ごたえがあった。筋肉（あるか知らないが）が人間より遙かに発達しているのかもしれない。

蒼い血が夥しく溢れる　しかし、死なない。痛みと怒りに身を悶えさせ、今にも拘束を破りそうな勢いだ。

ルビイはくう、と呻きながらぎりぎり刃を深く食い込ませる。気を抜けば刃が滑り落ちそうになる。このまま両断すればさすがに即死するだろう。右手のショーターを“兵士”の肩に突き刺し、振り向きかけの背中にルビイが張り付く形になる。首の半分まで刺さった左のショーター。肩に刺さった右手のショーター。足場は“兵士”の背中と固定されたトラバサミの上だ。

「~~~~~
× *!!!!!!」

絶叫を“兵士”があげる。四体がトラバサミで拘束されているとはいえ身体を振ることは出来る。ルビイは振り落とされそうになる。そこにフリードがロングソードを振るいながら肉薄する。狙うはこの“兵士”の得物らしい錐状の槍。武器を落とせば反撃されたときのリスクが低くなる。

と、フリードの一撃が“兵士”の手首に触れるか触れないかしたとき、突如として“兵士”に急激な変化が現れる。

「ヤバイ！2人とも早く離れて！！」

スコルピオが叫ぶ。「靈感」が危険を告げていた。
変化は急激だ。

「くっ！？」

「うわぁっ！」

筋肉隆々の“兵士”がまるで高温で溶ける硝子のように 液体
状の塊へと姿を変える。

拘束されていた四体は、糸を引きながら黒い粘液となってトラバサミから逃れる。スコルピオはチツと舌打ちし、有効な手段を模索する。

滴る油のように大地に落ちた塊は宿の外壁で視たスライムのようなものと同じだ。

変形能力を持った魔族。

唐突に足場を失ったルビイが落下する。しかし頭から落ちる真似はせず、落下しながらも上体を後ろにぐんと逸らせ、空中に固定さ

れたトラバサミを蹴って一回転し、体勢を崩すことなく着地する。
そして間髪入れず後ろへ跳躍する。そうしてなければ塊から飛び
出た黒い触手のようなものに拘束されていた。

「っ！？フリード！！！」

重層の鎧を着込み、速さに劣るフリードは捕まった。黒い鎧に包
まれた腕と腰に触手が絡みつく。鎧がぎしぎしとへこんでいくのが
判る。ばきん、と装甲のどこかが音を立てて割れた。
姿勢を低くし歯を食いしばってなんとか引き摺られるまいとフリー
ドは耐える。

そうしているうちに嘲るような魔族語の声と共に塊から新たに数
本の触手が生える。嘲笑うように、フリードの顔のすぐそばで静止
した触手は、みるみるうちにその先端を硬質化させ、あの錐状の槍
に似た形をとる。

（武器を狙ったのは 無意味だったか）

ルビィが叫ぶのが聞こえる。冷静さを失っている。今この瞬間、
騒ぎを察知されることはとても致命的なのに。

フリードは冷静に、きしむ身体と頬に当たる槍の穂先の感触を無
視してじっ、と塊を観察する。

そう、恐怖などしている暇はない。あの地獄のような戦場でもつ
とも大切なだったことは「恐れない」ことだった。恐れは、判断を
鈍らせる。踵をかえして逃げていったものから死の舞踏に加わって
いった。

だから、フリードは「仮面」を被る。

恐怖など感じない心が欲しい。氷のように揺らぎのない心が欲し

うに土の壁に身体を預け、眠りこけている。

魔術の光を封じ込めたランプが、男のぎらぎらとした異様な眼を照らし出している。

“ いいか？気は確かか？しっかりと耳の穴がっばじってよく聞けよ同志ヴァイセン。俺あ今日の夜にはあのクソったれ共と心中にいかなきゃならん。だからこうして貴様のケツを叩けるのもこれが最後だ”

記憶の中で 同じ義勇兵の制服に身を包んだフリードが頷く。
目の前の男と同じように栄養失調でやせ衰えているが、眼だけは異様な光を放っている。

“ 魔族どもは恐ろしいな？俺ら人間様と同じくらいいい頭を持っていた、そのくせ肉体は強靱極まりない。そりゃあ普段棲んでる場所が海の底だ。知ってるか？海の底ってえのはすごく「重い」んだ。人間じゃあ動くことすらままならない。そりゃあ強くなるってもんだでもな”

男が自分の眼の上をとんとんと叩く。

にやにやと笑うその男の名前を、フリードは思い出せなかった。
新兵同然で戦場に送られたフリードの世話を焼いてくれた男。

“ 俺にああ小難しい理論はわからんが、奴らにはどうしようもねえ急所があるんだ。勇者のお一人、ケンヤ様が発見されたいが…

・光だ。ヤツラの身体にある「光る部分」を探して狙え、そこがヤツラの心の臓 潰せば確実に死ぬ。それさえわかってりゃ、ヤツラを殺すか、殺されるかの対等な立場まで引き摺り降ろせる”

がしゃ、がしゃ、と奇妙な光沢を持つ金属で造られた鎧を鳴らしながら、騎士達が塹壕の入り口から入ってくる。疲弊した雰囲気が漂う塹壕の中でその集団 エインヘリヤルたちはひととき異彩を放っている。そのなかの1人が懷から巻物を取り出し、大声で兵士の名前を読み上げる。彼らと共に“死にゆく”兵士たちの召集だ、拒否権は当然ない。

名前を呼ばれた兵士が1人また1人と疲労した体を引き摺って戦列に加わっていく。

しばらくフリードと義勇兵の男はその様子をじっと見ていたが、ある名前が呼ばれたとき、男が諦観の色を滲ませて笑う 呼ばれたのだ。

“じゃあな、同志 今の教え、ゆめゆめ忘れるなよ”

フリードの意識が4年前の戦場から、現在まで巻き戻る。

半透明の塊の中に、子供の頭ほどの大きさの眼球がある。黄色く発光している。 はっきりとフリードを視ていると認識できる。心臓が凍りつくような禍々しさを「仮面」で無視する。

（眼球 光ってる、な）

周囲の全てを無視しながら、フリードは腰のホルスターに手を伸

ばす。時間がゆっくりになっているのを感じた。1秒が1分に。

（試す価値は、あるな）

かちり、と撃鉄を親指で降ろし、弾層が回る。

震える手を気合で抑え、ピストルを塊の眼球に向ける　ぶよぶよとした塊の膜に突き破るような勢いで銃口を押しつける。眼球が虚ろな銃口を凝視し、瞳孔が窄まる。

「喰らえ……！」

どん、どん、どん、と重い銃声がたて続けに鳴った。押しつけて放たれたその音は遠くまでは響かない。

黒っぽい液体に阻まれて弾道は見えなかったが、眼球が大きく痙攣するのをフリードは視た。

触手の拘束が急に弱まり、フリードは後ろに倒れる。

それと共に身体が後ろに引っ張られるのを感じた。

ずっと背後の誰か　ルビィが触手と引き離そうとしていてくれたらしい。

「っフリード！大丈夫か！？」

顔を覗き込まれる。息がかかるほどの距離にルビィの顔があった。大きな蒼い瞳が不安に揺れている。顔はくしゃくしゃに、なりふり構わない様子だ。

「仮面」が脱げる　それまで無視していた痛みがまとめてやってきた。

それでもなんとかいつものように笑みを作る。

「ボクは大丈夫っ、あいつは」

「殺ったみたいですよ、騎士フリード」

痛みに明滅する視界の中、スコルピオが屈んで塊に触る。

あぶない、と警告しようと思ったが塊の半透明の液体が青黒く濁っているのをみてフリードは全身を弛緩させた。あれは血だ。魔族の血は蒼い。

つんつんとスコルピオが指でつつくがもう塊は動かない。

「……死んでるみたいですね、目を潰せば死ぬ、と」

「眼、じゃない。ヤツラは光ってる部分が弱点なんだ」

「フリード！……やるじゃないか！立てるか？」

嬉しそうなルビィにばしばしと肩を叩かれてフリードは間抜けな悲鳴をあげた。

狙ってるんじゃないかと思うくらいの確に痛いポイントを突いてきた。

「痛たたたた！やめっ、そこが特に痛い！」

「痛みを感じるなら大丈夫だなっ」

なんとかルビィに肩を貸されながらフリードは立ち上がる。少しくらくらするが骨も折れてないし、出血もない。

かなり痛むが致命的なダメージはない。

フリードが痛みを堪えていることに気づいたのか、ルビィがばつの悪い顔をする。

「……見通しが甘かった、すまない」

それを聞いてフリードは笑う。ルビィが謝るなんて珍しいことだ。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月24日

2時15分

ドンテカ村内

他の魔族との遭遇を恐れて早々にその場を退避した3人は目標の建物 村役場がすぐ視える距離まで来ていた。

そこにいくまでにいくつかの“兵士”の集団を遣り過ぎた。予想通り統率のとれた集団。リーダー格とそれに従う数匹で構成された軍団だ。

鍛え抜かれたランバルディアの正規兵たちには劣るだろうが、人の魔族のポテンシャルの違いを考えると明らかな脅威だ。どうやら10単位で固まって動いているらしい 人間の軍隊と同じ単位。分隊だ。

魔族はルビイたちが仲間を殺したことをなんらかの手段で察知したようだ。かなり危ないところまで追い詰められた。

しかしなんとかルビイたちは一度も捕捉されることなく、生き延びている。

ルビイたちはこの1時間で、持てる技術と一生分の運の良さを使っただろう この魔族、通称“兵士”は知能は高いものの、視力は良くないらしい。

特に液体状に変化した状態。通称“ブヨブヨ”になると顕著だ。頭上のすぐ上を這いずる“ブヨブヨ”にルビイは緊張で吐きそうになった。

また、スコルピオの魔法と「靈感」にかなり助けられた。先程の「アイアンヴァイト」やユノに用いた「シルバーチェイン」身体の

動きを遅くする煙を発生させる「スロースチーム」も有効だった。魔族は強い光に弱い性質を持ったため連絡に使う予定だった「ライトボール」も幾度か使った。

しかし、スコルピオは役場近くに行き着くまでに相当量のマナを消費したようだった。

3人の存在と隠れてるおおよそ場所が感知されてる「チェックメイト寸前」の状態では他に手段のとりようがなかった。

途中でスコルピオがマナ切れで立てなくなり、フリードが背中に担いで行動している。

それまでに追跡の手を撒けたのは幸いだった。

ドンテカの役場は3階建ての屋根に風見鶏をつけた尖塔が立つ建物だ。アーチ状の入り口を通ってすぐに大きなホールがあり、村で集まりがあるときの集会所として使われているらしい。モンスターなどが村を襲撃した際の避難場所も同様だったのだろう。

「村の人間すべて 殺されてしまったかもしれない」

ぎりり、と歯噛みしながらルビイが吐き捨てる。

役場の周辺が殺戮の舞台になったことは明白だった。魔術灯に照らされた地面には欠損した人体の一部や内蔵がごろごろと転がっている。死体を引き摺った血のあとはやはり役場の中に続いている。夥しい血の道筋が役場周辺の砂を赤黒く染めている。

鉄が錆びたような独特の臭気が吸う空気の中に染み付いている。あと数時間もすればもっとひどい匂いが村中に立ち込めるだろう。地獄のような光景だ。

嘔吐感を無理やり抑え、壁に身体を預けたスコルピオに話しかける。

「密偵、いけそうか？」

「……ええ、まあなんとか　でも戦闘では期待しないでください」
マナの消耗がかなり身体に響いているようだった。顔はぐっしょりと汗で濡れ、眼の下にはほんの短い時間で大きなクマが出来ている。吐く息は荒く、相当な無理をさせたことにルビイの良心が痛んだ。

この1時間で3人の間には連帯感が生まれていた。背中を預けた仲。風貌はかなり胡散臭げだが思っていたよりこの密偵の少年は誠実だ。

少なくとも、王都の3歩歩けば待遇への不満を言い出すような宮廷魔術師よりは　ルビイは好きだ。あの連中がこの事態に放り込まれても何も出来まい。

「わかった、少し休め……フリード、引き続き頼むぞ」

「了解ですよ、御大将」

軽々とフリードがスコルピオを担ぐ。

偵察を役割とするルビイは身軽なままだ。

（役場の前に2匹。見張り、か？）

“兵士”は全て同一の形態をしている。屈強な肉体に魚鱗の鎧、錐状の黒槍。奇妙な形の兜。どうやら全て自身の身体を変化させて形創っているらしい。

役場の大きな入り口の前で首を周囲に巡らせながら警戒している。かなり長い間　ルビイは観察し続けていたが動きはない。

「ルビイ、どうする？」

フリードが指示を仰ぐ。少し考えてからルビイは言葉を返す。

「厳しいが、倒そう。どのみち、あそこを越えねば勇者の家までいけない」

役場は村の入り口から続く大通りを直進した広場にある。

宿からここまでは建物が密集していて、隠れる場所が多かったが役場周辺にはなにもない。ランドドラゴンを留めておく竜舎と初代村長の記念石像があるのみだ。

竜舎は幌つきの簡素な木組みでほとんど隠れる場所がないし、銅像にいたっては騒動のさなかに何かあったのか腰のあたりから折れてむなしい石の断面を晒している。

“兵士”との距離はおよそ300ラウン。ルビィが全力で疾走して3秒ちよつとで到達できる距離だ。

魔族にルビィたちが対抗できるか、という疑問は既になかった。弱点があり人、間と同じく死ぬ。倒すことが出来るという事実は確実に恐怖感を薄れさせていた。

「フリード、発砲を許可。右に回ってヤツラを銃声で引きつける」
ショーターを抜きながら前を睨みつける「私が横合いから殴りつける」

「了解」

「僕はどうします？」フリードの背からスコルピオが尋ねる「まだ2回ほどは使えますよ、魔法」

「却下だ、狼煙の火種を失いたくない。自分の身が危なくなつたときのみ使え」

「わかりました、少し休みます」

スコルピオが素直に頷く。

すう、と息を吸い、ルビィは物陰から一気に飛び出す。

役場の周辺に沈殿するように漂っていた血の匂いが、獲物を追いかつめる獣のように疾駆するルビィに掻き乱され霧散する。ルビィはそれを音として聞いていた。聞こえるのは風が耳のすぐ横を通り抜けていく音と、砂を跳ね上げて地を蹴り飛ばす自身の足音のみ。

2匹の“兵士”はまだ気づかない。

目指すは下半身だけになった村長像だ。役場とちょうど直線状に

ある　　ちようどいい「踏み台」だ。

それと同時にフリードもピストルを両手で保持し、中腰の姿勢を保ちながら移動する。役場の右側側面に回りこむような感じた。

そして“兵士”に向かつてピストルを発砲する。静まり返った夜に響く轟音が3発。フリードの優れた猟師の眼はその内2発が“兵士”の身体に命中したのを捉えたが、この距離では全く効果はない。

（頼むよ、ルビィ！）

2匹の“兵士”はフリードに気づいた。魔族語で罵りをあげながらフリードの方へと猛烈な勢いで接近してくる。異様に発達した大腿筋が生み出す脚力は相当早い。残り3発を撃ち切る前に槍が届く距離まで来てしまうだろう。

「……っ！……！」

2匹の“兵士”がフリードの方へ向かったのを視て、ルビィは思いつきり像を踏み台にして跳躍する。

狙うは後方の“兵士”だ。

（狙うは光、それが奴らの弱点、フリードはそう言っていたな）

“兵士”のみてくれで光っている部分は、兜からのぞく眼だけだ。激突するような勢いで後方の“兵士”の横面を蹴りつける。ルビィの蹴りは人間なら容易に骨を砕く威力だが“兵士”は大きくよるめくだけだ。

しかしルビィにはその硬直で充分だった。

着地すると素早く態勢を低く、大腿に開いた足の間をくぐり抜ける。痛烈な一撃に襲撃者の正体を捕捉しようとした“兵士”は小柄なルビィの姿を見つけれない。その様子を視てルビィは形のいい

唇を釣り上げる。

“兵士”の無防備な背中にアンテローズの剣技を叩き込んでやる。鎧を着込んだ人間を想定した、急所を突くことに長けた双剣のコンビネーション。

腰から肩口にかけての斜め上への撫で斬り、刺突、角度を変えてもう一度刺突、大きくよろめいた上体へ全体重をかけてのツインスパイク（二刀での逆手突き立て）

蒼い血がルビィの半身を染める　だがこれで終わりじゃない。倒れた“兵士”に向けて追い討ちをかける。

「死ねええっ！！！」

裂帛の、いや、怨嗟をこめた雄叫びと共に“兵士”の兜に包まれた頭部目掛けてショーターの剣先を振り下ろす。

どんな熟練した戦士であれ、眼で「敵」を視なければ戦えない。振り向いた先を狙った一撃。

「@x \$?!!!」

湾曲した鋭い切っ先は“兵士”の大きな眼に突き刺さる。おぞましい叫びが周囲に木霊した。冗談のように血が噴出し、思わずルビィは顔をそむける。眼に入れば間違いなく毒だ。

しばらく狂ったように槍を振り回し、地面でもがき苦しんでいたが大きな痙攣と共に動かなくなる。

「殺った！」

ルビイは叫びながら次　ピストルを構えたフリードと自分に挟まれる形になった“兵士”へ意識を向ける。

恐らくこの“兵士”たちは魔族の基準では高等な部類に入る。仲間が倒されたことに動揺のそぶりも見せず、大きく横とびに跳躍する。挟みうちの形から抜け出すためだろう。

間髪入れずフリードは残り3発の鉛弾を喰らわす。有効距離で放たれた射撃は“兵士”の五体を揺らしたが、急所へは届かない。こちらの狙いを悟ったらしく、槍を持っていない腕で顔を庇っている。そこにルビイが呐喊する。身体をしなやかにひねり、回転を乗せた重みのある縦一文字。

“兵士”はそれを腕で受け止め、動きの止まったルビイに対し、カウンターの突きを繰り出してくる。長い腕から放たれる一撃は強力だ。頭をわずかに下げて回避したルビイの頭上のすぐ上をぶおつ、と唸るような音が通り抜けていく。髪を後ろで束ねていた紐が風圧でほどけ、ルビイの髪がばさりと下りる。無造作に切ったばさばさの赤い髪。頬にあたる髪感触を煩わしく感じた。

「槍」の前で「剣」が足を止めることは死だ。荒々しく振り回される槍の穂先を必死で避ける。“兵士”は一対多の不利を悟ったらしく、役場の方へと後ずさりしながらルビイを懐に入れまいとしている。

「フリード！」

「はあっ！」

そこにロングソードを抜き放ったフリードが強引に攻める。

狙い済ました剣の振り下ろしは振り回された槍の中ほどにぶつかり、けたたましい音と共に火花を散らす。

暴風のような槍の穂先が肉厚な鋼の刃によって地に射止められる。

「
× ¥ : * ! ! ! ! !
」
「おおおおおっ！」

ぎしぎしぎし、と空間が歪む錯覚をルビィは視た。

槍を引き、目の前の敵から逃れようとする“兵士”と、動きを封じるフリードの拮抗　片手1本の“魔族”とスーツアーマーを含めた全体重を剣に籠めているフリードはそれでようやく互角だ。

驚異的な豪腕。この鏖迫り合いは長くはもつまい。

（しかしその中断、高くつくぞ！）

フリードの頑張りに応えるように、ルビィは“兵士”の懷めがけて転がるように入り込む。空いた片方の手でそれを阻止しようと“兵士”が拳をルビィに放つがその直撃をユノや騎士団長イスラすら凌駕する反射神経が許さない。僅かな身体の浮き沈みでの回避。

ガードを下げた“兵士”の頭部にショーターの刃が迫る。

「ちっ！」
「うわっ！」

“兵士”の姿が飴細工のように溶け、ルビィの刃とフリードの拘束を避けるように二手に別れる。

腕全体の力で押し出した刃はむなく空をきり、抑える相手を突然喪ったフリードがたたらを踏む。

（また変化した！厄介な相手だ！）

二手に別れたまま逃げようとする“兵士”を追おうと駆け出したルビィだったが　急に首筋に奔った予感に足を止める。

「……囲まれてる」

スコルピオがフリードの背中で小さく呟く。

一瞬遅れてルビィの足元にどす、どす、どす、と錐状の黒槍が行く手を阻むように突き刺さる。

「……時間切れか」

「畜生ッ」

ぴちゃぴちゃ、と水気のある音を静寂に響かせながら、広場を複数の気配が蠢いている。気を抜けば気絶しかねないプレッシャーに3人の動きが止まる。

ルビィは全身を硬直させ、眼だけで気配の数を数える。先程逃げた“兵士”をあわせて9　3人を包囲するように広がり、逃げ道を封鎖している。

徐々に狭まる包囲網に、ルビィとフリード、スコルピオはじりじりと後退し背中あわせの形になる。

闇の中に立像が5つ立ちあがり、鋼の擦れる音と共に3人の視界に視える範囲まで歩を進めてくる。

5匹の“兵士”

絶望、の二文字がルビィの頭の中に浮かぶ。

もとよりこの「最悪の事態」は覚悟の上だった。フリードに発砲させた時点でこの鋭敏な聴覚を持つ“魔族”たちに位置を察知されることは予測の範囲内だった。

そのうえでの超短期決戦での奇襲　しかしそれは失敗に終わる。この“兵士”たちの実力を読み違えてしまった。

（たかが1匹倒した程度で、増長し過ぎた……！！）

この状況を作り出したのは、自分だ。

目の前で民を殺された怒りや、1匹をなんとか倒した程度の自信で判断が狂った。

冷静に、ただ勇者と合流することだけを優先していれば迂回する方針をとっていた筈だ。

ルビイは自分への憤りと情けなさで一杯になる。そう、昔からこうだった。どれだけ気をつけても、どれだけ注意を払っても途中でどこか過信が生まれる。

うまくいけばいくほど自分の全能感に酔い、周りが見えづらくなる。それで幾つの失敗を犯し、足元を掬われただろう。

城を発つ前のイスラの教えや、ユノとの稽古の中で得た心得を自分は全く理解せず、何も成長していなかった。

ぶち、と唇を噛み切る。鉄の味が口の中に広がる。

「ルビイ」

フリードが静かに、背中越しに語りかけてくる。3人とも視線は眼前に迫る“兵士”を睨みつけている。

「キミのせいじゃない。分が、悪すぎた」

「そんなことはない……私が、もっと冷静でいれば……！」
ぎゅう、とショーターを握る両手に力を籠める。

心底情けなかった。判断ミスをした無能な上官を、フリードは罵りもせず逆に励ましてくれる。そんな心遣いが自分への劣等感で満たされた今のルビイにはとても痛かった。

「私が、間違えたんだ、わたしは」

「違うね」はつきりと、明瞭な口調でフリードが言う「ルビイは正しいさ、昔からね」

「え」

くすり、と背後のフリードが笑う。どんな顔で笑っているのかルビイは知りたかった。

「イチヤつきは、ヨソでやってくれませんかね、お二方」

スコルピオがフリードの背の上で呆れたようにため息を吐く。ずっと黙り込んでいた密偵の少年をほんの少しルビイは忘れていた。

「い、いちゃついてなんていない！……何か、策でもあるのか？」

じり、じり、と“兵士”たちが近づいてくる。奇妙な魔族語の嘲りと低い笑い声を響かせ、まるで魚が腐ったような悪臭を撒き散らしている。

もし今この瞬間にでもこの“兵士”たちがその気になれば、ルビイもフリードも役場の死体の中に仲間入りだ。

「ライトボールを使います　頭上に打ち上げて、眼くらましと狼煙の両方を今やみましょう、運が良ければまた逃げ切れるかもしれませんが。ついでにケイブリスあたりの誰かが気づいてくれるかもね、とても注意深い誰かが」

「可能性は低そうだが……ルビイ、やってみるかい？」

「運が良ければ、か　やらないよりは、マシか」

すつ、と深呼吸をしてルビイは気を落ち着かせる。“兵士”の持つ錐状の槍が今にも自分目掛けて刺さりそうだ。

幸い、目の前の魔族たちはもう自分たちが「勝者」だと、目の前の獲物が抵抗を諦めたと思っている。兜に包まれた大きな眼が笑みの形に歪んでいるのが嫌でも解った。

「頼む、密偵　いや、スコルピオ」

「ええ、それではエクスリブリス・コルタナ五編……」

スコルピオの静かな詠唱がはじまり、ルビィとフリードが背中合わせに、ただひたすら逃走に向けて全神経を集中していたその時。

西の空が、紅く燃え上がった。

『何が起こったッ！？』

『砂の箱庭、急激な負荷により不安定化しています！』

『報告する前に対処しろウスノロ！』

『ヴァルヴァ口分隊！エイス分隊！現況を報告しろっ！』

魔術装置「砂の箱庭」を中心に据えた魔族軍の作戦室は俄かに混乱した。

数刻前まで、作戦は順調そのものだった。ドンテカ村の人間の処理と施設の制圧、不確定要素の排除。今の今まで「砂の箱庭」で動きが丸見えになっていると夢にも思わない愚かな人間3人を嘲笑っていたところだ。

激変が起こったのは今回の「V作戦」の目標 案件Y、つまり勇者ユノ・ユビキタスの住処だ。

ソーサラーの妖術によって投入されたスラッド兵分隊のうち2つを村内で監視に当たらせ、それ以外の分隊5つで住処を包囲していた。

デアシュ軍下の精鋭スラッド兵たちは目先の感情に囚われることなく、包囲された住処の中で息を潜める勇者ユノ・ユビキタスの逃げ道を奪うことに専念していた。

その後、この作戦の要である“スルト”が投下され、勇者との一騎打ちを開始する。

“新しき魔王”チヒロに率いられし、魔族軍の復讐の狼煙　それがV作戦の目的。

しかし暗闇の空に立ち昇ったのは憎しみの狼煙ではなく、恐るべき熱と閃光だ。

突然起こった巨大な「動き」に追いつけなくなり、文字通りサンドストームになり荒れ狂う「砂の箱庭」を前に、デアシュが普段のたおやかな物腰に想像もつかない凄みを聞かせ、静かに声を張り上げる

「全員、黙れ　冷静に対処しなさい」

混乱の極地にあつた作戦室が水を打ったように鎮まりかえる。と、狼狽するだけだった士官とソーサラーたちが我に返って己の仕事に戻る。

「砂の箱庭を復旧なさい」

『はっ、ただいま戻ります』

数分もたたない内に「砂の箱庭」が安定を取り戻す。

ざああ、と羽虫のような音を立てて蚊柱の如く砂が命を受けて動き始める。

先程まで混沌として、崩壊していた箱庭の中が再び精密にドント力を表示する。

デアシュはいつもの細目から、爛々と輝く瞳を大きく見開いた。

「これは……」

『炎……?』

再現されたドンテカの西の端　　ユノ・ユビキタスの住処が燃えている。

ただの火事というレヴェルではない。それは魔族の軍兵が恐れてやまない人間の高位魔術師による“煉獄”や“業火”と呼ばれる戦略クラスの火炎魔術。

エルムトとやらの魔法使いの「エクスプロージョン」

気まぐれに人間対魔族の戦争に介入する龍族の「ドラゴンブレス」それらの「魔族にとつての脅威」に劣らない炎がユノ・ユビキタスの住処を中心に燃え広がっている。

『ウツ』

じつと箱庭を注視していた士官が呻いた。それも無理はない。

包囲網を形成していたスラッド兵の、鮮明に　爆発するように広がった炎から逃げ惑い、苦悶の形相で焼け死んだ亡骸を直視してしまったからだ。

眼を見開いたままのデアシュこそ涼しい顔をしているものの、作戦室の他の者達は吐き気を堪え、蒼い顔をしている。

現場に対して呼びかけを続けていたソーサラーが叫ぶ。

『デアシュ様っ、エイス分隊の通信球に反応あり』

「すぐに繋ぎなさい」

デアシュの指示で作戦室全体に妖術通信球から声が届く。

『こちらエイス分隊っ、マザー！マザー！応答を願うっ！』

『何が起こった！？状況を報告しろ』

「砂の箱庭」は未だに立ち昇る巨大な炎を再現しつつづけており、精細な部分は判別ができない。

この作戦室において状況を判断できるのはこの通信から聞こえる

音だけだ。

デアシユは通信に耳を傾けるが、炎が酸素を喰らって燃焼し続ける音と荒い呼吸を続けるスラッド兵の声だけで、他に何も聞こえない。

『あいつだ……あいつはずっと“作り替えられたフリ”をしてたんだ……今の今になって、正気を取り戻しやがった……！……！』

その言葉にデアシュが反応する。

「あいつ？あいつとは
“スルト”のこと？」

表情の少ない顔に若干の色を滲ませながら、デアシュは言葉を待つ。全身の火傷と酸欠状態にくわえて火に耐性を持たないスラッド兵はもう虫の息だ。

しかし彼は誇り高き“レヴィアタン”の一員として任務を果たした。

“スルト”です!“スルト”が暴走しやがった!!!!

[illegible]

スラッド兵の必死の叫びの裏に、狂ったような笑い声が聞こえた。複数の人間の声を重ね合わせたような甲高く、若い男の声。それと同時に再び炎が燃え上がる音が聞こえ、慟哭と肉を焼かれる音と共にスラッド兵が息絶えるのが通信越しにわかった。

「砂の箱庭」に再現された炎が揺らめき、爆心地の姿が垣間見え

る。

炎と共に巻き起こった爆風で、何もかもが平らになっている。ころうじて見覚えのある案件Yの住処の屋根だけが、むなくその亡骸を横たえている。

その前に立つのは1人の男だ。無残にも炎で焼け崩れ、骨を晒したスラッド兵たちよりも一回り大きい。そのくせ奇妙なことに人間と同様の均整を保っている。

巨人　かつてのウォーエイジに存在した伝説の種族を連想させる。

何もかもが焼け爛れて灰になった大地の上で、1人腹を抱えて笑っている。

「うふふ」

『デ、デアシュ様……？』

突然小さく笑い声をあげた己の上司を、戦々恐々と士官のひとりは何う。

再現されたその俯瞰図を視るまでもなく、デアシュは状況を把握し冷静さを取り戻していた。

見開いていた瞳をいつもの猫のような糸目にかえ、優雅に作戦室の士官たちに命令する。

「何も問題はありませんわ、各自粛々と仕事を続けなさい」

『し、しかしデアシュ様　』

「よいのです。彼らは、スラッド兵はしっかりとその任を遂げましたわ、家族に褒美をとらせなさい」

了解、と狼狽気味に返事をして、士官が仕事に戻る。

作戦室の中は緊迫気味の静寂に満ち、ようやく場が秩序を取り戻す。

その中心で、糸目の女　そして魔族軍の冷静たる参謀はチヒロ
そっくりの笑みを浮べる。

「さあ、どうなるのかしら　どうか魅せてくださいな」

『月』の暦1065年

天候：晴れ　8月24日
2時27分

ドンテカ外れ　燃えさかる炎の中

（熱い、熱いなあ、誰かクーラーつけてよ）

（何？何があったの？怖いよ、熱いよ、どうして？）

（襲撃だ、武器をとって状況を把握し、次の攻撃に備えろ）

（アリカは？あの子はどうしたの？わたし、あの子、まもらないと）

（また燃やした？誰が？どこの誰が？どこの誰がこの私に喧嘩を吹
つけたの？絶対に殺す、間違いなく殺す、ころせ、ゆの、ころせ）
（もう眠ろうよ）

（煩いな、少し黙ってよ）

分裂し、混乱した思考を、なんとか抑えつける。

明滅する視界と茫洋とした頭、まるで全身を鉄の棍棒で叩きつく
されたような痛みに耐えながら、ユノは起き上がる。

がらがら、とそれまで身体を圧迫していた木材だの瓦礫が地に落
ちる。

その幾つかが身体に刺さっているような感触があったが、それに対してリアクションする余裕はユノにはない。

失血で足がふらついたが、いつの間にか握っていた棒のようなもののニザヴェリルの魔術銃を杖になんとか踏みとどまる。

ミスリルの表面は傷ひとつ付いていない。それがひどく非現実的だった。

（わたし、なにしてたんだっけ？）

二重にぼやけた世界を、ユノはぼんやりとした心地で見回す。

一面の炎 それ以外の形容が思いつかなかった。

自分は確か、アリカに泣きつき、まるで子供みたいに扱われた後に、一緒に酒を飲んでいたんじゃないか？旅のはじまりを祝ったの二人きりのパーティー！。

頑張つて涙を止めようと思ったけど、止まらなかったな。

アリカはやっぱりわたしにとって

（ああ、そうだ、わたし）

世界が音を取り戻す。

明滅し、二重になっていた視界は像を取り戻し明瞭になる。身体の痛み、背中や足に突き刺さる異物の感触は全く変わらなかった。

脳がばらばらの思考を繋ぎ合わせ、ようやく「ユノ・ユビキタス」の自我が戻ってくる。

（アリカ、アリカはどこ！？）

そう、先程まで魔族に 恐らくスラッド兵が家の周りを取り囲んでいた。数刻前に事態を察知したユノは、散発的な攻撃を家を盾にして防ぎながら籠城して援軍 つまりルビィやフリードを待ち続けていた。

ユノ単身ならばスラッド兵の垣根を越えることも可能だが、怯えるアリカを連れてはうまくはいかない。この2年間で人を守りながらの戦いなどとうの昔に忘却していた。

血の少ない身体を引き摺り、半狂乱で周囲の瓦礫を掻き分ける。炎に包まれ、半ば炭と化しつつある木材や煉瓦は容赦なくユノの腕を焼いたが気にならない。ただ狂ったようにアリカの名前を叫びながら、少女の姿を探し求める。

くひゅっ

ユノの斜め後ろで、確かに小さな吐息の音がした ユノは慌ててそこまで駆け寄る。足がもつれ、したたかに身体を瓦礫の上に打ち付けたが気にしない。

廃材と化した家の下に、見覚えのある亜麻色の髪が見え隠れしていた。幸いこの一角は火の手が浅く、家具も原型を留めているものが多かった。

しかし今はそれが邪魔だ。アリカを下敷きになっている。

「うああああああっ！」

呻きと共に家の梁と思しき材木を持ち上げる。“グラールベルの鉄

籠手”で掴んだ部分がみしみしと音を立てて潰され、ゆっくりと宙に持ち上がる。

ぱらぱらと黒い灰と火の粉がユノに降りかかり、銀色の髪を焦がす。

ユノは歯を食い縛り、周辺を包む炎の海目掛けて投げ捨てる。ワイバーンが地面にまつさかさまに落ちたみたいな音と共に梁が火の海に沈み、瞬く間に燃え上がる。

その他にも見覚えのある椅子や本棚、樽などをどかし、ようやくユノは下敷きになっていたアリカと再会する。

よほど運が良かったのか致命傷になりそうな傷や火傷は見当たらない。

ユノは久しぶりにドンナに感謝した。

「ユ、ノ……さ……?」

「よかった　　！喋らないで、身体に障るから」

苦しげな吐息とともにアリカが眼を開ける。艶やかな亜麻色の髪は灰を被り、羽織ったカーディガンの裾は細切れになっている。いつも身綺麗にしている普段のアリカとの落差にユノは歯噛みした。

「身体でどこか痛いところはない?」

アリカが油汗を滲ませながら胸の下あたりを指差す。ユノがそつと触れるとひつ、と押し殺した悲鳴をあげて悶えた　あばらが折れている感触だ。深く折れても開放骨折でもない。リザードマンの生命力なら処置をすれば大丈夫だ。

「これなら、大丈夫　動かないで、すぐになんとかするから」

「ユノさ、ん」

「何?今何か当て木になるものを」

ぴた、と頬に白く冷たい手があたる。その感触でようやくユノは

自分が顔に火傷を負っていることに気づいた。

アリカは金色の瞳から一筋の涙を零し、呟く。

「わたし、許せない」金色の瞳の中にユノの汚れた顔が映りこむ「
どうして、みんな壊しちゃうの？」

アリカは悲しみと怒りに震えていた。世界の不条理さや厳しさといった「これまで付き合ってきた」もの達が、1つも許せなくなっていた。

どうして、目の前の小さな少女はこんな目に晒されなければならないのか。

どうして、こんなにも優しい少女にドンナーは手を差伸べてくれないのか。

どうして、彼女の平穏は脅かされ続けるのか

どうして、こんなにも肌が焼け爛れても、髪も燃えても、彼女は止まることも泣くことも許されないのか

どうして、自分と彼女の生活は、ふたりの安寧は壊されてしまうのか。

「許せない、許せないの……」

そう、うわ言のように繰り返して アリカは瞳を閉じた。

沈黙が、炎の海の中に落ちる。

泣きつかれたように眠るアリカを、ユノは身体に障らないように気を払いながら抱きあげる。

そうして、ユノは誰ともなく呟く。

「そうだね、許せない、許せないよね」

気を喪ったアリカを火の気のない大地の上に寝かせ、近くに落ちていたユノのポンチョを上に着せる。このポンチョには“耐火”の魔術が織り込まれている。火の粉程度なら防いでくれる筈だ。

「それは、あなたと同じ　？　そのデカブツ」

ずん、と重い足音を響かせ、火の海を割って巨大な人影がゆつくりと進みでる。

炎を身に纏い、怒髪天を衝いたその巨大な姿はウォーエイジに存在した“火の巨人”のようだ。

その風体も古代の貴族が愛用した衣　トウニカによく似た布の衣服を身体に巻きつけている。

巨大、と形容しているがその姿は筋骨逞しい羅刹漢のような姿ではなく、楽士か芸術家のようなほっそりとした優男風だ。

鼻筋の通った彫りの深い顔を怒りと笑いに染め、吐息の変わりに炎を吐いている。

ほっそりとしているがユノと比べれば枝と丸太のような腕には輪のようなモノを嵌め、右手に儀礼で使うような巨大な剣を携えている。

「あなたがどこの誰か、魔族か？それとも人間か？それはわからない」

ユノは振り返り、瓦礫の中から拾った直剣をぶん、と一度振る。

ぱっ、と灰と火の粉が舞った。

腕をだらりと下げ、首を少し傾げた無防備に見える体勢。

“グラーベルの鉄籠手”に包まれた左手はニザヴェリルの魔術銃を構えている。

「とりあえず言えるのは、これだけ」

ユノはゆつくりと歩き出す。蟻と象のような炎の巨人に向かって、堂々と。

「私とアリカは、とても怒っている」

ブイ・フォー・ヴェンデッタ？

「よつし！みんな準備いい？準備いいよね？？」

そこは奇妙な空間だった。

巨大な円筒を形成する壁には、人の使う魔術を行使する上で使われるルーン文字とは異なる、妖術における「力ある言葉」であるソーサル・ロウが半球の天井から床の中心まで放射状に彫りこまれている。文字は発光と変色を繰り返し、赤・緑・青の三原色の光を天井から床まで供給しているように見える。

床の中心にあるのは作戦室と同じ「砂の箱庭」を小さくしたものが設置されている。地球儀のような形をしたそれには沸騰する用途の知れない液体が入られ、シリンダーや、明滅を繰り返すトラペゾヘドロン（魔族が棲む深海域のみで産出される鉱石。妖術の力を高める用途で魔族文明内では広く使われている。）が金属器に嵌められ幾つも接続されている。

その装置を取り囲むように設置された大きな妖術球の間には幾人ものソーサラーが様々な作業をこなしている。

妖術球に向かい呪文を唱える者。「砂の箱庭」と妖術球を交互に確認しながら手に持った巻物に何かを筆記し続けるもの。

壁に彫りこまれたソーサル・ロウの光の流れを監視し、定期的に何らかの呪文を吹き込む者。

ソーサラーたちの眼にはこれから起こる「結果」への期待と不安が入り混じり、「静寂した興奮」とも呼ぶべき二律背反な空気が漂っている。

そんな空気の中を、魔族の少年　魔族軍第四軍団“ローレライ

”を率いるプシユケが跳ねるように駆け回る。

「そこっ！しっかりとマナの供給率を確認してっ、100目盛りごとトラペゾヘドロンを交換して」

『了解です』

「筆記班から数名！ソーサル・ロウ持続班のサポートに入りなさい。あー、タスク計測チーム、自動筆記に切り替えて回りなさい、早急につっ！」

『プシユケ様！作戦室本邦から“スルト”の行動に対しての説明要求が来ています！』

「今それどころじゃない！追い出しといてっ！」

四方から飛ぶ報告に、矢継ぎ早に指示を飛ばすプシユケは間違いなくこの奇妙な空間の主だ。

普段のおどした感もなく、魔王チヒロの艶かしい仕草に翻弄される少年の表情はそこにはない。熱心な研究者。或いは大衆の心を動かし、扇動するアジテーター。

その一面はプシユケという魔族が、決して只の気弱そうな少年ではないと雄弁に物語っている。

『案件Yと“スルト”が接触！戦闘がはじまります！』

通信役のソーサラーが妖術球から身体を離し叫ぶ。それを聞いてプシユケが大きく頷いた。

「よしっ、それでは各員計測を開始　余すことなく、一粒残さず、一滴残さず、何もかも精査しろっ！」

『了解！計測開始』

『計測開始』

『ソーサル・ロウのフル供給完了！いけます！』

“ローレライ”のソーサラーたちがプシユケの号令に応える。多種多様な形態の魔族達のその全ての眼が、中心に鎮座する「砂の箱

庭」の再現された立体地図を注視し、その全ての眼が遙か遠い「上」の大地。魔族にとつての奪われた故郷で繰り広げられる光景を焼きつけんとしている。

メルカトル大砂海入り口の村、ドンテカ。

炎の海。堆積する瓦礫の上。そこに佇む「悪魔」と“スルト”

彼らが長年待ち望んだ夢の第1歩。

プシュケが朗々と、興奮を滲ませながら発言する。

「勇者を、勇者のすべてを、解体してやるんだ」

勇者。憎き「自分たちの」神を海の底に縛りつけ、両目を潰した邪悪な神ドンナーに遣わされた魔族にとつて最低最悪の悪魔。

卑劣な人間たちの軍勢を率いて何度魔族を敗退させたことか数知れない。人でありながら人ではなく、容易に俗人に紛れる恐るべき“兵器”

それに対抗する為に特別に編成されたのが第四軍団“ローレイ”だ。

魔族の歴史の中でも軍団の歴史は浅く、プシュケが1代目だ。

魔族軍を構成する4大軍団は永きにわたる人間との戦いの中で幾度も壊滅し、統括する魔族さえも変わっている。

プシュケと“ニドヘグ”の老獪な参謀ウーフェアネスを除く2軍団長は、魔族内で実力が認められて新しく選ばれた者達だ。

もつとも“レヴィアタン”デアシュと“リンドブルム”魔戦士長ルナティークは、プシュケより階級も能力も生きている年月さえ優っているから立場的にはプシュケが一番下だ。

それに加えて、これまでに一度も本来の目的である勇者への対抗という任務をこなせていない。

一応は魔族軍全体の諜報部隊として、人の都市に紛れ込んで情報を得ることで貢献はしているが、その本分は“研究”だ。

達成不可能な目標を、未知の領域にメスを入れること、新たな概念を創造し配給すること、研究。

勇者の弱点、或いは対抗措置を見つけ、創りだすことが彼らの真にやりたかったことだ。

先代の 勇者に殺されてしまったものたちは不幸だった。当代の国王は過去の王とは根幹から「違う」

力に優れているだけでなく、統治に必要な才能だけでなく、驕り高ぶらない決して油断しない「理性」と「慎重さ」が存在している。これまでの王達はいくまでも正面から、力で押し潰すことしか考えなかった。大規模な諜報作戦やスラッド兵たちを運用した浸透作戦。あの王たる少女がどれだけ魔族全体の敗戦続きで呆けた頭を醒ましてくれたことだろう！

銜えてあの恐るべき力 ミズガルズの再来と言っているのかもしれない。

（やれる、やれるぞ）

プシケの興奮まじりの思考は、今の魔族軍全体の空気を反映したものだっただけ。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月24日

2時27分

ドンテカ外れ

燃えさかる炎の中

火は、恐ろしいものである。

触れたものを全てその舌で舐め上げ、尾で巻きつき、燃焼させる。火は火を産み、新たな標的を求めて空に、大地に、酸素を喰らいながら際限なく領土の拡大を続ける。

大きく育った火にはなにものも無力だ。

しかし、火は人にとって、文明の中で生きる全ての人間にとって、かけがえのない隣人でもある。

自分の身の回りにあるものを思い浮べてみればいい。

火の明かりがなければ夜は碌に本を読むこともできない。

火の暖かさがなければ冬の間をずっと凍えて過ごさなければいけない。

火の熱さがなければどんな腕利きの鍛冶屋でさえ剣の1本も打つことが出来ない。

火は素晴らしいものだろう、人の生活を豊かにしている。常にそこに居るだけで暖かさを与えてくれる恋人のような隣人。それが火だからといって、火に全てを委ねてはいけない。火は責任ある誰かに制御されている限り従順だが、一度人の手を離れ口輪を解き放たれば、たちまち凶悪な獣と化す。どんな神話も、どんな英雄録にも記述されていない、名前の与えられていない怪物。

命あるものを、無垢な欲求のままそのあぎとに放り込む不老の怪物。それが火。

……火の権化のような巨人が、白髪の少女ユノ・ユビキタスと対峙している。

この大陸には、現在は巨人という種族は存在しないと考えられている。

魔族や危険な海獣に遮られ人が渡ることが出来ない離れ島や、開

拓されていない外の世界には存在しているかもしれないが、この大陸ではドンナーとミズガルズが始めた世界を2つに割った大戦争のさなかに絶滅したものと考えられている。

詳しい話は知らないがドンナーとミズガルズの戦争に巻き込まれる形で参加していたのだという。

本来は、ドンナーとミズガルズがこの世界に来る前から暮らしていたらしい。

余所者の戦争に平穩を奪われた哀れな種族　どこかで聞いたような話だ。

およその巨人は、30ラウンから200ラウン程度の大きさを持ち、肉体は頑健かつ強靱で、精霊と強く結びつき、息吹だけで強風を起こし、拳で大地を鳴動させ、流す涙は雨となり、その亡骸は巨大な樹木となる。

大陸に点在する三大樹　ランバルディアの「始世樹」、龍族が棲まう「龍の巢」、パルメキアの僧侶たちが管理する「鉄の樹」、その全てが偉大な巨人の亡骸だという。

亡骸が変じた樹には不思議な力が宿っており、「始世樹」には人の才覚を見抜き王を選別する力が、「龍の巢」にはマナを生み出す力が、「鉄の樹」にはあらゆる呪いを打ち破る力がある。

彼らは偉大だ、そうユノは思う。
亡骸になってさえ、関係のない誰かに奉仕している。

（私だったらきつと、毒とか瘴気を撒き散らす樹になっていたろうな）

ふ、と口元を笑みに歪め、視線だけは眼前の“炎の巨人”を見据える。

この巨人は贗物だ。ただ図体が大きいだけの只の人。いや、やはり魔族か。

それにしては 造形が人間に似過ぎている。魔族はごく高位の者を除けば異形だ。海の生物と結びついて深海で生きながらえているのだから、それは仕方がない。

優男とも表現できる双眸を怒りと笑いに染め、ただ一点。ユノに注視している。

弱点である「黄色く光るもの」は少なくとも露出した部分にはない。高位な魔族ならば体内にある事の方が多い。

幸いなことにユノの背後にいるアリカへは関心が向かないらしい。もつとも、これからこの炎のリングで行われる戦いで気絶したアリカは無事では済まないだろう。

巨人から向かって右に、炎の海の内円に沿うように歩き出す。

意識がこちらに向いているのなら、必ず等距離に動くだろう。剣と剣の間合いだ。

ユノがだらりと下げた直剣のふくやかな曲線を描く刃と、巨人が構えた紋章の描かれた儀礼刀の剣身が火のゆらめきを無感動に照らす。

燃え盛る炎の中、ユノは口を開く。

「ねえ、大切なものを奪われた気持ちって知ってる？」

巨人は答えず、ただ凍りついた怒りと笑みを浮かべて、ユノと対面に動く。

姿勢を低く保ったその姿勢と、地面から足を離さず擦るように身体を移動させる足運びはユノにとっても馴染み深いものだ。召還された当初、騎士団団長イスラに叩きつけるように教えられた、前ランバルディア時代から続く由緒正しい古代剣闘術。

限られた空間で、一対一で決闘するのに向いたスタイルだ。

ユノの剣技は戦場の混沌としたフィールドの中で歪曲し、原型は無くなっている。

今イスラがユノの戦い方を見れば、こっぴどくどやされることだ

ろう。

死にたいのか　と。

「裏切られたり、燃やされたり、誰かを傷つけられたり」

なんの拍子もなく、つま先で瓦礫を蹴りとはし、巨人へと肉薄する。ニザヴェリルの魔術銃の銃口を前に向け、右手の剣をだらりと下げたままの特異なスタイル。

ぎしいつ、と奥歯の歯が鳴るのをユノは聞いていた。

「すつごく痛いよ?」

鉄と鉄が衝突し、強く振動した轟音が、全ての音を掻き消す。

魔術銃から放たれたのは、魔族用の大型弾筒。籠められた魔術は“炸裂”

空気を圧縮し、一気に爆発させることで衝撃波を発生させるポピュラーな攻撃魔術だ。描くルーン文字の量が増すごとに威力は重く、鋭くなる。

摩擦で起きた白煙で綺麗な直線を描きながら“炸裂”が巨人の胸に突き刺さる。鉄の筒の先端が肉に刺さる音の後に、耳をつんざく破裂音と共に筒の内側の空気が爆散し、巨人の上半身を大きく揺らす。効果の確認を待たず、ユノは上体を倒れこむように低く、巨人に向かって駆け出す。

瓦礫が踏み碎かれる。

「シィッ　!!!」

懷に飛び込んだユノは素早く巨人の膝を剣で殴打する。突撃の勢いを利用したダッシュスラッシュ。重い鈍器のような刃が、胸に空気の爆裂を喰らって上半身を反り返らせた巨人の体勢をさらに崩す。“勇者の加護”によって必要以上に強化された腕力はきつと龍族とも力比べが出来る。ユノは力の勇者、6人の勇者で「単純な殴り合

い」で一番強い。

駄目押しに巨人の無防備な鳩尾に至近距離から“炸裂”を叩き込む。

トップブレイク式の機構からしゃりん、と涼やかな音を響かせて鉄製のリングが飛び出す。赤く焼けたそれは地面に落ち、火花を散らす。大型の魔術円筒の中ほどに嵌められた反動軽減の“重し”だ。発射される円筒と共に加速し、銃口から出る直前に円筒から分離し、発射された銃身の先端部に残る。重い鉄製のリングは発射の衝撃を相殺し、銃身のブレを少なくする。役目を終えたリングは自動的に中折れ機構を作動させ、飛び出してくる仕掛けだ。

本来ならここで新しい魔術円筒を詰めるところだが 宙に浮いた巨人の肢体が大きく漲るのをユノは見逃さなかった。

（反撃が、くる）

倒れこむように、姿勢を低くする。

ぼおお、と炎が燃えあがる音が頭のすぐ上を通り抜けた。同時に押さえつけられるような熱風。髪の毛が焼ける匂いがした。

ちら、と視線を上げると巨人が中空で大きく剣を振ったのがわかった。大きな図体に見合わず軽業師のように身軽だ。

片手で大きく振った剣は炎を纏い、ユノの頭上を薙いだことが夜の闇に残った炎の残滓でわかった 炎の剣。ルーンを刻んだか、魔法で形成したか、魔族が持つ技術では創れないタイプの武器。

炎の剣の剣先がぶれる。

「ふっ！」

でたらめのように 炎の暴風がユノに襲い掛かる。斬り上げ、打ち下ろし、薙ぎ払い、斬り返し、おおよそ剣の基本的な技が炎熱を纏って振るわれる。肌を感じる熱さと熱風での推測だが、当たれば一溜まりもない。刃が身体に触れたが最後、燃えて炭になり、灰になり塵芥に還るだろう、これはそんな“炎”だ。

ナオキに与えられた魔族殺しの宝剣　ラーヴァティンによく似ている。

顔に吹き付ける熱と風に顔を顰めながら、ユノは叫びながらとびすさる。

瓦礫を踏み砕く感触。

「いつから魔族が火を使うようになったわけ？おまえたちの大嫌いなものでしょう」

返答はなく、ユノは戦闘を継続する。左手の箆手を盾に、顔の前に翳し、直剣で炎の剣の剣先を払う。巨人は予想通りの豪腕。剣速は相当早く、魔法の炎と併せて大きな脅威だ。

しかし技巧自体は大味で、守りに徹して立ち回れば捌ききれないこともない。

だがそう打ち合い続けることも出来ない。剣圧で負けるのが先か、ユノの剣が熱で溶けて使えなくなるのが先か。

「ワタシハ……復讐者ダ」

「何？」

「サキホドノ問イニ答エテヤル！」

くぐもつてはいるが――意外なほど凜々しい声で巨人がそう叫ぶ。その相貌からは笑いは消えており、燃え滾るような怒りとはつきりと“こちら”へ指向性をもった憎しみがある。それはユノが嫌というほど知っている「真摯」に卑怯な手段を執る人間の顔だ。

その眼光を受けて、ユノは呼吸がし辛くなる。

「ワタシハ全テヲ奪ワレタゾ、貴様ニツ――」

「……！」

巨人の図体が沈み、炎の剣が大きく薙ぎ払われる。膝を立て、足を伸ばした姿勢。足払い。ユノはその一撃を跳躍して回避する。着

地先は巨人の肩。大きく踏み込み、背後へと回ると大きく転進。その背中に刃を突き立てる。

筋肉を刺し貫く繊維の感触はなく、剣先に当たる固い　石のような物。

それは骨でもなく内蔵でもない。およそ生物の体内にありえない「何か」

背中から深く肺まで刺し貫かれているというのに、巨人は一切の痛痒すら見せず、背後へと回ったユノに振り向く。

炎の剣が振るわれる。

「彼女ハワタシの全テダッタ！」

ぶおつ、と炎の波が目の前を横切る。ユノは後退する。

「貴様に奪ワレタ！！」

振るわれる炎の勢いが増している。

「モウ彼女はワタシニ微笑マナイ！触レ合ウコトモデキナイ！貴様ガ！貴様ガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

巨人が正気を失ったように咆哮する。

眼の水分が熱に奪われたのか、眼を開けているのが辛い。狭まる視界の中、必死に炎の剣を回避する。身体を斜めに傾け、頭を下げ、足を狙った一撃を跳躍してやり過ごし、まるで砲弾のような威力の刺突を転がってなんとか避ける。

（熱い、まるで窯の中に居るみたい）

巨人の狂乱的な怒りの沸騰に呼応するように、周囲の温度が上がっているのを感じた。熱いというより痛い。ちりちりと顔の産毛が焼ける音がする。

この巨人の近くにこれ以上いるのは危険だ。

口の中でユノは素早く言葉を唱える。

“ドンナーは雷を纏い駆け出した　迅い　迅い　私の眼に影すら視

得ず、矢のごとき疾風 もはや誰にも止められぬ”

古代語のワーズ・ワースを紡ぎ『世界の停止』を発動する。ユノを除くすべてのものが緩やかに速度を落とし、限りなく静止する。音も光もないユノと巨人だけの世界が出来上がる 6歩しか動いてはいけないというルールの元に成立する、いかさまの世界。

6歩以上動けばどうなるか？それは誰にもわからない。

（身体が、きついな）

発動した力の負荷が身体に重くのしかかる。“勇者の加護”は世界の眼を誤魔化してズルをすること。人が事象に働きかけるのに必要なものの一般的な対価 マナを必要とするわけではないが、力行使するたびに確実に何かが身体から抜け落ちているのがわかる。戦場でやむおえず加護の力を乱用したことがあったが、そのあとは全力で疾走したあとのように疲れきり指1本動かせなくなった。連続で使用することは危険だ。

勇者であつた。戦場の「向月ゆの」にはたくさんの味方が居て、疲弊しきつたユノを助けてくれたが 今はそんな姿を晒せばどうなるか、想像しなくともわかる。

痛む身体に奥歯を噛み締め、6歩の逃避行にユノは移る。

1歩、まずはこの巨人の周囲から離れなければならない。

勢いをつけてその場から大きくジャンプする。暗闇の中、瓦礫を踏む感触。

片足をつくると2歩目にカウントされてしまうので、間髪入れずに次の2歩目を踏み出す。

静止した巨人のすぐ前に着地する。

大きく剣を振りかぶった姿勢の巨人を、ユノは観察する。全身に炎を纏い、古代の貴族のような姿をした炎髪の巨人。その端正な顔

に浮かぶ怒りをユノはしっかりと見据える。歯を食いしばり、顔中の筋肉を歪めて爛々と光る眼を憎しみで満たしている。

その顔から視線を外し、少し離れた瓦礫の上に横たわるアリカを見る。

「復讐者、ね」

3歩、巨人の背後まで移動する。

この巨人が発する熱の範囲はおおよそ30라운の円周。炎の剣を捌くのに必死で気づかなかったが、相当な高熱だったらしい。巨人を中心とした30라운の円内の地面や瓦礫がごとく焼け爛れ、酒の瓶などの硝子は飴のようにぐにやりと曲がっている。ただの人間であれば大火傷で動けなくなっていただろう。

巨人の方に身体向きを変える。両足をつき、これで4歩目。

「アリカに出会う前なら、殺されてもいいと思ってたよ」

静止した巨人に何も語らない。目の前の“仇”を殺すために剣を振るっている。

言葉を聞かせるつもりはない。残り2歩の世界の中での独白。

「殺されてもいい」というのは 偽らざる本心だった。

ユノはこれまで「復讐者」と名乗る人間と何度も対峙したことがある。騎士の男。騎士の女。魔術師の老人。魔術師の老婆。平民に扮した少年や少女もいたか。みんな殺したか、不具にして二度と剣など握れないようにしてやった。

老若男女、様々なその人々の眼には同じ色彩が宿っていた。怒り、憎しみ、憎悪、嫌悪、義憤、悲しみ、虚無感。それらの感情を鍋で火にかけて煮込んだようなどす黒い色。

彼らの多くは復讐がどういったものかを知っていた。復讐は何も

生まない非生産的な行為だ。名誉も利益も発生せず、ただ殺された者の恨みを晴らすという“儀式”と、大切なものが殺され、傷ついた己の心を和らげる為にある自己満足　無駄だ。

復讐したとしても、死者は還つてこない。ユノは殺されても死者を生き返らせることは出来ない。もし死骸が残っていればユノの知りえない神秘的な手段で生き返らせることが出来たかもしれないが、どのみち過去は変えられない。

だからユノはせめて、残された人たちに殺されることでその怒りを晴らせてもいいかと思った　アリカに逢う前の“契約”に疲れ果てて、ただこの世界からの解放を望んでいた当時の浅はかで傲慢な考えだ。騎士たちの遺族に向き合っているようで、自分のことしか考えていない。

「今は、殺されてあげない」

「向月ゆの」はもう「この世界」の住人だ。勇者というゲストではなく、地位も名誉もない漂泊者として生きた2年間でこちらに馴染んでしまった。

セリアという友人も、アリカという「守るべき人」も出来た。

だから、自衛する。自分と自分の大切に思うものを守る。自分のために。

「私を殺したいというのなら」

かちん、と音を立て、魔術銃の銃身が2つに折れる。

歪みひとつない綺麗な円を描く砲身が黒々とした口を開ける。そこにユノの手で放り込まれるのは先程発射されたものと同様、頑強極まりない魔族を殺すために大型化された魔術円筒。

刻まれたルーンが、光を失った世界の中で唯一かがやく。

魔術銃を肩につけるように構える。身体の重心を低くし、右足を前へ。

これで5歩だ。

「……すつごく痛いよ？」

左足の踵で6歩目を踏み、世界に時間を取り戻す。

急速に世界が息をふきかえし、光が戻る。木材と土が焼けた煙のにおいがつんと鼻につく。

巨人は目の前からユノが消失したことに動揺したようだが、すぐに自身に迫る危機を察知したらしい。

敵を見失ったときに最も警戒すべき箇所　背後に剣を振りながら顔を向ける。

そこがユノのねらいだ。

「アアアアッ!？」

巨人が大きな悲鳴をあげる。しかしすぐにそれは言葉にならなくなる。

振り向いた顔の頬に突き刺さったのは“加速”を得て砲弾と化した魔術円筒だ。

刻まれた魔術ルーンは“貫通”と呼ばれる魔術。本来は木の壁を砕く程度の威力の空氣の槍を作る魔術だ。発動に必要なルーン文字も少なく、人間や低級モンスターにはちょうどいいが魔族に対抗するには心もとない、そんな魔術だ。

それが鉄製の円筒に刻まれるとどうなるか？　魔術ルーンは言葉を連ねて綴ることによって効果を増す。円筒のつるりとした表面にはびっしりと同じ文字が円周に沿って刻まれている。

着弾と同時に刻まれた“貫通”が目を醒ます。

「月までフツとべ!」

その原理はスペースシャトル打ち上げと同じ原理だ。

シャトルは宇宙に上昇するのに自分の力ではなく、外部の燃料タンクと補助ロケットブースターによって行う。そしてその後起動操縦システムの操作で噴射されたブースターで宇宙を飛ぶ。

燃料タンクは魔術銃で補助ブースターは内側螺旋状の“加速”だ。そして、発射された魔術円筒に刻まれた“貫通”が“飛ぶため”のブースター。

「！！！！！！？」

再び巨人が悲鳴をあげる。

着弾し、失速してあとは地面に落ちるだけの円筒が再加速する。砲弾が自分の意思を持ってパンチしたようなものだ。

強力な頭部への打撃に巨人が完全に身体のコントロールを失う。危険な角度まで曲がった頭につられて上体が前にのけぞり、司令塔を揺さぶられて制御がきかなくなつた下半身が大地から離れる。ユノから視ると上体をひねり、こちらに顔を向けたまま前のめりに回転している。

ユノはその巨軀が地面につく前に、銃をかなぐり捨てて白兵戦に移る。

瓦礫を一足飛びで越え、体重移動の勢いを乗せて鉄箒手で殴りかかる。クリーンヒット。宙にういた巨人の鳩尾に箒手が突き刺さる。

みしり、と骨のきしみと共に、身体の中の何かが砕けるのを感じた

内臓の感触ではない。石か金属だ。

続けて素早く拳を引き、再度殴打を繰り返す。フック気味のストリート。駄目押しに、踏み込みながら肘で巨人の背中を追撃する。いずれも低級の石ゴーレムなら砕ききれぬ威力を籠めている。

「ゲウウウウッ！！！」

巨人が手をつき、なんとか立ち上がるがそれ以上の行動をユノが許さない。立ち上がった巨人の懐に入り込み、流れるように剣の一撃を叩き込み、脇を抜けて離脱。

踵を返し、一撃を入れて再度離脱　ヒットアンドアウェイ。足を止めて打ち合うことは避ける。この巨人は恐らく「周囲の熱を操る力のようなもの」を持っている。

近くに、少なくとも30ラウン圏内に長くいることは危険だ。

怒り狂った巨人はなんとかユノの姿を捉えようと炎の剣を振るうが、その一撃は易々と避けられる。頭部と身体へのダメージが大きく、せん妄状態でやみくもに振るった刃は目にみえて鈍っている。

ユノが巨人の脇を駆け抜けるたび、その彫像のような肉体に斬撃が奔る。赤みを帯びた白磁のような肌に裂傷が生じ、そこから魔族特有の蒼い血液や脂肪ではなく、赤い光源が見え隠れしている。

（この巨人、魔族でなければ生物でもない　機械みたいなもの？）

巨人の振るう炎の刃を転がって避けながらユノはある程度この巨人の正体を推測する。

魔族と人間は神話を紐解けばわかるとおり、全くの別種族というわけではない。海の生物との同化具合にもよるが、上階級の魔族たちはほとんど人間と同じ身体の仕組みをしている。脳。そこから続く神経。体中を巡る血管。骨。筋肉。肺や肝臓をはじめとする内蔵も同じだ。唯一、心臓、それに類する器官だけが「黄色く輝くもの」に置き換わっているらしい。

それに対して、この巨人は違う。これは生物ではない。

幾度か直接ダメージを　拳で殴った手ごたえなどで判断するとこの巨人の身体の中を占めているものは“石”だ。筋肉は繊維だから砕けないし、内蔵は破裂という表現が近く、骨の感触はもつと軽い。展性（物体が圧力や打撃によって破壊されることなく変形する性質）が極めて少なく、硬度に富む物体だ。

この世界の鉱物に関してそれほど詳しくないユノは石を思い浮かべるほかない。

（その“石”を砕いてもコイツは痛がってる様子もない　とすればこれは弱点じゃない？）

「ナ・メ・ル・ナアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！
！！！！！」

怒りの咆哮と共に振りおろされる剣を避ける。ばけた頭が戻ってきたのか、剣の鋭さが戻っている。

ユノはその一撃を避け、大きく飛び上がり後ろに下がる。長年の相棒であるショートソードがもう駄目になっていた。そうとう丈夫な造りの剣だったが巨人の発する熱で刃が歪みはじめている。あの炎の剣とはもう打ち合えないだろう。腰にもう1本短剣を差しているがこれは打ち合うタイプの剣ではない。

振るわれる炎の波を避け、後退する。

捨てた銃を拾ったかったが無理そうだ。巨人は身体全体から気炎のようなものを立ちのぼらせ、こちらに接近してくる。

追撃を鈍らせるためレザーアーマーの肩口ポケットに収納されたスローイングダガーを投擲する。加護の力を受け、銃弾のような速度で投げられた刃は人ならば即死。眉間や首、心臓の箇所深く突き立ったが効果は見られない。続けて眼と足を狙って投擲するが、剣のひと薙ぎで中空で焼け、溶けて尽きる。

このままではいけない、じり貧だ。

（時間を稼ごう）

必要なのは、ヤツを接近させないこと。

そのまま幾本かダガーを投擲しながらアリカの寝かされた場所まで下がる。巨人にアリカの存在を認識させるのは危険だが、考えたプランを実行するにはアリカに掛けられたユノのポンチョ。その裏側に隠された武器の幾つかが必要だ。

「もう少し我慢してね、アリカ」

意識のないアリカに話しかけ、折れた骨に障らないようにポンチヨを剥き、平らな瓦礫の上に素早く広げる。ポンチヨの内側には頑丈に革で補強されたループ。そこに右から順に組み立て式のリカーブボウ、ルビィと戦ったときに使った鉄鎖の投網、反しのついた二対の短く柄を調整されたトマホーク、腰のポーチに入りきらない数珠繋ぎの魔術円筒、色々な用途に使えるラトウカ（賢者の都パル

メキアのあるギムレー島に自生するつる性植物。細く弾性に優れ頑丈で、日用品から船の建材まで幅広い需要を持つ。代表的な交易品としてカスツールから大陸に流通している。〕で編まれたロープなどが吊り下げられている。

ユノは迷うことなくトマホークとロープの束を手に取り、アリカにポンチヨを掛け直す。

そうしている内にも巨人は大腿でこちらに近づいてきている歩幅から予想して5歩。余裕を感じているのか、怒りの中に嘲りの笑いが浮かんでいる。攻撃が通用しないことへの優越感が、それともユノの後退を怯えと受け取ったか、いずれにせよ全力で走ってこないことは幸運だ。

ロープの結束を解き、見当をつけた長さで切り裂く　ここまでで2歩。

トマホークの木柄に備え付けられた鉄製のリングにロープを通し、固く結ぶ。

巨人が剣を振りかぶるのが見えた　このまま避けなければ、ユノは焼死体になる。

片方の斧にも手早く結び、両手に掲げるように持つ。

巨人が唇を歪ませ、嗤う。

「ドンナコトヲシヨウト、無駄ダ」

「ぎゃあぎゃあうるさい」

渾身の力を籠めてトマホークを投げる。

唸りを響かせながら投げられたトマホークは正面の巨人の両脇を大きく通り抜け　炎の海を越えたところに立っていた燃えかけの灌木に勢いよく巻きつき、反しのついた斧刃が幹に深く突き刺さる。もう片方も同様だ。

それがもし「攻撃」だとしたのなら、大失敗もいいところだ。どんなに争いと縁のない幸せ者であろうと、自分を殺そうと目の前で

剣を振りかぶる敵に向かって斧でも石でも投げつけるのが正解だと思うだろう。

しかしユノが行ったのは「攻撃」ではない、サボタージュだ。

「又ウツ!？」

巨人が大きいのけぞる　胴体に強く喰いこんだロープのせいだ。500ラウン離れた灌木に突き刺さる威力で投げられたトマホーク。それに結ばれたロープは恐るべき速度で「直線になろうとする」その中間に何があるうとお構いなしだ。

40ラウン近い巨体が浮かぶ。投石器から発射される砲丸のようだ。炎の海を越えた瓦礫の上に勢いよく巨人が墜落する。粉塵が勢いよく舞い上がり、ぱつ、と火の粉が夜の空を焦がした。

(かなりダメージは大きいはず、しばらく時間を稼げた)

ユノはプランの成功に確信の笑みを浮かべ、今さら訪れた失血のよるめきと火傷の痛みにも声を漏らす。

致命傷ではない限り“勇者の加護”はユノを可能な限り生かしてくれるが、痛いものは痛い。

重い身体を引きずり、再びアリカの横に座る。

とにかく　あの巨人が目につけない場所に隠したかった。出来るだけ遠い方がいい。まだあの巨人の倒し方も力の全貌も見えてない。はじめにユノとスラッド兵の団を丸ごと吹き飛ばした巨大な閃光と炎。頑丈な家の材木と建材が盾になり2人とも奇跡的に助かったが、奇跡に二度目はない。

荒い息を整え、アリカの応急手当を行う。

腰のポーチの中から包帯を取り出し、ナイフで裂く。折れた骨が肺に突き刺さらないよう固定する必要があった。意識のないアリカを仰向けに寝かせ、胸の下あたり　肋骨の折れている患部の上に軽い木の板をのせる。当て木だ。

「許せない、よね」

眩きながら、包帯で当て木を固定する。

ユノの黒い真珠のような瞳に炎に包まれた家の亡骸が映る。

「何かもかも燃えちゃったよ、服も、金も、酒も、私の好きな青オリーブの塩漬けの瓶も、アリカがはじめた菜園も、蔓棚も、私が作ってあげたブロンズの如雨露も……みんなみんな」

俯いたユノの白い頭が震える。ばきつ、と音がした。鉄籠手を嵌めた左手が瓦礫の破片を握りつぶした音だ。砕いた後も掌は小刻みに震えながら力を籠め、破片を砂粒にかえていく。

そしてその無骨な籠手に包まれた手で涙の跡の残るアリカの頬を撫で、優しくその身体を抱き、火の気のない。燃えた自分の家の亡骸がない場所を探して歩き出した。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月24日

2時20分

ドンテカ、死体置き場と化した役場の前

西の空が、紅く燃え上がった。

その事態は周囲を取り囲む9匹の“兵士”にとって全く予想していない出来事のようにだった。

追い詰められて殺される寸前、刹那に燃えあがった空を呆然と見つめていたルビィとフリード、そしてその背中に背負われたスコルピオは瞬時にそれを好機と見てとった。

「ルビィ！」

「フリード！突破するぞ！」

「……！」

ルビィが目の前で立ち尽くした“兵士”の懐に入り、ショーテルを眼球めがけて突き出す。対応が遅れた兵士は慌てて後退しようとするが、強烈な炎の光に眼を潰されバランスを崩し転倒、馬乗りの形になったルビィに眼を刺され絶命する。

それに対して4匹の“兵士”が錐状の槍を振りかぶるが、それは迂闊な動きだった。

「隙あり」

『ッ！？』

耳元で聞こえた声にルビィに槍を向けていた“兵士”の1匹が弾かれたように振り向く。そこには金属音と共に押しつけられた冷たい虚ろがある。

兜の中の黄色く輝く瞳の瞳孔が窄まる。

どちゅ、と汚らしい破裂音が響く。フリードのピストルが火を噴いた音だ。

連続して起こった仲間の死に固まる“兵士”に時間を与えず、スコルピオの詠唱が紡がれる。

「エクスリブリス・コルタナ五編断章。ライトボール！」

『……！』

下にむけたタクト型の杖から光の球が撃ちだされる。地面にぶつかったそれは誰にも眼を瞑り、顔を背けたルビィとフリード以外に動く暇を与えず破裂する。

強力な閃光が周囲に満ち、“兵士”たちが顔を覆って悲鳴をあげる。魔族の多くは火と光に極端に弱い。これは古くから伝えられる魔族の弱点だ。

人間ならば数秒間目が眩む程度の閃光が強力な武器となる。

「よくやった！あとは寝てろッ！」

喜色満面に鋭い笑みを浮かべ、ルビイが駆ける。豹の如き跳躍。進路上にいた“兵士”がルビイの気配を感じ、身体を変化させて、触手を伸ばすがそれらは容易く切り裂かれる。

光が身体に影響を与えているのか、その動きは緩慢で力がない。

“兵士”の頭上にルビイの影が被さる。月をバックに、双剣を逆手に構えたその姿は蝙蝠の羽を広げた悪魔のようだ。

その気配に我を失った“兵士”は無骨なロングソードを片手に突進してくるフリードに反応が遅れる、致命的に。

踏み込みの勢いを利用して繰り出された刃のひと薙ぎが、上を見あげた“兵士”の首を殴りつけるように切り裂く。

首の半分以上を切断されて無事な生物などいない。筋肉が発達し、並の剣を通さない防御力を持つ魔族でさえそれは同じだ。蒼い血を夥しく撒き散らし、“兵士”がごぼごぼと苦悶をあげる。その叫びは三度押しつけられたピストルのゼロ距離射撃がすぐさま中断させる。

その間に地面に着地したルビイは態勢を低く疾走し、眼を抑えて呻きながら槍を振り回す“兵士”たちの群れを抜ける。ライトボールの光に慄いているうちに離脱しなければならない。光の影響が弱まれば元の木阿弥だ。

フリードもマナ切れでぐったりとしたスコルピオをしっかりと背負いなおし追従する。

向かう先は西。ユノ・ユビキタスの家だ。

「……………何が起こっている？」

残りの“兵士”を振り切り、ユノ・ユビキタスの家の近くまで近づいたルビイは呆然と呟いた。

まるで怒り狂った龍が炎の吐息で一切合財根こそぎ燃やしていた後のようだ。

ユノ・ユビキタス邸は完全に焼失、いや爆裂四散といった表現の方が正しいか　敷地を仕切っていただろう柵だけがここに家が存在していたことをむなしく誇示している。

家の壁だの柱だのが半ば炭と化した破片となりそこらじゅうに散らばっている。

屋根の一部だっただろう木の板が地面に深く突き刺さっているのが爆発の威力を物語っていた。

「……火薬庫が爆発でもしたのか？」

「そのワリには硝石も硫黄の匂いもしませんけどね」

ルビイの横からにゅ、とスコルピオが顔を突き出す。

「普通個人の家に火薬庫はないと思うなあ……」

「うるさいな、言ってみただけだ。」

いちいち細かい魔法使いと副官の一言にふん、と鼻を鳴らしてルビイは元ユノ・ユビキタス邸に近づく。炎は酸素を喰らいながら燃焼し、周囲を煌々と照らしている。

無事でいるか怪しいが　とにかくユノとアリカという女性を探さなければいけなかった。焦りや動揺は注意力を喪失する。そうは言っても「勇者」が「死んでしまう」なんて考えるだけで恐ろしい気分になった。

ルビイにとって、勇者とは憧れ以上の存在だ。

人の誰よりも強く、人を導き、人の誰よりも危険な先頭に立ち、人の為に魔と戦う。それも何の思惑もなく、ただただ純然に世界を救う為に戦う。ルビイにはどれだけ頑張っても無理な相談だ　自分は弱く、人望もない。いつも先頭に立つことを心にかけているが、その側には必ずフリードという「保護者」がいる。

魔族と戦うにしたって、1人では恐怖で足が竦んでしまうだろう。

ドンテカの村内は2人がいるから切り抜けられたのだ。

自分に出来ないこと、自分には無いものを持っている“勇者”はルビイはとても羨ましい。決して埋められない力の溝というのは嫉

妬を呼び起こすものだが　　圧倒的な雲の上の存在に対してはそんな感情は起こらない。

だからこそ　　ルビイは「ユノ・ユビキタス」という存在を人一倍憎んでいる。

勇者なのに罪を犯し、自分の大切な姉を永遠に奪い、償いもせずのうのうと生きている。

ルビイにとって姉のダイナもまた、自慢の姉であると同時に勇者と同じ羨望の対象だった。自分と違い知性と感性に優れ、歌で人を引きつける姉。剣の腕前は当時のランバルディア軍のなかでも五本の指に入り、勇者のそばに並びたち魔王に立ち向かう神の戦士団“エインヘリヤル”の一員として選ばれる。

それをあの勇者は奪った。ルビイの大切な姉を、羨望の対象を奪った。

それも“勇者”という同じくらい憧れている存在の姿をして。

大切なものが、大切なものを奪う。これは堪えた。ダイナの死を知り、その加害者を知った時の荒れようをルビイは自分でも憶えている。両親や家の従者、フリードにも随分と迷惑をかけてしまった。

結局それは心に「復讐」という目標を得て安定した　　姉を殺し、勇者の尊厳を汚した唾棄すべき愚者を斃す。それがルビイを騎士隊長という役職へと上げる原動力となったのだ。

守護騎士団の隊長となれば王族との接点も増える。そうすれば勇者の情報を知る機会も増えるだろうと思ったからだ。

（だが、蓋を開けてみれば　　）

勇者来訪の報を知り、城の庭を訪れたユノの姿を視て、いや、直接ユノ・ユビキタスという少女と関わってルビイの中の復讐心は少しその炎を小さくしてしまった。

自分でもその気分はよくわからない。“契約”が本当に成されていることを知ったからだろうか？勇者、というルビイが抱いていた

イメージと大きくギャップがあつたからだろうか？ただ戦いに疲れ果て病んだその精神を、剣で感じてしまったからだろうか？
分からない。それはルビイには本当によく分からなかった。

（ただ、そう、そうだ）

ルビイは城の庭で戦った時の、ユノの姿を思い出す。

“ いい判断、ハナマルをあげましょう ”

武器を隠したポンチョは風にはためかず、白髪ショートヘアだけが風に揺れている。

ルビイよりも齡が三才ほど年上だというのにその体格は弱弱しく折れてしまいそうに見えた。左手に嵌めた奇妙な籠手が不釣合いだが、己の手のように馴染んでいる。

逆手にショートテルを構え、いつでも飛びかからんとしているルビイに対して、その構えは無防備に思えた。だらりと下げた右手の直剣と左手。普通の戦士にやられれば侮られているのかと激昂するとこだが　その立ち姿には一分の隙もない。

その姿にも戦慄を憶えたが、一番印象に残っているのはその顔だ。

何が楽しいのか、笑っている。かわいらしいとも表現できる造作の顔を皮肉げに歪めている。瞼の降りた黒の双眸。歪んだ口角。どこか少しだけ泣いているようにも見えた。

（そう、あの女は、あの時、泣いていたんだ）

涙こそ流れていなかったが、あの瞳は泣いていた。何かに疲れ、絶望し、後悔していたように見えた。

考えてみれば　馬鹿な話だ。

（結局、自分の気の迷いでしかないな）

顔に出さず、自嘲する。

ただそれでも、声に出して確認しておきたかった。

「……あいつを殺すのは、私だ、私なんだ」

「ルビィ？何か言った？」

フリードが不思議そうに呟く。ルビィの背後について死角をカバーしている。

「いや、なんでもない　とにかく勇者を探そう」

火の手はかなりのものだった。幸いユノの家付近は類焼物がほとんどなかったから彼女の家だけで済んでいるが、もしこれがドンテカを中心だと考えるとぞつとする。

火はどこまでも貪欲に、燃やせるものを自分の身体にくべている。あたり一面が炎の海だ。

ルビィとフリードは舞い散る火の粉から顔を手で庇いながら家付近まで近づく。

まるで炎が行く手を阻む壁のように家の敷地に入らせない。何か奇妙な力が働いているようだ、とスコルピオが呟いた。

「ああ、ちょうどいいところに」

「!？」

どうするか、と考えあぐねていた時、炎の海の間こう側から声がした。

聞き覚えのある声だ。少女としてはハスキーだが、耳に艶やかな声音に、明瞭で淡々とした発音。ユノ・ユビキタスの声だ。

その声を聞いてルビィとフリードは安堵した。

「勇者か、無事そうだなにより……」

そう言いかけて、ルビイは眼を疑った。ユノと思しき人影は躊躇せず、なんの気負いもなく炎の海の中を歩いてきたのだ。

フリードがあとずさる。ばき、と瓦礫を踏み碎いて人影が実体と化す。

炎の海を越えてやってきたユノは 満身創痍だった。

全身から煙と、肉が焼ける嫌な臭いを立ち昇らせている。きれいな白髪はところどころ焦げ、僭称の“灰かぶり”を連想させた。顔の半分近くは火傷で膨れ、片目を半分閉じている。額からは血が流れている 穏やかな顔立ちは“それ”を全く意に介していないことがわかる。それがひどく不気味にルビイには思えた。

白のレザーアーマーは酷い有様で、ほとんど防具として機能していない。黒のアンダーウェアは血と灰が混じりあって死衣のようだ。

「ユノさん、その、腹、は？」

「うん？」

フリードが青ざめながら少女の腹を指差す。家の柱と思しき木片が脇腹を貫通している。かなり時間が立っているのか、血が夥しく流れたあとが着衣を黒く汚している。

炎で逆光になってよく分からなかったが、他にも太腿や肩に爆発で飛散した破片が突き刺さっていた。

「平気だよ、これくらい、はね」

「平気なわけがないでしょう！とにかく止血、いやまずはその木片を抜かないと！」

フリードの背から降りたスコルピオが慌ててユノに駆け寄る。マナ切れがまだ響いて足がふらついている。

「いいよ、そんなのは ええと、名前、なんだっけ」

ユノは駆け寄ったスコルピオや呆然と見つめるルビイとフリードを置き去りにしたまま、その両腕で抱えた大きな「何か」をスコルピオに手渡そうとする。ユノのポンチョの筈だがアニマルハイド製のそれだけは綺麗なままだ。“耐火”のルーンでも織り込まれているのだろう。「何か」はそれに大事そうに包まれている。

自失して受け取ったスコルピオは尻餅をついた。感触は柔らかく、意外なほど重かったのだ。

それもそのはずだ、どこか冷静な心地でフリードは納得した。それは話に聞いていた「ハーフリザードの女性」確か、名前はアリカ嬢 だったからだ。

服はぼろぼろなものの満身創痍のユノと違いこちらは無傷だ。ただ泣きつかれたように、涙の跡を頬に残して意識を失っている。

尻餅をついたスコルピオにフリードが駆け寄り、代わりに彼女を抱きかかえる。体温もあり、苦しげに吐息をついている。生きていた。

「お願いね、肋骨が折れてるから、乱暴に扱わないでね？」

平然と、ユノが言う。顔が逆光で見えづらいのがフリードには酷く怖かった。

それでもなんとかその畏怖を唾と一緒に飲み込み、フリードはなんとか発言する。

「ええ、はい、でもユノさんは、どちらへ？」

その問いに答えず、ユノは3人に顔を背け炎の向こう側を見やる。しばらくして、ぽつりと呟く。

「火を、消しにいくの」

「……火？」

聞き返せざる得なかった。

確かにそれは、理にかなった行動だろう。誰だって自分の家が燃えれば火を消そうと努力する。

だがフリードにはユノがそういったニュアンスで発言しているように見えなかった。

まるで、そう、何か生きたものを命どころかその存在から抹消しようとしているような 怒りを通り越した感情が見えた。

沈静しているわけではない。狂っているわけではない。

それをなんと形容していいのか、フリードは詩人でも文学者でもないから分らない。

ただぼんやりと脳裏に浮かんだイメージとして、幼少期に、アンテローズ領の山の中で一度だけみた夜の湖。木立で月の光にも照らされず、しかしどこからかの得体の知れない光源でぬるりとした感触できらめく黒い水面。

あの逃げ出したいのに背をむければ水面を割って白い女の手でも飛び出してきそうな、気の迷いで素足をちゃんと水面に点ければ最期。水面下に潜む得体の知れない怪物が嬉々としてあぎとを開きそうな　脅迫めいた不安感があった。

止められない、フリードはそう思ったただ腕の中で眠るアリ力嬢をしつかりと抱えなおした。

「お、おい、本当に大丈夫なのか？」

驚愕して黙っていたルビイがためらいがちにその背中に声をかける。

先程の黒々とした思考はショックと共に消し飛び、純粋な心配が口からついてでた。このまま行かせたらきつと死んでしまう。何をするつもりなのか分からないが、死んでしまう。わけのわからないまま死なれるのは、嫌だった。

「大丈夫、なーんにも問題ない、そう何にもたいしたことなんてない」

「……ルビイには目の前の勇者が正気とは思えなかった。このままじゃいけない、とルビイは気を取り直し、また炎の海の中へ戻ろうとするユノの側まで歩く。

「おい、待て私も一緒に」

突然、鼻先に指が突きつけられる。金属に包まれた人差し指。反射的にルビイはのけぞり、あとずさる。

「い、一体なにを」

「まだ“早い”」

黒い真珠のような瞳が、炎に照らされている。
言葉が繰り返される。

「あなたには、まだ“早い”」

「何、を」

「それじゃあ、また後で」

呆然と固まる3人を置き去りにして、ユノはまた炎の中へ戻っていった。

「スルト」は忘れかけていた肉体的な痛みと共に意識を取り戻した。

身体の下の「燃え滾る石」が動くたびにごりごりと擦れあうのを感じた。不快な感触だ。

しかしすぐにそれも気にならなくなる。身体の中から増幅するような熱と共に高揚感だけが彼の心を支配していた。

ダメージは多少受けたがああ勇者はてんで自分に敵わない。小手先で時間を稼いだのがいい証拠だ。猟師が猟銃を失ったらどうするか？それが肉食獣の前だったらどうするか？答えは簡単だ。ぶざまに、みつともなく尻をまくって逃げる。

ぐはははは、と昔なら決してしなかっただろう野卑な笑い声をあげながら、彼は起きあがる。

とてもいい気分だった。今の自分は何もかも「みかえしている」権力を傘に自分と彼女を下品に茶化した貴族も、偽善的な心配で自分の優越感を満たそうとする鼻持ちならない親族も、無関心な国も、何より自分の半身を、彼女を奪ったあの勇者も　今の自分には決

して敵わない。

身体の上に被さっていた瓦礫やら灰をばらと落とし、傍らに落ちた炎の剣　　確かあの小さな魔族は「レヴァンティン」と言っていたか。

まあそんなものはどうでもいい、と「スルト」は大腿で歩き出す。少し離れてしまったがまだ勇者を殺す機会には充分にあるはずだ。今ならば忌々しい魔族どもの行動の制限もなく存分に力を振るえる。もし遠くに逃げようとしていればまた辺り一帯を焼き払えばいいだけだ。「スルト」を造り替えた魔族は力の使用について何かと小言を言ってきたがそんなのは構ったことではない。

どうせこれが終われば、自分は彼女の元へ行くのだから。

「サア、隠レテモ無駄ダゾ？逃ゲテモ無駄ダ……勇者ヨ、何処イル？」

「ここだよ」

なんの前触れもなく、勇者　ユノ・ユビキタスが目の前に現れる。

巨大な籠手を振りかぶり、半身を捻った、痛烈な打撃を生み出す姿勢。

なんの反応をする暇もなく、「スルト」は強かに打ち据えられる。身体の中の「燃え滾る石」がまた割れた。だがどうということはない。この石が自分の身体にある限り、力は永遠に供給される。

砲弾のようなショックにまだ残った「人間の部分」が悲鳴をあげたが、そんなものはどうでもいい。狂った笑いと共に、炎の剣を振り回す。

「ハハハハハ！無駄ダ！無駄ダ！オマエハ私ニ敵ワナイ！誰モ誰モ私ヲ止メラナイイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

「さっきから止めてるけどね」

振り回される炎を、勇者は避ける。その回避は確かに見事だ。軽

業のようでありながら決して地面から足を離さず、滑るように転がるように炎の剣先から紙一重で避け続ける。

もしこれが人間だった頃の「スルト」であれば絶望していただろう。これはなんの冗談だ！と。

「スルト」は嘲笑を籠めて叫ぶ。

『火ノ精霊ヨ！踊り狂工！』

「！」

「スルト」となった彼は人間には出来ない奇妙な能力　精霊を見聞きし、意のままに操ることが出来た。彼を造り出した小さな魔族がわけのわからない講釈をしていたが、全く興味がない。ただ五大元素でいうところの「火」に類する精霊を特に強く操ることが出来た。

周囲に漂う火の精霊が悲鳴のような吐息と共に踊り狂う。まるで乱痴気騒ぎ。周囲の炎が勢いを増し、温度が轟々と音を立てて上昇する。

「ハハハハハ！」

彼は手を広げる。目の前の勇者は何も出来まい。ここはムスperlヘイムなのだから。

自分以外生きのこれるものはいない。地獄のような灼熱の世界。

「燃エロ！燃エロ！世界ノ凡テ、何モカモ燃エテナクナレ！燃エテ燃エテソノ炎ガ天上ニ上ガレバアノ愛シイ女性ハ暖カクナル！体温ガ戻ル！全手元通りニナル！！」

「スルト」は自分の中で2つのものが暴れ狂うのを感じていた。ひとつは「人間」である自分。もうひとつは「スルト」である自分。かたや目の前の勇者を殺し、現実を否定し、何もかも元通りの愛の生活にする妄想とり憑かれ、かたやただ純粹無垢な衝動のまま世界の全てを燃やして灰塵に帰さんとする　破滅の権化だ。

彼を形成しているのはそのふたつの狂気だ。

「くっ」

勇者は苦しげに呻き、後方へ跳躍する。上昇する熱に耐えかねたのだろう。体中から白煙を立ち昇らせ、香ばしい肉の香りを漂わせている。

その事実「スルト」はにやにやと頬を歪めた。

距離を詰める。炎の剣を指揮棒のように振りながら。

「サア、ドウシタ？敵ワナイカ？苦シイカ？彼女ハモットクルシンダゾ、才前ハモット苦シンデ、ブザマニ許シヲ乞ウテ死ンデイクノダ……アノリザードマンノメスモ一緒ニアアアア？？？」

「は」

勇者が俯き、震える。その姿に「スルト」は言い知れない満足感を感じていた。圧倒的な存在を、自分より強い存在を屈服させている。これは人間の頃では味わえない快感だ。

「サア、膝ヲ折って彼女ニ祈レ、ブザマニ、ブザマニ」

「あっはははははは……」

「その場」に似合わない、その行動に、彼は呆然とした。眼の前の勇者は笑っている。

俯いて震えていたのは、無力感に打ちのめされていたのではなく、むしろ、まさか、腹を抱えて、笑っていた？

「あー……」

勇者が顔をあげ、目元を拭うふりをする。可愛らしいと形容できる顔には笑みの色が浮かんでいた。伏し目がちで、どこか憐れんだような奇妙な笑顔。

「こんなに笑ったのは、本当に久しぶりだよ」本当に愉快そうに笑う「ええと、そう、エリーゼもまた随分と、苦労してたのね」

エリーゼ、それは「スルト」の永遠に失われた恋人の名だ。

「こんな、ああ、気持ちの悪い気どり屋が恋人なんてね」

その一言が耳から頭に入り、理解するのに少しの時間がかかった。理解した瞬間、「スルト」の意識が真っ白になった。

「ああ、とっても笑える」

「貴様アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

怒りの衝動にまかせ火の精霊をさらに踊らせる。躍らせるといふより子供がぬいぐるみの首を掴んで振り回している状態に近い無理やり働きかけに精霊たちは悲鳴をあげてブチブチと潰れて死んでいき、精霊がこの世界に生きるのに必要なマナを血のように吐き出していく。

それらのマナは空気を伝い「スルト」の体内で鼓動する「燃え滾る石」に集約されていく。

マナの急激な供給を得て活発化した「燃え滾る石」はオーバーヒート寸前のエンジンの如く振動しながら強力に発光する。活火山のマグマを思わせるような禍々しい灼熱の色だ。

「燃え滾る石」は「外側からでも否応なく位置がわかるくらい」の強力な光を発している。

それを視て　勇者の瞳が半月に歪む　ああ、それか。と声なく口元だけで呟き、形のいい唇に笑みがのぼる。獲物を追い詰めた狩猟者の嗤い。

「私イトオオオオオオ、エリーゼヲ愚弄スルカアアアアアア
ア!!!!!!!!!!」

「スルト」は優男の容貌などもはや微塵の影もなく、眼から火が燃え上がり、口は裂けて口蓋の奥から今にも炎を吐き出さんとしている。

「燃え滾る石」へのマナの供給は臨界を迎え、それに応じて「スル

ト」の前にソーサル・ロウで構成された魔法陣が構成される。人間の魔術師たちが使うものとは違う形体のものだ。紅い光を放ちながら蠢動する魔法陣の中心に強力に凝縮されたマナの塊が膨れ上がる。魔法的なセンスを一切もたぬ者でもわかるだろう。魔法陣の中心の塊に場の「力」が強力に集められていくのが、周囲を包む炎が怯えたようにその火勢を小さくし、大地は震え、瓦礫の破片が地から天へばらばらと浮き上がる。あれは「発射口」だ。数十人からなるスラッド兵の一団と村の区画をばらばらに吹き飛ばすパワーの放出源だ。

直に喰らえば、勇者も「死ぬ」

その為の一撃だ。亡き恋人と自分を侮辱された今、目の前の加害者を甚振ることを取りやめ、終わりの一撃を放つことに決定した。

すう、と勇者は息を吸う。

そして力ある言葉、ワーズ・ワーズを紡ぎだす。

“ やれ進め、進めや進め、我が民よ。留まることは許されぬ、眼の見えぬものは手を使え、手のなきものは前へ出よ、足なきものは手で進め、四肢なきものは歌い給え”

そうウォー・エイジの物語の一節を呟きながら、勇者は「スルト」に向かって歩を進める。

呪文はまだ終わらない。歌のようにか細く、韻律を上下しながら淡々とした抑揚で古代語の呟きが続く。

“ 惑え怯えよ蛇の民、鉄の矛と鉄の剣。その罠に怯え惑えよ。さあ進めや進め、我が民よ、幾千のその身で幾万の愚者を打倒せよ”

「スルト」が動く。精霊から奪ったマナの凝縮に注力しながらも、

炎の剣を振るう。

それはマナの凝縮の完了まで近づかせないための牽制の一撃だった。

しかし、勇者は足を止めない。顔のすぐ横を炎の波が通り抜ける。その様子を理解出来ず、焦った「スルト」が剣を反し、首を両断せんと薙ぎ払う。

火炎の刃が進む少女の首に触れ、炎がその身を覆い尽す。しかし、その身体は淀みなく次の1歩を進めた。

「!？」

巨人の顔に動揺が浮かび、さらに刃を振るう。

炎の波がでたらめに周囲のすべてを焦がす。何発もレヴァンティンの炎を受けた勇者は頭の先からつま先まで炎に包まれている。だがその波の轟音の中でもはつきりと聞こえる、瓦礫を踏みしめる音が彼の思考をパニックに陥らせる。

（何故ダ！？何故コノ剣が効力ナイ！？）

“たとえその身が朽ち果てようと、進めや進め。たとえ大地が割れようと進めや進め、いかずちの旗印の元に。さあ進め、やれ進め、這いずる蛇の首級をあげよ”

人型の炎と化した勇者が、左手を掲げる。高温の炎に包まれてなお、その奇妙な光沢の金属で造られた巨大な籠手は月と炎の光を受けて無感動に輝いている。普通の鉄ならばもう液体と化している温度だ。

そして「スルト」は視てしまった。自らを包む炎の中から、冷然となんの感情もなくこちらを見やる勇者の瞳があったことを。そして「スルト」は幻覚を視た。眼前で弱弱しく歩を進める勇者の背後に、幾万もの戦士たちが血に濡れた剣や槍を手に、行進を進める姿を。その視線の先はすべて自分だ。憎しみも殺意もなく、ただ

ただ理解不能な光だけを湛えてじりじりと包囲を狭める姿を。

“さあ、進めや進め、我が民よ、這いずる患者の首級をあげよ”

「ウ、ウ、ウガアアアアアアアアアア！！！！！」

魔法陣がたわみ、凝縮されたマナの塊が激しくぶれる。使用者の動揺をもろに影響に受けて、不完全な形でソーサル・ロウの術式が停止してしまった。しかしそんなことに気づかず、眼前の勇者と背後の軍勢に怯えた「スルト」は力を解放する。

閃光！

凝縮されたマナが一気に弾け飛ぶ。指向性を持つその放出は「スルト」の前方に放射状に広がり、猛烈な爆炎と閃光を撒き散らし全てを吹き飛ばす。

まるで白の絵の具をぶちまけたような有様だ。炎と光の波に包まれた瓦礫とおぼしき影は宙高く空を舞い、高温であとかたもなく消滅する。先の爆発のあとでもしぶとく燃え残っていた低い灌木もまた根を生やした土ごと天高く舞い、大地と永遠に死別する。

[illegible]

そんな暴虐な力の放出がしばらく続き、唐突に出力を弱めて辺りに夜の闇が戻ってくる。

力を解放しきった「スルト」は疲弊したのか、もう存在しない心臓のあたりを抑え、呼吸を荒げている。なんとか息を整え、跡形もなく消えたであろう勇者の消滅を確認しようとする

がしつ、と首元が掴まれた。

「……エ？」

「スルト」は全ての思考を停止し、ただ自分の喉元にかかった女の腕を見た。

これは右手だ。ところどころ被服が破れ、白い肌を露出している。白い？火傷を負っていない？ただ白煙だけがその肌から上がっている。

「……つかまえた」

ぞぶり、と肉の埋まる音と共に、「スルト」は胸に異様な痛みを憶えた。

「……つかまえた」

ユノは途切れそうになる意識をなんとか繋ぎとめながら、呟いた。身体が鉛のように重かった。短い時間で“勇者の加護”を使いきった後遺症が出始めている。ユノは一度勇者であることを完全に捨ててしまっている。自分の精神に問題があるか、それともドンナーが「壊れた勇者」に呆れ失望し、もう見捨てているかは知らないが「向月ゆの」であつた頃と比べて自分は弱くなっている。勇者として。

それでもそろそろこの乱痴気騒ぎを終わらせなければならない。

「グアアアア……！？」

弱点の推測はどうやら当たったようだ。胸の中心から抜き手で差し入れた手が、固い感触をもつ「何か」を掴んでいる。それは石に酷似しているが絶え間なく熱を放出し、生物の内蔵のようにびくびくと脈動している。石のような内蔵。内蔵のような石。どちらにせよ、これを掴んだことで巨人の身体から力が抜けていつているのが分かった。

「エリーゼは、確かに素敵なひとだった」

この巨人が聞いているのかわからないが　ユノは呟く。

「もし、この世界がただのファンタジーだったなら、エリーゼみたいなひとが勇者って、そう呼ばれたんだろうな、そう思ってた」

手の中の石がびくびくと蠢きながらなんとか籠手の中から逃げようとがいている。ぐ、と力をこめてそれを抑える。弛緩した巨人の五体が痙攣した。

「けど、エリーゼは、きっと正義感が強すぎた。まるで炎みたいだった。際限なく燃えて広がって、何もかも燃やしてしまう。あの日、あの場所で、エリーゼはそうなってしまった」

そこで言葉を切り、ユノはむなしく笑う。いい加減灰と煙で潰れた喉が痛かった。

「それが私にはとても　気持ちが悪かった」

ごぼつ、と音を立てて、籠手を石ごと引き抜く。巨人の体内からは血は結局一滴も出ず、かわりに小さな火の粉が雪の粉のように舞った。

左の手の平を開き、この巨人の核になっていた石を視る　魔族語の力ある言葉、ソーサル・ロウがびつしりと刻まれた小さな石。それは心臓のように脈打ち、ユノの手の平から逃れようともがいている。

音を立てて巨人がくずおれる。出来すぎた彫像のような五体に罅がはいり、急激に風化していく。巨人はその様子を呆然と、形を失っていく自分の両手を眺めている。

「許して、とは言わないよ。あなたには恨む権利がある……恨み、私を殺す権利もある」

「けど」

「私にはこれからやらなきゃいけないことがたくさんある。みんなに会って、謝らなきゃいけない。セリアとの約束を守らなきゃいけない。アリカを守らなきゃいけない。だから今も、これからも、死ぬわけにはいかないの」

手に力を籠める。ばきばきと音を立てて石が砕けていく。やはり普通の石とは違うのか、握った手の中から零れた破片が宙に溶けて消えていく。

「浅ましいけど 私は私を優先する。だから」

ばきん、と手の中の石が砕け散る。それが最後のひとかけらだった。

「死ね」

巨人が消えていく もう人の形を成していない。胸の中心から壊れ宙に溶けて消えていき、もう残るはわずかな肩の輪郭とその優男風の顔だけが残っている。

その顔は、火の気配も怒りも憎しみも抜けて、ただの青年の顔のように見えた。どこか弱弱しい印象を受ける青年貴族の顔。きつとどこかの社交界で頑張って彼女を口説いたのだろうな そんな風に思える顔だ。

青年の口が動く。もう声帯も失って声は出ない。だが、空を見つめながら何事か呟いた口は緩慢で、はつきりとユノにも読み取れた。

「エ、リー、ゼ……………」

「あ
」

ユノの意識はそれ以上続きそうもなかった。限界がきていた。力の消耗はもろに身体にダメージを与え、今にも瞼を閉じてしまいそうだった。意識を失うことの快楽がそこにあった。

どさ、とユノは仰向けに倒れる。ごほつ、と咳が肺からとび出した。咳とともに口から鉄の味がする液体が滴り落ちた。しかし鉛のように重い身体はもう指1本動かず、口を拭えそうにもなかった。（ああ、もう、勇者じゃないもんね）

いつの間にか夜が明けそうになっていた。巨人の消失と共に周囲を包み込んでいた炎は勢いを弱め、今にも消えそうだ。ただ未練がましく瓦礫や墨と化した材木の表面でくすぶりつづけている。

遠くの方で、がしゃがしゃと騒々しい音を立てて誰かが走っているのが分かった。瓦礫を蹴散らす鋼鉄製のブーツ。軽い、猫のような体重の移動。これはきつとルビィだろう。いつかユノ・ユビキタスを殺してくれるかもしれない少女。

少しづつ近づきつつあるその音を聞きながら、ユノはゆっくりと意識を失った。

悪夢

これは夢だ、とユノは冷めきつた気分です。ひとりそう思った。顔に降りかかる雨はぬるく、血の味がする。

ユノはぼんやりと、どこかの橋の上で空を見上げていた。

陸と陸を繋ぐ簡素な木づくりの橋。目の前に流れる川は雨を飲み込みながら、少しづつ朱けに染まりつつある。

川の両端にはねじくれた木が群生し、その一部が今にも川に身投げしそうなほど頭を傾いている。

それは雨の重みせいでなく、木の中ほどに引つ掛かった死体のせいだ。白い肌を持つ、それ以外人間とかわりのない魔族軍兵士の死体。矢で貫かれた腹部からは青い血がしたり、川に1本の黒い線を引いている。

蛇が描かれたミズガルズの黒と金の旗が、川の中腹にある岩に留められている。

あれだけ恐ろしかった軍旗も、掲げる者がいなければただの塵芥だ。

ああ、憶えている

ここは、村だ。あの村に続く橋の上。西部の沿岸にほど近い森林地帯を抜けた先、撤退する魔族軍の一群を追跡し、見つけた村だ。

それは一見、普通の、よくありがちな住民を永遠にうしなつた村にみえた。

魔族に蹂躪しつくされ占領された西部アリストピア領には人間はひとりも残っていないかった。人間だった残骸か、モンスターの「食糧」になつてしまった食い散らかしがのこるばかりだった。

しかしそこには、人の、否、生きている「なにか」の気配が感じられた。

“ どうします？ゆの様 人など生きているとは思えませんが ”

“ さきほど排除した連中の生き残りでしょうかね、それか捕虜の可能性もあるか ”

“ 莫迦な、これまであの残虐な連中が人を生かしたままにしていたかね？可能性として低かろうそれは ”

“ 希望はもつべきではないですか 卿 きやつらめから逃れた人々が居ると ”

“ フン、あのバケモノどもが地上にひとかけらと存在しているかぎり、我は希望など持てんな ”

そう会話し、指示を仰ぐエインヘリヤル達になんて言ったか
ユノは口を歪め呟いた。

2年前の、今より少し小さい背中を持つ「向月ゆの」と声が重なる。

「 みんな落ち着いて、とにかく偵察を出しましょう 」

ぱちっ、と何かを切り替える音がして、眼を開いた瞬間にユノは村の中にいる。

つつましい規模の農作と林業で成り立つ名もない村、きっと人が居た頃のアリストピアでも交易商が立ち寄るたぐいの村ではなかっただろう。

またこの「夢」がなにかを見せ、ユノを責めようとしているのか、そんな風に思い、少しだけ待つ。

ざあざあとする不快な雨が黒い泥を跳ね上げている。

「なにも、ナシ」

今回の「夢」は特になにも見せるつもりはないらしい。

いつもはこの村で殺した騎士たちに怨嗟の声を投げかけられているか、騎士たちが逃げ惑う魔族の民を惨たらしく殺していく様子を見つめているか、それが壊れた「向月ゆの」が淡々と騎士を殺していくさまを見せつけられるか。この村でエインヘリヤルたちを殺して2年。そんな光景をユノは繰り返して見続けている。

慣れた様子でユノは村の中を歩き出す。

魔族の村はおおよそ人が使っていた村を自分たち向けに改装したものだった。

村の通りの屋根と屋根の間には隙間なく黒い布が大きく張られ、強い日の光を遮るようになっていた。

そうして光を遮った場所には手掘りとみられる泉が点在し、そこには黒い、人の感覚には不快に感じる瘴気を放つ水が満たされている。その水場は「ズール」と名づけられ、人間にとっては周辺を魔族が通っていった痕跡として扱われていた。

「ズール」は人間には得体の知れない 珊瑚や魚の鱗、ヒトデをモチーフにした装飾で飾られ、水源の中央にはスイレンに似た水生多年草が生えている。

魔族にとっては「ズール」はなんなのか？それは魔族文化の研究者ではないユノにはわからないが、この「夢」で冷静に村の中を観察するようになってこの「ズール」は魔界 つまり海の底、深海の空気をもたらすものなんじゃないかと思うようになった。

深海の空気、なんとも可らしい字面だが魔族にとっては海が永く

住み慣れた世界。人が水の中に入って息が出来ないように、魔族もまた地上では空気が吸いづらいのかもしれない。

それが真実かそれとも魔族に入れ込みすぎた狂人の妄想か？
きつと、それはどうでもいいことだ。

暗く遮られた村の中をユノは歩く。天に張られた布は日よけにはなっても雨は防げず、遠慮なくユノの首すじや鼻先に垂れて落ちた。夢の中でさえなんとも冷たい。

（ああ、そうこの辺りだった）

村の通りを抜けた、広場。そこで「向月ゆの」は彼女に手をかけた

“ねえ、ほら、視て下さいよユノ様、こいつらこんなに、こんな人並みに苦しんじゃってる！人じゃないのに、真似っこしてるだけなのに！”

村の中央広場、「向月ゆの」の指揮を聞かなくなった騎士たちは村々に思い思い散り、これまでの復讐を愉しんでいた。

それは、ソーサラーの放った妖術に貫かれた領民の為だった。

それは、純粹な正義感の爆発だった。

それは、魔王に操られたモンスターに妻を喰われた夫の私怨だった。

それは、サディスティックな感情の発露だった。

それは、魔族の軍勢に捕まり“戦利品”に加工された同胞の代弁だった。

ここに居る　彼女、エリーゼ・ブリミル・フォンブラウンもま

た魔族狩りを楽しみ、見ていて哀れなほど怯えていた。

エリーゼは綺麗な女性だった。

芯の通った高い鼻に雲ひとつない空のような碧眼。健康的な赤味を帯びた頬にはよく笑みが浮かんでいた。

すらりと頭身は高く、身体は優雅さを失わない程度に鍛え上げられていた。

ユノは彼女と並ぶとちよつとだけ自尊心が傷ついた。

「にほんじん」である自分とランバルディア人のエリーゼの美醜を比べるのは無意味な話だが、それでも同じ女性とは思えないほど綺麗で、男らしかった。

そう、彼女は男らしい雰囲気を持つ女性だった。貴族の女性のなよなよと気取った雰囲気もなく少年のような朗らかな性格だった。

よく社交界に男装して参上し、きゃあきゃあと大貴族の令嬢の方々を騒がせたと自慢していたか。

健全な肉体には健全な精神が宿るのか、空のような碧眼には正義感と自信に満ち溢れ、実力もあつた。もし彼女が勇者だったなら、それはきつとよく似合っていたことだろう。

勇敢で優美な颯爽たる女勇者。

でもその印象は、彼女が自分を守るために作りあげていた鎧なのかも知れない。

エリーゼは広場の中央にある物見やぐらの上にいた。火事を報せる半鐘はむなしく木の板で作られた足場に横たわり、人がいたころには真鍮かブリキの風見鶏でもいたかもしれない屋根はばらばらにやぐらの周辺に散らばっていた。

エリーゼは赤い、顎のラインで切り揃えた髪をかきむしり、狂気じみた独り言を喋りながら柵にロープを巻きつけていた。頑丈な登攀用のロープ。それは本来の用途で使われていなかった。

（ああ、ここで一度、吐いたんだっけ）

柵と結び付けられているものは、魔族の老人だった。1人だけで

はない。白い肌と黄色い瞳を持つ、男、女、老人、他にもいたかも知れない。

物見櫓は、絞首台へと変わっていた。痛めつけられた魔族の民は最後はここに運ばれ、彼女の手によって櫓から落とされていった。

吊るされたものには手足がないものもいた。腹を一字に切り裂かれ、内容物をぶらさげているものも。

いつのまにか横にいた 地面に胃の内容物をぶちまける「向月ゆの」を無視して、ユノはやぐらの螺旋階段を登る。階段の中ほどで吊るされた魔族の男と眼があった。

ぱくぱくと口を開いては閉じていた 人間より生命力の高い彼らは死ぬまでに時間はあった。

やぐらの上では、ぶつぶつと何かを喋りながらエリーゼがしきりに頭を抱えていた。

その顔はひきつった笑いで固定され、眼からは涙が溢れていた。落ち着きなく動く碧眼は何を視ているのか、それとももう何も視なくなってしまったのか。

“ ああ、違う。こんなの違う。こんなこと私は望んでいなかった ”

“ でも、でも、嫌だ。ああ、嫌だ。憎い、こいつらが憎い。魔族が憎い！魔族は悪だ！！ ”

ユノは左の拳を握りながら、彼女の方へと歩き出す。

もはや身体の一部と化している“グラーベルの鉄籠手”の感触がひどく頼もしかった。

こんな最悪な夢の中でさえいつものように安息を与えてくれる。冷静な鋼鉄の保証人。

“そう、悪だ！こいつらは悪だ！それなのに、こいつらは何？こんな、こんな顔をして、嫌だ、違う　悪は滅ぼさなきゃならないのに！”

ユノは拳を振りかぶる。

彼女にとって　魔族とは常に強大で、邪悪な存在だったのだ。魔王という象徴に率いられる極悪非道な、良心のかけらもない存在。そんな存在を打倒するため、地に平和をもたらすため、エリーゼは自分の中の「正義」に従って戦った。本当に、よく戦ってくれていた。

けれど、エリーゼは清廉すぎた。

彼女は村の中で魔族の「日常」を見た。人と同じように暮らし、開墾し、笑いあい、親と子で団欒し、恋人同士で愛を育み、幸せを謳歌する。そんな光景を視てしまった。

追い詰められ、傷つきながらもここが最期とばかりに退かなかつた魔族の死兵たちの真意を知ってしまった。

自分の姿を視て、まるで「魔族」にでも襲撃されたかのように怯え、逃げ惑う「魔族」の姿を視た。子供を抱き、必死に庇い続ける母親の姿を視てしまった。殺された恋人の亡骸を、半狂乱になって引き摺る男の姿を視てしまった。

それが、彼女が信じ、何もかもが尊い犠牲として吹き飛んでいく戦場の中で頼ってきた正義に、致命的な罅を入れた。

“ねえ！教えてくださいユノ様！こいつらは悪？私は本当に正義？こいつらは本当に魔族？私は本当に人間？私が、わたしが戦ってきたものは本当に”

拳の先に突き刺さる感触は軽く、現実感のないものだった。

腕を広げ、涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら笑うエリーゼの幻影が消える。それは当たり前のことだ、これは夢にしか過ぎないのだから。

脳も臓器も骨も筋肉も存在しない、自らの脳味噌が創り上げた幻影にしか過ぎないのだから。

（この夢を見始めた頃 何度やり直そうと思ったっけ）

この夢を見始めたころ ユノはこれを過去への逆行と勘違いしていた。過去の過ちを正せる、夢のよう奇跡。ここで自分が正しく動いていたなら、心折れず勇者のままでいられたなら 未来は、いや、現在が変わるかも知れない。

きつと「あちら」で普通に学生をしていたところにそんな内容の本でも読んでいたんだろう。

けれどどれだけ必死になって村々を駆け巡り、魔族を責め立てる騎士たちを説得し止めようとして失敗し、それでもめげずに足掻いても何も変わらなかった。

いつも終わりは唐突に訪れ、何も変化のないまま汗だらけのベッドで目がさめる。

何度も何度もそれを繰り返しては泣いて、胃の中のものを吐き出して、それを「夢」だと冷静に受け入れた。そうすると途端に夢は現実感を失い、つまらない「えいが」に品を変えた。

黒い破片となつてばらばらと崩れていくエリーゼだったものを見送り、ユノはやぐらから空を見上げる。

「この夢、何度見続けるんだろう、私」

その答えはまだ、ない。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月26日

13時45分

昼下がり 砂ばかりの荒涼な大地の上で、せわしく動く集団がある。

彼らが動き回るたびにがちゃがちゃと甲冑の板と板どうしが擦れあう金属音がかすかに鳴り、砂海の静寂をわずかに乱す。

けたたましい喧騒に踏み散かされた大地の砂が空気の中に舞い上がり、ひとり不機嫌そうに座る少女の鼻腔をくすぐった。

「隊長、陣地の設営終わりました！」

「よろしい、しばらく待機。では次は渡航者への検問設置の件についてだが」

「おい、ウィンストン。工兵が薪とロープが足りないと報告がきているようだ……」

「エルムトの者達がドンテカの村人たちを弔いたいと？ 駄目だ、適当な理由をつけて追い払え、ロスクヴァのものに紛れさせるなよ！」

「うー……」

「いらいらしてもしょうがないよ、ルビィ」

親子のような身長さの2人の騎士 “アンテローズの赤薔薇”のルビィと自由騎士フリードは手持ち無沙汰で急設されたランバルディア軍の基地内にいた。

適当に引っ張ってきた椅子に座ったルビィは大腿を広げ、その膝にひじをついて不機嫌そうな顔を支えている。その横に佇むフリードは常体の黒い甲冑姿ではなく灰色の薄いチュニックに身を包んで

いる。“兵士”の攻撃で鎧の背甲が破損したのだ。幸い、到着した国軍の中に鎧鍛冶がいたので修理させているところだ。破損自体は致命的なものでもない。昼過ぎか夕方前には鎧としてよみがえるだろう。

ルビイはフリードの言葉に答えず、頬の古傷をぼりぼりと掻く。険しい少女の視線の先にあるのはせわしなく基地の設営を続ける兵士たちだ。

もちろん“兵士”とは違う。人間の、ルビイとフリードにとって馴染み深いランバルディア正規軍の兵士たちだ。

ランバルディア正規軍 文字通り大陸の東南部を領土とするランバルディア王国によって編成された軍隊だ。広大な農作地と鉱山を背景に、大陸ではもっとも規模が大きい。

規模だけでなく装備もまた充実している。優れた製鉄技術と市井の職人たちによって生み出される良質な武具に、豊富な火薬 火薬とは昨今の戦争においてなくてはならないものだ。

先天的な素質と教養が必要となる魔術と誰にでも扱える火薬では単純な優位性は火薬のほうが高くなる。

ランバルディア、エルムトそして今は亡きアリストピア。この三大主要国の中で現在唯一平民の兵士に過不足なく銃器が行渡っているのはランバルディア正規軍のみだ。

（それでも、魔族に対抗するには足りない。足りなさ過ぎる）

ルビイは昨夜の惨劇を思い出し、そばにいるフリードに気づかない程度に身を固くした。

昨夜、ルビイたちは本当に運が良かったのだ。

結局 ドンテカは魔族に滅ぼされた。

生存者はルビイたち4人を含めて8名。運よく最後まであの“兵士”たちの嗅覚に引つかからなかった平民の夫婦にその1人息子。徹夜で火の番をしていた鍛冶見習いの青年。あとはルビイはよく知

らないが、偶然ドンテカに滞在していたらしい凄腕の冒険者“ハツカペル” 4年前の魔王戦争のうちに魔王の魔力によって使役された巨大モンスター“マツナガラム”の撃退に一役買ったといわれている。

もつとも、彼はランバルディアの国軍がドンテカに到着するより先に村を離れたらしく、戦ったあと リーネルネの王城の柱よりも太い鉄棍によって上半身まるごと叩き潰された数匹の“兵士”の死骸によつてはじめて彼の滞在が確認されたという。

只1人、身に降りかかる粉を振り払って村を離れたということらしいが 昨夜の地獄を体験したルビィにとつてはにわかに信じがたい話だ。

それ以外、運よくも生き残り今日の陽を浴びることの出来た者以外はどうかだったかというところ 思い出すだけでルビィは胃の中の内容物が逆流するのを感じた。

ひとことでいえば、死んだ人間の末路のすべてはドンテカ中央の村役場に収められていた。

その様子を表現すること自体は非常に簡単だ。人間の、刺し貫かれて内臓のとび出した遺骸が、なんの尊厳もなく肉屋の軒先のように吊るされていただけだ。

調査に居合わせた数人の不幸な兵士が胃の中のを吐き戻したようだった。

そして今ルビィたちが何をしているかというと 何もしていない。

急に火勢を弱めた炎の海の中に倒れていたユノを回収したルビィたちは、とにかく火の気のない村の外へと移動した。

意識を失い、満身創痍といってもいいユノと包まれたハーフリザードの女、アリカ・マイルズを抱えてルビィたち3人は途方に暮れ

ていた。

頼みの綱である勇者は満身創痍で意識を失い、まだ残留した魔族が生存者を探して動き回っているかもしれないからだ。

そのとき炎で照らされた南の空にあきらかに鳥とは異なる巨大な影が現れた。

すわ新手法と身構えたルビィだったが、それはランバルディア国軍が誇る飛翔竜騎部隊「ワイバーンライダース」の哨戒騎だった。

亜竜　ワイバーン等の動物的な竜を操る彼らは、地を這い回り泥にまみれる地上の兵士たちにとって救いの神となることが多い。

ドンテカの異常を察知して駆けつけた竜騎士に簡単な報告を済ませたルビィたちは1日ののち到着した国軍と合流し、今に至る。

簡単な状況の説明（説明が容易に済んだのは、村に取り残された“兵士”の遺骸や村役場の死体置き場などがあつたからだ）をしたあと幾つかの報告と負傷者　満身創痍のユノとマナ切れで渴望状態に陥ったスコルピオ、意識をうしなつたアリカ・マイルズを軍属の療養院に収容し、その後ルビィたちは暇をもて余している。

中央から派遣された守護騎士団の2部隊と、エルムトその他他国への警戒を努める辺境領から出撃した騎士団と兵隊が崩壊したドンテカの周囲に展開しているがユノ・ユビキタスの旅への同行を理由に一時守護騎士団の隊長職を解任されているルビィとフリード、そして本来表に出てくることのない密使であるスコルピオは守護騎士団にも、領主騎士団にもその下に仕える正規兵隊にもなんの権限も持たないのだ。

ある意味今の立場は　閑職に追いやられているといっても過言ではない。

そのせいでルビィはさきほどから少し不機嫌になっている。

「大丈夫かな、ユノさんとアリカさんは」フリードが腕を組みながらそう呟く。

「……」

ルビイはぼうつと何かに考えを巡らしているようなフリードに一瞥をくれると、その視線の先　ロスクヴァ教会の雌羊のシンボルが刺繍された布の仮設療養院へ目を向けた。

ロスクヴァ教会とは主神ドンナーに仕える兄妹の召使いの妹、ロスクヴァを信仰する教会だ。兄であるシアルヴィが勇敢な心と旅の安全を守護し、ロスクヴァは献身と慈悲を司る。大陸の広い範囲でほぼ無償の療養院を開いている。

所属する信奉者のほとんどは“魔術”による恢復術を学び修めたもの　ヒーラーの女性だ。

戦いに日常的に赴くものであれば足を向けて寝られないというのが一般的な、ルビイにも同じことがいえる認識だ。

今この場所でも負傷者や気分の優れないものの治療や診察。昨日の惨劇で死んだ村人や冒険者たちの弔いと埋葬にと慌しく働いている。

今視線の先にあるテントの中では、昨夜から意識の戻らないユノ・ユビキタスが眠り続けている。

（まだ、早い、か）

ぎし、と鉄材で組まれた軍用イスに体重を預け、昨夜のアリカ・マイルズを抱え現れた彼女を思い出す。

顔の半分を覆う火傷。燃えて焦げた白髪。至るところに生じた裂傷と打ち傷。先端からどす黒い血の滴り落ちる身体を貫通した木材。そして、それらをまるで意に介さない、穏やかにもみえる双眸。その月のような瞳の中に何が満ちていたのか、ルビイには想像がつかない。

ただ、そう、印象深いのは「まだ早い」というその言葉だった。

（わたしはまだ、届かないということだろうか）

人ではない。魔族という埒外存在に立ち向かうには。

「！」

「ど、どうしたのルビィ？」

突然立ち上がった隣の少女騎士にフリードはびくつと身体を竦める。

「少しあの女の様子をみてくる」

「え？イスラ様が先程到着されて、セリア様から連絡事項があるって」

「かわりに聞いておいてくれフリード」

えー、ちょっとおと狼狽しながら追いかけてくる大柄な騎士から足早に逃げ去りながらルビィはぐ、と家紋の刺繍されたグローブの下で拳を握る。

（わたしは、知る必要がある）

昨日の戦いの中で、ルビィはひとつの現実を思い知らされた。

今の、今ここにいるルビィ・ギムレット・アンテローズでは魔族に勝つことはできない。

仲間の支援を受け、これまでの経験を総動員してようやく“兵士”を2匹。戦っている最中は高揚していたが、朝がきて冷静になりその情けないスコアに愕然とした。

これから自分はおよそ今回の数段は過酷な「魔族との戦い」へと乗り出すのだ。5人の勇者が消息を絶ち、西へと向かう最後の勇者が狙い済ましたように襲撃された。

もはや心配性のセリア姫のいつもの杞憂、という可能性は吹き飛び、魔族がなんらかの暗躍を画策。いや、もう「している」可能性が浮上した。

ドンテカの村内を搜索したさいに幾つかの建物の中で明らかに人間以外の、モンスターでもない要因で殺害された遺骸が発見された。

それは昨夜の惨劇よりずっと前に作られたもので、多くは白骨化して身元がわからないようにされていた。

決定的な証拠となつたのは同じ部屋で発見された怪しげな、地上のどこにもない石で彫られた小さな彫像。

その姿はドンナーやその親族に類するものではなく、頭に珊瑚の冠を戴いた半人半魚　　マーメイドの女を模つたものだつた。

半人半魚という極めて魔族に近い生態を持つマーメイドたちは魔族との永い間の盟友だ。

魔族に比べて身体能力は低いが人間に近い知力と高い擬態能力を持ち、戦時中などに捕らえられた間諜の多くはマーメイド族だつた。その、人間にとつて忌まわしい種族を模つた彫像はこのドンテカに少なくとも数ヶ月前から擬態した魔族、もしくはその信奉者が滞在していたことを示していた。

ランバルディアの国民にはまだその事実が伝えられていないが王族をはじめとした国家の中枢部は今頃大騒ぎしている頃だろう。

絶対的な安全圏であるはずの今の時期、今の首都に魔族が潜み、今に自分の命や領民の命を狙っているやも知れないのだから。

（そして、居るんだ、西には、アリストピアには！）

間諜という「枝葉」がいるなら必ず「根」は存在する。それはこれまでの戦争の終わりと違い、敗走を装い地に根を巡らせ、ずっと反撃の機会を窺っていたのだ。

今回の5人の勇者と中央との途絶も、ドンテカへの襲撃もまだ実つた果実の一部にしか過ぎないのだ。

これから、本格的に魔族は攻勢に出てくるだろう。

それに少しでも対抗する　　先手を潰すのがユノ・ユビキタスとそして自分たちなのだ。

「絶望してなどいられない。戦いの手段を、届くための術を

」

自分はあの勇者に教わらなければいけないのだ。

「ああー、いつちゃったか……」

フリードは姿の見えなくなったルビィを追うのを諦め、どうせ行き先は分かるからいいよねとひとりごちる。

資材袋を運搬する兵士やドンテカ周辺の地図の束を抱えて走っていく事務官の間を器用に縫いながら、フリードはもとの場所に戻った。

「ん？」

「おお、あー、1週間ぶりだなフリードリヒ自由騎士“隊長”」

「……えっ？」

ルビィとフリードで適当に溜っていた場所に佇んでいるのは見慣れた騎士姿の3人。ランバルディア守護騎士団団長イスラ・ウルズ・アンゴーシュと、ルビィ率いる（といっても元だが）騎士団第6隊に所属するケリー・ジェーンとスコッチ・ロズル・ビファイターの2人だ。

ケリーはフリードと先輩後輩の関係にあたる新鋭の自由騎士だ。好奇心をむき出しにした緋色の瞳に愛嬌のある丸顔。細いみつ編みにくくった髪とそばかすが「そのへんのパン屋の看板娘」のような雰囲気醸しだしている。

しかしその技量は確かなもので、モンスターの撃退や盗賊団の鎮圧などを担当する銃兵隊に所属し平民志願兵とは思えないほどの狙撃スコアを記録したという。

フリードもいくらか彼女の銃の腕前を見たことがあるが、おそらくランバルディアでも5本の指に入る名射手だろうと認識している。そんな事情もあってかケリーに与えられたのはフリードなど通常の自由騎士が所有する「黒騎士ピストル」ではなく、完全に彼女専用寸法を調整されたワンオフの「ボルトアクションライフル」だ。

現在正規軍兵が採用しているフリント・ロツク（火打ち石式）のマスケット銃とは比べ物にならない精度と威力を誇っている。

ちなみにユノの持つ“ニザヴェリルの魔術銃”はドワーフたちの人間には埒外の技術を使ったもので、比較の対象にならない。

今はフールドが焼け跡から掘りおこして背中に担いでいる。

にこにこいつもの笑い顔で会釈する横で、スコッチはいつものように鉄面皮で直立不動の礼をしている。

スコッチ・ロズル・ビファイター。古くから王都の警備などに携わってきた名門の跡取りだ。

神経質になでつけた髪に細いフレームの銀縁眼鏡。身体は細く、手足も長いせいでどちらかといえばひ弱な印象を与えるが騎士としての能力は問題なく優秀で、騎士学校の教育課程も主席で卒業している。

本来なら“問題児騎士団”　つまり上官であるイスラなどに平然と暴言を吐いたり、武者修行と称して同期の騎士を襲撃してねじ伏せたり、モンスターの巣窟と化し近隣の住人に被害がでていた廃坑を外側からまるごと爆破したルビィをはじめどこかしら問題のある騎士達が集まる第6隊にはまったく似合わない人材だ。

少なくとも、書類上の成績で判断するなら誰もがそう思うだろう。だが外見は立派な騎士に見える彼もまた立派な「問題児騎士」なのだが……。

「なにか、こう、不穏な言葉が聞こえましたよ？ イスラさま？」

「ん？ 何がだ、フールドリヒ自由騎士“隊長”」そしらぬ顔でイスラが言葉を繰り返す。

「それですよ！」びし、とイスラの人の悪いにやけ顔に指を突きつける「な・ん・でボクの階級が4つも上がってるんですかっ！？ 2階級特進でレベルじゃないですよ！」

「ヒラから一気にたいちよーですもんねー、驚きますよねー」イスラの後ろでへらへらと笑いながらケリーが呟く。

「正式な辞令が今頃アンテローズ領の邸宅に届いていることでしょう。おめでとうございますフリード自由騎士長」淀みのない早口でそうスコッチが謝辞を述べる。

「ス、スコッチ、キミもさ生真面目に報告してないで状況の説明をしてくれないかい？」

そう顔を引き攣らせるフリードの鼻先にイスラの手で朱印の押された書類が押し付けられる。

それを慌てて受け取り文面に目を走らす。紙の手触りは上等なもので決して性質の悪い冗談でないことを物語っていた。

「特別任務遂行にあたり、フリードリヒ・ヴァイセン自由騎士に騎士隊長権限を授ける……王国軍執行部ならびに自由騎士会……それにセリア姫の印章まで」

「そう、まあ冗談ごとじゃないんだな、フリード」

イスラの顔から人の悪い笑みが消え、冷徹な指揮官の顔へと変わる。

無意識にフリードは背筋を正す。2人の騎士も同様だ。

「これからおまえとルビィ　そしてユビキタスには魔族軍の潜伏地として可能性の高い西部へと渡ってもらう。この目標自体には今後も変更点はない。が、しかし状況は大きく変わった。」

ええ、とフリードは緊張気味で頷く。

「ドンテカは想定しえない戦力で殲滅され、各地で続々と魔族の潜伏。信奉者の諜報活動が報告されている。襲撃の発覚から今日にかけて既に20件を超えた。ほとんど地方村は全滅だな」

「この騒動を境目に、ですか」

「そうだ、王都の魔術師どもに精査させた結果だ。手口はその全てが“ドツペル”　最悪のケースだと家族全員がヤツラに成り代わられていた場所もあった。」

「活動の内容については？」

「破壊工作は報告されていない。ほとんどが情報収集　王都周辺の地勢情報や防衛体勢、戦力に関する情報だな。なかには地方領主

に「蜜」を嗅がせて情報を得ていた者もいたよ」

「げえ、と無遠慮な悲鳴をケリーが上げる。眠たげな臉の上にかかった眉が歪む。それに釣られるように口の片方もへの字に歪んだ。

オホン、とその横のスコッチが咎めるように咳払いを吐く。

「ま、そんなわけで最悪、魔族側に地方全域の地形から兵舎の位置。王都の詳細な地図情報まで入手された可能性が高い。これは魔族と人間が戦いをはじめて、史上、類を見ない出来事だ」

「ごくろ、と状況の深刻さにフリードは唾を飲み込む。

「地の利を知る」というのは戦いにおいて非常に重要なことだ。攻撃目標の決定。進攻ルートの選択。手段の立案。不確定要素の想定。戦いの中での重要な局面全てに関わる。

「歴史上、正面からの物量作戦しか運用してこなかった魔族がはじめて大掛かりな諜報作戦に乗り出した。そしてその成果を誇示するように、まるで手の内を見せるようにあいつらは先ずドンテカを破壊し尽した……まだ幾らでも手札はあるとでもいいだけに、な」

「それが、ボクの騎士隊長昇格へとどう繋がるんです？」

「フリード、おまえは今のアリストピアの状況を知っているか？」

「？ええ、4年前の魔族進攻時に現女王プリシラが親交の厚い北のスコヴィヤ帝国に落ち延び、支援を受けて亡命政府を樹立。その後スコヴィヤ軍と共に戦線に参加し国土を奪還。いくつかの契約を経て新アリストピアとして復興中……現在は国外に流れた国民に召集をかけ、ちらほらと帰還民が増えているという話ですが」

「その出来事があり小国だったスコヴィヤが存在感を増してきましたね」これはスコッチだ。

「あたしスコヴィヤのお酒好きだわー、身体がすっごいあつたまるんですよねえー」

間延びしたケリーの無関係な発言を無視し、イスラは話を続ける。「そう、だが現地に残留したエインヘリヤルや派遣した使節から得た情報はあまり芳しくない。総合するなら現在の新アリストピアはカオス。帰還民と新国民の間での軋轢や体制の不備、冒険者など

のならず者の過剰な流入による治安の悪化エトセトラ……どこになにが潜んでもおかしくない状況だ。」

「そんな風になっているとは　この情報はやはり国民に漏れぬように？」しばし考えを巡らせフリードはそれだけ尋ねる。

イスラもフリードの問いの内容を読み取り、ああ、と口を歪めて首肯する。

「自分たちの国は自分たちで直さにやな、まあ、つまり西部ではまともな協力体勢は得られぬ公算が高い。」

「そこでボクの騎士隊長権限ですか」

「そうだ。望めぬ正規戦力より動ける非正規戦力　おまえに授けられるバッチは自由騎士称号持ちで一個小隊組める。有効に活用するんだな」

「力の勇者にアンテローズ家の騎士隊長、そして自由騎士の一個小隊ですか……これで相手が魔族でなければ怖いものなしの編成なんですがね……話はわかりました」

「ん」手をあげてイスラが頷く。

「ところでフリードリヒ自由騎士隊長、アンテローズ様は何処へ？この場所で落ち合うよう伝令には伝えた筈ですが」

「いままでどおり副長でいいよスコッチ……」ルビイがさきほど歩き去った方向に目をやり「ユノさん、いや勇者の様子を見てくるとさつき行ってしまったけど」

「あー……そうか」

はあ、とイスラは壮年の顔をきませながらルビイと同じようにイスに体重を預ける。ぎしり、という金属のきしみは少女のものに比べて重い。

なにやら突然やりきれないような、奇妙な色がイスラの浅黒い顔に浮かびフリードは目をしばたたかせた。

「どうかしましたか？」

なにかあったのか、とニュアンスをこめてケリーとスコッチに視

線を送る。

だがケリーは正直に首を傾げ、スコッチは相変わらず表情を読めなかった。

「なに、あいつ　アンテローズは相変わらずのようだな、と思っただけだ」

「ええ、まあ行動が唐突というか、考えるより先に身体が動くというか……それが善く働くこともあるのですがね」

普段の、第6隊を率いて王都の警護をしていた1週間前を思い出す。

色々と苦労もこつむることも多かったが、フリードの顔には苦笑が浮かんでいた。

「違うさ……」

「え？」

静かなイスラの否定にフリードは疑問符をあげる。が、椅子に体重をあずけて遠い空を睨むように見つめる壮年の騎士はその疑問には答えなかった。

「あいつも“持っていて”くれるなよ……向月、ゆの」

険しい色を潜ませた視線の先、砂海の空には鳥が吹き飛ばされるように飛んでいた。

夢のなかで、ユノは置かれた状況に当惑していた。

夢のはじまりと終わりはいつも唐突なものだが、その夢の開始はあまりにも強引だった。

そこはおおよそ　ゆとりを考えなければ20人程度は入りそうな小さな、いや「小さい」という括りのなかでも、ほんの少し上位に入りそうな広さを持つ「カフェテリア」だった。

ユノは未知の「夢」に警戒しながら「カフェテリア」の中央から

周囲に視線を巡らす。

しっとりとしたオイルの質感のある板張りの床　床は掃除が行き届いていて天井のシーリングライトから降り注ぐ黄色を帯びた優しい光が淡く反射している。

ひっそりと長い年月を経たような古びた椅子とテーブル。そのいくつかは同じデザインの物ではなくアンティーク・ショップで買い集めてきたもののようにユノには思えた。

来客を告げるブロンズベルのある扉。その横にはこれもまた年代ものの黒電話が置かれたキャビネットがあり、棚の開いた隙間から黄色い表紙を持つ分厚い本が見え隠れしていた。

窓は少なく、暗い印象がある。しかし室内に射しこむ西日を色とりどりのステンドグラスが味気ない白色の陽光を赤色や青色へと変え独特な雰囲気店内に与えている。

隠れ家的名店　もし雑誌にでも紹介されるならそんな表題がつきそうだ。

（あ、コーヒーマーカーが付きっぱなしだ。）

店の中には誰もいない。客も、店主も、ウエイトレスもいない。それどころか蠅や羽虫の1匹もこの空間には存在しそうななかった。ただ、天井から光を提供するライトと同じように木製のカウンターの脇でぼこぼことコーヒーマーカーが煮立っている。黒い、刑事ドラマで小物として登場しそうな古臭いモデルだ。オレンジのランプが点灯し、静かな店内に微かな作動音を振りまいている。

「なんだか……不気味。いったいこれは何？」

「オマエの過去さ、向月ゆの」
「っ！」

背後から唐突に聞こえた声に、ユノは拳を振り上げて振り向いた。左足を前に出すのと同時に半身を捻り、右手を前に、左手を上段に。迎撃の構え。

そこで、ユノは自分自身の姿が変化していることに気がついた。

身体を覆うのは最後の記憶にあったばろぼろに破損したアーマーとアンダーウェアではなく、剣帯や魔術円筒を入れるポーチが付けられた革製のベルトではなく、太腿から膝まで覆うアニマルハイドと鉄の膝当てがついたレギンスではなく、それは確かに、いつか着ていた制服のブレザーとスカートだった。

そして決定的だったのが、いつもユノの左腕を覆っている“グラーベルの鉄籠手”が影の形も存在していなかった。

懐かしい、血管でも浮き出そうなくらい白い「向月ゆの」の腕だった。

（何故！？）

狼狽する暇もなく、正面から何かが覆いかぶさってくる。

転倒しないことは幸運だった。ユノの背後から襲ってきた襲撃者は西洋然としたランバルディア人であるように見えた。襲撃者は腕を前に、両腕を押し付けるようにして体重をかけてくる。

それに対しユノは力での拮抗を選び、その選択に致命的に後悔した。“勇者の加護”が身体のだこにも感じられない。いつもの、溢れるような制御しきれない力の内在がどこにもない。今の自分はどこにでもいる、少しだけ格闘技をかじっただけの4年前の少女だ。背中が壁に押しつけられる。カウンターに面したカフェテリアの横幅は人1人が横たわるスペースは存在せず、偶然にして組み伏せられることは回避できた。

どんっ、と固い壁に肺を圧迫され、けほつとユノは咳き込む。パニックになりながらも冷静なユノの一部は攻撃を選択し、床から左足を離して膝蹴りからローキックか金的かを相手に叩き込もうとしていた。

しかしユノはきつ、と襲撃者の顔を睨みつけて、痺れるような感覚と共に全てを自失した。

「なん、で……」

襲撃者は、たった少し前に、間違いなく殺したはずの「巨人」だった。

いや、その言葉には語弊がある。正しくはそれは炎の巨人に姿を変えたはずの、エリーゼの恋人だった。

そう一目で認識できたのはその男の額に1本も髪がかからず、うねりのある後ろ髪を首の後ろで束ねて顔が見やすかったかもしれない。

どう見ても人間にしか見えない彼は王宮の楽士服に身を包み、黙したまま顔をユノの鼻先まで近づけてきた。

（違う、こんな、私は、知らない！）

ユノは極限のパニックに襲われていた。目を限界まで見開き、奥歯を震わせてただ目の前の男の顔を見つめるしかなかった。

ユノはエリーゼの恋人であるこの男のことなど「知らない」

あくまでもあの「巨人」の最期に視えた顔と、エリーゼが生前していた惚気話、思い出の中に出てきた登場人物でしか知らない。この男が楽士だったことや髪型を後ろで束ねることなど知るはずがない！「当たり前だ、私はおまえの創作物ではないのだから」

「嫌！」

男の言葉にユノはただ身を振った。頭からはもうこれまで培ってきた護身の術が抜け落ちて、ただ非力な少女が男に必死で抵抗しているだけになってしまった。

革靴を履いた足で必死に男の脛を蹴る。股の間に足を入れられ、すぐに蹴りは届かなくなつた。

五体を拘束され、顔を覗き込まれる。

言葉が喉から繰り返される。

「嫌 嫌、いやっ」

目の前で男の顔はじわじわと変化していった。

男の細面で骨ばつた輪郭はふつくらした曲線を帯び、彫りの深い

顔面の造形は小ぶりに、全体的に丸みを含んで形状を変えていく。目じりから皺と隈がきえてその大きさを変えながら落ち着いた緑から空色の碧眼へと目の色が変化した。

それと同時に身体を拘束している男の肉体も変化していく、肩幅の広い男の造形から、丸みを帯びた柔らかな造形へ　女の、身体だ。

ばさり、と赤い髪が抑えを失ったように目の前へかかった。

そして、変化の終わり。ユノはその顔を見て、ただただ首を横に振った。

「嫌、なんで、いやだ。いやだ　　エ、リーゼ」

「健康的な美に溢れる、女の顔が笑った。鋭い印象を伴って。ゆの様、痛かった……………ですよ？」

嫌あああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!!!

抑えていた感情が爆発した。

ユノはただ狂乱する。首をちぎれんばかりに横に振り、拘束された腕を振り回す。

身体はてんでんばらばらに可動できる場所を求めて動き回り、紺色のブレザーをめちやくちやに乱した。

足もまた独立して逃げ場を求めて狂ったように床を蹴り、近くにあった椅子を勢いよく蹴り倒した。

目は堅く閉じられ外界の耐えられない現実を遮断し、肺と繋がった喉は徐々に悲鳴を囁れさせていった。

「あ、いかん」

状況に似合わない醒めた女の声が聞こえた。

その言葉が耳に聞こえてもパニックに陥ったユノには言葉として届かず、悲鳴を途切れ途切れの奇妙な呼吸音へと変えていた。

ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、と口と喉、肺が1本の透明の筒で固定されたような自由が利かず、痙攣したように激しく胸を上下させていた。

「術を誤ったか、やはり私はこういう役割は向かんなかな　？」

ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ

「おおい、水もないのに溺れてもらっては困る。主^{ぬし}は　では　ないのだから　」

身体をだらしなく弛緩させ内股に床にずり落ちるユノを「エリーゼの顔をした者」は優しく支えた。

おびえた子供を宥める父親のように、男性的な強さを感じさせる手つきでさらさらと少女の頭を撫でた。

「おお、愛い子よ。憂い子よ　さあいつもの冷静な、波ひとつない平面の心に戻るのだ……力の勇者よ」

カウンターの上のコーヒーマーカーがごぼつ、と音を立てる。黒い液体のなかに気泡が上がった。

女の、エリーゼの顔をした何者かに抱きすくめられたユノは次第に全身に安定した力を取り戻し、痙攣が消えた。異常なまで収縮を繰り返していた肺は沈静して呼吸もいつものリズムへと戻り始めている。

その時点で普段のユノ、ユノ・ユビキタスであれば目の前の異常な物体に取れうる限り有効な反撃を繰り出すところだが　まるで親の手で撫でられ安心した幼子のように恍惚の表情を浮かべおとなしくしていた。

「あなたは……誰？」

悲鳴で酷使された喉はがらに涸れていたが、ユノははつきりとした口調で疑問符を目の前の存在に投げ掛けた。

「ふむ、私のことを聞かれたのははじめてだな　まあ、いいか、とにかくコーヒーでも飲もうか」

そつとユノの肩から手を離れた女は首を傾いで思考しながら少女の身体をカウンター席の小さな椅子の上に誘った。

そしてしばしの間、ユノは何故だかひどく穏やかな気分で木製力ウンターの木目を数えていた。

軽い音と共に出されたコーヒーの香りではつ、と意識を戻す。

カウンターにコーヒーのカップを置いたのは落ち着いた雰囲気を纏った男だった。

「飲むといい、君はよくこのお店でブラックコーヒーを飲んでいたらしいからね」

「そうなの？」

「少なくともこのメニュー表にある季節のフルーツ盛りバナナサンデーではないようだね。フルーツとバナナが何故別れているのか、私には理解し難いがね」

「そう」

ユノは何の警戒もなく、黒い液体に唇をつける。香ばしい芳香と共に広がった心地いい苦味がユノの味覚を刺激し、まだどこか呆けていた頭をハッキリさせた。

「さて先程の質問だが」

「？」上目遣いでユノは男の顔を見る。

「私には、そう、とてもたくさんの名前がある。どれを使えば君に影響を与えずに済むか　ヴェラチュール、グリムニル、スヴィパル……少し露骨か、シーズスケッグ、ガグンラース、ハールバルズ……とても呼びにくい名だな、我ながら」

顎に手をやりながら唐突に名前のようなものを羅列しはじめた男を「何やってんだろう」と思いながら、ユノは新たにコーヒーに口

を運ぶ。

ユノの口が3度、黒い液体を嚙下するまで男は悩み続け、そして大きく頷いた。

「ふむ、そうだな。どうも私の名前はどれも憶えるのに苦勞するし問題がある。本来は君に付けるべき名だったが　ここでは私はこう名乗らせてもらおう」

満足げに頷いた男の身体が再び変化する。だが、ユノは次は驚かなかった。

頭の片隅でこの「存在」はこういうものなのだと誰かが報せていた。

年齢不詳の、若いのかも老いているのかもわかりづらい男の身体がカメラのピントがずれたように暈けて見えなくなる。目の前にいるのにぼんやりとして視えないのは奇妙な感覚だった。

ただその擦りガラスを隔てたような向こう側で男の姿が大きく変貌しているのがわかった。

特徴のないワイシャツとズボンの被服が白金に輝く甲冑に変化し、中肉中背の肉体が豊満で均整のとれた女性の肢体へと変貌を遂げる。白髪まじりのオールバックが先端から輝かんばかりの金髪になり、髪先端がくるん、くるまった愛嬌のあるカールの長髪に長さを変える。

そして最後に翼の生えたサークレットを頭に被り、女は深い海のような碧眼をゆっくりと開いた。

時が止まったようなカフェテリアの静寂を震わせるように、女はひどく澄んだ声音で名乗りをあげた。

「我は勇敢たる人間を選定し、きたるべき戦役へと備えるもの
戦死者を運ぶ神に近く、神でないもの。ワルキューレが1人、ラー
ズグリース……………“計画を壊すもの”」

ユノは目を見開き、空になったカップを床へと落とした。

「ん……」

夢はいつものように唐突に終わりを迎え、ユノは覚醒した。

身体の調子は悪くなかった。気を失ってからどれだけ時間がたったか分からなかったが、“勇者の加護”はユノを治してくれたようだった。

「痛っ……」

そう呟いてユノは頭を抱える。

発生源のわからない、茫洋とした頭痛を感じた。

その痛みは例えるなら頭の両側を、厚みが100ラウンはありそうな鉄板でぐいぐいと押さえつけられているかのようだ。

しかもその鉄板の表面は平静なものではなく、斬新な表現を希求するステイル・アーティストが創意工夫を重ねに重ね、元のインゴットの形が想像でなくなるほど曲面と鋭角が増えてしまったでこぼこの荒地だ。

血こそでていないもののその痛みはひどく、まるで頭の一部が割れて欠け落ちて、何かが抜け落ちているように感じた。

……だがいくら触って痛む場所を探したところでもどこにも罅割れはなく、しばらくして痛みは沈静した。

上体を起こし、そこでようやく眼を開く。顔半分を包帯のようなもので巻かれているから片方は暗闇のままだ。

「……王都から救援があつたみたいね」

ユノが目覚めた場所は見覚えのあるランバルディア国軍の印章が

入った仮設療養院だった。

丈夫な布とポールで組まれた簡易のもので、四、五人を収容出来る程度の大きさだ。ベットに寝かされているのはユノだけで、治癒に使ったと見られる薬油や包帯などが銀の盆に載ってワゴンに置かれている。親切な誰かが治癒の手助けをしてくれたらしい。

薄い天幕から射しこむ光はおおよそ昼過ぎの日差し。外は快晴のようだった。

「あ……」

きよるきよると片目だけで天幕の中を見回して、ユノは思いがけない人物を眼にした。

「すー……すー……すー……」

アリカだった。ユノの横たわるベットに近い椅子の上で毛布にくるまっている。

救援に来た誰か（ルビィやフリードか、大穴であの密偵かもしれない）が気を利かしてくれたのか、灰まみれのネグリジェとカーディガンにかわり、療養院のヒーラーたちが身に着けるような白のブラウスと暗色のロングスカートを履いている。顔に残ったガーゼや足に巻いた包帯がユノの良心をちくりと刺激した。

（ああ、ダメだ、しっかりしなきゃ）

ユノは頭を振り、心に出来たしこりを落とそうとする。ユノは自分が大切だと思うものを守ろうと決めたのだ。アリカ、アリカ・マイルズ。

ユノ・ユビキタスはこれから一生をかけて彼女を守っていこうと決めた。それは昔から。じつはユノがアリカを救ったのではなく、アリカがユノを救ってくれていたと気づいたときから心に決めていたことだが、今回の出来事でそれは一層強くなった。

何にでも頼って、何でもして彼女を守ろう。

そのためには　自分はこれからずっと強くあらなければならない。
どん、と胸を強く叩き、深く息を吸い込む。これで決心は完了だ。

そう思い込む。

ベットを軋ませ、ユノは立ち上がる。その途端ぐうと腹の虫が鳴り、ユノは思わず辺りを見回した。情けない話だが“勇者の加護”で怪我の治りを早めた後はいつもひどくお腹がすくのだ。
軽く赤面しながら、自分の服装を確認する。

これもまた誰かが気を利かしたのか、ぼろぼろになったアンダーウェアとレザーアーマーにかわって白い入院着を着ていた。“グラベルの鉄籠手”は取り外せなかったのか、肩口から袖を切り取ってそのままにしてくれたようだ。

近くにある鏡で顔を確認するとそこにはぼけっ、とした表情をしたミイラ女が佇んでいた。ほとんど顔は包帯でぐるぐるまきで、寝癖のついた白い髪がその隙間からまぬけにとび出していた。

（こんなに巻いてくれなくてもいいのに）

いい加減かゆみに我慢できそうになかったので、顔の包帯をとることにする。

頭の後ろの結び目をさぐり、指でほぐして包帯を外していく。幾度か頬と包帯がくっついていていような感じがあったが気にせず剥がす。皮膚と包帯が癒着しているという怖い事態もなく、親切な誰かが治療力を高める薬油を顔に塗ってくれたようだった。

薬油で濡れた頬がひんやりとした外の空気に晒されて心地いい。

「……………」

ミイラ女の包帯を外すとそこには顔が醜く崩れ、つぎはぎだらけのモンスター　というようなことはなく、かわり映えのしない自分の顔が現れる。黒目がちで、少し高い頬骨を持つ童顔。

火傷がひどかったとみえる部分がうつすらと黒みがかっているが、

これもそのうち消えていくだろう。

ユノの治癒力は普通の人間の比ではない。

「あ、お目覚めになりましたか」

外した包帯をなんとなく右手でもてあそんでいると、天幕をくぐって誰かが入ってきた。

一瞬、腰の後ろに手が伸びるがそれは無意味だ。装備は全部外されている。

仕方なく振り返ると、天幕の外から射しこむ光に照らされて背の高い女性が立っていた。

「御体の具合はいかがですか？」

「ああ、ええと、見ての通りよ」

ユノは後ろ手で巻いた包帯を机の上に置く

「本来ならあなたは生きているのが不思議なくらいの火傷と怪我を負っていたのですが……」

「便利な身体でしょう？……失礼だけど、あなたは？」

「失礼しました。ランバルディア国軍中央療養院に所属しておりますマリエラ・クロフォードと申します。お初にお目にかかりますわ

ユビキタス様」

女性　マリエラ・クロフォードは折り目正しくお辞儀をした。

本人もいつている通り、その姿は療養院で働くヒーラーの模範といった風情だ。髪かくしの白いケープに露出の少ない黒のロングワンピース。身体の前には外科手術用の赤いエプロンを着けている。何故エプロンが赤いかというと、飛散した血が目立たないようにするらしい。

彼女は恐らく　ロスクヴァ教会に所属するヒーラーだろう。

詰襟の首元に、その証である雌の山羊を象ったホーリーシンボルを下げている。

ロスクヴァとは主神ドンナーに仕える従者の一柱だ。兄であるシア

ールフィと共に地に生きる全ての人々を助け続けているという。ロスクヴァを信仰する教会はその救いを代理し、国の広い範囲で無償の療養院として機能している。ロスクヴァが女性である所以なのか、教会に所属しているヒーラーはほとんど女性だ。

髪は隠れているため彼女が貴族か平民かは判別がつかないが、顔はたまごのようにつるりと白く、鼻筋の通った綺麗な顔立ちをしている。鳶色の瞳は優しい色で満たされているようにユノには思えた。少なくとも彼女が突然ナイフをこちらに突きつけてくる可能性は低いだろう。

（……違うな）

一瞬だけ彼女を「値踏み」し、警戒を解く。立ち振る舞いや仕草からは戦いに関係のありそうな匂いがしなかったからだ。

（嫌な女だ、わたし）

顔をなんとか笑みの形に作る。

「どうもありがとう、クロフォードさん」机の上の包帯をつまむ「この包帯もあなたが？」

「ああ、いえ」

マリエラは柔和な笑みを浮かべながらユノの背後　椅子の上で眠りこけるアリカの方を視た。

「治療の大半は彼女が行いましたよ……自分も怪我をしているというのに、私が治しますと聞きませんでね　努力家で、優秀なヒーラーだと思いますわ、シスター・マイルズは」
シスター・マイルズ、とユノは口の中で反芻する。看病をしてくれたアリカだとは分かったが、なんとも耳に慣れない呼び方にユノは少し笑った。

目の前のマリエラという女性はアリカのことをシスター、つまり同胞として見てくれるらしい。アリカはギルド所属のヒーラーだ。なんにせよアリカが評価されているらしいのは嬉しかった。

「アリカは、ずっと看病を？」

「ええ、国軍が到着するまでずっと……休ませてあげてくださいね」
「そうね、ありがとう」

ユノはそう礼を言いながら、気を失ってまだ時間があまりたっていないことに安堵した。

この「みんな」の安否を確認しにいく為の旅　それが“対話”の通信不良や地や天に潜っているという可能性は失われた。

魔族は人間に対してすでに侵攻を仕掛けている。

その第1歩　非常に大きな1歩として「勇者」を無力化しようとしている。

……それはもう目のそらしようのない現実で、8割がた成功してしまっている。

西部に残留する魔族軍の残党がなんらかの策略によってナオキとケンヤ、そしてハイネ、アライス、エレノア　自分をのぞく勇者を排除した。

その5人を排除したなら当然次の順番は元勇者であるユノだ。

セリアは除外されているだろう。彼女はあくまで勇者を「こちら」に召還する巫女であり、勇者ではない。

それにセリアは「国」と「城」と「加護」に護られている。セリアを排除するのはランバルディア一国を相手にするのと同義だ。

（そう、次は私。私の順番だから“ここ”に来た）

普通の　よほどの楽観主義者でもないならそう考える。

（でも、信じられない）

話題がなくなり、自分の仕事　療養院の仕事を黙々とやっているマリエラを横目に見ながらユノは思考する。

（あの5人　ナオキたちのチームワークは完璧だった）

目を閉じ、頭の隅に追いやっていた「みんな」の顔をひとりひとり、思い出す。

それはユノにとって神経を使う作業だった。

現在の「ユノ・ユビキタス」ではない、「こちら」に来た当事の「向月ゆの」の記憶は透明で、臭いがなく 陰惨極まる戦場での記憶と感情が濁り凝った「ユノ・ユビキタス」の中では容易に見失い、二度と取り戻せそうになかったからだ。

それでも、大切にしまいこんだ「みんな」の顔をユノは今回も無事に思い出すことができた。

ゆっくりと目を閉じ、視界を暗闇にする。瞼で外界と自分とを遮断するのは大切な記憶を閲覧するには必要な儀式だった。

暗闇の中にそのうち「みんな」の顔が浮かび上がる。

「ユノねーちゃん！」

目に映えるエメラルドグリーンの頭髮に健康的に焼けた小麦色の肌。口元に生えた八重歯がチャームポイントで、背丈を大きく超える長大な弓を持って笑いかけている……龍に育てられた野生児のような、けれど時にハツとするくらい正鵠を射る言葉を吐くこともある。無邪気で、そして聡明な弓使いの少女エレノア。

エレノアはよく沈みがちだった「向月ゆの」に懐き、元気づけてくれていた。今も同じようにしてくれるだろうか。

「ユノさん、いいですか魔術とはそもそも」

くい、と銀縁の眼鏡を中指で押し上げて線の細いローブ姿の少年がユノに何事かの蘊蓄を語りかけてくる。アライス、知識の賢者アライス。フルネームは忘れてしまった。記憶が失われたわけではなく、メンバーの誰もが憶えるのを放棄するくらいとんでもなく長いのだ。

アライスはいつも大量の蔵書^{ヒブラリオ}を背中に背負っていた。そう、確かケンヤが「こちら」に来たときに持っていたリュックをあげたんだっ

けか。いつも小さな本棚を無理やり背負っていたアライスの喜びよ
うときたらなかった。今思い出してもユノは笑ってしまう。
いつも聞き流していた色んな蘊蓄を今は真面目に聞いてみたいと思
った。

「ユノっ！後ろをお願いしますわ」

凜とした、それでいてどこか艶やかな響きを持つ声がユノの脳裏
によぎる。

鮮烈な印象をのこす真紅のドレス・アーマー。儀礼用かと見紛うよ
うな装飾をちりばめられた大剣と盾。

その二つをお供に戦場を舞踏する優美な少女ハイネ、ハイネ・オー
デニー・ミルニル。

ハイネはお世辞にも付き合い易いタイプとはいえない性格だった。

一見して傲慢で高飛車で高圧的　しかし彼女と時間を共にし、背
中を預ける関係になればその印象は一面的なものだ気づく。彼女
は繊細で傷つきやすく、時に誰よりも優しく人を助け、時に誰より
も悪を憎んで矢面に立つ。

そしてそんな一面を悟られるのが照れくさくていつも「高貴で高慢
な貴族のお嬢様」の仮面を被る。ハイネはそんな少女だった。

「こっちは任せときな！向月ッ！！」

そう叫び、遅しく隆起した腕が銀色の光を放つ槍を投擲する。

その後姿はいつ見ても頼もしい。

「こちら」に着てからもずっと着続けていたぼろぼろの学ランをは
ためかせながらケンヤ、東条ケンヤが不敵な笑顔を見せる。

ユノと同じく「こちら」に召還され、勇者になった少年だ。

はじめは見た目のいかつさと粗暴な言動でユノは敬遠していた。生
まれつきらしいツンツンの頭髪はどう鼻屑目に見ても不良にしか見

えなかったからだ。でも、運命共同体だと一緒に冒険を続けるうちにその印象は薄れていった。
貴族の妖艶な夫人に魅了されて顔を赤くして戸惑った彼や乱暴だけ
どいつも優しさのある彼に気づくことが出来たからだ。

「 ユノちゃん」

彼の姿を思い出すとき、ユノは胸の奥が詰まるのを感じる。さら
さらの髪。やさしく、いつも憂いを帯びたような双眸。今のユノよ
りも細いが決してひ弱ではない身体。それらをひとつひとつ思い出
していくだけでユノは胸が張り裂けそうになる。

（ナオキ……神代ナオキ）

頭に思い浮かぶのは彼の様々な顔だった。笑いかける顔、落ち込ん
だ顔、戸惑う顔、怒る顔、もう一度笑いかける顔。

それらがユノの脳裏で明滅しながら表情を次々変えていき 最後
にはいつも「あの顔」になる。

今にも泣きそうな、捨てられた子犬のような表情。

「気づいてあげられなくて、ごめん」

（ああ、やめよう、これ以上はダメだ）

ユノはかぶりを振って頭の中の「みんな」を消していく。ひとつ残
らず。念入りに。

「これから」のことを考えればこれ以上の回想は避けるべきことだ
った。

ユノは自分の手を広げ、皮膚の下に内在する力を感じる。

それは体中を奔る細い血管の一筋から一筋まで満ちていて、時たま
生きているように脈動する。

血液のようで物質ですらないそれは「こちら」に来てから授けられ

た“加護” 人を「勇者」にしてくれる無形の力だ。

（力の勇者 ドンナーの力強さを分け与えられた存在）

力を授かったあとのユノは時たまそのように呼ばれることがあった。“加護の地”を守る賢者たちが言うには「勇者」に与えられる力は均一ではなく、ドンナーが持ちえる強大な能力を分配される形で授けられる。

どんな基準で選ばれたのかはユノ自身には分からないが、ユノはドンナーが持つ単純な力、つまりは破壊に関連する能力を分け与えられている。

（私だけで、いや、私たちでみんなを救えるだろうか）

ユノはかぶりを振ると、ベッドから立ちあがり外へと出て行くことをする。

するとまるでタイミングを計ったように天幕の中に入ってくる人影と目があつた。

「ん、生き返ったか馬鹿勇者」

蔑んだような眼で悪態をついたのは、相変わらず変化のないチェインメイルを身につけたルビィだ。

唯一違うのは後ろでまとめていた髪が顎のラインまで下りていることか。

猫っ毛なのか髪先は自由奔放にあちこちにゆるい弧を描いている。

ふん、と鼻を鳴らし、腰を当てながらユノと背比べでもするように胸を張って立った。

ユノはそのぼさぼさの赤髪の頭を半眼で見下ろしながら、その悪態に応える。

「いきなり失礼ね、馬鹿って何よ」

「馬鹿は馬鹿だ。いきなり死ぬような真似をしやがって」

吐き捨てるようにそう言うはずかずかとベッドに腰掛ける。

ユノはそのいらついた様子に片眉をあげる。

「あら、心配してくれてたの？」

「馬鹿をいうな馬鹿勇者、おまえに今死なれるのは……困るだけだ」
声にださずその言葉にユノは笑い、対面のベットに座る。

込み入った話だと察してくれたのか、雑用をしていたマリエラが一礼して去っていく。

アリカは安らかな寝息を立てたままだ。

ルビィは一度その肩を叩いて起こそうかと考えたが　半死半生の目の前の勇者に縋りつき、夜を徹して治癒を施していた姿を思い出し、やめる。

救出した当初、何の役にも立たなそうな女だとルビィは判断していたが、その姿を覗いて以来ルビィはこのハーフリザードの女を見下さないように意識して気をつけている。

「それで？今の状況は？」

しばしの沈黙のあと、ユノがそう聞くとルビィは不機嫌に、しかし一介の軍人らしい簡潔な言葉で現況を説明してくれた。

ランバルディア本国がドンテカの異変に気づいたのはおよそ32時間前、ユノとアリカ。そして包囲するスラッド兵たちがメチャクチャに吹き飛ばされた頃だ。あの巨人が引き起こした大爆発が異変の察知をかなり早めてくれたようだ。

夜間哨戒中のワイバーンライダーズ　文字通り飛竜ワイバーンを巧みに操る竜騎士たちで構成されたランバルディア空軍の1騎がドンテカに舞い降り、村で大規模な魔族による襲撃があったと知らされてあわてて王都へと帰還。魔族と戦えるだけの戦力を至急整えて大急ぎでドンテカへと出立したらしい。ランバルディアはドンテカと防衛協定を結んでいる。

ルビィたちは突然弱まった火の海の中に飛び込み“勇者の加護”で力を使い果たしたユノを回収。国軍は村の状況を察知し、すぐさま生存者の搜索と村内の捜査に乗り出し今に至る。

「結局、村人に生存者はほとんどいなかった　私たちを含めた数人のみだ」

「……」

「ひどく惨たらしいものだった。腹を裂かれ、逆さまに吊るされ……あれではドンナーの身許に辿り着くことはできまい」

「そう」

感情をこめないユノの相槌にルビイの眉間が陰しくなる。

わかりやすいな、と冷めた感想を抱きながらユノは少女の言葉を待った。

「……何も思わないのか、勇者」

「そうね　死体を使った陽動、いや、囮戦術か……村役場の中に入らなくてよかったわね」

「そうではない！人が死んだんだぞ　たくさん！」

「それがどうしたの？」

かつ、とルビイが怒りの衝動に駆られるのがわかった。

信じられない、という表情はすぐに憤怒にかわり、膝の甲に置かれていた手の平が固く握り締められる。

少女の小さな手が鋭い拳に変わるのをユノは冷静に見つめていた。

「貴様は　……！」

振りぬかれるルビイの拳をユノは避けなかった。何故そうしてやったのかは分からない。

骨と骨がぶつかる音と共に鈍痛が頬に広がり、脳が軽く揺さ振られる。いつそ心地いい気分でユノはベットに倒れこんだ。

「守れなかったんだぞ……！何の関係もない民を！すぐそばにいながら……！なんの手立てもなく！細切れにされたんだぞ……！」

「そうね」

入院着の襟元が掴まれる。上半身に押し掛かる少女騎士の体重と体温を感じた。

少女の体重は“勇者の加護”を受けた身体には軽く、体温はとても

熱い。

興奮しているのか、吐息が荒い。

（ああ、うざったい）

「つつ　　！」

なんの拍子もなく、ユノは軽いフックをルビイの顔に叩き込む。それをルビイは反射的にかわそうと素早く身を反らす、が、押し掛けられる内に伸ばしていた右手がルビイの首を抑える。左のフックはフェイントだ。

目を見開き口を開ける少女をベットのの上に叩きつける。同時に上体、下半身、両足、と順に身体を捻り、正面と背後の位置を強引に入れ替わる。

叩きつけられながらも脇腹を狙ってルビイが蹴り足をねじこんでくるが、全てを見こしたようにユノはその蹴りをわずかに上体を捻ってやり過ごし逆に腕で抱え込み拘束する。

どしゃん、と派手な音を立ててベットが軋む。脇に押しやられていた枕が宙に跳ね、音も立てずに剥きだしの砂の大地に転がる。薄い布を通して射しこむ光が舞い上がった砂埃を輝かせる。

ユノの月のような瞳と、マットに頬を押しつけられたルビイの蒼い双眸が重なる。

「言いたいことは、それだけ？　あなたがあまりにも暑苦しかったからこうしたけど　言いたいことは言えた？」

「こッ、の　　！！」ルビイが起き上がろうとする。

ユノは右手だけでなく左手で肩のあたりを圧迫する。くう、とルビイは呻いて動けなくなる。無理に動けば関節を痛めるだろう。

「いい？　私はね」

ユノは落ち着いたトーンで、言葉を選びながら喋る。

「もう“何の関係もない人間”を守ろうなんて、思わないの。私を助けてくれた人、私を嫌わない人、私を守ってくれた人。私が助けたいと感じた人、私が好きだと思った人、私が守らなきゃいけない

と思った人。それだけを、守ろうと思ったの……それ以外は、好きにすればいい」

「……………」

「好きにすればいいよ。生きたり、死んだり、嫌ったり、好いたり、守ったり、勝手にすればいい。私の手は小さい。周りにあるもの全部助けたり守ってたりしたら、本当に守らなきゃいけないものに指が届かなくなる。」

「貴様はッ、勇者だろうが……！」

ルビイの押し殺した声を、ユノは静かに笑いとばす。

「勇者、勇者だから、どうしたの？」

言葉を切り、息を吸う。

「…………勇者だったら顔も見ただことのないような誰彼の命まで責任持たなきゃいけないの？」

ユノの瞳が奇妙に歪む。静かな声音で語られる言葉は少し熱を帯び、どこか揺れていた。

「…………そんなのもうたくさん。本当はわかっているんでしょう？勇者が絶対じゃないことが、無敵の存在じゃないってことが」

ユノはそういう終えて、ルビイの身体から手を離す。

興奮していた。色素の薄い頬には赤味がさし、肩で小さく息をしていた。

だが、激情はすぐに醒めていった。声のトーンは次第に落ちていき、いつもの少女にしてはハスキーな声音へと戻った。

「もし勇者が絶対無敵の超人で、たった1人で何百何千の命を救えたなら、とつくに魔族なんて滅びてるわ」

ルビイは身体を起こし、ユノの方を振り向く。

「…………それに、わたしはもう勇者なんかじゃない」

射しこむ光が少女の全身を黒いシルエツトへと変えていた。

シルエツトは踵をかえし、外へと歩き出す。

「ここに居るのは、ただの、ただの“私”だよ」

その呟きははつきりと悲しげだった。

「……………」

はあはあ、とルビイはベットの上で荒い息を吐いた。

しばらくの沈黙ののち、ルビイは押し殺した叫び声を上げて、固いベットを拳で叩いた。

「……くそッ！くそッ！くそッ！糞ッ！！！！」

繰り返し、拳を打ちつける。

胸中に行き場のない怒りがあつた。

勇者が「誰をも救えるような無敵の存在」ではないことぐらい、ルビイはずっと昔から理解していたことだ。

斬られれば血がでる、出過ぎれば死ぬ。ただ、そう、ただ「死にづらい」だけだ。

様々な奇跡をもたらす「勇者の武具」や強力で周囲にも多大な恩恵をもたらす「勇者の加護」もあくまでもドンナーが与えたもうた「手段」にしか過ぎない。どんな武具も力も正しく使われなければ意味を成さないのは騎士として教育を受けたものならば誰もが知っていることだ。

（それでも、私は信じたかった……！！！！）

ルビイは昔から、勇者になりたいという願望があつた　はじめはただ勇者に近づきたいという憧れだった。

だが騎士として泥臭い訓練と血生臭い戦いに明け暮れ、己の無力さに気づかされるうちに、それは「勇者になりたい」という願望へと変わった。

その頃のルビイにとって、勇者とは超然とした、全ての懊悩から解き放たれたような存在だった。

遠い異世界から聖女たる巫女に選ばれ、王から無条件に名誉を授かり、主神ドンナーから寵愛にも似た加護と圧倒的な力を得て、恐怖も、劣等感も、焦燥感もなく　ただ大陸を魔族の手から救うため

に戦いに立つ無敵の存在。

そんな勇者にルビイは憧れ、そして嫉妬していた。

（だが、その感情を、わたしは認めたくなかった）

1歩でも近づけるよう、ルビイは血の滲む努力をした。戦場に行つてしまった親友を想いながらも、心の奥底ではそんな感情が渦巻いていた。

“授かりものの、借り物の力なんて努力で打倒してやればいい。努力すれば近づける。追い抜ける。自分もまた世界に認められる！！”

けど、それは、ルビイの勝手な思い込みだった。

姉の仇を執る為に様々な情報を調べる中で知ったことだ。

人には誰にしる例外なく限界があり、そのラインの内側ぎりぎりです。なんとか遣り繰りしながら自分の身を取り巻く世界と戦い続ける。

定められた限界を越えればさらにその向こう側に辿り着けるか、それとも何もかも壊れて失うか　2つに1つ。

それは男も女も子供も老人にも平等だ。限界のない人間なんていない。

人魔入り乱れる戦場の中でそれを知り、越えてしまったのだ。勇者という大きな力の、その重みに耐え切れず壊れた　ルビイは知っている。あの白髪の勇者が2年間の人魔戦争の渦中で、幾人もの兵士を身体を張って守ってきたことを。

勇者は何もかもを超越した救世主ではなく、自分と同じように泥と血に塗れた「人間」なのだ。そこでルビイは気づかされた。

もし、あの「村」での騎士殺しがなければユノ・ユビキタスは5人の勇者と同じように人々から尊敬と感謝の念で迎え入れられてきたはずだ。

だがもうそんな未来は訪れない　ユノは魔族の「村」を巡り配下

のエインヘリヤルと対立。村の制圧を進言する騎士たちを殺し、「村」に棲んでいた魔族の民を逃がした。多くの兵士を救ってきたその手を騎士の赤い血で染めたのだ。

そこに至る理由はきつと都の口さがない連中が真実味たっぷりに囁くような「配下との不仲説」や「優秀すぎる部下たちに無能な勇者が耐え切れなくなった」「魔族の村など建前で実は痴情のもつれた」など、そんな世界の出来事ではなかったはずだ。

確かに、そう彼女は守って、傷ついて、命を賭して　決壊したのだろう。

「でもっ、それでも……おまえには救える力があるんだろ……！！力が、あるんだろ……！！！」

それは結局、他力本願な願いなのだ。

自分に出来ないから、救えないから自分以外の強力な他者に頼り、縋りつく。縋りつくだけならまだいい。縋りついて、その力のある他人にも救えなかったなら今度は感謝もせず責めるのだ　おまえのせいで、おまえが出来なかったから。さきほどの自分の姿そのままだ。

それを浅ましいと、情けないとルビィは思う。それが怒りを増幅させる。

（それでも　）

ルビィは思ってしまうのだ。

ユノ・ユビキタスが自分と共に昨日の村の中にいて、そして戦ってくれたなら

「……………」

悔しさを、感じた。

昔からきつとその感情は何も変わっていない。

浅はかな、それでもどうしようもなく強い願望。

ルビィはどさ、とベットのの上に寝転がり、天幕の天井を眺める。暴れたせいで埃が舞い上がり日の光を受けてきらきらと輝いていた。それを掴むように　実際に掴もうとしたわけではないが、手を伸ばしてルビィは小さく呟く。

「強くなりたい……」

「その言葉を、しっかりと伝えてあげなきゃいけませんよ」
ルビィは突然聞こえたその声に、顔をあげた。

「すいません、起きてしまいました」

そう申し訳なさそうに言ったのはアリカだった。亜麻色のふわふわとした髪に金色の瞳。縦に長い瞳孔がルビィのことをじっと見つめていた。

表情に怒りの色はなかった。天幕の中に漂う静寂を反映したかのように、その視線は静謐だった。

その視線を受けてルビィは居心地悪そうに目をそらす。いつから起きていたのかわからないがルビィはユノを殴ってしまった。目の前のアリカにとって、それはいい行為なわけではない。

ルビィからすれば、フリードか、それがアンテローズ領の両親や乳母を罵倒され殴られたようなものだ。

このハーフリザードの女性にとってユノがそれほど大切な存在であることはルビィにだってわかる。

ただ、出てきた言葉は心情と違う言葉だった。

「恥ずかしいところを見せたな……」

「何が恥ずかしいのですか？」

アリカは控えめな、しかし芯の通った声音で目をそらすルビィに言った。

追求でも批判でもない、純粹な疑問。それは逆に、ルビィの身をさらに小さくさせた。

乳母に怒られてるような気分だな、と頭の隅で自嘲しながら言葉を

返す。

「聞いていただろう？わたしは、あいつを責めたのだ。自分の無力を、怒りを、勇者のせいにした……あいつの身を狙った襲撃に巻き込まれた人間のことなど、本当はどうでもよいのだ。本当は、ただ縋りつきたいだけなのだ」

「……」

視界の隅で亜麻色の髪が揺れるのが視えた。

「力のない私にかわってドンテカの誰も彼も救って欲しかったと、助けて勇者さまと、そうやって駄々をこねたのだ……これが恥じゃなくて、何だ」

「恥なのですか？」

アリカはこくん、と不思議そうに首を傾げる。ひとさし指を下唇につけていた。

「わたしは、あの怖い化け物たちが襲ってきたときに何度もユノさんに助けを求めましたよ？それはもう、恥ずかしくなるくらい。窓の外から姿が見えるたびにきゃーきゃー悲鳴をあげちゃって、顔には出さないけど迷惑だったろうなあ」

くすくす、と何がおかしいのかアリカは口元に拳をあてて笑う。

「とにかく何にも分かんなくて助けてー！守ってー！ってね……ユノさんだって必死なのにね」

（強いな この女、いや、この人は）

ルビィは笑う。目の前の、穏和な笑みを見せるヒーラー見習いのアリカと今の自分。その対比に泣きたくなる。

それでも言葉を返さなければいけなかった。

「それは 守られるものと守るものの違いだ。おまえ、あ、いやあなた……ミスマイルズは守られる側で、私は騎士だ。人を守ることが意義。間違っても、誰かにその意義を放棄していい人間じゃない」

「アリカでいいですよ……でもあなたは、本当に縋りつきたいのですか？」

奇妙な感覚を憶えて、思わずルビイはアリカの顔を視た。さきほどと変わらない。

まるで教師に教えるを受ける生徒のように背筋をぴんと伸ばし、膝に手を置いた姿　しかしその座り姿は何故かルビイにアンテローズ領の乳母を思い出させた。さきほど抱いた印象は間違いいではない。母親にかわり勉強や作法を教えてくれた厳しくも優しい乳母。父と母の「しごき」に耐えかねて何度その胸に飛び込んだか。

似ても似つかないはずだ。乳母は普通の人間だったし、ルビイが物心ついたときにはもう「ばあや」と呼べる年齢に近づいていた。

目の前のアリカは成人してまだ2年もたたない。戦いに身を置く、明日も知らない類ではない、まだ「若い」と呼べる年だ。

ルビイはアリカの縦長の瞳から目が離せなくなる。

それでも、まだ言葉は口からとび出した。

「縫りつきたくなど、ない。ただ」

「ただ？」

「……」

「あなたは、自分でさきほど言っていたではありませんか」
「アリカは微笑みながら、どこか得意げに唇を動かす。」

「つよくなりたい、と」

「」

「ルビイの頭の中で、かちりと何かが嵌る音がした。欠けていた、いや、むしろ何か余計な異物が挟まったまま無理やり回っていた歯車が子気味のいい音と共にその邪魔つけない異物を吐き出したような、そんな音。」

「わたしもさつき言っていたんですけどね、と笑いながら目の前のハーフリザードの女は言う。」

「その言葉を、はつきりと伝えなくちゃ、多分前に進めないんだと思います。あなたがどんな風に、なんの為に強くなりたいのかなん

てわたしには分かりません。けど、その想いを伝えることはとても大切なことだと思うのです」

「それは……何故？」

「人は1人じゃ強くなれないからだと、思うからです」くすつ、とアリカは笑う「わたしね、ユノさんと出会う前はこんな風に貴族様にエラソーなことと言えるような性格じゃなかったんです。いつも人の顔ばかり窺って、怯えて泣いて隅っこで震えて　ユノさんがいなければわたし今頃生きていなかっただろうなあ、と思います」懐かしそうにハーフリザードの女が笑う。

「そりゃあユノさんはあんな性格ですから　あ、ユノさんってクールそうに視えて意外とトラブルに自分から首を突っ込む性格なんですよ？たくさん危険な目にも遭いましたし、こんな生活イヤ！と思ったことも何度もありましたよ」

「……そんな性格なのか」

「ええ、元はといえばわたしとユノさんが出会ったのも酒場でのトラブルですしね」

ええと、どこまで話したんだっけ、と口元に手を当ててからアリカは言葉を続ける。

「けどそんな生活が続ける内に、世界が随分と広がった気がしたんです。今ではちよっとくらい乱暴な人に遭ってもなんとか遣り過ごせるし、思ったよりも自分の身体が強いことに気づいてちよっと無茶しても大丈夫だって分かったし、昔の自分より強くなれた気がしたんです」

「……」

「それはなんでかなーって思うとみんなみんなユノさんに助けてもらって、次からは自分だけでも大丈夫なようにつて教えてもらったことばかりだったんです。そう、だから、誰しもが自分だけでは強くなれないんじゃないかなーって、強い人でも行き詰まったときには誰かコッソリ頼ったりしてるんじゃないかなーって……そう思ってたんです」

ああ、こんなに喋ったのは何日かぶりです。と照れくさそうにアリカは笑った。

もう居心地の悪さをルビィは感じていなかった。視線を外し、俯いたままルビィはぼつりと呟く。

「あいつも、勇者も、そうだと思うか？」

「え？」

ルビィの問いに虚を突かれたようにアリカは一瞬戸惑い、うーんと金色の瞳を天幕の端から端まで巡らせてから口を開く。

だがその動きとは裏腹に迷いのない口調だった。

「きつと、ユノさんもそうだと思います。ユノさんは凄く強くて、時々恐くなるくらい冷静で、どんなときでも頼りになるけど、きつとユノさんもたくさん泣いて、たくさん傷ついて、たくさん誰かに助けを貰って……そうやって強くなってきたんじゃないかな、と思います。」

その言葉を聞き、ルビィは顔を上げる。

憤りも、迷いも、悔しさも消えてはいなかった。

ただ、そう、出口のない回廊をぐるぐる回るのをやめたただけだった。浅はかな性格だな、と自分で思う。けれども悪い気分じゃなかった。

「そうなのか……」

ルビィは椅子に座るアリカに礼を言うと、天幕から外へと駆け出した。

「……久しぶりだな」

天幕を飛び出し、あてもなく基地内を歩いていたユノに声を掛け

たのはイスラだった。

ユノは沈黙のまま歩を進めるのを止めるとゆっくりと振り返り壮年の男の姿を視界に入れる。

通り抜けていく風が白い病院着のすそをはためかせた。

数年前の記憶より少し老けただろうか。壁のように張られた陣幕を背にして立っている。黒いアンダーウェアに動き易く改良された鋼鉄製のプレートアーマー、肩口には騎士団長を表す赤と黒の肩章を括りつけている。

ぼさぼさの髪を無造作に後ろで括った髪型も負傷した足をかばうような立ち姿も何ひとつ変わっていない。

「……お1人ですか？」

「いや、供回りが2人いる。少し出払ってもらったがな」

皮肉じみた笑いをイスラは口元に浮かべる。

そのまま胸の上で組んでいた腕を降ろし、ポケットの中に突っ込む。ごそごそとしばらく漁って取り出したのは少しよれた紙製の箱だ。

その中から片手で器用に1本の紙で乾燥した草を巻いた棒状のもの

つまりは煙草を取り出し、口に咥える。

これまた器用に片手でマツチを擦って火を点けてからイスラはユノに話しかける。

「……吸うか？」

「まだ吸える年じゃないですから」

「クロップ（この世界の煙草の呼び方）に吸える吸えねえもないだろう」

「私の世界ではそうだったんですよ」

ユノはその隣に腰を降ろして基地内を忙しく駆け回る兵士達に視線を向ける。

「あいつ」

少しの沈黙のちイスラが口を開く。

横目で見ればユノと同じように遠く前方に視線を投げ掛けていた。

「あいつを、どう思う」

「……………ルビイの事ですか、せんせい師匠」

ユノはイスラのことをせんせい師匠と呼ぶ。何故だか初めてであったときからその呼び方がしっくりと来たからだ。

「よせよ、もうそんな風な呼び方できる立場じゃねえだろ　おたがいに」

「それでも、他の呼び方が思いつかないもので」

「はあ……………」

ぼりぼりとイスラはめんどくさげに頭を掻く。いかつい顔が困ったように歪むのをユノは「たいいくずわり」した膝の下で笑った。

ユノは顔をあげ、頭に浮かぶルビイの顔や姿を反芻しながら言葉を述べる。

「とても優秀だと思えますよ。剣の腕、身体能力、機転の良さ、負けん気の強さ……………きつとあの子ならいい騎士になれると思えますよ」

「……………それがオマエを殺すために培ってきたものだとしてもか？」

「ええ」ユノは迷いなく返答する。

「それが、それがそうして鍛え上げられたものだとしても、今回の出来事には関係ない。「みんな」を助けるために、精一杯強くなつてもらうつもりですよ」

「　助けられると、思うか？」

ユノはイスラの顔を見やる。視線は遠くを見つめたまま、ただわずかに顎を引き締め歯を噛みしめているのが見て取れた。

「助け、ますよ」

「……………」

ユノは祈るように合わせた両手で鼻先を覆う。月のような瞳の中には地平線を埋め尽くす砂の海、その先にある西部の大地が映りこんでいる。

「セリアにお願いされたからじゃない、ましてやこの世界や、ランバルディアの為でもない」

「自分の、為、か」

「ええ」

隣に立った男の身体が軽く勢いつけて前にでる。降ろした指先にはすっかり短くなったクロツプの亡骸が挟み込まれていた。

「そろそろここを発つ。王陛下に報告をしなければならんのでな」

「そうですか　お気をつけて」

陣幕の壁に背中を預けたままユノはそう言う。

「それは俺の台詞だ、莫迦者め」

ばさっ、ばさっ、と軽い風と共に基地の上空に3騎のワイバーンが飛んでくる。竜騎士が操るそれはどうやら少し離れた敷地に着陸したようだった。数から考えてもイスラたちの迎えの騎竜だろう。

「1つだけ、俺はオマエにいつておくことがある」

もう離れて歩いていたイスラが言葉を発して止まる。振り返ることなく、どんな表情をしているか分からなかった。

ユノは座ったまま言葉を待つ。

「あいつは、オマエとは“違う”」

「……」

「ただの人間と勇者の違いの話じゃない　ただ、オマエとあいつは“違う”んだ」

竜が翼ではためかせた風がイスラの髪と張られた陣幕。ユノの白い前髪を揺らす。

「くれぐれも、あいつを持っていつてくれるなよ　向月ゆの」

その言葉を最後に、イスラとユノは3年の半年ぶりの再会を終えた。

年数・日時共に詳細不明
ミドガルズオルムの領域、あるいは封印された海淵

海とは、人間にとって魔の領界だ。

それはどこの世界であっても、現実でも、異世界でも変わらない真実だ。

諺にこんな言葉がある。

“板子一枚下は地獄”

それは、船乗りの仕事が危険と隣り合わせという意味だ。

木で作られた船が唯一の命綱。それがなければ人は海というものに永劫関わることは出来ない。

どんなに科学が進歩しようと、時代が移り変わろうとそれだけは変わらない。

人は海の中で生きることなど出来ない。

人は水に、海に、重さに、冷たさに、暗さに決して耐えることなど出来ないのだから。

「
　　」

地獄の底　　光射しこまぬ海底のそのまた底の闇の中。

完全に光がその権力を失い、そこに生息する魚たちが奇怪な発光器で自ら光を発するようになる異界中の異界の底。

そこに、白い少女がいた。

白、という表現は被服の色を表現するものではない　それは少女自身の色。裸体だった。

少女の裸体は完璧な均整を保っていた。

ひとつのしみもない足首。異様なまでに艶かしく、長く伸びた2本の足。膝、太腿。臀部。細く締まった腰。

すらりと1本1本が伸びた長い指にそれを胴体と繋ぐ手首と二の腕。桜色の先端を持つ2つの乳房は手の平に収まる大きさで、重力に負けることなくかすかに上を向いて少女の胸元で揺れている。

長く艶やかなビロードのような黒髪を海の重力に任せ、上昇も落下もすることなくそこに存在している。

それは決して水死体などではなかった。

海中の冷たさを無視するかのように赤味をさした頬に桜色の唇。軽く開いた口元からはマリンスノーと同様に上昇する気泡があった。

呼吸をしている。

少女は、確かに生きていた。

「~~~~~」

少女は黒髪を靡かせ、手を広げて歌を唄っている。

その歌はこの世界のどこにもない歌だった。澄んだ鈴の音のような、だがどこかに醜悪なまでの甘さを含んだ魔の歌声。

それに魅かれたように、少女の周りを大小さまざまな異形の魚が泳ぎ漂っている。

ネエ、愛オシクテ仕方ガナイノ

艶かしい銀色の身体をくねらせて紅い背鰭と冠を持つ巨大な魚が少女を包むように踊る。

ネエ、憎クテ仕方ガナイノ

異様に膨れた顎と鋭く細いナイフのような歯を持った魚が恥らうよ

うに少女の手から逃れる。

ネエ、ワタシノ氣持チニ氣ヅイテホシイノ

カウンター・イルミネーション。自らの身体を虹色に光らせ哀れな魚を誘引する水母が遠慮がちに少女の周囲を回る。

ネエ、狂ツチャウホド、愛シテイルノ

どこからか、少女を照らすように光が射した。日の光とは違う。冷たさを持った奇妙な光。それに照らされて少女と、その周りを漂う幾百を超える魚とそうでないものたちの群れが銀の鱗や黄色く輝く瞳が艶かしく輝かせる。

そして、唄う少女と踊る従僕のような魚たちの遙か下　遙か巨大な都市が眠っているのが視えた。

隠れ潜む、封ぜられた神を信奉しその身を海中に投じた人々の末裔。ミズガルズたちが棲もう悠久の都　深海都市ミッドガルド。幾多の尖塔と奇妙な形状を持つ高層建築を持つそれは、人が住む都などより数段雄大で、進歩しているように見えた。

だがそれは自然なことなのかも知れない。

ミズガルズには人間しか「敵」がいないのだから。

そしてその「敵」を打倒するために気が遠くなるほどの進化と研鑽を積み重ねてきたのだから。

外敵のない絶対的な優位と、細胞の基礎に刻み込まれるほどの地上への回帰願望。

その二つが、ミズガルズという種族の文明を急速に発展させていた。海と生きることの出来ない人間にはその脅威を予想することすら出来ない。

『チヒロさま、第4軍団の方がお待ちです』

うつとりと眼下に広がる都市を眺めていた少女は、手首に付けられた通信球からの声で現実に取り戻される。

一瞬だけ眉根を寄せながら手首を顔に寄せて通信を入れた近衛のソーサリーに返答を返す。

「すぐに戻るわ。部屋に通しておいて」

『御心のままに』

まったくもー、と小声で独り言を呟きながら上ミッドガルドの上界に聳える巨大な「何か」へと泳いでいった。

部屋の中で1人の少年が落ち着きなくソファに座っている。

青と黒で統一された部屋の中は奇妙だった。教会の天井ほど高い天井に反してその部屋の横幅はそれほど広いとは言えず、とても一族を束ねる差為政者の私室とはいえないこじんまりとした造りをしていった。

調度にしても贅の尽くした珊瑚造りのテーブルや、持ち帰った人間の部品などの「戦勝品」を加工して造られた高等家具なども存在せず、地上にもありそうな一般的なものが使われている。

ただ幾つかの「この世にそぐわないもの」がなんの防護もなく無造作に部屋のどこそこに無造作に置かれている。

どこか遠くの異界の様子を移す鏡のような装置や様々な記録が封じられた薄い奇妙な円盤状のもの。

一応技術士長という役職を持つ少年にも計算しきれないような、膨大な数式を一瞬で終わらせてしまう光輝く箱状のものなど、この世界の理を変えてしまうような恐るべき能力を持つオブジェクトが部屋の中に存在していた。

「あ……！」

部屋の中央の床に空けられた丸窓　ミスガルズの住居には一般的な外界と部屋とを繋ぐプールの中から少女が裸体のまま現れる。あわわわ、と白い柔肌から目を逸らす少年を無視し、部屋の端で彫像のように控えていた側仕えの魔族にガウンを着せてもらう。

長い黒髪を乾かす必要はない。少女がさっ、と髪に手で櫛をいれるとはじめから水気などなかったかのようにさらさらと音を立てて少女の肢体を包むように広がる。

それらの一連の動きを終えてからようやく「新しき王」チヒロは少年に声を掛けた。

「それで？どんな用なの、プシユケくん」

「あ、いえ！はいっ……」

革張りのソファから立ったり座ったりと挙動不審な動きをしながらプシユケと呼ばれた魔族の少年が応える。

そして執務机に腰を降ろしたチヒロにあるものを手渡した。

紙状の、だが人間の言葉ではない魔族語で筆記されたものだ。

ガウンを肩口まではだけさせたチヒロはふんふんと頷きながらその帳面に目を通し、直立不動で裁量を待つ少年に声を掛ける。

「プシユケ」

「はっ！」

「この解析の結果をすぐにマニュアル化して戦事部門に配布しなさい。特に“レヴィアタン”には優先して配布。あまり時間はあげられないわよ」

「チ、チヒロさま、それでは」

「ええ」

くすつ、と満足げにチヒロは笑う。感極まったようなプシユケの頬に白い手をあてる。

「よくやり遂げたわね　褒めてつかわすわ」

一瞬の沈黙の後にプシケは膝から崩れ落ちた。強張っていた身体から糸が切れたようだった。

よく視ればその少年の目元には黒々とした隈があり、指先が震えているのが見て取れた。

「やった……これでようやく……！」

チヒロは知っていた。このプシケという少年が今の今まで不眠不休で研究を続けていたことを。そして今、こうして出来た「結果」がこれまで“ローレライ”の本来の目的である「勇者への対抗」という史上目的をはじめて果たすことが出来たのだという事実を。それは、きつと何ものにも変えがたい達成である筈だ。

魔族　　ミズガルズの民には人間と異なる特有の精神構造が存在する。

それは人間が高機能な自由意志を持って生まれてくると違い、はじめから役割を背負ってこの世に生を受けるという点だ。

生まれたその時から既に一生の役割が決められている。つまりは魔族の社会とは蟻の社会と同じものなのだ。

働きアリは永遠に労働から解放されることはないし、兵隊アリは死ぬまで戦役のために鍛錬し、そして死んでいく。

目の前で泣き崩れるこの少年もまたその1人だ。

彼は自分の努力が認められたから泣いているのではなく、この世に生を受けてようやく己の役割を果たすことが出来たのだと　　そう　　いった涙なのだ。

そしてその涙を流させることが出来るのは、女王アリ　　チヒロだけなのだ。

（生きた機械、意志を持った装置、感情を表現する愛玩人形）

泣きながら感謝の言葉を述べる魔族の少年をその身で抱きしめながら、チヒロはぞくぞく、と恍惚に身を震わせる。

（みんな、みんな、わたしのもの。わたしだけの、わたしだけが自由に動かせる“ユニット”）

チヒロの脳裏に 「こちら」に来る前に飽きるほどやり込んだゲームの画面が浮かぶ。

それは、この世界とてもよく似た時代背景を持つ、最大で4人までが対戦の席に着くことが出来るゲームだ。

プレイヤーは神か、それに等しい権力者に君臨し自由に人間を動かすことが出来る。

開拓者に世界を探索させて視界を確保し、滅ぼすべき国と同盟を結ぶべき国を見つける。

農民に様々な資源を採集させ内政を潤し、都市の建築と文明の発展を遂げさせる。

そうしている内に時代は進み、軍隊が世界のテクノロジーの中に登場する。

そして、敵国を滅ぼすために兵团を指揮し、戦争する。

それは決して文明を作ることとを目的としたゲームではなく いか
に効率的に敵の文明を滅ぼすか、そういったゲームなのだ。

「あちら」でまだ人間だったチヒロは、そのゲームが大好きだった。

（ああ、早く、早く滅ぼしたい）

チヒロは恍惚の表情のまま部屋の天井を、その遥か遠くに広がる地上の世界に思いを馳せる。

そこには敵対文明であるく人間くが巨大な文明を築いている。

それを全部「まっ平ら」にするのが、魔族全体の、そしてチヒロのひどく個人的な望みなのだ。

（さあ、もうわたしは手札を切ったよ？）

音もなく、痙攣するように少女は嗤う。

（あなたは、次はどんな風に動くの？）

セリア・ランバルディア・イヴヴァルトについて

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月27日

9時2分

ランバルディア王国王都・王城リンベルネ アルヴィース元老院

アルヴィース元老院。王城リンベルネの敷地内に存在するその巨大な議会議堂は国の中心ともいえる場所である。

王族諸侯とそれに仕える宮廷貴族。また、何かの事情により召還された領主や騎士などが国の運命を左右する政^{まつりごと}について議論をかわす。重要な政治の舞台である。

本来なら常に喧騒と議論が巻き起こるその場所に、今は不気味な沈黙が満ちている。

「騎士団長イスラ・ウルズ・アンゴーシュ。顔をあげよ」

「……はっ」

円形の議会の中央 そこで跪き、騎士の礼を執っていたイスラはゆっくりと顔を居並ぶ王族の面々に対して顔をあげる。

イスラの表情にはいつもの飄々としたおちゃらけもなく、身なりもパリッとした儀典用の鎧を身につけている。

肩口から伸びる青い外套も大仰な飾りのつけられた膝当ても普段のイスラならば「邪魔」と言って憚らない。

だが、王侯貴族の居並ぶここでは身に着けてなければならない。特にイスラのように冒険者から貴族に成り上がったものにとつては重要なことだった。ドレスコード（服装規定）といえば聞こえはいがその実は身なりや立ち振る舞いで自分がその発言に耳を入れるべきか、聞く耳を持つべきか判断しているだけだ。人は人をパッケ

ージで判断する。それはどの時代や世界でも変わらないことだ。

円状に造られた大理石の議席は人で満たされている。

中央の小さく隔絶された広場に佇むイスラ、前方の高見席に居並ぶ王族諸子 現国王アヴェル・ランバルディア・イヴヴァルト。

第一王子アルステッド。第二王子ギネスそして王女にして神の巫女であるセリアが豪華な椅子に座りイスラの方を視ている。

現国王アヴェルは「戦神」と呼称されるその鮮烈な気性らしく、己で仕留めた獅子の毛皮をなめしたマントを羽織り、金の鎧を身に付け、巨大なグレートソードを杖のように床に立ててそこに腕を乗せている。

野性味溢れる、だがどこか気品を感じる顔立ちには針のような口髭をたくわえている。

その横の席に着席するアルステッドとギネスはよく似た顔立ちの、しかし対照的な性格の双子だ。

第一王子アルステッドは父の影響を色濃く受け継いだ、ランバルディア王族らしい性格の持ち主。

激情家な気質を持ち、喧嘩早く。戦に関することが好き。現在軍事に関わる政務を指揮しているのもアルステッドだ。

それに比べギネスは非常に穏健な性格の持ち主として育った王子である。

花や詩を愛し、芸術に感心を持つ。どちらかといえば今は亡き女王シエーラの影響を受けた気質といわれている。

アルステッドが第一継承者として認められている今、ギネスは国の文化や芸術に関わる内政に積極的に関わっているようである。

本人としても王の器としてふさわしくないと認めており、王もそれを受け入れている。

アルステッドは父とよく似た鎧を身に着けて堂々と座り、ギネスは膝の上で手を組んで縮こまるように座っている。対照的な図柄だ。そしてギネスの左側にこの場で唯一の王女、セリアが楚々と、不

安げな様子で座っている。

セリアの背後には侍女ウルスラが影のように付き従い、主人の様子を心配げに伺っている。

そしてその王族たちと対面に、もしくは対峙するように円形議会の席全てに貴族諸侯の面々がひそやかに囁きあいながら座っている。

「それではイスラよ、ドンテカで目にしたことを話してみよ」

先程と同じ声　アヴェルが広い議会内に響き渡る声でイスラに命じる。

それに対しイスラは再度頭を垂れ、事細かにドンテカの出来事を報告した。

報告の内容は軍の調査と部下たち　ルビイとフリード、そして“詩の蜜酒”に属するスコルピオの証言を元にしたものだ。

8月23日の深夜、寝静まったドンテカに魔族の軍勢が出現村は大きな騒乱の痕跡なく、何らかの計画によって村の機能が麻痺させた状態で襲撃が行われた。犠牲者は村の人間と観光者、冒険者を含めた数百人　ここで貴族から大きなどよめきが起こった。

ひそひそとなにやら囁きあう貴族を尻目にイスラは報告を続ける。ほぼ同時刻に村の離れに暮らす勇者ユノの邸宅を魔族が襲撃村内と邸宅周辺の魔族の死骸の数から比較するに、勇者ユノを殺害することが今回の魔族側の主目的と見られる。

そしてその数刻後、村内において魔族の集団と交戦中のルビイ一行はユノ邸から「巨大な火柱と閃光」があがるのを目撃する。

そこまで聞き、アルステッドが凜とした口調でイスラに問う。

「襲撃した魔族の詳細については？」

「はッ、残留物から察するに大戦中期より現れた特殊軽歩兵の一団であると見られます」

「……あの連中か、ウルタールでは煮え湯を飲まされたわ」

アルステッドが吐き捨てるように言う。

ウルタールとはアリストピアの東側に広がる大きな湿原の事だ。都市奪還のため東側から湿地を渡ろうとした兵団が次々と泥中に潜んだ魔族軍兵によって引き摺りこまれ、あえなく潰走した作戦だ。東側に展開した軍を指揮していたアルステッドにとって苦い過去の思い出だ。

その一件から騎士学校の『対魔族戦訓』に「魔族と対峙するときには常識と樂觀を捨てよ、でなければ己の命を投げ捨てることになる」という一説が付け加えられたのも記憶に新しい出来事だ。

「続けよ」

アヴェエルに命令され、イスラは報告を続ける。

魔族の一団をかわしたルビイたちは勇者ユノと合流するため邸宅に移動し、そこで「巨大な火柱と閃光」が邸宅一帯を粉碎する目的で使用された魔法的攻撃であると認識。しかし包囲網を形成していたスラッド兵の一団を巻き込む形で炸裂したその呪法には不可解な点も 多く、魔術師団の調査が現在進行している。

また、邸宅周辺を包んだ炎は魔術で生み出されたものと解析され、魔族以外の勢力が介入した可能性も否定出来ないと見ている。

イスラはそこで一度言葉を切り、現在は正規軍とドンテカに近い辺境領軍が防衛基地を作り、周辺調査と警戒活動を行っているとの報告を締め括った。

「質問があります。よろしいでしょうか？」

貴族側の席から声があがった。イスラの背後の席だ。

聞き覚えのあるその声に来たか、と声に出さず吐き捨て王に伺い

を立てる。

アヴェルは無言で、ただ手を振って促す。

背後でどよめく声。衣擦れ、誰かが席から立ち上がったようだった。

「感謝いたします王陛下　お聞きしたいことはあの勇者、ユノ・ユビキタスの今後についてです」

「今後、とは？」

それまで沈黙していたセリアが顔を上げ、震える鈴のような声で意味を問いかける。

凜とした声だが表情には不安が募っているにが見てとれた。

貴族席からの質問者　テレンス・ナルヴィ・エランシア公爵夫人が王に負けずとも劣らない声量で発言する。

「そのままの意味ですわ、これまでは……まあ、何度か不幸な出来事が重なったとはいえあの勇者は“契約”の奉仕のためにわが国の領土内に留まる形となっておりました。数多くの諸侯の反対を押し通す形で……」

（不幸な出来事？どの面が言うんだか）

イスラは顔には出さず心の中で吐き捨てる。

エランシア公爵夫人はアライサム・ナルヴィ・エランシア　　2

年前の惨劇でユノに命を奪われた騎士の母親だ。

ユノが拘束され、王都へと戻ってきたときに半狂乱でその護送馬車に近づこうとした、被害者のひとりとして印象深い貴族の1人。

息子を永遠に奪われた哀れな母。そのときまでは彼女はそういった人物として受け止められていた。

その後、この元老院で開かれた懲罰法廷に召使に抱えられて現れた夫人は、まるで命を奪われた20人の騎士たちの怨念が憑いたかのようにユノの処刑を求めた。同じように自分の騎士や親族を喪った貴族をまとめあげ今では「排斥派」と呼ばれる派閥のリーダーとして国会でユノの厳然な処罰を望み続けている。

それについてはイスラは侮蔑を抱かない。奪われた者が奪った者を攻撃するのは当然のことだ。

しかし、この女はこれまでの2年、明らかにやりすぎた。

擁護者の王都郊外への隔離、邸宅の3度に渡る「不審火」、国中の商店間でいつの間にか決められていたユノ・ユビキタスへの売買禁止令、高額で出され続ける「白髪の女の首」を求めるギルド依頼の数々。

数えるのも馬鹿馬鹿しいユノとその周辺の人物を狙った襲撃者の数々。

その全てがこの女の采配によるものだ　巧みに痕跡を消しながら。

（復讐する時、人はその人間と同列である。誰の言葉だったか。）
彼女の「復讐」のために何人の人間が不毛な争いに巻き込まれ、地位や名誉を失ったか。

しかし罰することは出来ない。彼女の賛同者の支持と、その役職の重要性を考えれば。

エランシア公爵夫人は声高に続ける。

「ですが今回の出来事でまたあの勇者は定住の地を失ってしまいました。それも、わが国を含めた多くの国に愛されてきたドンテ力を犠牲にして……死んでしまった民のことを思えば哀れでなりませんわ」

そういつて夫人はレースのハンカチで目元を拭う。しかしその瞳から涙が流れていないのは誰にもわかることだった。

「そつだ！」

彼女の座る席の近くから賛同の声があがる。

夫人を中心とした「排斥派」が陣取る席だ。

「あの者がいるだけで民が危険に晒される！」

「そもそもあの者が魔族を手引きしたのではないか!？」

「ご友人だからといって今回の出来事は看過出来ませぬぞ！姫！」
ざわざわと議会の貴族たちが騒ぎ出す。

と、その「排斥派」の主張に対して反論する声がイスラの左側の席から巻き起こる。

「その議論は今回の問題に関係ない！今はこれからのことについて話し合うべきではないか！」

「そうだ！場を弁えよ！この世の一大事かもしれぬのだぞ！」

「姫を侮辱する発言を取り下げよ！今すぐだ！」

一見まともな意見をあげる彼らにもイスラは不快げに頬を歪める。

（いいカツコしいが。手前らが欲しいのはセリアの寵愛と発言力だろうが）

「排斥派」と真つ向から対立する派閥 「擁護派」と名付けられるのが彼らだ。

基本的には戦場で配下や親族、自らの命を助けられた貴族や軍人を中心として構成されているものの、本当に純粹に恩義を感じてユノを擁護しているのはごく一部だ。おおよそはユノ・ユビキタスのきつての友人であり聖女であるセリア姫のお膝元に近づいたためだろう。

もつとも「排斥派」と違い何らかの不都合なアクションを起こさないだけまだ信頼がおける派閥といえる。

「姫！ご返答を！」

「姫っ、王陛下、お答え下さい！」

「姫、気にすることはありませぬ」

「姫ッ！」

議会は完全に泥沼と化している。大勢の貴族が好き勝手に対立派閥を罵り、口々に困惑するセリア姫へと滂沱に言葉を投げ掛ける。

その不毛な流れを止めようとどの派閥にも属していない貴族が宥

めようと立ち上がり、混迷の様相をさらに悪化させていく。
まるで子供の喧嘩。だが情けないことにこれがランバルディアの
実情だった。

かんっ！

突然轟いた雷鳴のような音に、アルヴィーヌ元老院の全ての時間
が止まる。

その音を響かせたのはイスラの目の前の高見席、その中央。今ま
で沈黙を保ち貴族たちを睥睨していたアヴェル自身だ。

太く、傷跡が無数に残る腕がグレートソードの柄を握っている。
杖のように持った剣の鞘先で地面を打ち鳴らしたのだ。

静まりかえった議会内にばらばら……と砕けた床の破片が落ち、
イスラの足元に転がる。

鞘の一打ちで議会内の動きを止めたアヴェルは傲然と、静かな声
音で囁くように言葉を発する。

「鎮まれ」

「……………」

沈黙ののち議会の全てが動き出す。言葉を発するものは誰もいな
い。

わずかな衣擦れがあちこちで響き、そのうち全ての貴族が行儀よ
く着席する。

イスラは拍手喝采でもしたい気分だった。

アヴェルは沈黙を取り戻した議会の中を見回すと満足そうに頷き、
横に座るアルステッドに何か耳打ちした。

鞘打ちにも眉一つ動かさなかった豪胆な王子は力強く頷き、椅子
から勢いをつけて立ち上がった。

そして朗々たるバリトンで円形の議会全てに演説をはじめた。

「話はわかった。その方たちの抱えた心配も確かにわかる。重要で、些末なことではない。」

その言葉に排斥派の貴族たちが頷く。

「だが、よいか！今回の出来事は奴らの復活の狼煙だ……既に耳に入れている者も多かるう。ドンテカでの出来事を皮切りにランバルディアの中で数多くの魔族とその信奉者が発見された！永きに渡る人魔戦争が終わり、我々が最も気を緩めている時を狙ってだ！」

ざわ、と貴族の内でもた動揺の波が広がる。知らないものは怯え、既に耳に入れているものは顔を強張らせた。

「奴らは小賢しくも敗走を演出した！偽の魔王を立て、我々人間の油断を誘いもつとも柔らかい時期を食い破ろうと算段したのだ！まるで肉が腐るのを待つハゲワシだ……だが一部の慌て者が抜け駆けをした、それがドンテカだ」

おおお、と軍人を中心とした貴族から怒号が上がる。魔族に対しての怒りの声だ。

アルステッドは高見席を舞台として、右から左へと全ての聴衆に投げ掛けるように声を響かせた。

「これが平原の、人対人の戦ならば致命的な誤りだろう。伏せた兵とその剣先は“その時”まで完全に、何の痕跡も違和もなく隠しておかねばならない。でなければ騎兵の蹄か、歩兵の銃列に塵芥のように食い破られるだろうからな。もはや勝利の笛は永遠に鳴らぬ。だが相手は魔族。忌々しく、おぞましい　そして決して油断してはならぬ我らの仇敵だ！！！」

真紅の外套を手で打ちはらい、アルステッドは拳を握った。

「諸君！戦の準備を！もはや杞憂の余地は欠片もないことは明白。諸侯はすぐさま領地を防衛体制に移行し、兵力を再結集せよ！王軍ならびに首都の防衛体制も第二種警戒域（王都およびその周辺市村

の要塞化および軍隊の無期限駐留）に移行！取れうる手段を尽くして魔族の襲撃に備えよ！」

再び大きな歓声があがる。アルステッドの軍からの支持は絶大だ。イスラは黙して、冷静に周囲の観衆を見つめる。この中央の広場はそういった観察に適していた。

昂ぶり、轟々と高鳴る貴族の中で明らかにその決定を、いや己の主張をふいにされて悪感を持っている者達がいた。

それは「排斥派」のメンバーだ。

特に王の高見席の正面に陣取るように座ったエランシア夫人は悔しさと苛立ちを隠しめせず憎憎しげに王族を、とりわけセリア姫を睨みつけている。そして隣に控えていた従者らしい男に扇子で口元を隠して何事か囁くと用は済んだとばかりに退席し、元老院を出て行った。

幾人かの「排斥派」のメンバーも後に続くように出て行き、そのうち中央の席には無関係な貴族が残されるばかりになった。

『イスラ様、聞こえますか』

耳元で、正しくは耳に付けた“対話”のピアスから周囲の歓声と怒号を無視して声が届いた。

イスラが高見席の方を見上げるとウルスラが頷いた。

『姫様が密に相談があると……来て下さいますね？』

『アバンチュールのお誘いか？そりゃ嬉しいね』

『ぶん殴りますよ、イスラ様』

イスラの悪意のない軽口にウルスラは冷徹な無表情で答えた。

『月』の暦1065年

天候：晴れ 8月27日

15時45分

ランバルディア国王都・王城リーンベルネ 礼拝堂の一室。

こんこんこん、と控えめなノックが部屋の中に響く。

石造りの壁に天蓋のあるだけの簡素なベッド。その脇に置かれた椅子に座っていたセリアは読んでいた小説から目を離れた。

「確認を」

ウルスラが一礼し、1歩前へ出る。

壁際に控えていたウルスラともう1人、カタリナは視線を合わせ、扉の向こう側にいる人物に声をかけた。

ウルスラが扉の左側にたち呼びかけ、右側にはカタリナが鋭く磨かれたレイピアを持ち、いつでも不埒な侵入者に対して攻撃を行えるよう控えている。王族の女性を警護する侍女は武術と魔術に秀でた魔法戦士であるのが常だ。

特にカタリナは王陛下の近衛兵と対等に渡り合う実力の持ち主であり、信頼のおける防衛者としてセリアの側に仕えている。

「どなた様であせられますか？」

ウルスラの問いかけに男の声が答える。

「守護騎士団団長イスラだ。花束も首飾りもないが姫様にお取次ぎ願おう」

「姫」

短い言葉で指示を仰ぐのはカタリナだ。

女性にしては低く、重圧を与える声をしている。天使のような外見からは想像できないその低くどすの効いた声が彼女の特徴だ。

セリアは椅子から立ちあがると本をテーブルに置き、立ち上がった。

「通しなさい……お待ちしておりました騎士イスラ」

セリアがイスラと繋がりを持つようになったのは幼少の頃　　まだイスラが貴族ではなく自由騎士として戦場にいた頃の話だ。

その時には既に魔族が地上へと這い上がり、アリストピアを闇と禍々しい妖気が覆う暗黒の大地へ変貌させてしまっていた。7年にわたる人魔戦争の最初期、各国の旗を掲げた全国連合軍とミドガルズオルムの金の旗を掲げた異形の魔族軍がメルカトル大砂海を挟んで対峙し、激突の時を今や遅しと睨みあっていた頃だ。

まだ巫女として見習いだったセリアはアヴェルと亡き母シェーラに連れられて前線の陣中見舞いに訪れた。

王の訪問に沸きかえる兵士と騎士たちがセリアは嫌いだった。

その頃のセリアはまだ精神的に幼い　　絵本や伝記絵巻を好んで読み、それに感化される子供だったからだ。

死を恐れずに悪いドラゴンに立ち向かう騎士なんていなかった。みんな強がっているだけで眼の奥で死に怯えていた。

病気で元気がない子供のために仲間と一緒にラッパを吹き、沈んだ町を明るくする兵士たちなんていなかった。いつも知れぬ激突の時のため、みんな必死で槍や銃の手入れをしたり、家族に手紙を書いていた。

平和を愛する優しい王様なんて居なかった。血のような夕焼けの下、長い髪を振り乱して人と国のために、恋人と王のために死ぬ、勇敢な戦いの果てに死ぬばドンナーはその御許を開いてくれると叫び続けていた。篝火の炎が空に立ち昇り、兵士たちの殺気にも似た熱意を一緒に空へと持ち上げていた。

幼いセリアにはそれがたまらなく怖く、そして裏切られたように

感じたのだ。

でもそれを表にだすことはしなかった。小さな頃から「巫女」や「聖女」と言われ、その型にはまるように育てられてきたのだから巫

女はただただ肅々とドンナーとその神々に祈りを捧げ、聖女は常にたおやかに微笑まなければいけないのだから。

だがそんなセリアの悲しみに気づいた男がひとり、そこにいた。

ほお、この国の姫様はじつに器用であらせられる。アリストピアの大劇場でも見られない名演ですな

何を言っているのですか？わたしはどここの舞台にも立ったことなどありませんよ。

嘘笑いは、嘘泣きよりばれるのが容易いのですよ、小さな聖女さま。

イスラは当時とほとんど変わらない軽い笑いを浮かべてセリアの対面に座る。

「それで姫様。この俺に今度はどんな用件を申し付けるつもりで？」

「騎士イスラ、姫様に失礼だろう」

表情の少ない顔に眉間を寄せてカタリナが言う。

「いいのですよカタリナ、確かにイスラにはいつも様々なことをお願いしているのですから」

「……御意に」

ぶすつ、とした顔でカタリナが壁際まで下がる。基本的に表情が少なく人形を思わせるカタリナだが、その特徴に反して何を考えている

がとても顔に出やすい。

普段から権力や美辞麗句で塗り固めた貴族たちに囲まれたセリアにとってそれはひそかに癒されるポイントだった。

ウルスラはすでに壁際まで下がり控えている。

「まずは、ルビイとフリードの様子は如何でしたか？」

ルビイ・ギムレット・アンテローズとフリードリヒ・ヴァイセン。その2人をユノと共に向かわせたのはセリアの采配によるものだ。「戦いの家」と呼ばれるアンテローズ家の申し子のようなルビイとその脇を長年固めてきた優秀な自由騎士。そういった実績で選んだ面もあるが、セリアにとってルビイとフリードは騎士の中でももっとも信頼のおける人間だった。

まずはルビイ。彼女はとても純粋で、常に真っ直ぐを生きている少女だ。

セリアに近づいてきたときでさえ彼女は自分の目的をセリアに隠さなかった。ユノへの復讐のため。そのためにユノを知りたい。その真っ直ぐな瞳にはゆらぎも卑しさも悪意もなく、ただただ純粋で強烈な「怒り」だけが存在していた。

それはを非常識と思う反面、とても希有なことなのだとセリアは思う。

人はどうあっても憎み、欲望を募らせ心を凝らせる。どれだけはじめに崇高な目的を得ようと少しづつ 木組みの家具が湿気で腐っていくように人は自分の意志を歪めていく。環境に流されるままに。

そうなってしまった人間をセリアは何人も知っている。

（けれど、彼女はそうならない。そう、信じられる）

ルビイの心は鋼鉄だ。腐らず、容易くは折り曲がらず、全てのものに平等にその硬さを見せつける。

それはある意味、神の意識に近い。

神に仕える巫女だからこそ至ったその着想がセリアのルビイに対

する信頼と敬意を深めている。
と同時に懸念することもある。

（いつかその強さが人や己を傷つけなければいいのですが……）

対して、フリードは常に変わり続ける人間だ。

柔軟といってもいい。あらゆる状況に適切に対応し、その場において好適な結果をもたらす。副官としてはこれ以上ない人物だろう。ルビィが鋼鉄のままいられるのも彼が緩衝材として周囲と彼女を調整してしてくれるからだ。

……言ってしまったらルビィを周囲に溶け込ませるにはフリードが必要だということになるが、それ以外の点に関しても彼は信頼が出来る。

人魔戦争下において最前線で生き残り、自由騎士として任命されるその実績。その称号を裏打ちする能力と知恵の周りの良さ。

とても平民とは思えない、平民にしておくのがもったいないというのが悪気はないが口さがない軍人たちの評価だ。

（しかし）

セリアは彼に対しても懸念する。

フリードは何かを隠している節がある。ルビィとは違う、人間らしい、そしてどこか人間らしくないような不気味な隠蔽。

それが何を示しているのか、フリードが何を隠しているのかはセリアは分らない。秘密を持った人間を見抜くのは得意だが、セリアにはその箱の中身が何であるかは分らないのだ。

だが、同時にそれがルビィやその周囲の人物にとって脅威ではないということこそセリアは感じている。恐らく彼自身の、彼の心の中の何かが問題なのだろうと、何も知らない彼に対してそんな風にセリアは見ている。

（これがいつもの取り越し苦労であればいいのですがね……）

「姫？」

カタリナが心配そうにセリアに声をかける。

どうもぼうつ、としているように見えたらしい。はっ、とあわててセリアは目の前のイスラに意識を戻す。

イスラは「いつもの」事情を知っているのかにやにと、決していやみにならない口調で軽口を叩く。

「またお得意の心配症かい？ 心配姫」

「ええ、またですね」セリアは苦笑する。

ウルスラが心配げに眉根を寄せる。カタリナはその横でイスラに對して隠す気もない敵愾心をぶつけていた。

「まあいいさ、あの2人に関してはそこまで心配いらねえよ。アンテローズはガキだが一応曲がりなりにもひとつの部隊を率いてるし、フリ

ードのお守りもあるしな。ま、国に帰ってくるころにはアンテローズがガキから女になってるかもしれねえが……」

セリアはその意味がよくわからず首を傾げる。

その後ろではレイピア片手にイスラに斬りかかろうとするカタリナとそれを必死で止めるウルスラの姿がある。激しい動きだがほとんど音を立てていないのは彼女たちの優秀さ所以だ。

「騎士フリードは隊長権限を受け取ってくれましたか？」

「断りようがねえだろう。略式だが正当な手続きをふんで執行部と騎士会の諒解を得たんだ。まあ、それがなくとも姫様のハンコだけで充分な理由になったろうがね」

「……やはり少し強引でしたでしょうか」

「なに、構うことない。権力は必要なときに必要なぶんだけ使えばいい。それに姫様はこの国の姫様なんだ。誰も彼も文句なんか言えるはずがねえのさ、表向きではな」

「……」

押し黙るセリアにイスラは表情を消して、静かに呟く。

「後悔しているのか？自分がただの聖女じゃあなくなったことが」

「いいえ……そうではありません」

「言いたいことはハツキリと言った方がいいぞ、姫を、セリアを“そう”した原因は俺にもあるんだからな」

イスラは懐かしそうに己の動かなくなった片足を撫でた。

セリアはランバルディア王国の王女であり、神の託宣を聞く巫女だ。それと同時に貧困や疫病に苦しむ人々に手をさしのべる。その救貧

活動の象徴である「聖女」だ。かつての母が同じくそうであったようにランバルディアの王女として決められた道を歩んでいる。

だがセリアにはこれまでの「聖女」とは違う。決定的な違いが、心の奥底にあった。

この世には、希望なんて存在しない。神の救いも、癒しも、ただ頭を垂れて乞うているだけでは永劫訪れない。

それを学んだのは人魔入り乱れる戦場の中でだ。父の反対を押しきり、勇者たちの供についたセリアは陰惨たる戦場を見た。幼いころに垣間見た幻想の崩壊の、その続き。

人は魔族を殺し、魔族は人を殺す。どこにも慈悲など存在しない。人が人であることを忘れて牙を剥き出し、獣のように吠え立てる。なんとも“平等”な世界。

目の前で兵士がモンスターの顎に噛み砕かれ、破片を撒き散らす光景を目にしてセリアはそれまでのあらゆる常識を失った。

けれど、それは絶望ではなかった。自分のそばに、ユノやナオキたちがいたからだろうか。

希望が存在しないのであればどうすればいいか、救いが、癒しが、慈悲が己の矮小な身に降りてこないのであれば、どうすればいいか。

本格的に動きだしたのは戦争後だった。ユノの事件とその騒動が行動を急がせた。

セリアは残留した魔族を倒すために西部に残ったナオキたちに別れを告げ、単身ランバルディアへと舞い戻った。

当事のランバルディアは誰もが疲弊しきり、激しい攻防の爪痕や負傷した国民が溢れかえっていた。

セリアは時同じくして帰還した兄弟たちへの挨拶もそこそこに、生き残ったヒーラーやなんらかの回復術を持つ冒険者や国民をかき集め、救貧活動を組織した。

ここまではこれまでの聖女と同じだ、人を救う。

セリアはその過程で 救済と引き換えに様々な知識と、そして人脈を得た。国民のご意見番。耳の聡い商人頭。裕福ではないが民に慕われた地方領主。独自の交易ルートを持つ武器商人。人と共に生きようとする酔狂なドワーフの鍛冶士。暗殺を生業とするアサツシン。

これまで何の関わりもない。普通に「聖女」として生きていれば決して交わりようのない人々と出会い、契約した。

対価は様々だが契約の内容はただひとつ「セリア姫に尽くせ」

知識。情報。人材。物品。技術。暴力。

王族という地位を介さない。ただ一個人同士の対価ある奉仕契約。それはセリアの望む「救い」に必要なものだった。

この世界に希望がないのなら、作ればいい。救いも癒しも慈悲も、あらゆる権力を使って、作ってしまえばいい！

イスラはこのセリアの絵図をこころよく支えた。

他人の秘密を感じとるのは得意だが、悪意には気づけないセリアにかわって付き合う人間を選別した。

後ろ暗い世界の人間たちとの交渉方法を覚えさせた。

説得とは時にはピストルや短剣を突き付けながらやった方がいいと教え示した。

セリアはもはや聖女とは呼べない人間になった。助けを求める人々に差し伸べる手の後ろ手には短剣が握られていた。赤子を優しく抱く

その腕の中には毒薬が隠されていた。それが振るわれるのは民に對してではない。

様々な理由を持った、善悪関係なくセリアの救いを邪魔するものたち。

牙を持った聖女。それが今の自分。

「いえ……自分で決めたことですから」

「そうか」

イスラは髭の薄い顎をなでて目を細める。

「さて、そろそろ本題といこう。何をしたい？何を望む？」

「ウルスラ」

セリアの呼び掛けにウルスラが動き、祈祷具が収められた棚からひとつの箱を取り出した。

およそ80ラウン四方の小さな箱だ。材質は魔術を通しにくいアダマントタイトを加工したもので、表面に刻まれた盾の紋章が堅牢さ象徴

している。

ウルスラは一礼しイスラとセリアの間のテーブルの上にその箱を置き、魔術を唱える。

「 解錠 」

宙に描いたルーンを指先に纏わせ、ウルスラは箱の表面を複雑な図形を描くようになぞった。すると箱の内側できん、と涼やかな金属音が鳴り、ゆっくりと箱の蓋が開いた。

箱の内側の、赤い布地に乘せられたものを見てイスラはほお、と声をあげた。

「ラタトスクの耳飾りか、しかも見たことのない。新型か？」

「ええ、ニザヴェリルのドワーフたちに拵えてもらいました」

ラタトスクの耳飾り、というのはドワーフの国ニザヴェリルで作されたマジックアイアムだ。

遠く離れた場所に魔術を介して声音を伝える通信用の品だ。この技術はドワーフの専売特許というわけではなく、イスラがウルスラと話したような”対話”を刻みこんだピアスなり耳当てや帽子は高等階級を中心に普及している。

だがその能力には大きな開きがあり、ラタトスクの耳飾りは極端な高低差がなければ大陸の端まで声を届けることが出来る代物だ。

セリアが新たに制作新型はその能力にくわえ、使用者同士の視界を共有 音だけでなく映像を伝えることが出来るようになってい

る。

「これを早急にユノに届けて下さい。手段は問いません」

「ああ……そうか、あいつは受け取らなかつたんだっけか」

「ええ……あの子は、ユノは自分に溜め込むひとですから」

ウルスラが箱を開けた時とは逆順になるように図形を描き、箱の仕掛けを”施錠”する。

「すぐに俺の部下に運ばせよう……他には？」

「スヴァルトアルフ Heim への扉を、開いて下さい」

「！」

イスラはその発言に軽く眉をあげ、驚きを示した。

ごく短い時間、セリアの背後に控えるウルスラに視線で問う。女神のような侍女はわずかに表情を固くしたが、理解の意を示した。

「それではあいつをフェロー島に？だが時間はあまり執れないぞ。それに、万が一排斥派に露見すれば確実に動乱が起きる」

「いえ、イスラ。思い出して下さい。あの世界の成り立ちを」
その言葉にイスラはしばし考えを巡らし、はつとする。

「成る程！考えたな……扉はひとつではないということか。」

「ええ、そうです。あの場所であれば、あの”触れてはならない”森であれば誰も怪しむことはないでしょう」

「そうだな　しかし」

セリアが目を伏せる。

「ええ……わたしは、またあの子に」

セリアはその続きを言葉に出すことなく、何かを振り切るように首を降った。

髪の色と同じ、金細工のように繊細な睫毛が悲しみに震えていた。

「……あの子にまた試練を強いてしまいます」

イスラはどのように任務をこなすか、それには何が必要かをセリアに伝えようと、幾つか下らない軽口を叩いて部屋を退出していった。

「ウルスラ、今夜は誰も部屋に入れないで頂戴」

「かしこまりました。姫様」

ウルスラは恭しく一礼するとセリアの部屋から退出していく。扉から出る一瞬ウルスラの顔に気遣いの色があつたことをセリアは心のうちで感謝しておく。

セリアは扉をそつと指でひと撫ですると、踵をかえして礼拝堂の窓から外を見た。

一面に広がる森に、遠くの街並み。太陽がそろそろ1日の仕事を終えて地平のむこうへと横たわろうとしている。

城と街を隔てる森は黒々とした影にかわり、街のまばらな灯りだけが世界に取り残されている。

綺麗な景色だ。国の1日が穏やかに過ぎ去ろうとしている。平和な夕刻。

少し前まで、この窓からは焼け落ちた家々から立ち昇る煙が見えていた。

二度とこの景色を壊させはしない。セリアは心の内でそう固く誓う。

その為にはどうすればいいか。

とにかく、今はたくさんの人を集めなければ。

人はひとりでは何も出来ない。たとえいくら巨万の富や財宝に囲まれていても周りに人がいなければ何も出来ない。

人が必要なのだ。

人と人のつながりが。一本の糸は脆弱だがそれが集まり繋がれば剣の刃でも断ち斬れない強い布になる。

「だから、お願い。無事で帰ってきて……」

ケンヤ、ナオキ、ハイネ、アライス、エレノア。

そして、ユノ。

ただ流されるように己の運命を受け入れるだけだった自分に、最

後まで寄り添ってくれた勇者たち。

その「みんな」が今や危機の中にいる。

それを助けるために、最後に残った友人もセリアは死地に追いやってしまった。

（でも、待っていて　私は助けて見せる）

セリアは窓に背を向ける。

（私がみんなを守ってみせる。私の、私なりの方法で！）

こん、こん。

と、なんの前触れもなく部屋の中に何かを叩く音が響く。

決して大きい音ではない。木材の強度を確かめるかのような、控えめなノックだ。

セリアは息を飲み礼拝堂の扉へ視線を向ける。

そちらにはウルスラとカタリナのふたりが扉番をしている筈だ。

何か緊急の用事かしら、と思うがすぐにその音が扉のノックではないことに気づく。

「窓から失礼……」

セリアがそれに気づくタイミングを図ったようにその声はかけられた。

すぐにその場を離れると、窓と挟むようにテーブルを動かしてセリアは振り向く。

「女史からの手紙を預かっておりますゆえ……」

そう言つて頭を垂れる人物は窓の外　　6階建ての礼拝堂の宙に浮いている。

その人物の、男の姿は一種の警戒を招くものだった。

フェルトのような黒い外套を身体に巻きつけるように羽織り、頭と口元を布で隠している。

外套から覗く被服は飾り気のないブラウスに細いパンツ。裾と靴の間からみえるくるぶしは血の気のない白だ。

セリアはテーブルに置かれた短剣を鞘から抜くと、男に言う。

「入りなさい　伯爵」

「お招き頂き感謝の極みに御座います」

男が長い手を翳すとひとりでに窓が開いていく。

内側から掛けられた錠前もかちん、と音を立てて外れていく。

「それで、手紙はどちらに？」

「ここに」

男は黒猫のようにしなやかに窓から滑りこみ、セリアの足元にかしづく。

花の一輪でも差し上げるような手元にはいつの間にか手紙が挟み込まれている。

特に特別な印章があるわけでもない　数枚の便箋が収められた封筒。紙の質感は上等なもので一般の平民同士がやりとりをかわすものではなかった。

差出人の名前はマリエラ・クロフォード　セリアと契約をかわした内の一人だ。

「……確かに」

セリアはしばし指先で手紙を確かめてから男に受領の意を示す。

「フロイラン。対価を頂けますかな」

「はい」

一瞬の躊躇ののちセリアは右手に持った短剣を左の指先にあてがう。

それを見た男は眼を輝かせ、口元を隠した布を首に引き下げる。嬉しそうに開いた口から覗くのは、針のように尖った牙だ。

ヴァンパイア　男はそう呼ばれる種族のひとりだ。

「　　っ！」

セリアは勢い良く右手の短剣を滑らせる。

鋭く研かれた刃は肉を切り裂き血管を傷つける。

赤い血が床の上に滴り落ちる。

男はそれを一滴も逃すまいと床に這いつくばりそれを啜った。

とても美味な何かを味わうように、長い舌で滴り落ち血を舐めとる。セリアはそれを眉根を寄せて、何かに耐えるように見守り続ける。

血を舐める男と血を与える女。

それは倒錯的な光景だった。

「美味にございました　では、善い夜を」

「……ええ」

血に充分に舌鼓を打った男は満足そうに夜の帳の中に消えていく。セリアは窓からその姿を追ったが、その時にはもう数匹のコウモリが月夜に飛んでいるだけだった。

ヴァンパイア、夜の貴族。彼もまた対価をもって契約した者のひとりだった。

セリアは何も喋ることもなく男から渡された封書を短剣で開く。

指先の傷は魔術で癒した。

その中に入っているのは数枚の書類だ。白い紙に青いインクを使って描かれたランバルディア語の文章の羅列。

瞼を薄く開け、何度か躊躇したあとセリアはその文面を読み始め

る。

「……………ああ！」

しばらく記録書を読み進め、次第にセリアは震えていく。手紙を読む手はこわばり、それでも読むをやめなかった。

文章が恐ろしいわけではない。身の毛もよだつような呪術の類が描かれているわけでもない。

それはあることに関する、確かな根拠を持った レポートなのだ。

頭では理解していた。薄々目星をつけていて、それを確認するために“こう”した。

セリアは頭を抱えて天蓋のついたベッドの上に崩れ落ちる。

押し殺した聖女の叫びだけが微かに、冷たい石造りの壁の外に漏れることなく部屋のなかに満ちていた。

セリアの手から手紙がばらばらと落ちていく。

その文章の1ページめ。

そこには『解剖記録』と印字されている。

行程 1 日目？

『月』の暦 1065 年

天候：晴れ 9 月 1 日

7 時 38 分

ドンテカ ランバルディア国軍警戒基地

「……それじゃあ、これからのことについて話しましょうか」

ぼりぼりと白い頭を掻きながらユノは面倒くさげに呟いた。

既に「巨人」との戦いでを負傷は完全に治癒し、服装も白の入院着から砂海の気候に適した装備に着替えている。

破損した防具のかわりに軍の支給品を拝借した黒のアンダーウェアに白と赤のツートンカラーのクロースアーマー（防護服）。

鎧というより厚手の服、といった代物だが灼熱の砂海で甲冑のような金属鎧を着るのは自殺行為だし、軽装のほうがユノは戦いやすい。

装身具については変わらず“グラールベルの鉄籠手”とアニマルハイドのレギンス。剣帯とポーチのついたベルトを身につけ、武器の収納されたポンチョを羽織っている。

背中には保存の利く食糧などを詰めこんだデイベックと“ニザヴェリルの魔術銃”を背負っている。フリードが回収してくれたらしい。

もともとの装備が砂海向けのものだ。大きな変更はない。

「これから？何か話しあうことがあるのか？砂海を越えて西部へ向かうのだろうか？」

何故かストレッチなどしながらルビイが質問する。ルビイも変わらず軽装のままだがチェインメイルの上から鎧の温度上昇を防ぐサードコートを着ている。胸の左側にはランバルディア軍の国章が刺繍

されており「女騎士」の印象を高めている。

くせつけの赤髪の上には、つばの広いケトル・ハットを被り、防塵用の眼鏡を帽子の縁に巻きつけている。

どこの軍にもいる横流し屋の兵士から買い取ったものだ。

「これからのこと、というか」

「？」

「その、自己紹介が必要だと思わない？」

「……そうか？」

ルビイの疑問符にユノはきまりの悪い顔をした。

「わたし、こいつの名前知らないわ」

びし、とユノの籠手に包まれた指が黒衣の少年に突きつけられる。

「えっ」

その言葉にショックを受けたのは諜報組織“詩の蜜酒”の密使、スコルピオだ。

ドンテ力襲撃のさいに陥ったマナの渴望からも回復し、しっかりと自分の足で立っている。

スコルピオも家に忍び込んでいたときの服装と変わらず黒のローブと黒の襟巻きだが、その上から厚手の外套を羽織っている。

今ここ 軍基地の裏門前にいる人物では一番暑苦しそうな服装だ。

しかしローブの材質が薄手のわりに丈夫なのにくわえて“冷却”のルーンが服の裏地に縫いこまれているらしく、暑さを感じていないらしい。

ショックを受けた密偵の後ろにはどこからか調達してきたランドドラゴンが3騎、柵に紐で繋がれている。

「そういえばユノさん、家での一件以来、スコルピオと会っていないですねえ」

何か納得したようにぼんと手の平をフリードが叩く。

フリードもまた特に変わらず錆止めが塗布された自由騎士の黒甲冑だ。

甲冑というと暑苦しそうなイメージがあるが、フリードの身につける型は胸部と腰、大腿部の保護を重視して設計されたもので、腕部や膝下は取り外し可能な簡便なものになっていて、重量はあるが通気性は悪くない。

ルビィと同様にサーコートを羽織れば少なくとも太陽と加熱された鉄の暑さに蒸し殺されることはない。

「ああ、そういえば、それもそうか」

納得してストレッチを続けるルビィ。あまり興味はない模様だ。

「それにみんなアリカのこととはあまり知らないでしょう？これから長い付き合いになるのだし、必要だと思うわ」

そう言うユノの後ろに、どこかもしもじとした様子で白のブラウスと暗色のロングスカートの上から薄手のケープを羽織ったアリカが様子を伺っている。ケープはロスクヴァのヒーラーたちが譲ってくれたものだ。

「……連れて行くことに決めたのですね、ユノ・ユビキタス」

「ええ　今回の一件は私に復讐したい連中をもう一度騒がせかない。どこかに残すより、私といったほうがきつと安全だわ」

シヨックからいちはやく立ち直ったスコルピオが静かに言い、ユノもまたそれに目を細めて呟いた。

「その根拠は？」

「私を守るから」

その迷いのない発言にスコルピオはにや、と胡散臭げな笑みを浮かべ、成る程といった調子で頷いた。

ユノは背後のアリカをうながし、前へと進ませる。

居並ぶ騎士と魔法使いの3人にアリカは何故か緊張していた。

そもそもアリカは人見知りな気質の持ち主だ。昨日までは状況が状況だけにそのあたりに気が回らなかった。

（ああ、どうしよう。ルビイさんこの前のことやっぱり怒ってるのかなあ？）

たら、と首筋に汗をかきながらアリカは内心で半泣きになる。

ルビイはストレッチをやめ、じっと睨みつけるように目を細めてアリカの方を見ている。

……だがこれは親しい人物　例えばフリードや親兄妹。騎士団の部下ならばわかることだが睨みつけているわけではない。

どちらかといえば興味があることや好ましいものを見ているときの表情だ。もともとの目つきが鋭いせいもあって誤解されがちな難点だった。

「ルビイ、目つきが鋭くなってるよ」

「ん？ああ、そうか？すまない」

アリカが萎縮していることに気づいたフリードがやんわりと注意し、ルビイは特に気にすることもなくぱち、と目を開ける。

ルビイとフリード。2人と関わっているものならば1日に数回は見る光景だった。

「えっと、アリカ・マイルズです。見ての通りリザードマンとの半人で、一応ギルド所属でヒーラーをやっています」

よろしくおねがいします、とアリカは頭を下げ、3人も各々それに答えた。

「使える魔術の系統は？回復術だけかい？」

フリードが威圧しないようつとめて軽い口調で尋ねる。

「あ、回復術がいちばん多いですけど逃走・かく乱系のルーンも組めます。例えば“眩まし”とか“羽音”ですとか」

「へえ、珍しいですね。魔術師、特にヒーラーなんかはひとつのルーン系統に偏りがちと思っていましたが」

そうスコルピオが言う。

魔術というのはルーン文字を媒介として事象に働きかける方式だ。

どのような効果を及ぼすかは文字の意味とその組み合わせによって決定される。魔術師はルーンの意味とその組み合わせを正確に把握し、マナを対価にルーンを世界に発現させる。これが正当な発動方式だ。

その特性上、同じ文字から開始される術が必然的に習得しやすく、また咄嗟の状況に発動する魔術を変えられるアドバンテージも大きい。

だがそのアドバンテージを優先するあまり、使用者が自身の能力を狭めてしまうという問題もありがちだ。

もっともヒーラー（癒し手）のような専門性の高い魔術師であればある程度は使用ルーンの偏りも許容されているのが現状だ。

「そうですかねえ？同じことをスクールの先輩にも言われましたけど……」

うーん、と人差し指を口につけてアリカが疑問符をあげる。

「でも、ほら、どうせなら使えるものが多いほうがいいじゃないですか。ねえ？ユノさん」

「うん、そうだね」

言葉少なくユノが頷く。冷静な表情と口ぶりから無関心なようにも見えるが、どこか得意げな響きがそこにあった。

気弱で臆病なアリカに対して様々な防衛の心得を教えたのは他でもないユノ自身だ。

戦うより逃げる、常に周りの物を利用せよ。

持てる手段は可能な限り多く、決して「特化」するな。ひとつの手段に執着することは手段の封鎖に繋がる。

そして、高い能力や技術とは時に人をどうしようもないほど慢心させる。そうなるくらいならば中庸な能力と技術を多く持て。

そのほうが、生き残れる。

それをなぞるように魔術のスタイルを整えてくれたハーフリザードの友人にユノは心の内で満足感に似た感情を持っていた。

「なるほど……それじゃあ僕も自己紹介を……」

スコルピオが大きく頷き、自分の番だとばかりに進み出る。

「よし、それでは自己紹介も済んだし出発するでしょう。勇者、手ほどきはいつしてくれるんだ？」

「そうね、ギルドベースキャンプに着いてからにしましょう。アリカ、ちよつと地図を出してくれない？」

「はい！これですね。えーっと、一番近くて広い。それに人の滞在も少ないとなると第16ベースキャンプがいちばんいいですねー」

「それじゃあそこで」

「うむ」

スコルピオの言葉を完全に無視してユノとアリカ、ルビィは素早くこれからの旅程を決定すると、ランドドラゴンに飛び乗って裏門からメルカトル大砂海の関所の方へとたずなを向けてすでに走りはじめている。ユノとアリカが一騎に乗り、もう一騎にしがみつくようにルビィが騎乗しているのが見える。王都では馬の方が騎乗動物として主流であり、騎乗竜に慣れていないのだろう。

「……………」

ざああ、と砂が風に吹き飛ばされる音がむなしくあたりに響く。得意げに進み出たままの体勢で固まったスコルピオの外套も同様に強い風にはためき、たなびく音をあたりに響かせている。

横で黙々とコテージや飲み水の大瓶などをドラゴンの背に積み込むフリードにスコルピオはぼつりと尋ねる。

「僕、嫌われてるのかな」

フリードは冷ややかに答える。
「第一印象が悪いんだよ、君」

『月』の暦 1065年

天候：晴れ 9月1日

8時47分

メルカトル大砂海 関所

「通行規制 ？」

ランドドラゴンの背の上、白いフードの下でユノは呟く。

視線の先には広大な地平線を有する砂海の淵にこびりつくように
ぼつんと立つ木造の建物と、そこに掲げられた大きな看板。そして
思い思いの旅装に身を包んだ人だかりがある。西部アリストピア領
への帰還民、交易商、旅行者、冒険者、その他多勢。

関所の門番と押し合い圧し合いする彼らの上には、白地に染めた
木板の看板に強い調子で「通行規制」の文字が大きく自己を主張し
ている。

「私たちには関係ないだろう。王陛下の書状がある。」

ユノの横に並ぶルビイが遠く群がる人だかりを見つめて言う。

「懸念すべき点は、そこじゃないわ」

「何 ？」

ユノの指摘にルビイが疑問符をあげる。が、ユノはそれに答える
ことなくランドドラゴンから降りて関所に歩いていく。

ルビイもそれに続き、アリカとフリード。そしてスコルピオは顔
を見合わせた。

ユノは通行止めに憤慨する人だかりを押しわけ、通り抜けて関所

の出国窓口まで辿り着く。

そこには辟易した表情でロードスギルドの制服を着た出国管理員の男が座っている。

おおよそ出国できない理由を問い詰める旅行者の対応に疲れたのだろつ。おせじにもあまり良いとはいえない態度で対応窓口に座っている。

「少しいいかしら？」

フードを被った小さな少女とケトル・ハットを被ったもう一人に管理員はじろり、と無遠慮な視線を向ける。

「ここはお嬢さん方の遊び場じゃねえぜ」

「何つ、貴様その口の聞き方は」

激昂して男に詰め寄ろうとするルビィをユノが止める。

男ははっ、と嘲るような笑みを浮かべてはたばたと何かモンスター
の羽を用いて作った扇で顔を仰ぎだす。

完全に話を聞く体勢にないその態度にルビィが窓口カウンターに飛び掛らんとする。

「やめなさい」

“グラーベルの鉄籠手”で口を塞がれ、むぐ、とルビィは呻いた。
不満げに視線で問いかけてくるルビィにユノは片目を閉じて「ま
かせろ」と合図を送った。

一応それは伝わったようで、憤まんやるかたない表情で1歩下が
った。

ユノはとんとん、と窓口のガラスを叩いて職員の視線を向けさせ
るとにこ、と笑いかけた。

髪の色はフードで陰になってわからない。窓越しで微笑んでいる
のは悪意なさげなただの少女だ。

どこか男性の「そうだった願望」に答えてくれそうな魅力のある
少女　そう見えるかも知れない。

大人のようで、大人ではない。少女と女の境目にいる少女。

その少女が意外なほどハスキーな声、しかしよく通る声で男に話しかける。

「冒険者登録番号一〇二二五二一、といえばわかるかしら」

「何？」

「わからなければすぐに照会してみればいいわ」

にこにこ笑うフードの少女の、有無を言わせぬ口調に渋々と職員は受付机の下に収納されたフォルダから「冒険者名簿」を取り出す。

そして指先を舐めると怪訝な表情で名簿と目の前の少女を見比べながら帳面をめくっていく。

それほど時間はかからず男の表情が変化した。

目を見開き、日焼けで赤くなつた顔を青くする。帳面の紙の端が強く摘みすぎて音もなく破れた。

ユノはその変化を確認すると窓口のカウンターにこれ見よがしと左腕を乗せて寄りかかる。

ドンナーの雷が刻まれた、無骨で少女に不釣り合いな巨大な筆手がぎし、と脆い木造の建物をわずかに歪ませる。

重量級の恐竜がこの建物に身を預けたかのようなのだ。

「ひっ」

男が小さく悲鳴をあげる。

「ルビィ、許可証を」

「あ、ああ」

ぽかん、としながらルビィがユノの右手に王陛下の許可状を渡す。特別任務を帯びた騎士に渡されるそれは、ランバルディアおよびその従属国。

そして中立地域であれば自由に出入り出来る一種の魔法の鍵だ。

この制度はランバルディア独特のものではなくエルムトやアリストピア、北のスコヴィヤでも同じような代物が存在している。

ユノは窓口の硝子にがさ、と許可状を押しつけると笑いながら、しかし声だけは「冒険者」に戻しながら男に言う。

「私の名前は　面倒だから言わないけどだいたいわかるわよね？少し質問に答えてくれない？」

男が冷や汗をかきながらぶんぶんと首を縦に振る。

「先ず、このランバルディア王の許可状がこの関所でも有効かどうかについて」

「……ゆ、有効です。通行規制下にあっても相違ありません」

がさ、と許可状を背後のルビィに返す。もうこの書状に用はない。「それじゃあこの通行規制の原因は？通行料もせしめてないようだし、しっかりと事情があるはずね？」

「は、はいもちろんであります」

微妙に男の口調が怪しい。

ふ、とフードの下で視線を緩めて男に話す。

「それじゃあ、その理由を説明して、ひとつの嘘も欠けもなくなね」

男は噛みながらも目の前の少女　その鉄の拳。その奇妙な光沢を持つ表面に映る自分の顔を見ながら説明した。

「は、は、はい。もちろんです。えー、このす、数日間。突然モンスターの凶暴化が、確認されて……今の時期であれば考えられない種類のやつらまで、と、突然人を襲いはじめたっていうんで、上から一時の渡航見合わせの達しがでたんで、ご、ごさいやす」

「冒険者まで？すでに旅立ってしまった人間は？」

「ぼ、冒険者も同様です。とにかく猫一匹通らせるなど……渡航者は、近場ならギルドの有志が連絡員として誘導。え、遠方に関しては、その」

「その？」

ぎし、と“グラベルの鉄籠手”の中で拳を握る。

「ひつ、その、特にこちらからは関知せず、場合によっては入国も許可しないと、そ、そう達しが出ています」

「王陛下がそのような事を……？何故そんな無体な真似を」
冷静さを取り戻して管理員の話に耳を傾けていたルビィが不快感をあらわに呟く。

確かにそれは非道だろう。自国の民を理由もなく放棄することになる。それが本当に人間であれば、だが。

（戒厳令が発令されたつてところかしら。非正規戦力の自国への囲い込み、国民の他国への出流の制限。そして“ドッペル”諜報者の侵入防止、か）

男の言うモンスターの凶暴化もまた事実だろう。

この世界のモンスターたちは常体は普通の動物と変わらない生態をしている。

本能のまま暮らし、食べ、寝る。そこには人間に対しての敵愾心もないし知性を感じさせる行動も存在しない。

しかしそれがひとたび、ひとたび復活した魔王のマナ。西の空に瞬く間に広がった黒い世界の瘴気に触れると劇的に変化する。

動物から異形に、生物から「敵」に。モンスターは優先して人間を襲いはじめる。

ある程度人に慣れた種類ならば危険は少なく、すぐに沈静するらしいが。人の相容れない世界に棲む種類。たとえば砂海、溪谷。

深い森林。そして海。そこに棲み慣れたモンスター達。それはもはやモンスター（怪物）とすら呼べない、伝説の中の魔物と化す。

その変化に間違えようもないのだ。そして偽って人の流れを止める意味も。

（魔王は、生きている。ナオキたちが仕留め損ねた。？もしくは）
ユノはカウンターから左腕を退け、口元に拳をあてて考える。

みし、と木造の関節が少し浮き上がった。

男はもはや何もいえぬまま、脂汗を流して呆けている。

「お、おい勇者。そのあたりにしておいたらどうだ」

ルビィが遠慮がちにユノのポンチョの裾を引っ張った。

「？、何が？」

「もう、聞きたいことは聞けたのだろっ。早く出立すべきではないか」

「ああ、それもそうね」

ユノは自覚なく窓越しに固まる男を見やる。満月のような瞳が男を貫いた。

「もういいわ」

堰を切ったようにお助け、命だけはと叫ぶ男を無視してユノとルビィが関所を通り抜けていく。

ざわざわと騒ぎ立てる野次馬につられるようにやってきたアリカ、フリード、スコルピオがその背中に続く。

その表情は「？」マークで埋めつくされ、人の多さも手伝ってかアリカが目をまん丸にしてきよときよと周囲を見回している。

ユノは畏怖と恐怖の視線を特に気にすることなく 自覚することすらなく先頭を進み、その少し後ろをルビィが半眼で追従していく。

（この勇者）

先頭に行く、時々ちらりと畏怖の視線を向けてくる野次馬を一瞥しては、不思議そうに首を傾げるユノにルビィは思う。

関所のゲートを越えた先には、何もない砂の地平線と天と地を分かつように広がった青空がある。

白い太陽が小さな小石ひとつにまで影を落とし、蜃気楼で霞む遥か遠くには全て砂で出来た波間が存在している。

その砂で出来た海を動かすのは風だ。強い、海を越え、山を通り抜けてきた西の風。

ざああ、と空に砂を運ぶその風は例外なく先頭にいる少女のフードも吹き飛ばす 白い、蒼く透き通った空にすら滲むことのない相

容れない白色の髪。その持ち主がルビィとその背後の3人に小さく笑いかける。

その笑顔は純粹に綺麗だった、次の言葉がなければ。

「さあ、行きましようか！死の世界に」

ルビィはなんとなく既に疲れを感じながら心の中でひとりごちた。

（ドンテカでは嫌われてたというか、怖がられてたんじゃないか？）

『月』の暦1065年

天候：晴れ 9月1日

13時25分

メルカトル大砂海

暑い。

4時間ほど過ぎただろうか、太陽がちょうど頭上に昇ろうとしている。

一番はじめの ルビィがユノに魔族との戦いを教えてもらっ予定のキャンプまで半分より少し前の距離だ。

本来ならもっと早く砂海を横断できるルートがあるのだが、偶然かそれとも何者かの手管なのか凶暴化した砂海モンスターの群れがそのルートを遮るようにして大規模な移動を行っているらしい。ギルドの有志に連れられて砂海から誘導されてきた隊商たちの情報だ。その結果、最悪でも 砂海渡りの経験が豊富なユノによれば5日間にかかる行程を進まなければならないらしい。

（この太陽の中を五日間。それに夜は北国並みに冷えるのだったか……地獄だな、ここは）

じりじりと皮膚を焼く太陽を首筋に感じながら、ルビィは帽子の

下で呻いた。

ふと砂一色の地面をみればケトル・ハットをかぶり、サーコート
を羽織った自分の影がくつきりと。彩度の高い黒で焼きつけられて
いる。

（砂漠が暑いなど、わかっている筈だったのだがな）

ランドドラゴンの背に揺られながら自嘲する。

知識として知っていることと、体験して得ることは違う。どれだ
け頭の中で「砂漠とは雨が降らず、乾燥しており草木も生えない環
境。全体の総量として水分が少なく、気温の変動が激しい。そして
その激しさとは死ぬほど暑いか死ぬほど寒いかのどちらか、否、ど
ちらもである」と知識として記憶していようと、実際にその実物に
触れなければ正体をはっきりと掴むことは出来ない。

その行為の成功が個人にとって幸せなのか不幸せなのかという議論
は別としてだ。

眉間を流れる汗を拭いながらルビィは前を見る。

メルカトル大砂海は非常に高低の激しい場所だ。

大陸西部の沿岸から吹き続ける風が絶え間なく砂を運び、長い年
月をかけて大きく緩やかな砂の山を形成している。もちろんそれは
1つきりではなく数えるのも馬鹿馬鹿しいほど幾つも。砂で作られ
た緩やかな山脈だ。

山脈があるということは当然谷も存在する。形成された山と山の
狭間。今ルビィたちが隊列を作って横断しているのもまさにその谷
のひとつだ。

一番先頭に行く勇者 ユノによればそいつた谷が横断ルート
の目星になるらしく、冒険者などによく利用される谷には忘れられ
ないように、他の谷と間違えないようにと名前がつけられているら
しい。

今もその名前はルビィの視界の端で自己主張している フレッツ

ド・デビス・二十四番溪谷。発見者の名前と番号をそのまま付けたのだろう。

そういつた名前なまえのついたプレートが1スロット（大陸のキロメートル単位、10000ラウン＝1スロット）ごとに突風対策用のロップと杭で補強されて掲示されている。

地図と照らし合わせれば遭難の危険もない。非常に行き届いた整備だ。これを施工するのに何人の人足が犠牲になったのか想像を禁じえないが。

（まあ、そんなことどうでもいいんだ）
言葉に出すことなくルビイはかぶりを振る。

ルビイは隊列の真ん中に入れている。先頭からユノ・アリカと続き自分。そして背後にはフリードとスコルピオが二列に並んでランドドラゴンを進めている。この順番を決めたのはユノだ。

ナビゲーターとしてもっとも経験豊富なユノは先頭を切り、次に経験があり救護役として重要なアリカが二番目。

フリードは前大戦で砂海を渡った経験があり、スコルピオも特に問題なく周囲を警戒しながら歩を進めている。

ルビイは真ん中。真ん中とは一番経験が浅く、守られるポジションだ。

（くそっ）

もちろん、その判断が間違っているとは思っていない。

だがルビイは悔しさを感じてしまう。

何故事前に経験を積まなかったのか、訓練をしようと思わなかったのか。そんな言葉が脳みその中でぐるぐると回り続けている。

もし先に経験があったのなら、実績があったなら「おまえ」はもっと認められているだろうに。頭の中で誰かがそんなことを言っている。

（しかし先を、未来を予測して経験を積むなんて、現実には無理な話だ）

もちろん学習することは可能だ。前例に従って必要となる物事を頭の中に入れておく。必要になる技能を先に修得し鍛錬しておく。だがそれが全ての物事に適用できるとは考えられない。

どこかの道を歩いていて、上から突然植木鉢が落ちてくるかも知れないから、それを回避するために訓練する。

もしかしたらその植木に植えられた草が触れただけで死に至らしめる毒草かもしれないので毒に対する知識と解毒法を学んでおく。そしてもしかしたらその植木を落とした人物が実は太古の世界から蘇った古代人かも知れないので古代語を習得して話せるようにしておく。

極端な例だが、結局はすべてに万全な体勢で挑むことなど出来ないのだ。想定できないことは常に存在している。

人は万能にも全知にもなれない。どれだけ神に愛されようと、命運を握って、力を授かるうとも。

（それを頭で理解していても）

先頭に行く「勇者」の後ろ姿に目をそそぐ。

（私は、私の心はそれを期待してしまうんだ）
憎み、罵り、その素顔を見てしまっても。

「止まって！」

突然発せられたその言葉にルビィははっ、とドラゴンの手綱を引く。

言葉を発したのはユノだ。左手で後列を制止し、厳しい視線を前方に向けている。

「どうしたんですか、ユノさん！」

ルビィの前方にいたアリカが大声で問いかける。背後ではフリードとスコルピオが目配せし、左右に散開した。

ルビイもまた周囲を警戒しながらユノとアリカの横にドラゴンを進める。

「一体どうした？」

「……竜車だわ」

「何？」

「見て、竜車が倒れている。」

ユノが前方に指差す。つられてルビイも目を凝らすと　峡谷は風に乗って舞い落ちる砂と谷を通る風に巻き上げられる砂のせいで視界が悪い。砂の霧とも呼ぶべきものが周囲に渦巻いている　そこには半ば砂に埋もれて竜車が横倒しになっている。

竜車とは馬のかわりに大型の騎乗竜ランドドラゴンに車を牽引させるもので、馬の足が適さない地形や気候帯で輸送運搬を担っているものだ。馬に比べて速度や乗りやすさは劣るものの大容量の運搬に適している。殆どの用途は交易品の運搬だ。

「……モンスターに襲われたのか」

竜車はかなり大きな物のように見えた。丈夫なインベルの皮をなめして作った幌に頑丈に組まれた木組みの胴体。車輪はかなり重量がありそうな鉄製だ。車を牽引していた筈のドラゴンはどこにも見当たらず逃げたか、モンスターの餌食になったのだろう。

「そうだとすれば」

アリカが縦長の瞳孔を細くし、目を凝らしながら言う

「かなり大きなモンスターに襲われたみたいですねえ」

その推測は恐らく当たりだろう。ルビイは頷く。

竜車の胴体の中ほど。貨物台が何か大きな力で圧縮されたようになっている。

今は砂に埋もれてみえないがそこかしこに木片や中の積荷が散らばっ
つていてもおかしくない損傷の仕方だ。

そして、かなり広範囲に渡って溪谷の山肌に何か大きなものがぶつ

かった後がはつきりと残っている。まるで擦りつけるように。ルビイはその時の様子を幻視する。

巨大な「何か」がどこからか、溪谷の上からか、もしくは砂の壁を突き破って哀れな竜車の前に立ちはだかる。

竜車の主が御者台から逃げる暇もなく「何か」はかまぐびをもたげ、頭より大きく開く口でばかり。竜車ごと啜えて持ち上げる。

この獲物は飲み込むには大きすぎる。それなら小さくして少しずつ食べよう。「何か」は首を振る。振って手近な壁に叩きつける。

しくじった。この獲物はあまり食べれる箇所がなかった。小さな生肉がひとつとそれより少し大きな生肉がふたつ。腹の足しにもならない。

「……痛っ」

気づけば手を強く握り締めていた。爪が手の平に食い込んでいる。開いてみれば赤い痕がくつきりと折り曲げた指先の形についていた。その指先が震えているのにルビイは気づき、かぶりを振る。

（ええい！怖がるなルビイ・ギムレット・アンテローズ！この程度で、まだこれぐらいで怖がるな！！）

ルビイは萎縮しそうになる心を奮い立たせ、ドラゴンから降り立つ。ざくつ、と鋼のブーツが砂を踏みつけた。

「何をする気」

ドラゴンから降りず、ユノがたずねる。

「こうして遠くから見てもラチがあかん。近寄って危険を確かめてくる」

「やめたほうがいい、まだ“アレ”をやった犯人が近くにいるかもしれない。罠を使つくらいには聡いわよ、ここのモンスターは」

「わかつている。だがずっとこうしているワケにもいかんだろう。迂回路もない」

頭上のユノは沈黙し、その月のような瞳でルビイを見た。

ルビイもまた強い光を湛えてその視線に対して返す。

お互い、その視線に籠められた言葉はわかつていた。

今この状況は危険よ、あなたはまだわからないだろうけど。痛い目を見なければおとなしくしていなさい。

そんなこと、知っている。だがやらせる。私にやらせる。私に確かめさせてくれ。私の力を試させてくれ。

数瞬の視線の絡み合いののち、ユノは仕方ない。と息を吐いてルビイを促した。

「……すぐには抜刀せずに半抜きで忍び足。歩く場所も中央ではなく少しはずれた、出来るだけ平坦な場所を選んで進みなさい」

「何故だ」

「何か両手が必要になったときに武器を失わなくても済むように。あとは地面の、柔らかい砂だまりにはモンスターがいる可能性が高い。」

「なるほど、憶えておく」

ルビイは重心を低くすると、腰の後ろで交差した双剣の柄に手をかけ、刃を中ほどまで抜く。

しゃり、と涼やかだが隠しようのない鋭さを秘めた金属音が小さく響き、ルビイの心を安定させる。

（大丈夫）

じやり、と砂を踏みしめて地面の確かさを感じながらルビイは心の中で呟く。

背後を見れば「ニザヴェリルの魔術銃」を肩に預けたユノとおろ

おろとユノとルビィの2人を交互に見比べているアリカが見える。
何故ユノがルビィと共に行かないか、そして何故ルビィが1人で
先行したかわからないのだろう。

そのもつと後ろにはこちらを見るスコルピオと隊列の背後を警戒
し続けるフリードの姿がある。

（私は戦える）

ぎ、ぎ、ぎ、と砂を踏みつけながらルビィは1歩1歩進む。

ぶわ、と砂まじりの風が吹きつけてくる。

ルビィはその風から手で顔を守ると構わずまた1歩歩みを進めた。
砂の霧が少しづつ晴れ、横倒しになった竜車が近づいてきた。

（私は、なにも、怖くなどない）

そう心の中で呟くルビィの下。足元で「何か」が目を開けた。

行程 1 日目？

彼は俊敏だった。

自分の上を歩く不注意な愚か者を鋭く知覚し、すぐさま身体を膨張させる。

筋肉の膨張によって圧縮され機能を制限されていた臓器が目を醒まし、そしてその中に残ったわずかな水分が彼の体中に充満する。

彼は自分の意志で“ひもの”になることができた。

学んだわけではない。生まれたときから出来る、彼の得意技だ。

重い砂の中を、自由に水の中を泳ぎ回る魚のように移動する。

向かう先は決まっている。上だ、浮上だ。彼の最大の武器である聴覚が未だ獲物が彼の上にとどまっているのを報せてくれている。

足音の軽さからして小さな獲物だ。まだ生まれてまもない迷いインベルか、それとも食べるところは少ないが逃げ足が遅くてとろい「ニンゲン」とやらか。

なんでもいい、早く食べたい　彼はこの一ヶ月なにも食べていなかった。

乾いた粘土のように硬直し小さくなった胃が膨らみ、口腔の奥から唾液が分泌される。

乾きで縮こまった舌がこれから得る味覚を想像して悦びうねり、彼の上顎にびっしりと生えた、奇麗にならべられたナイフのような細長い歯をべろり、と舐めて濡らした。

ぶおおおお、と肺を通じて特徴のある鳴き声が彼の喉から発せられる。

それは攻撃、あるいは捕食のための突撃の合図だ。

その攻撃は、ルビイにとってそれほど予想外にあったわけではなかった。

持ち前の高いコンセントレーションで研ぎ澄まされた耳が、足下の砂中から発せられる奇怪なうめきを確実に捉え、位置を特定させていた。

ルビイは身をわずかにかがめ、後ろ腰の剣帯から半抜きにしていた双剣を素早く抜き放つ。

細かくさらさらと小さな粒でできた砂の上を危なげなく踏みつけ、跳躍し、下から来る相手を待ち受ける。

（来たっ！）

そう思うが早いか、足下の砂から粉塵とともに奇妙な姿のモンスターが現れる。

長い時間観察できたわけではない　肥え太った芋虫に丸い目と昆虫のような細い触角をつけ、きわめて人間によく似た口をくつつけたらそんな生物になるかもしれない。悪趣味な造形だ。

ブリーワーム。砂海に生息するたちの悪いモンスターの代表格の一匹。そいつの姿を冒険者向けに定期発行される「怪物誌」で見たおぼえがあった。

ブリーワームは耳を塞ぎなくなるような奇怪なおたけびと共に、ルビイの頭に嚙りつかんと砂の中から跳躍してきた。

ルビイは左足を引き、勢いよく半身をそらしてブリーワームの跳躍から身をかわす。鼻先を奇怪な芋虫の青ちやけた表皮の色と不愉快な臭いが通り過ぎていく。額から汗が吹きでる。

にやり、とルビイは無理矢理気味に笑みを浮かべて恐怖を噛みつぶすと、まだ空中に滑空したままのブリーワームの胴体に勢いをつ

けて斬りかかる。鋭く磨かれたショーテルの片われが怪物の胴に食い込み、堅い表皮を易々と切り裂いて柔らかい肉を深く抉る。

ぎゅいいいいいい、とこれもまた耳を塞ぎたくなる悲鳴と共にブリーワームが空中で身をよじる。緑色の体液が飛沫をあげて砂の上に落ち、攻撃の成功にルビィは今度こそ確信の笑みを浮かべ、追撃に入る。

後の始末は簡単だった。

砂の上に落ちて激しく身をよじるブリーワームの尾のほうを足で踏みつけ拘束し、砂中に逃げ込まれるのを防ぐ。

そしてあとは双剣のもうひと片われを勢いよく突き刺し、手首を回して捻る。傷口を広げる動きだ。

ぎゅいいいい、と断末魔を上げ、一度だけ勢いよく芋虫の胴体をそらしてブリーワームが息絶える。

ルビィはショーテルを怪物の胴体から抜き、緑色の体液を剣を振って散らすとはっ、と鼻先で笑った。

「……たいしたことないな！」

「そうかしら？」

突然背後から聞こえた声にぎょっ、としてルビィは振り返る。

「まあ、確かにそうね。ブリーワーム、この砂海の中では一番雑魚。砂の中に潜んでその上を通りかかった生き物を引きずりこむ卑怯生物。」

「……驚かすな」

いつの間にかドラゴンから降り、ルビィの背後に立っていたユノにジト目でルビィは言った。

ユノはその言葉に応えずにこり、と口の端をわずかに笑みの形にする。

「二人とも、大丈夫ですかっ？」

白髪の頭の背後に、こちらを心配そうにみつめて大きな声で安否を確認するアリカとフリード、スコルピオの姿が見えた。谷に立ちこめていた砂の霧がわずかに薄くなり、視界がよくなっている。

「大丈夫よ、でもこっちは足場が悪いからまだ動かないで」

ユノが振り返りアリカの声に答え、そしてもう一度ルビィへと月色の瞳を向けた。

「一番の雑魚とはいえ、やはりたいしたものだわ。コイツに頭を食いちぎられる冒険者はおおげさな例えだけど、星の数ほどいる」

「褒められた気がしないな」

「褒めていないもの、ルビィ。今から少しだけ授業をするわ」

ユノは笑みを深め、だらりと下げた手を剣の柄にかける。ルビィはそれがこの勇者の戦闘態勢だと知っていた。

自然に、意識することなくルビィは双剣を十字に構え、上体をかがめる。それがルビィの戦闘態勢だ。

「何だ？今ここで戦^やるのか？」

ルビィの挑発めいた言葉にユノは答えない。笑みも変わらない。

「砂の海の掟その一、雑魚に構うな。」

「何？」

「この言葉はある種のモンスターたちの習性の危険と対処法を説明している。対処法であって、解決法ではないのは、もしこの掟を破るような真似をしたら、もうそれだけで“詰み”であることに起因している。」

「ぐぐぐ、とどこか遠くで遠雷のように何かが震動するのをルビイは感じ取った。

「いったい……何だ？」

「ブリーワーム。別名砂海ウジ。きわめて狭い範囲のテリトリーでのみ活動し、それ以外ではほとんど地上で目にすることはない。危険度は砂海基準では最低。しかし要注意度は星二つ。つまり、何があってもこれだけは守れくレベル」

後半のユノの言葉をルビイは聞いている余裕はなかった。

砂でできた谷全体が鳴動している。まるで大地全体が生き物の体の上になってしまったかのように。

その震動の正体をルビイは知覚していた。谷の中だ、砂で形成された谷の表面がぼこり、と盛りあがり、ユノとルビイを囲むようにしてゆるい線を描いている。線はひとつではなくみつ、よつつ。それ以上だ。

「その理由はブリーワームの体液から発せられる特徴的な臭いと死肉のある種のモンスターが強く好み、誘引するためである。つまり、まあ」

谷を包む鳴動の中、目の前の勇者が小首を傾げる。

「雑魚に構うな、つまりその意味は雑魚に構うと強いのがわんさかやってくる。つまりそういう意味なのよ、ルビイ」

「……言ってる場合か！」

どん、と強い衝突音が連続して起こり、それと共に周囲の谷の壁が突き破られる。細かい砂が瀑布のように広がり落ちる。

にわかに濃さを増した砂の霧のなかに、無数の黒い影が穴から這い出してくるのをルビイはその目で捉えた。

その大きさと数にルビイは双剣を構えたままなす術なく固まり、周囲を見回す。

狼狽するルビイを置き去りにしてユノは戦いの準備をはじめる。

背中から“ニザヴェリルの魔術銃”を引き下ろすと、トツプブレイク式の機構を作動させる。

しゃりん、とミスリルと鉄が擦れる涼やかな音が連続して響く。装填された魔術円筒は2発とも“炸裂”空気を破裂させる初歩的な攻撃魔術だ。

「ルビィ、今から視界を良くするわ。それがうまくいったら3人のところに走って、アリカとスコルピオを守りに行きなさい。寄り道してはダメよ」

「……わかった。勇者、貴様はどうするのだ？」

ユノは手首を振って銃身を真っ直ぐに戻すと、そのまま片手で正面に立ちこめる砂の霧目がけて照準を合わせた。

もっとも、この魔術を発射する銃には照準器のような科学の産物は付いていない。あくまで照星が示す適当な位置にだ。

「お楽しみよ」

「……は？」

「ルビィ、私ね、この世界に来てその殆どが嫌なことばかりだったの。ハインやアリス、エレノアやセリア。それにアリカに出会えたことはすごく良いことだった。でもね、私にとってはこの世界は地獄そのものだったの」

独り言のようにユノは語る。ルビィはそうして語る勇者の横顔から目が離せなくなっていた。

「でも、そんな地獄のなかで、私はひとつの楽しみを知ってしまった。「あっち」に居てはきつと一生わからなかった。私だけのお楽しみ」

「それは一体」

ぱん！と強い破裂音がルビィの平衡感覚を一瞬狂わせる。

横に立つユノの左腕がL字に折れていた。左手に握られた魔術銃。その延長線上にある銃口からたなびく煙で出来た細い線。

いつの間にか円筒が発射されたのだとルビィはそれを見て知った。ばふ、と正面の霧が急速に、爆発するように晴れる。その中心には役目を終えた円筒が転がっている。

もう一回、横で破裂音がする。2発目。摩擦で出来た白煙の線を引きながらだめ押しのように“炸裂”が空気を爆散させる。

「――」

その奥　霧の向こうに見えた異形の群を確認する。

その群はまるで「怪物誌」を代表するたちの悪いモンスターの博覧会だった。

ブリーワームなど比べものにならない大きさを誇る砂海の大蛇ドウラー。

鎧のように堅牢な甲殻と巨大で鋭い尾針を持つアーマースコルピオン。

牙に強力な毒を持ち、噛みついたものを決して離さない死の巨大蟻、ヴァンジャナキア。

砂の海付近に生息する不潔で狡猾な一つ目の亜人。サイクロプスの集団。

てんでんばらばらな、生態系も何もかも無視したモンスターの大量群が確かな敵意を持ってこちらを睨みつけていた。

ルビィは思わず横にいる勇者を見る。

先程の言葉をそのまま実行に移していいのか　自分はこのいなくても平気なのかと。

そして、自分のその行動をルビィは後悔する。

「あはっ」

ユノは笑っていた。

目を細め、まるで今からとても楽しいことが待っているかのように、笑っている。

月によく似た瞳には戦いの高ぶりも、傷つくことへの懸念も、死ぬことへの恐れも何もない。

そしてその笑みを　ルビイに見られていたことに気づいたのか、それとも「そういうもの」なのか、一瞬にして引っ込め、いつもの飄々とした少女戦士の顔に戻った。

「さあ、行つて。ここは私が引き受けるから」

「……！」

ルビイは声もなく頷き、逃げるように踵を返す。

反抗も反論も、嫌悪すら沸かなかつた。まるで魔法に掛けられたように、ユノの言葉に従う。

跳躍するように走る。柔らかい砂だまりを踏むような真似はしない。

砂の霧はほとんど晴れていた。2発立て続けに撃ち込まれた“炸裂”の影響だろう。強力な爆風が谷に停滞する砂混じりの空気を残らず追い出している。

太陽が砂の上にルビイの影を色濃く作った。

「ルビイさんっ！」

ハーフリザードの女が助けを求めるように叫ぶ。

アリカ、フリード、スコルピオもまたモンスターに襲撃されていた。

（……今は「あれ」を考えている暇はない！）

アリカの叫びに応じず、齒噛みしてルビイは「跳ぶ」。全身を折り畳むようにかがみ、助走と体中のばねを最大まで引き出した跳躍。赤髪の少女騎士は宙空にいる間だけ猫になる。

しなやかにサーコートに包まれた体をひねり、体重を乗せ、アリカのドラゴンを包囲するモンスター　　口ばかり大きい棘だらけの痩せた犬。の1匹に刃を叩き込む。

「グギャツ！！！」

クリーンヒット。アリカのケープの裾を引きずりおろさんばかりに食いついていた1匹の頭が割れる。

着地してから右、左とルビィは視線を巡らす。

ランドドラゴンがユノ、ルビィのを含めて4頭　　アリカはユノと同乗だ。

それを円を描いて取り囲む「犬」が確認できるだけで10匹。アリカ周辺に4匹。フリードとスコルピオの周辺に6匹。まだ居るはずだ。

ルビィは叫ぶ。

「フリードっ！そっちの状況はっつ！！！」

ぱん、と軽い炸薬の破裂音の後にフリードが答える。

ランドドラゴンの手綱を巧みに操り、片手には黒く光るピストル。まるで『帝国騎士物語』の挿し絵にでも出てきそうな勇ましい姿だった。

「3匹殺^とった！残り6！！だけど素早くてなかなか銃で狙えない！！」

再び発砲音が鳴り響き、まるで自分が次の番だともいうかのよう^ににスコルピオが少年の声で叫んだ。

「アンテローズ！こいつらの名前はスカベンジャー。でかいモンスターの食べ残しを漁る掃除屋！個は弱いが多い。チームワークと体の棘に注意！麻痺毒を持っています！！！」

「解った！！密偵はフリードをサポート！このすばしっこい犬っころの足を止める！！！」

そうやりとりしている間にも犬　　スカベンジャーはルビィと騎

乗したアリカ目掛けて突進してくる。

まるで対人用に訓練された軍用犬のようだ。ドラゴンには目もくれず正確に、執拗にルビイとアリカだけを狙ってくる。

人对犬の攻防は忙しないものとなった。

ルビイはとにかく走り回り、包囲するスカベンジャーの群れを挑発してアリカへ行く数を減らす。

その試みは成功し、6匹にくわえてフリードを襲う群れから離脱した2匹をルビイ自身に引きつけている。合計8匹。

顎まで裂けた口を開いて突進してきた1匹を足を使って叩き落とす。追撃、とどめ。もう1匹が腕を狙って噛みついてくる。剣を振って牽制。ひるんだところを追撃。空振り。背後から忍びよっていたさらにもう1匹を振り返りの勢いと共になぎ払う。頭と顎の今生の別れ。グッバイ。

そこにもう1匹が突進。跳躍して避け、全体重をブーツに乗せてストンプ。頭蓋骨を砕く。

「ルビイさん、新手です！2匹！同じやつ！！」

「くそつ、きりがいいな」

背後に守るアリカが叫ぶ。アリカもまたどこからか取り出した飾り気のないメイスを振るってルビイが誘導しきれなかったスカベンジャーを迎撃している。その細腕からは想像できないような力強く容赦のないスイング。

本人は意識していないかも知れないが、リザードマンという「種の力がそこに発揮されていた。

アリカが吹き飛ばしたスカベンジャーを踏みつけてとどめを刺しながらルビイは叫ぶ。

「アリカっ！何か今、この場で役に立ちそうなルーンを使えるかっ

「？」

「名前で呼んでくれて嬉しいですよ、でもそう言われても思い浮かびませんよお！」

がぎんつ！と交差したショーテルとスカベンジャーの爪と牙が激突する。顔にかかる生臭い口臭に顔をゆがめながらルビイは叫ぶ。

「何でもいい、この不愉快な犬モドキに効きそうならなんだって歓迎だ！」

「あつ、犬つ！ええと、それならっ……」

アリカの指が空中に文字を描く。金色に輝く光の線。振るわれ、文字らしき記号が完成することに溶けるように消えていく。

全ての「規定されたルーン」を描き終え、世界がアリカに奇跡を使用する権利を与える。

「こんなのどうでしょうっ “獣除け” ！！」

アリカの持ったメイスがルビイを包囲するスカベンジャーの群れに「照準」をあわせ、魔術が発動する。

ぶわ、と粘性のある紫色の液体のようなものが音もなく広がるルビイもその液体に巻き込まれたが何の感触も感じなかった。

「ギユワッ！！？」

「クウンッ！」

「グゴアッ！！？」

スカベンジャーに対しては効果てきめんのようだった。

何かとてつもなく嫌な臭いのものを嗅いだかのように苦しみ、液体に触れるのを嫌がり逃げていく。

ルビイは苦しみ悶える1匹にショーテルを突き刺し、アリカを賞賛する。

「やるじゃないか！これで残りの奴らを追い払えるか？」

「無理です！これ、すぐに消えちゃいますっ」

言うが早いか、すでに遠くに逃げたスカベンジャーが戦意を取り戻してルビィに対して突進してくる。

ちい、と舌打ちしてルビィは両手のショーテルを振るう。

（普通の獣なら今ので十分だろうが、こいつらはモンスター。しかも魔王の影響を受けている）

魔王の影響を受けたが最期、それはもはや二度と普通の生き物には戻れない。戦い、喰らい、心臓が止まるまで人間を狙い襲う。

そこには躊躇いも恐怖もない。

「アンテローズ！おとり役をお願いします！」

スコルピオが叫ぶ。アリカと同じく騎乗で短刀を振るい、スカベンジャーを牽制している。

ルビィは思わず怒鳴り返す。しかしその蒼い眼は先んじて広く逃げやすい地面を探して動きだしていた。

「何だ、何をするつもりだ！しょうもないことならおまえの襟首を掴んで引き摺り落とすぞ！」

「魔法で一網打尽にします！この醜い牧羊犬どもには追い回す羊が必要ですよ！できるだけ足の速く、簡単には食いつかれない羊がね！」
なるほどなっ

即座に納得する。

ざく、と小気味いい音を立てて、ショーテルの切っ先が獣の痩せた腹を突き破る。ルビィの肩口を越えてアリカに食いつこうとした不埒者だ。

ルビィは剣を振ってスカベンジャーの亡骸を叩き落とし、フリードを呼び寄せる。

「フリード、私に代わってアリカを守り抜け！鞍に彼女を招待して差し上げる！」

「了解っ！」

視線の先にドラゴンを馬のように乗りこなすフリードの姿があ

る。

ドラゴンを片手で馴らし、早足で安定させたまま、こちらに近づいてくるスカベンジャーをピストルで撃ち抜いている。

文字通り竜騎兵だ。

アリカがフリードのドラゴンに飛び乗るのを確認すると、ルビイは双剣を打ち鳴らし、スカベンジャーの群れの気を引きつける。「さあさあさあさあ！犬っころども、私が相手だ！ええ？どうした、私を捕まえみろっ！」

ぐるる、と乱杭歯を剥きだしにして、スカベンジャーたちが唸る。はつきりした敵意が自分に突き刺さっているのをルビイは感じた。「こつちだ！こつちだ！醜いクソイヌども、おまえらの羊はこつちだぞ！」

言っが早いか、ルビイは駆け出す。出来るだけ「狙いやすい」場所へ。

それに釣られ、いつの間にか増えていたスカベンジャーの群れが嬉々として駆け出す。

数は10を越えた。一度食いつかれたら命がない。ぞわり、と背筋に冷たいものが走る。

後ろを見る余裕はない。少しでもスピードを緩めたが最期、ルビイは背後の大群の遅めのランチになるだろう。

履いた鋼のブーツが砂を蹴立て、踏みつける音、吐息。爪が砂を挟る音。短く荒い獣の呼吸。生臭い臭い。

それがわずかな。しかし永遠に等しい感覚をもって、ルビイに流れる時間の全てになる。

それ以外のものは認識できない。砂で形成された深く緩い傾斜のある谷も、無慈悲に降り注ぐ太陽の熱も、砂まじりの風も、今まさにルビイが大群を連れて遠ざからんとしている3人の仲間たちも、一枚も薄いヴェールを隔てて意識の外に放棄される。

スカベンジャーからの命がけの逃走のさなか、確かにルビィはこの世界でただひとりとなった。

（怖い？ 怖いのなら、もうあきらめてもいいんだぞ）

アドレナリンで冒されたルビィの脳内で、誰かがそう囁く。甘い、停止を促す誘惑の声。

それは自分の声だ。頭の中に反響して響く、ルビィ・ギムレット・アンテローズの声。

（足を止めて休めばいい、なかに痛いのははじめだけさ、あとは安らかに。ずっと安らかに眠れる）

（無理しなくていいんだぞ、おまえは弱いんだ。誰も責めやしない。それにほら、勇者だって近くにいないじゃないか）

柔らかい砂だまりを跳躍し、避ける。直進するのをやめ、速度を落とさないまま緩やかに方向転換する。

（そう、いつもみたいに助けを求めればいい。いつも心の中で求めてたじゃないか　助けて勇者様って）

黙れ！！

心の中でルビィは叫ぶ。

脳裏に渦巻いていた「自分」の声が風に流されるように消えていく。

しかし本当に風に流れてルビィの頭の中から放逐されたわけではない。ただ、今は聞こえなくなっただけ。それがルビィには悔しい。

ルビイの世界が、時間を取り戻す。

背後のスカベンジャーの群れはそろそろ追いかけるのに飽きたようだった。

追跡役を数頭を残し、右に2匹、左に3匹と回り込み、ルビイを包囲しようとしている。

その包囲網が完成すれば^{ルビイ}羊は終いだ。大きく裂けた口に不揃いにならんだ牙と爪で引き裂かれる。

だがそうならないのをルビイは確信していた。もう終わる。そろそろこの追いかけっことはお終いだ。

走るルビイの視界の端に、黒い外套をはためかせた密偵の姿が見えた。

右手に杖を、左手に蔵書^{ビブリオ}を、少年の口が大きく開くのが妙にゆつくりルビイには見えた。

「いきますよ！アンテローズ エクスリブリス・火の海^{ムスヘルヘイム}の作り方第6版。バーチカル・ファイアーボール！！」

スコルピオの掲げた杖の先からぼ、ぼ、と音を立てて人の頭ほどの大きさの火球が立て続けに燃え上がる。

それはゆっくりと杖の先を浮遊すると、一定の高度に達した火球から天にむかつて放たれる。

その様子はさながら大砲の一斉発射だ。

放たれた火球は5発。火の粉を尾のように引きながら、砂の谷の上空を高く越えて ルビイを追うスカベンジャーの群れに舞い落ちる。

炸裂！

天から降り注いだ火球は地面に着弾すると大きな爆風を伴って拡散し、周囲に業火と衝撃を撒き散らす。

「っつー！」

爆風に背中を押され、ルビイは砂の上に転がる。衝撃で右手の双剣が弾き飛ばされ、細かい砂の水面に突き刺さる。

「……………ッハア」

スコルピオの魔法はルビイに追いつがっていた群れをきれいに吹き飛ばしたようだった。

爆風で起こった砂塵の中にいくつもの　かつて犬の怪物だったものの亡骸が転がっているのを見てルビイは安堵に身体力を抜く。

「ルビイ！」

「ルビイさん！」

遠くから、といってもそれほど離れているわけではない。ランドドラゴンに騎乗したフリードとアリカがこちらへと来ていた。

「ご苦労さまですアンテローズ。見事な羊ぶりでした」
ゴート

「……………貴様、あとで少し殴るからな」

「なんで!?!」

フリードとアリカに続いて赤茶けた表紙の蔵書ビブラリオを持ったスコルピオがルビイの側に駆け寄る。

ルビイの半分冗談の私刑宣言にうるたえるスコルピオを無視し、ルビイは立ち上がる。

（まだひと段落だ、あいつの、あの勇者の支援にいかねば）

砂の霧間に見えた群はおそらくこの死の砂漠でも一等にたちの悪いモンスターの集団だった。

倦怠に包まれる身体に活を入れ直し、ルビイは自分の副官に命令

を出す。

「フリード、悪いが2人を引き続き守っていてくれ、あの勇者がまだあつちで戦っている」

汗をグローブで拭い、ルビイは砂の谷の西側。つまり今までの進行方向を指差す。

ルビイの指差す先はまたも砂の霧に阻まれ、何も見えなくなっていた。

ただ、ルビイには 何も見えないはずの砂塵の向こうで、誰かが楽しそうに笑っているような気がした。

行程1日目？

『星』の暦1063年

天候：不定期な激しい風雨　6月8日

アリストピア南部スー溪谷　時間は2年と104日遡る。

「これが慣れ、ってやつなのかな、おまえどう思うよ」

深く唸るような、しかし年の若い少年の声が反響して響く。

溪谷の中腹にあった洞窟は暗く、中は入り組んでいて狭かった。

しかし湿気はなく岩地は乾燥しているし、有毒なガスやモンスターが住み着いてもいない。疲れた身体と心を朝まで預けるのに、この洞窟はとびきりいい場所に違いなかった。

「おい無視すんなよ、だいたいおまえ、飯喰わねーのかよ、オレ喰っちまうぞアライス」

がなりたてるような少年の声に視線を、正しくは手元にある魔法書から目をそらして知識の賢者　アライスは深く溜め息を吐いた。
「五月蠅いですね。だいたいケンヤ、君が今食べてるそれはナオキ君の分でしょう。どれだけ食べる気ですか」

アライスの示した「それ」とは軍から支給された戦闘糧食だ。中身はアサスと呼ばれる米によく似た実を柔らかく煮て丸めた団子が3つにインベルのジャーキーが5本、固く湿気に強いビスケットが1袋といったところだ。

この1セットは戦場に身を置く全ての人間　徴兵された兵士にも王に命を捧げた騎士にも魔術師にも魔法使いにも平等にこれが配られている。地位も優劣も関係なく、人間であれば誰にでも配られる。

たとえ世界を救いに召還された勇者でも、それは同じことだ。

軽んじられているのではない　本当に余裕がないのだ、この世界

の人間には。

「いいんだよ、こいつ」ケンヤは横にいる少年を肘でつつき「気分悪いからいらなとかぬかしやがるんだよ、なあ？」

いきなり話題を振られもうひとりの少年 神城ナオキは困り気味に笑う。

「え？あ、うん、そうそう」

「泣き寝入りしてはダメですよナオキ君。この手合いは弱いと見るとどこまでもつけあがってきますから」

「人を不良みたいにいうんじゃねーよ本中毒。眼鏡割んど」

そう言い合いながらも2人の言葉には険がない。お互いを理解し合い、背中を預けるのに慣れた関係特有の親しさがそこにはあった。それを肌で感じ、ナオキはふっ、と顔に笑みを浮かべる。洞窟の中は外の雨嵐で凍えるように寒いが心は暖かった。

「だいたいですねケンヤ、ぼくは前々から言いたかったが君には主語がない。突然慣れたか？と聞かれても何のことか意味がわからないですよ」

「それくらい汲み取れよ…… ったく、これだから頭デッカチは」

「なんですと？」

「ま、まあまあ」いつものお決まりのように2人の間に割り込みながらナオキはケンヤに話しかける「あれだよ、えー、僕は慣れたよもう床が平坦で特別臭かったり危険じゃなかったらそれだけで寝れるし」

召還された直後の冒険は泣きそうだった。見慣れぬ世界に生まれてはじめての野宿。しかもそれは星空の下に森の中、といったロマンチックなものではなく得体の知れない生物の奇声や刺されると卵を植えつけられるような羽虫が飛び交うジャングルの中だ。“勇者の加護”を授かりにいった旅的一幕。もう3年も前の出来事だ。それについて懐かしく思いを巡らせているとケンヤがへっ、と笑う。

「バカ、オレが聞きたいのはそんなんじゃないよ」

その声はどこか乾きを含んでいるような気がして、ナオキはケンヤの顔を見た。

ケンヤは疲れきった、しかし顔には笑みを浮かべながら自分の手の平を見た。傷の多い、タコのある無骨な指先。

「今日もさ、随分殺^やつたよな」

「ケンヤ？」

ナオキはその言葉に戸惑う。

「……そうですね」

アライスは冷静に、中指で眼鏡を押し上げながら相槌を打った。洞窟の入り口付近に座ったアライスを、月明かりと滝のように落ちる雨が黒い影絵に変えていた。

「彼らもだいぶ疲弊してきましたね。昨日今日と倒してきた軍兵は質が落ちていくように感じました。装備にしても錬度にしてもあきらかに2ヶ月前より悪くなってきた。我々が、人間が、ここまですぐで戦況を押し返してくるとは想定していなかったのですね」

「やっぱりおまえもそう思うか？ 奴ら、少しづつ弱ってきている。」

ビフレストを解放しにいったときみてえな、こう、化け物中のバケモノみたいなヤツが出てくるのが少なくなってきた」

「ええと」ナオキは2人の会話に少し遅れてつづく「近衛兵のことだよな？ あのゆのちゃんとエレノアが倒してくれたやつ」

「そうですね、近衛兵。情報によれば“レヴィアタン”と呼ばれる魔王近衛部隊の戦士のようなですね。魔族の中でも特に戦闘に特化して生み出されたエリートですね」

「エリート？」ナオキはその言葉に疑問符をあげる「魔族でエリートって人間に近い姿をしてるんじゃないの？ あいつらはとても人とは言えなかったけど……」

「それはあくまでも人間が不明瞭な情報を元に作成した憶測ですよ」アライスはナオキの方に視線を向けたのがわかった「広く周知されていることが、真実だと思わないほうがいい」

「確かに」

うん、とこれまでの戦いの出来事を頭蓋の天辺のあたりで思い浮かべながらナオキは頷く。

ナオキたちはこの世界に来てから、ずっと予想を裏切られるようなことばかりだった。ファンタジー世界は夢と冒険に満ち溢れていたか、否。レベルが低いうちは死ぬような出来事に遭わなかったか、否。ピンチになったときや誰かを助けないといけないときに奇跡は起きたか、否。この世界はいつでも、どうしようもなく公平かつ平等だった。人にも魔族にも肩入れなしの死ねば終わりのハードコアゲーム。

「そのことについて、これもぼくの「憶測」にしか過ぎないんですがね……」

アライスは少しだけ躊躇するように身をよじりながら喋った。

「言ってみるよ」

「うん」

「……魔族は人間が思っているほど、人から離れていないのかもしれない」

「人から？」

「ナオキ、魔族の生い立ちについては理解していますよね」

「ああ、うん」脳裏で知識を反芻する「昔、大きな戦争があつた。^{ウォー・エイジ}

それで勝ったほうは地上に繁栄した。そして負けた方は自分たちの神様と一緒に海に消えていった。」

「そう、片方が人間で、片方が今は“魔族”と呼ばれる存在です。地上人への復讐と地上への回帰を望む、人間の敵」

それが召還された当事のナオキたちにされた“魔族”の説明だ。

「しかし」アライスは影になったまま続ける。

「しかし、実際に彼らと戦い、その印象は正しかったですか？実際に刃を交えた彼らは、絶対的な人間の敵でしたか？」

「……」

ナオキはその言葉に考え込む。いや、常に“魔族”という存在をこの目で見てからナオキの頭にはその問い掛けがあった。ただ日々の目まぐるしい状況に対応する為に、脳みその書庫に放り込んで放置していたままだったのだ。

「確かに、人間の強大な敵であることには変わりはないでしょう。しかし一般的に囁かれるような、冷酷で血も涙もない異形の怪物であるとはぼくはどうしても考えられないのです」

稲光がアライスの横顔を照らす。その顔にはわずかに苦悩が表れていた。

「確かに、大きな隔たりがあるのは間違いない。しかし、何か、何らかの方法で、その溝を埋めていくことは出来ないのか」

搾り出すような言葉は最後は吐息にかわり、自嘲げな呟きにかわった。

「……何か、何らかの方法で、こんな言葉をぼくが口に出すとはね」
「アライス……」

ナオキは何も言えなくなった。

アライスは魔法使いの国エルムトにおいて最高の能力と知識を身に付けた最年少の賢者だ。

その知識は決して机の上だけのものではなく薬草の見分け方から大多数の敵を労少なく倒す方法など、冒険の役に立つ知識から相手を陥れる計略の類まで網羅している。ナオキたち6人の勇者が誰ひとり欠けることなく今まで戦えているのはアライスの頭脳に他ならない。

だからこそなのだろう　これまで冷静沈着にチームを支え続けてきた目の前の友人が悩み苦しんでいることにナオキは驚き、そしてそれに気づけなかった自分を恥ずかしくなった。

「昨日殺した奴さ、ほらあのでけえの」
ぼそり、とケンヤが呟いた。

「なかなか“グングニル”が抜けないから足で胸板を踏みつけて、こう、引き離して穂先を抜いたんだ。わざわざ槍を抜くために加護の力を使うのももったいないしさ　そしたらさ」

ケンヤがぼろぼろになった学ランのポケットから何かを放り出す。

「……彫像？」

それは汚い布に包まれた、小さな彫像だった。地上にある石ではない、たぶん海の中の石を彫って作ったものだ。

出来はあまり良くはないように見えた。辛うじて、女性を模ったものだと分かるくらいだ。先の尖ったもので削られた髪の毛のライン、小さな顔、目を見立てて開けられた不揃いの穴　ずっと見ていたら呪われそうに感じた。

「その、オレの殺したヤツの懐から出てきたんだよ、槍を抜いたときの弾みと一緒にさ、鎧の隙間に挟み込んでたんだろな」

沈黙が降りた。

遠くに聞こえるスコールの音が洞窟の中に満ちる。

「なんの像なんだろうな、それ」

ぼつりとケンヤが呟いた。

くしゃくしゃ、音を立ててと横にいるケンヤが動く。

頭を掻いているようだった。ケンヤは何かを深く考えるときそんな風にする。

「オレにはさ、それが、こう、そいつのヨメとか、オンナなんじゃないのか。それを模ったもんなんじゃないのかって思えてならねえんだ。もちろんさ、もちろん違うかもしれない。俺達とあいつらの文化とか風俗？とかそーいうのが違うってのはよくわかってる。俺の考えてるようなものとまるきり違うかもしれないーってのも、思っ」

「……」

「やめなさい、ケンヤ。考えてはいけません」

アライスが嗜める。

「それを思い悩むのは、魔王を私たちの手で倒してからにしましょう……考えるなどと言いません。ただ、深い懊悩は刃を鈍らせる。特に君が今抱えているその“考え”は、君自身を滅ぼしかねない。ぼくはそんなのは御免だ」

ケンヤは空腹の狼のようにうめいた。くしゃくしゃ、と髪をかきむしる音が激しくなる。

苦しげな声が洞窟の中に低く響く。

「分かつてる、頭では理解してるんだ……今オレが考えたところでなんの意味がないことくらい！でも、浮かんでくる、メシを喰うたびに！夜、目を閉じるたびに！頭の中で考えちまうんだ！！」

「ケンヤ！」

たまらずナオキは叫び、隣に座るケンヤに駆け寄る。鼻先すら見えない暗闇の中、ケンヤはこの2年で筋骨逞しくなった身体を縮こまらせ、頭を抱えていた。

学生服に包まれた身体は震え、こわばっていた。

「落ち着いて、ケンヤ。今は考えちゃダメだ、何も思わなくていい。目を閉じて、ゆっくり息を吸うんだ……いい？ほら……」

ナオキはケンヤの背中をさすり、ゆっくりと言ひ聞かせるように言葉を吐く。

昔、何か悲しいことがあって泣いたり落ち込んでいたときに姉がやってくれたことだ。ナオキはそれを真似する。

「うつ……」

うめきながらも少しケンヤは落ち着いたようだった。身体の震えは止まりつつある。

様子を伺っていたアライスの影が安堵の息を吐いた。

限界が近づいている、ナオキはそう感じた。考えてみればそれは当たり前のことだ。なんの予告もなく、一方的に「こちら」に呼び出されて以来2年、自分たちを取り巻く状況は常に過酷で、狂って

いた。

知らない世界、知らない人々、知らない価値観、知らない歴史、知らない戦争。

それら全ての未知のものが全部降りかかってきた　いつの間にか「勇者」という知らない人間になってしまった自分たちに。

そしてそれら全てを自分たちは背負ってしまった。拒むことは出来なかった、自分たちを求め、助けを乞う人々があまりにも多すぎたから。

勇者　人々の期待を一心に背負い、大陸を脅かす魔族と戦う存在。

それだけならばまだよかった。

しかし自分たち、いや、ケンヤは思ってしまったのだ。これまで斃してきた魔族という怪物たちは、実は“怪物ではなかったのかも”しれない”ということ。自分たちがこれまで守ってきたのと同じ、心がありそれぞれ個人の歴史があり家族があるごく普通な、ただただ生きてきた境遇が違っただけの「人間」だったのかもしれないということ。

（でも、よかった。今ここでこうして吐き出してくれて）

ケンヤは苦痛を自分の中に隠してしまう性分だ、昔からそうだ。

弱音も吐かず苦痛も見せず、いつも誰よりも明朗に豪放であるとする。

それは本当ならとても好ましいだろう。でも今のような常に心身ともにプレッシャーがかかり続ける状況では危険だ。兆候がない。

誰も彼もが人の心や身体の機微を察することは出来ない。苦痛も苦悩も、自ら主張しなければ誰もそれを取り除いてやることはできないのだ。

（彼女は、ゆのちゃんは大丈夫だろうか）

ケンヤの背を擦りながら、ナオキは自分と同じく「こちら」に呼び出された少女に想いを馳せる。

向月ゆの　ボーイッシュな黒髪が似合う、少し冷たい印象の少

女。

彼女は今ナオキたちとは別行動を執っている。人对魔族の現在最大の主戦場たる「鉄の森」で魔法でナオキたちに偽装した騎士と配下のエインヘリヤルたちを率いて戦っているだろう。昼も夜もなく、今こうしてケンヤの背を擦っている合間にも。

ナオキたちには計画があった。その計画の要ともいえる役割は、ゆのがもつとも適格だったのだ。

その役割とはこれ以上なく派手に暴れて魔族の主戦力を釘付けにすること。陽動だ。

そして今その陽動は成功し、効果を発揮している。今ナオキたちが居るスー溪谷は「鉄の森」の後方だ。

この溪谷さえ無事に抜けることが出来れば魔王陣営としてもつとも信頼性の高い旧アリストピア王城。フィンランギイ城はもう目と鼻の先だ。

（彼女は、アライスやケンヤのような苦悩を抱えているんだろうか

）

　　瞼の裏に、最後にあつたゆのの姿が浮かぶ。

5日前の朝。彼女の背後には鬱蒼とした「鉄の森」のシルエットと細く立ち昇る黒い煙があつた。

エインヘリヤルたちに紛れる為に着た板金鎧に青みがかった外套。そこから見え隠れするすつかり馴染みきつた勇者の武具“グラীবールの鉄籠手”に、どこかの誰かが恐ろしいほどの執念をこめて魔族殺しの術法を施した無銘の剣。

それらを身に纏ってアライスから作戦の概要を聞く彼女はいつも通り涼しげで、頼もしかった。

「そう、つまりいつも通りでいいわけね？わたしは狂人。あなたたちは狼。狂人が踊り叫ぶうちに狼はゆつくりと獲物に忍び寄り、狩人が近くにいないことを祈るわ」

笑みをその声に含めながら嘯き、記憶の中のゆのは自分の首を絞

める真似をする。

「心配しなくても大丈夫よ、わたし、こう見えて騙すのは得意なの」
そう言い切ったゆめの顔は笑っていたのか　ナオキには思い出せなかった。

『月』の暦1065年
天候：晴れ　9月1日
13時48分
メルカトル大砂海フレッド・デビス二十四番溪谷　時間は2年
と104日進む。

ユノは自分の中の「闘いをこよなく愛する不定形」が喜び悶えるのを感じた。

いつもは抑え込んでいる黒々とした「闘い」への欲望が、身体の中いっばいに広がりつつあった。

だが今はそれでもいい。この不定形は飼い馴らせない、時には外から出してやらないと檻を壊してしまう。

そう判断し、ユノは瞳を閉じる　次に開いたときにはもうそれは今の自分ではない。

目の前には一杯の砂山とモンスターの集団が広がっている。

それらの異形のモンスターたちがユノを中心に追い詰めるようにじりじりと近づき、包囲していた。

「けっこう久しぶりだな、これだけの数と戦うのは」

ユノはそうひとりごち、ゆつくりと前に出る。

このモンスター達は魔族からの尖兵だ。魔王のマナによって操られ、人を襲うように仕向けられた即席の「妨害者たち」それが人魔戦争下における、モンスターの認識だ。

あくまで魔王のマナの影響によって洗脳状態にあるだけで知能が高まるわけではない。ある程度知能の高いオーガやゴブリンなどの亜人ならば、効率的な襲撃計画を立てたりもする。

それ以外の動物に近いモンスターは人間に対する敵意が何よりも優先されるだけだ。それが一番の脅威でもあるが。

「もう、ここは戦場。そう考えていいのかな」

襲撃のタイミングが明らかに良すぎた。砂海に入ってわずか4時間。ルビィの失敗をふまえても、この広大なメルカトル大砂海で、こんな「戦いに向いた」集団が形成されるわけがない。

魔術を弾き返す特質な皮膚と、圧倒的なタフさを持つ砂海蛇ドゥーラー。

堅牢な外骨格と致死性の毒。そして昆虫特有の俊敏さを持つアイマスコルピオン。

同じく強力な毒と、そして集団の怖さを冒険者に教えてくれる巨大蟻ヴァンジャナギア。

狂気じみた凶暴性と狡猾さをあわせ持つ低級の亜人サイクロプス。これらのモンスターの群れをヒトが相手取ろうと思うと、訓練された武装の充実した兵隊をふたつみつ犠牲にするつもりで投入しなければならぬだろう。それだけ厄介な集団だ。

何者かが 考えるまでもなく魔族たちの仕業だろうが、この砂海に工作を施している。

戦場が作られている。大陸西部でも多くこんな局面はあった。

雲霞のごとく襲いかかるモンスターと、それを盾にして進撃してくる魔族たち。

それに哀れに喰い散らかされる兵士たちと、自分の身を守るので精一杯だった自分たち^{ゆっしや}。

目を閉じればいつでも瞼の裏に浮かんでくる　助けを求める兵士の顔と、その幾つもの死の景色が。

「でも、もうわたしはそれに何も感じないんだ。悲しくも、つらくもない。ただひとつ」

轟。そんな音がした。

それは砂が一斉に蹴立てられた音だ。モンスターの集団が動き出した。その先は一点、ユノひとりだ。

その音を聞いてようやく眼を開く。もうこれで自分自分ではない。ユノは押さえようのない「高ぶり」を喜びに変換し、口から息を洩らす。

ひきつれた笑いが少女の形のいい唇を歪ませた。

「グオオオオオオオッ！！！！！」

一つ目の不潔で狡猾な亜人、サイクロプスの集団が一番最初にユノに到達した。

そのほとんどが腰蓑に棍棒といった武装だったが、中には冒険者の遺留品らしき錆びた銅剣や刃こぼれした斧を構えているものもいた。

サイクロプスの集団は雲霞の如くユノに殺到し、すぐさまその姿を見えなくする。

人間などものともしない跳躍力。地が、空が、視界がすぐさま血走った眼球で覆われる。

もしこの光景を誰かが見ていたなら、もはやその中心にいる少女の生存など露と考えないだろう。撲殺か剣斧の刃でぐずぐずに切り裂かれたか、集団の重みにすりつぶされたか　そう考えるだろう。その少女の正体を知らないものならば。

ぎし、ぎし、ぎし、ぎし……………

蜂球の如く群がった集団の中心で、異様な音が響いている。

それはふたつの武器と、多数の金属がぶつかり、拮抗する異音だ。集団は動かずに停滞している。中心の何かに狼狽するように。

サイクロプスの集団が襲い掛かったのは確かに数瞬前までひとりの小さな少女だった。

左手に嵌めた巨大な箆手がアンバランスな、細身の少女。

だが今はどうだ、そこにいるのは死神だ。少女の形をした死神だ。

死神は笑っている。顔を地面に向け、目を閉じて口を大きく開けて笑っている。

その姿は異様なものだった。腰を低く、尻餅をつく寸前までかがめ、足を大きく、柔軟に開いている。

右手は前に突き出し、その手には“ニザヴェリルの魔術銃”の銃身を握り、左手はその上を交差するように天に掲げられている。

その二つが、サイクロプス達の進撃を止めている。

棒が、剣が、斧が、ユノの差し出した一对の腕に全て止められている。異音の正体は数十の凶器が少女の箆手と魔術銃の特異な形状の銃把を抜けようとして、震える音だ。

しかしそれは徒労のように見えた。

まるで蟻が象に歯を立てているような状況だ。

あまりにも、ユノという少女とサイクロプスの力は違いすぎた。

「ぶれいぼーる！」

少女が、少女の形をした死神が、顔をあげて嬉しそうに叫ぶ。

甲高い金属音が砂海に響き渡る。

数十の凶器を一気に弾き返したユノは、体勢を崩して怯んだサイクロプスの群れに肉薄する。

その手の中にあるのは逆さまに握られた魔術銃だ。特異な　平たい斧のような形状の銃把は鈍器として使えるように設計されたものだ。

それを両手で振りかぶり、大きな目玉を瞬かせるサイクロプスに思いつき振り下ろす。

「ぎゅぐつ」

間の抜けた苦鳴をあげてサイクロプスが吹き飛ばされる。いきおいよく碎けた頭部からリング大の眼球と脳漿が飛び散り砂の上に落ちる。

ユノはそれに構うことなく、わずかに笑みを口元に浮べながらさらに魔術銃を引き寄せ、振り下ろす。

フルスイング、筋骨逞しい亜人の身体がまたひとつ宙空に浮かび砂の上に落ちる。

「……………!!!」

仲間に2匹の犠牲が出てようやくサイクロプスたちが体勢を立て直す。

それぞれ各々が持ち寄った武器を片手に構え、少女を打ち負かさんと動き出す。

走り寄るサイクロプスの数は4。

ユノは笑いを口元に貼りつけたまま暴風のように動き出す。

背後から振り下ろされた錆びた金棒をわずかに体勢をそらして回避し、そのまま流れるように自然な動作で肘鉄突き出し、背後のサイクロプスの臍を突き上げる。

悶絶し、崩れ落ちるサイクロプスの頭を後ろ足で潰して無力化すると、前方から剣、斧、槍とばらばらの武器を突き出し、殺到する3匹にぶつかるように突進する。

少女の背筋が弓のように引き絞られ、体内に液体のように充満する

“勇者の加護”が沸騰する。

「ワンナウト」

少女は冗談めかして呟く。

銃把が振り切られる。剣を振りかぶり、ユノに斬りかからんとしていた1匹が錐もみで回転しながら砂に沈む。

「ツアーアウト」

横合いから突き出された斧を箆手で打ち払い、その衝撃で怯んだ2匹目の顔面に固い銃把を叩き込む。

「ばきん、と首の骨の折れる音と共に斧のサイクロプスは崩れ落ちる。」「スリーアウト、攻守交代っ」

3匹目のサイクロプスが決死の覚悟で突き出した槍を首をそらしてかわし、懐にもぐりこむ。あわてて槍を引き戻ろうとしたサイクロプスに左拳を叩き込み、喉の骨と胸骨をばらばらに砕く。サイクロプスの大きく開いた口からは滝のように血が流れ、その巨軀が膝から崩れ落ちていく。

「さあ、次、次」

瞬く間に6つの死体を生産したユノは変わらず独り言を続けながら前に進み出る。モンスターはまだこの場の唯ひとりの人間を殺さんと周囲で機会を窺っている。

その状況に一切構うことなくユノは手の中の“ニザヴェリルの魔術銃”をくるり、と回す。

銃が「正しい」位置に戻る。固いウォルナット材のグリップを手収め、中折れ機構を作動させ、円筒の装填。手首を振って銃身を真っ直ぐに戻し、人差し指を優しく、撫でるような繊細に引き金にかける。

その一連の動作にはひとつの躊躇いもない。慣れきった、何度も何度も繰り返された動きだ。

「たーまやー」

にへら、と恍惚とした笑みを浮かべてユノは引き金を引く。

箆められた魔術は“炸裂”

空気が衝撃波を伴ってはじけ飛ぶ。

もろに着弾したサイクロプスが苦痛の雄叫びと共に爆裂四散し、その周りにいたモンスターたちが発生した衝撃はで切り刻まれる。ユノは効果の確認をせず次弾を装填し、繰り返し引き金を引く。発射。命中。

単眼の巨人の赤い血、肉片。巨大な蟻の破片、体液、鎧のような

甲殻をもつ大蠍の残骸　全てがすべてごたまぜに、なんの慈悲もなく砂の海の上にばら撒かれる。

「　ああ」

ユノは熱い息を吐く。身体の芯が融けてしまいそうだった。

引き金を引いた指先からしびれるような疼きが身体中に広がっていく。腕、身体、脳髓、爪先。

その感覚が体中に広がり、余韻を残して消えていく。

「……たのしい」

そう呟くユノの眼前の大地が砂を吹き上げて割れる。巻き上げられた砂塵のむこうに見えるのは、細くとがった歪なナイフの群れ。砂海の下に潜んでいたドゥーラーの大顎だ。

爛々と輝く小さな爬虫類の眼が確かな殺意を持ってユノを見据えている。

唾液を撒き散らしながら自分を噛み砕かんとする大きな口を見上げ、少女は暗く笑みを浮べる。

「ねえ、そう思わない？」

ユノは赤々としたドゥーラーの口腔めがけて左拳を撃ち放った。

アリカ、フリード、スコルピオと別れたルビィは自分の選択を後悔しはじめていた。

「グギヤアアアアッ！！！！」

「ツチ！！」

砂の霧を抜けた先で　ルビィはモンスターに囲まれた。

「あの時」に砂塵の奥にみえた数ほどではないにしろ、一人の剣士が相手にするには充分すぎるほど多い。

狂気じみた単眼の亜人　サイクロプスの振るう剣を頭を低くして回避する。

モンスターの振るう剣だけあって、技巧はないが威力と速さは充分すぎる。

大きく剣を横に振ったサイクロプスの懷に飛び込み、双剣を袈裟懸けに振るう。

ぱっ、と赤い血が飛び散り、サイクロプスの赤銅色の胸板に赤い一文字が刻まれる。しかしサイクロプスは少しよろめいただけでそれがどうしたとばかりに強烈な戦意を持ってルビイに撃ちかかってくる。

（くそっ、タフすぎる！）

ルビイは背後から忍びよっていた巨大なサソリ。アーマースコルピオンの尾の一撃を前に飛んで回避し、そのまま剣を振り上げて斬りかからんとしていた亜人の顎に強烈な蹴りを叩き込む。首の骨を砕く感触と共に、身体に無数の赤い筋。双剣での切り傷を負った亜人がようやく事切れる。

「くそっ、勇者め……どこで戦っている！？」

昆虫独特の素早い動きで距離を詰めてきたアーマースコルピオンの一撃を身体をそらしてやり過ごし、胴体と尾の隙間に双剣のかたわれを突き刺す。剣や銃をはじく装甲そのものの大蠍に有効なダメージを与えるにはそうするのが一番効果的だった。

緑色の体液が飛沫をあげて砂を汚す。運良く急所を突けたのか、アーマースコルピオンは壊れたおもちゃのように痙攣し、あおむけにひっくり返る。

「グオアアアアッ」

「……くそったれ……！」

息を吐く間もなく、砂山の上からサイクロプスの集団が飛び降りてくる。モンスターたちはそういった生態なのか、それとも魔王のマナの影響なのか判らないが、砂山の上や中を縦横無尽に行き来できる能力があるようだった。

砂の大地に粉塵と共に舞い降りたサイクロプスたちは顔一杯の眼を血走らせ、ルビィに襲い掛かってくる。

ちっ　と何度したかしのない舌打ちと共にその場を飛び退き、顔の前で双剣を交差に構える。かたわれを上、かたわれを逆手に、攻守を素早く切り替えられるアンテローズ家相伝の構え。

血と油で濡れたシヨールテルの刃が、ぬらりと光る。

太陽が、ちょうどルビィの天辺に来ていた。

「ガオオオオオオッ」

「！！」

深く息を吸い込み、ルビィは砂を蹴立てる。

集団の数は遠くに3。近くに2。武装は徒手と金棒、ハンマーが半々といったところだ。

近くにいた2体が呐喊するルビィを迎えるようにそれぞれハンマーと剣を振り上げる。

だがその動きは“アンテローズの赤薔薇”には遅すぎる　ルビィは体勢を低く、猫科の小動物のように地を蹴って棘付きのハンマーを振りかざすサイクロプスに突撃する。

顔のすぐ前を、振り下ろされたハンマーの質量が通り抜けていく。占めた、相手は目測を見誤った。

振り下ろされた丸太の様な腕を足場に、ルビィは跳躍する。

狙うは顔に寸法の間違いかのように付けられた大きな単眼。眼はどんな生物であれ、急所だ。

逆手で握られた双剣のかたわれが、サイクロプスの血走った単眼を横一線に切り裂く。

感触は、思っていたより硬かった。

「グオッ！？グオオオオオオオッ！！」

サイクロプスが絶叫をあげてくず折れる。ハンマーから手を離し顔を抑えてしゃがみこんでいる。

（こいつはもういい。盲目では動けまい）

ルビィは一瞥をくれてそう判断し、次に控えるサイクロプスに踊

りかかる。

振るわれる剣は重く、そして速い。しかしその動きは乱雑で読みやすいものだった。

「所詮バケモノかつ！」

袈裟に振り下ろされた一撃を易々とかわし、双剣を前に突き出しながら全速力で踏み込む。その様子は興奮した闘牛のようだ。

突き出された2本の角　湾曲したショールの切っ先が剣を振り下ろしたサイクロプスの腹に突き刺さる。貫通、繊維を貫く硬い手ごたえ。

「っ！！」

ルビイはひらり、とサイクロプスに突き刺した両腕を支点に空中に踊る。腹に剣を突き刺され悶絶するサイクロプスの胸板を蹴り一回転する。その勢いで突き刺した双剣が一気に抜け双剣が硬い腹筋から解放される。

腹を刺された上にその切っ先をぐるりと一回転に回されたサイクロプスは腹から臓腑をぶちまけながらくず折れる。

「グオアアアアアアッ！！！！」

遠くにいた3体が踊りかかってくる　中央が槍、左右が徒手。

（いいぞ、私は戦える。やれている）

残る3匹を打ち砕く自分を描きながら、そう確信する。

ルビイにとつて、戦いとは人と人が行うものだった。

王都守護騎士団。それは文字通りランバルディア王都の平和を維持する治安騎士団だ。

凶暴で人に害を与えるモンスターが掃討されている王都周辺では、任務のほとんどが野盗や蛮族、その他国に対してよからぬ企みを算段する人間を叩きのめすことだった。

ルビイはモンスターを相手にした経験が殆どない。2度か3度か、そのうち一回は姿を見ずに終わった　武器庫で有り余っていた爆薬で吹き飛ばしたのだ。

その自覚がルビイの心の内に不安を生じさせていた　王都から旅立ち、今までずっと。

魔族という人間にとって最大の天敵と戦うという緊張と焦燥と一緒にあって、ルビイに重石となつてのしかかっていた。

しかしそれも今ここで終わりだ。自分は戦えている　完全に、とは言わないが、“戦いの家” アンテローズの名を汚さぬには十分に

「来いっ！」

ルビイは叫び、両手の剣を手の中で一回転させる。

その姿は勇ましい。サーコートに風を靡かせ、ケトル・ハットの顴から覗く瞳は蒼く燃えている。

砂海のさらさらとした砂を踏みつける両足は力強く、何者にも屈しない意思を感じさせる　。

しかし、その立ち姿に、その勇ましさ、忍び寄るものがある

ごっ、そんな音がした。それから首の骨が軋む音が。

ルビイは一瞬何もわからなくなる。明滅した視界、頬に当たる砂の細かい感触。綺麗に線を引いたような横一線の空と地平。そこに佇む、単眼の亜人の醜く膨れた足。

（殴ら、れ、た……？）

視界が何かの影で塞がれる。錆びた、棘付きのハンマー。

首を少し上に、そのハンマーの持ち主が太陽に陰になって見える。

（……しく、じっ、た）

その影は、ルビイがはじめに目を切り裂いた盲目のサイクロプスだ。眼が潰れ、顔を赤く染めている。しかしまるで何も問題がないかのように、足元の哀れな敗北者を嘲笑うように顔をこちらに向け

ている。

ルビイは知らなかった。サイクロプスという種族が、非常に鋭敏な五感を持っていることを。そして魔王のマナがモンスターに狂気のような執念と戦意を与えているということ。

眼を潰したところで、足をもいだ程度で、全身を切り裂いたぐらいでは、モンスターは止まらない。

唯一の対処法は息の根を完全に止めてやることだ。慈悲も油断もかなぐり捨て、念入りなとどめを。

そうしなければ、倒したと思った1匹に、自分が息の根を止められることになる。

「グヒヒヒヒッ」

眼が潰れたサイクロプスがいやらしく笑う。

そしてその2本の腕が高々と、太陽を覆い隠すように振り上げられる。

黒々としたハンマーの影が、天から血を流すルビイの頭めがけて今にも振り下ろされようとする。

「ああ、さま

」

そう、眩きながらも、明滅する脳裏に浮かんだのは あの楽しいに笑う勇者の顔だった。

ハンマーが、少女の頭を砕くのに充分な力を持って、振り下ろされる。

ぐしゅっ、と何かが潰れる音が、砂海の空に響いた。

行程1日目? (後書き)

<http://twitter.com/#!/calaaage1emon>

ツイッターです。一応載せときます。

更新したときかに多分おそらく呟きます。

行程1日目？

『月』の暦1065年

天候：晴れ 9月1日

14時00分

メルカトル大砂海フレッド・デビス二十四番溪谷

ぐしゅっ、と何かが潰れる音が、砂海の空に響いた。

ルビィは朦朧とした意識のなかで、突如視界を遮るように現れた銀色の腕を見ていた。

否 その表現はきつと正確じゃない。箒手だ。ドンナーの象徴たる雷と、太古の植物が刻印された無骨な箒手。

その箒手が、それに包まれた腕が、ルビィにとどめを刺そうとしていたサイクロプスの顔面に突き刺さっている。

生ぬるい液体と肉片が、ルビィの頬に降り注いだ

視界の隅でさびた棘付きのハンマーがゆっくりと砂の上に横倒しになり。

それと同時に、遠くの方にいたサイクロプスが変わり果てた姿で倒れ伏しているのは見えた。

いずれも一撃で、身体どこかに穴を空けられて即死しているようだった。

（なにが、起きて ）

呆然とするルビィの耳に、掠れた女の声が囁かれる。

「さあ、起きて」

まるで猫の子でも掴むように首当ての襟首を持たれてルビィは引
つ張りあげられる。

喉が締まってルビィは奇妙なうめきを漏らした。

引つ張りあげられて立たされた背中の人に人の感触があつた。自分と
同じか、それより少し大きな人の像。

ルビィはその正体を横目で見た。

「　　こんなところで死んでる場合じゃないでしょう?。」

ルビィを死の一撃から救つたのは、ユノだった。

絵の具で染めたような白髪に風にはためくことなく垂れ下がった
ポンチョ。赤と白のツートンカラーの防護服。

それらには点々と赤い液体が、血が趣味の悪い絵画のように散りば
められていた。血色の悪い、人形めいた白い顔にも　一瞬ルビィ
はドンテカでの「それ」を想起し、肝を冷やしたがそれは全て返り
血なのだすぐに気づいた。

犠牲者の血。

彼女自身は無傷だ。

「ゆう、しゃ」

「大丈夫?」

ルビィがなんとか頷くと、ユノはルビィを膝枕するように寝かせ、
後頭部をへこませたケトル・ハットを取り払った。

髪の中でまとめられていた赤髪が広がり、その先端から鮮血が滴
り落ち、砂を黒く汚す。

それを視てルビィは気が遠くなった。自分の血だ。

血、生命の証、身体の中を流れる川、心臓を動かす燃料。涸れれ

ば死ぬ、命が無くなる。

身体の奥が凍るのを感じた。

怖い、命を失うのが、怖い　女が流血に強いなど嘘だ。

自分の血が流れて平静なままいられる人間などいない。

（駄目だ、混乱している　）

脳震盪で鈍くなった耳には微かにユノが「頭を守っていたのは幸運だった」「そうじゃなかったら割れていた」と呟くのが聞こえた。

「動かないで、大丈夫。少し痛いだけよ」

ぱち、と留め金を外すような音が頭上で聞こえ、次の瞬間にルビイの視界がかすかに薬品の匂いがする布で覆われる。

何も声を出せないでいる内に手際よくその布はルビイの頭をぐるりと包み込み、出血を抑える。

ぎゅ、と頭が圧迫される。

その瞬間、熱い水に漬かったような感覚だった後頭部が鉄の棒を頭の中でかき回されたような痛みを発する。

「　　！！！！」

あまりの痛みにルビイは声のない悲鳴をあげて身をよじる。

「動かないで」

無常にも目の前の勇者はその身体を抑え、応急処置を続けるようだった。

「痛い？死ぬほど痛い？」身体を抑えるユノの言葉にはどこかおちよくなるような色が混ざっていた「その痛みに感謝することね……痛いのは死んでいない証拠だもの」

何を言っている、と言いつ返そうと思ったが再度襲ってきた痛みの波にルビィはぐう、と呻き、身体を抱える。

その後も、ユノは応急処置を 受けてる側のルビィからすればわざと痛みを長引かせているようにしか思えなかったが。続け、あとの本格的な処置はアリカに任せる心づもりのようだった。

「よいしょっ」

その掛け声とは裏腹にユノは軽々とルビィの身体を背負い、砂の溪谷を歩きはじめる。

天辺にあつた太陽はいつの間にか、まるで砂の大地を歩く唯一の人間と勇者を見守るかのようにその背中を照らしている。

強烈だった日の光が、少しだけやわらぐ。

その光の中をユノは無言で歩く。

「……ふがないな、私は」

しばらくの沈黙ののち、ぽつりとルビィがそう呟く。

その言葉には自虐が含まれていた。

「喋らないほうがいい、傷に触るわよ」

ユノは淡白にそう答える。血糊に汚れたその顔にはもう「闘い」で得た興奮はない。

しかしその言葉を見捨て、ルビィは押し殺すような声で言葉を吐く。

「……私は騎士だ。主に忠誠を誓い、民を守り、国と世の平穩の為に戦う 民を、戦えぬ人を守る。それを為す者だ。そしてその一団を束ねる者でもある」

守護騎士団第6隊隊長、ルビィ・ギムレット・アンテローズ。騎士隊長というのは家柄や功績だけでなれるものではない。

実力と前者ふたつに加えて「騎士」という者に対する考え方によりその役職を拝領する。

「騎士」であることを誇るものや、その地位を利用して民を圧しようとするものには決して就くことは叶わない。

「本来ならわたしは、誰よりも前に立ち、誰よりも最後に倒れなければならない者だ…… そうしなければ守ることなど出来ない。」

「……」

「これまでは、そうしてきた。そうしてきた、つもりだった」

ユノは弱弱しくなるルビイの声を聞きながら、リーネルネで閲覧した彼女の履歴を思い返していた。

自由騎士から真の貴族へと成り上がった「戦いの家」アンテローズ家の三女。最少年の守護騎士隊長。無法者やごろつきから恐れられる苛烈にして華麗な双剣使い“アンテローズの赤薔薇”

それらの称号は決してパッケージだけのものではなく、記録された彼女の実績は輝かしく「無敗」だった。

生まれ、育てられ、戦士として訓練を受けて騎士となり、それを束ねる者になり その過程には一度も敗北の二文字は存在していなかった。彼女の心の内はどうであれ。

「だが、今の私はどうだ とんだザマだ」吐き捨てるようにルビイは呟く「誰よりも早く傷つき、倒れて…… 怯えている」

ルビイの身体は震えていた。数瞬前の死の危機と恐怖が身体に現れている。ユノのポンチョを掴む指先も強く、白くなるほど握り締められて震えている。

「…… こんなことで、こんなところで倒れ、死にかけていて。私は魔族などと戦えるのだろうか」

「……」

ユノは瞳を閉じ、暫く沈黙してから口を開いた。

「くだらない」

少女が顔を上げるのが判った。

ユノはそれに構わず、静かに、砂海の熱い空気に溶け込ませるように静かに言葉を吐く。

「思い悩むだけ無駄だわ、そんな事」

ユノは息を漏らすように笑う。

「ねえ、ルビィ。あなたは、何がしたかったんだっけ？」

「……何？」

「あなたの目的は、一番の目的は……魔族を倒すなんてことだったの？」

ルビィが息を呑むのが分かった。ユノのポンチョを掴んでいた手が緩み、離れていく。

その動きを眼で追いながら、ユノは静かに続ける。

「些細なことでしょう？ そんなこと。そんなもの“過程”でしかない。そうじゃないの？」

「貴様は……！」

ルビィが声を荒げる。前を向き、月のような蒼白い瞳の中に砂海を映しこんでいるユノにはその表情は見えない。だが推測することは簡単だった。少女は激怒している。燦ぶった焚き火の炎がもう一度再燃するように。

ユノはそれを感じ取って、どこかおどけるように言葉を続ける。

「そう、それでいいのよ。ルビィ、思い出しなさい。今、あなたがどうしようもない弱音を吐こうとしている私は」

ユノの脳裏に「あの日」の光景が再生される。血のような雨と熱い泥、金属鎧に滴る不愉快な水の感触、そして 一對の双剣を手に、顔面蒼白でこちらを見つめるルビィそっくりの女性の姿。

その唇が戦慄くように震え、何かを言おうとしている。ユノには

それが何を言っていたのかももう思い出せない。

「あなたの姉を、ダイナ・ギムレット・アンテローズを殺したのよ」
「……！」

衝撃があつた。ルビィがユノを突き飛ばしたのだ。

ユノは隣の赤髪の少女に視線を向ける。

予測どおりルビィの瞳には、いや、その小柄な体中に怒りが満ちていた。純粹な、どこまでも真っ直ぐな突き刺さるような怒り。瞳の中で蒼い炎が燃えていた。

「わかつている……！そんなことは、わかつている……っ！……貴様などに言われなくても、貴様などに……！」

搾り出すように声を荒げてそう言い、ルビィは自分の足で歩きはじめる。

ふらふらと、水のように細かな砂に足をとられそうになりながらも、歩いている。

ユノは遠ざかるその姿を見て今度こそ小さく　ルビィへと向けた時とは違う種類の笑みを浮かべた。

（そう、それでいい）

ユノは心の内で呟く。

（私たちの間に信頼関係なんて必要ない　敵のままでいい。）

ふと視線を向けた太陽が、雲に隠れようとしていた。

世界がわずかな時間だけ熱を失う。ドンナーの瞳が閉じられる。

（敵のまま強くなって、魔族も魔王もみんな一緒に片付けて　そ

して終いに)

そうなれば、ユノは必要ないものとなる。

この世界の危機は去り、少なくとも2000年は平穏でマトモな人間の世の中が訪れる。

勇者は神の遣いではなく過去の英雄へと立場を変え、多くの人に慕われながら永い寿命が尽きるまで生きていく 大切な誰かが逝ってしまった後も、異世界にたった一人だけで。

ユノはそんなふうにはなれないし、なりたくもない。そんなことはまっぴらごめんだった

「私を、殺して」

その呟きは、砂の海に落ちて消えていった。

『月』の暦1065年

天候：曇り 9月1日

19時32分

メルカトル大砂海中間中継地点『ギルドベースキャンプ』

日が地平線の向こうに姿を隠し、世界が闇に包まれる。

その移り変わりと共に灼熱の砂海は徐々に温度を下げ、厳寒な荒海へと姿を変える。

それに耐えて次の朝日を迎えるため、人は着込み、食べる。

そこには普通の人間も、神の加護を受けた超人にもなんら違いはない。

「さー、みなさん！出来上がりましたよー！」

半人半獣の少女、アリカがにこやかに笑みを浮かべながら天幕か

ら出てくる。

防寒用のコートの上に定食屋の娘、といった風情のエプロンと、可愛らしくデフォルメされた猫が刺繍された厚手のミトンを身に着けている。

アリカが運んできたのは湯気を立てる大鍋だ。

ユノは、ん、と返事をしながら“ニザヴェリルの魔術銃”の手入れを中断する。

地面に敷いたブランケットの上に取り外した銃身を置く。歪みひとつない綺麗なパイプの瘦身には、無数のルーンが刻まれている。

ミスリル材用のオイルで汚れた手を布で拭き取り、大鍋を運ぶのを手伝う為に立ち上がる。

「いい匂い……メニューは？」

「インベルベークンとカボチャのシチューですっ！」

暗闇を照らすような焚き火の周りにはめいめいが思い思いに砂海の一夜を過ごしている。

スコルピオはユノと同じように火の番をしながらビブリオを読み、何事かを地面に置いた羊皮紙の帳面に書き込んでいる。

フリードとルビィは焚き火から少し離れたところで何かを話し込み

正しくは苛々としたまま無言のルビィにフリードが氣遣って話しかけているようだ。

あまりのその必死さに横目で見つめていたユノの頭には「犬」という言葉がぼんやりと浮かんでは消えていた。

「あーほ、ほらほらルビィ！ご飯だってよ、お腹すいてるだろう！？ね、ルビィ！！」

「……わかってる、大きな声を出すな」

「あ、よし！ルビィが５時間ぶりに喋ってくれたっ！！よしよし行こうさあ行こう」

「引つ張るな……クソ、頭痛い……」

アリカと同じく防寒用のコートを着込み、頭に真新しい包帯を巻いたルビィがフリードにずるずると引きずられてくる。

サイクロプスにやられた頭の傷はアリカの“治療”で跡形もなく消えたものの打たれた衝撃はそのまま残ったようだ。

ユノとスコルピオは自分で皿にシチューを掬い、対面に座ったフリードとルビィにアリカが皿を渡しに行く。

「はい、どうぞ！」

焚き火を挟んだユノの対面に座ったルビィにアリカがシチューの入った皿を渡す。

「……ああ」

仏頂面でその皿を受け取ったルビィだったが、空腹と横に定位置のように腰掛けたフリードの熱い視線に耐え切れずに掻きこむようにシチューを食べだした。そんな横でアリカがにこにここと笑っている。

ユノがそれをぼうつ、と見つめていると横にいたスコルピオが耳打ちするように話しかけてきた。小さな声だ。

「ユビキタス、彼女と何かあったのですか」

ユノはじろり、と半眼で横に座る少年の顔を見た。少女と見紛う美少年。そう言ってしまう容姿を右眼の下に入れた蠍のタトゥーが台無しにしていた。

スコルピオはユノの視線を気にする様子もなく、これまた容姿に不釣合いな胡散臭い笑みを浮かべている。

人を安心させる気のない、謎めいた微笑みだ。

「別に何もないわ、あなたが興味あるような面白いことはね」

「おや、これは酷い。それでは僕がまるで噂好きのスパイのようではありませんか」

「面白い冗談ね、おひねりはいるかしら」

「いや、すいません。その左手に持ったダガーは出来ればしまつて下さい。いや、振りかぶらないで下さい死にますから」

はあ、と呆れたため息を吐いてユノは左手に持ったダガーで石のように硬いペテシャンサス（大陸に広く生息する無毒のヘビ。高い温熱性を持ち、寒冷地で重宝される）の干し肉をスライスする。本来なら炙ったり水で少しづつふやかしながら肉厚な刃物で突き碎いて食べる代物だが“勇者の加護”で強すぎる腕力を得たユノはバタ―のように切裂くことができる。

基本的に戦い嫌いなアリカに唯一褒められる異能の使い方だ。

「……それで？何を聞きたいのかしら」

しゃり、しゃり、とダガーで干し肉を切り分けながらユノはめんどくさげにスコルピオに話を促す。

スコルピオはへら、と笑った顔をわずかに引き締めるとさらに声を潜ませて言った。

「……ユノ・ユビキタス。僕は監視者としてあなたの監視を行っていた時期があった。その過程で、ある程度あなたという存在の能力と、してきたことを知っている。それを踏まえたうえで聞きたい」ユノは黙したままダガーを動かし続ける。

「……今回の戦い、あなたに勝ち目はありますか？」

「意味のない質問ね、やつらの戦力もわからないのに答えられると思う？」

そっけなくそう答えると少年を拳を手の前に持ってきて笑った。

「ふふ、何も完璧な正答を求めているわけではありませんよ。単なる、雑談の延長だと思ってくださいよ、気楽なね」

「……その雑談には台本があるんじゃないの？あなたには」

「やれやれ、どうにも信用がないですね、僕は」

そう悲しげなふりをしてかぶりを振るスコルピオを半眼で見つめながら、ユノは適当な答えを探す。

探すまでもなく、答えることは簡単だ。私には無理です、ごめんなさい。そう答えることはすぐにでもできた。

しかしそれはスコルピオの背後の人物、つまりはランバルディアの王ラヴェルのことを考えれば口に出来ない言葉だった。

ラヴェルは冷酷で、残忍な。そしてこの世界では数少ない「勇者」という存在になんの感慨も抱かない男だ。

もしユノが、勇者という「ランバルディアの武器」が自分に逆らえばすぐにでもユノを抹消しようと動く筈だ。

黙って殺される気は毛頭ないが、そんな状況に進んで首を突っ込もうとするほどユノは自暴自棄なわけじゃない。

そんなことを考えながらもユノの思考はスコルピオの問いに答えようとしていた。

まず事実として　ユノは人魔戦争で戦場を駆け回っていた「向月ゆの」より弱くなっている。確実に。

そう感じる理由は様々だ　まず勇者という存在の強さの元である“勇者の加護”が封印されている。

『世界の停止』やドンテカで炎の巨人と戦ったときに歌った『死の行進』　歌い続ける限り無敵となることができる。は過去に与えられた能力からすれば残滓にしか過ぎない。

今のユノに残されたのは加護の力による再生能力と怪力。そして前者のふたつの能力のみだ。

（そして、武器がない）

ユノに与えられた勇者の武器　『勝利の剣』は強力な魔族殺しの武器であり、心強い相棒だった。

『加護の地』を守護する神官たちからすればそれはナオキに与えられた『ラーヴァティン』や『フリッグの外套』ケンヤに与えられた

『グングニル』より数段位の低いものらしいが　ユノにはそんなことに興味はなかった。

『勝利の剣』も同じくユノの手元がない。深くは知らないがスヴァルトアルフヘイム　ダークエルフたちが棲もう隔離された世界に封印されているという。

今こうして魔族たちとの戦いに赴いたユノの手元がない理由は考えるまでもない。

（そして……これが一番の理由）

それは、ユノが「向月ゆの」ではないということだ。

特別な意味があるわけじゃない。ただ、自分は違う。「向月ゆの」ではなく、ユノ・ユビキタスなのだ。

人の為に傷ついて戦って、「勇者」という人間に向けられる期待に無思慮に応えていた「向月ゆの」は2年前のあの村で死んでしまった。

自分はもはや勇者の「向月ゆの」じゃない。かつて勇者だった少女の残骸だ。

残骸は誰がどうしようと残骸でしかない。狂気が、諦観が、虚無が正気や熱意や希望を上回ることなどありえない。

「どうです？ユノ・ユビキタス。答えはでしたか？」

埋没しそうになる思考が横に座るスコルピオの声で引き戻される。

焚き火の火に照らされた少年の瞳はきらきらと　好奇心旺盛な猫のように輝いている。

（どちらにしろ、答えはいつもそう）

ユノはスコルピオの挑戦的な瞳に応えるように、口の端を上歪

ませる。

「やってみなければ分からない」

「……」

遠くにはアリカとフリードが何やら楽しげに喋るのが聞こえる。

ぱち、と火の中の薪が爆ぜた。

「何が待ち受けてたって、どんなことがこの先で起こっていたって、私は前へ進むことしか出来ない」

前へ進む、それは比喻ではなかった。

ユノはもうドンテカでアリカと暮っていたような そんな場所には戻れない。

それはユノやアリカの心の問題ではなく、人とユノとの間の問題なのだ。

ドンテカに建てられた家 あれが実質、ユノが最後に住むことを許された家だった。

ユノは“契約”で冒険者として暮らす2年間の間で3度自分の家を焼き払われている。

それは今回のような正体不明の存在の仕業ではなく、親族を殺された復讐者。要は人間の仕業なのだ。

テレンス・ナルヴィア・エランシア公爵夫人 エインヘリヤルの騎士の一人、ナーフ・エランシアの母親。

ユノは復讐者の中で唯一彼女だけを覚えている。

ユノが檻に囲まれた馬車で運ばれている間も、ラヴェル王の元で裁判にかけられている間も、セリアが“契約”の書を持って人々に嘆願している間も、彼女だけが血の吐くような金切り声で処刑を叫び続けていた。

ユノはその時以外彼女と遭ってはいない。しかし冒険者となったユノの耳には聞こえてくる。

“エランシア公爵夫人が同じ境遇の貴族たちを組織し、灰かぶり

の勇者をその手で血祭りにあげようとしている”

そんな場所に、そんな人間がいる世界に、自分の居場所などない。それはただ一人だけ“灰かぶりの勇者”に友人として接しつづけてきたアリカも同じことだった。

「……逃げることは出来るのではないですか？彼女を　アリカ嬢を連れて誰もあなたのことを知らない。誰もあなたを捕らえられないところまで逃げて平穩に暮せばいい。少なくとも、あなたならそんなコトは容易なのではないですか？」

「……セリアや、他のみんなを裏切って？」

ふ、とユノは空気を吐き出すように笑う。

「もう、そんなことは出来ないのよ　ツケを溜めすぎた。自分のした事と、自分のしなきゃならないことを先延ばしし過ぎた……もう、たくさんなのよ、過去から眼をそむけることも、逃げることも」
ユノはそういう終え、立ち上がる。

少し喋り過ぎたと思ったのだ　自分の心の内を、目の前の密偵に。

「どちらへ？」

「少し夜風にあたってくるわ。何かあつたら呼んで頂戴」

その言葉にスコルピオは特に引き止めることもなく頷いた。

「わかりました。」

無言でユノは頷きかえし、側においていた“ニザヴェリルの魔術銃”を手にとつて踵を返す。

「……ユノ・ユビキタス」

しばしの沈黙のあと、背を向けたユノにスコルピオが呼びかける。

「何？」

「これは、杯の蜜酒でもエルムトの魔法使いでもない、僕だけの言

葉です」

「・・・・・・？」

何がいたいのかわからず、ユノは振り向いたままの姿勢で首を傾げる。

スコルピオは焚き火の方を向いたままでその表情は見えなかった。
「もちろん、信用してくれとか何かをしてくれとか、そんなことは
言いません……僕とあなたはどうにも悪い出会い方をしてしまいま
したからね」

薄暗い自分の部屋。ベッドに横たわる守るべき友人。その横に佇
む素性の知らない黒い影。

それはどんなに甘く見積もったって、味方や信頼できる人物と出
会うようなシチュエーションではない。

その時のことを言っているかと思ひ、ユノは黙って次に続く言
葉を待った。

「僕はね、あなたを助ける為に、この任務に志願したんですよ。あ
なたの旅に続き、監視をするという任務にね」

「……………そうなの？」

「少し苦労したんですよ。その任務が“杯の蜜酒”の内部でおおや
けになったときには既に誰が行くのか決まっていましたからね

名前は忘れましたが、非常に有能で、愛国心に溢れた魔術師でした
よ……あなたに対してだって一定の理解は持っていたようですね」
「それで？」

「正面から話をしてもらってもこれは自分に与えられた任務だからと突っぱ
ねられるのはわかっていましたから……マジメでしたからね、
彼。だからその、少しばかり言うことを聞くようにしてもらったん
ですよ。組織のアジトがどこにあるのか忘れちゃうような方法でね。
……あ、誤解しないで下さいよ。けっこうみんな使う手なん
ですよ。まあそのお陰で組織内はいつも殺伐としたムードなんです
がね」

「へえ」

ユノは生返事を返す。それ以外になかった。

“杯の蜜酒”の内部事情に興味はないし、どう聞いても面倒な話を聞いているようにしか思えなかったからだ。

「まあそんなこんなで幾つか内部工作して書類改竄なんかもして

僕は彼に成り代わって今ここにいます。報告なんかは彼の文体を真似して送っています。バレたら縛り首でしょうね、僕は」

そう言うては、ははは、と軽く笑うスコルピオをユノは呆れた視線で見つめる。

「何故そうまでして？一体何がしたいの？」

「僕は、彼では出来ないこと……僕にしか出来ないことをしにきたんです。あなたに対しても、あなたがこれから直面するであろう出来事にもね」

「………いったい何を知っている？」

ふふふ、とスコルピオはわざとらしい調子で笑う。顔は既にこちらを向いていた。

だがどんな顔をしているかわからない。焚き火の光が顔に暗い影を落としていた。

「今、あなたに話してもただのたわごとにしかなんこえません……ただ、僕があなたの旅についていくことで、状況は利のある方向に傾いていく、それだけは、確実です。」

「………やっぱりあなたは信用できないわね」

ユノは首を振り、焚き火から離れていく。

これ以上何を聞いてもはぐらかされると思ったからだ。

「いやぁ………すみませんね。僕は、僕はこんな煙を撒くような話し方しか出来ない。そんな人間なもので」

ぽつり、とユノが去ってからスコルピオは言葉を続ける。

その瞳には焚き火の赤い炎と、それを挟んで話を続ける3人の姿が幻のように浮かんでいる。

「ただ、僕は、僕だけは」

その瞳が細まり、次第に何も見えなくなる。暗闇が世界に降りてくる。

「あなたを助けなければならない　それだけは、真実なのですよ。ユノ・ユビキタス」

『本隊、応答せよ。こちらスペクター、応答せよ』

ゆるく、煙のようにたなびく風に揺られながらも、その声は明瞭に相手に届いていた。

ユノ達が今夜の寝床としたキャンプから離れた　小高い丘がある。

それは例に漏れず砂で形成されたもので、高く積みあがっていた砂山が風に永く晒されて薄く広がったものだ。

その丘は溪谷の谷間にあるキャンプからは視認することは出来ず　その上に何があるのかも知る術はない。

何者かが広大な砂の丘に同化のように腹這いに横たわり、闇の中からキャンプの様子を伺っていた。

その人物の手首には怪しく輝く球を嵌めた機械が装着されており、それが遠くに離れた何者かに通信を送っていた。

『本隊、聞こえるか、応答せよ』

『聞こえている。間違えているぞスペクター、我らをもつ本隊と呼ぶな、これからはリーグ（同盟）と呼べ』

『諒解、失礼しました。応答せよ、リーグ。状況に変化あり』

闇に隠れたその人物は、ふ、と笑いを声に含ませ大きく輝く黄色い瞳を歪ませた。

『報告せよ』

『目標が動き出しました。奴一人だけ、光のない方向へ去っていくのが見えます。』

『気づかれたのか？』

『いいえ、そういった様子はありません。油断しきっている、まるで太りすぎて動けなくなつたクラゲみたいだ。』

彼のその“人間にはわからないジョーク”にぐはは、と粗野な声で笑いが起こつた。通信先の人物の笑い声だ。

『いいぞ、諒解した。貴様はそのまま偵察を続ける。キャンプに不審な行動がないか見張っておけ……全員、聞け！』

闇に包まれた砂海に、古びた伝声管を通したような声が響き渡る。それは人間には聞こえない。闇に潜む彼らだけに聞こえる声だった。

『リーグ、今こそ襲撃の時だ。我らの真実の任務が今このときより始まる。アグニ、ヴァールターは隊を率いてヤツを包囲せよ。ドニ、イーブラーはモンスターを集める、ありつたけ、キャンプの連中が骨ひとつ残らないくらいにな。そしてわたし、テレザの隊がヤツに對してチャージをかける。あとは諸君、臨機応変に行動せよ、以上だ。』

闇の中から返ってくる声がある、それは複数で、亡霊のような響きを持っていた。

『アグニ、諒解。行動ニうつル』

『ヴァールター、諒解。我らは奴ノ背後を取ることにしヨウ』

『ドニ、りよおおおおかああアアイイイ、マモノ、イッパイ、

イッパイ集めまあああアアスウウウ」

『イーブラー、諒解。ありったけ？ありったけ、ありったけ……
……ありったけ……！』

『テレザ、諒解。我らはリーグの為に！』

砂を蹴立てて、しかし音を立てずに影たちが砂海を動きはじめる。月の微弱な光に照らされたそのシルエツトは奇怪なものばかりだ。三角の頭部を持ったもの、蛸の触手を髪のようにたなびかせるもの、手足が異様に長く、その全てに尖鋭な刃物をくくりつけて飛び跳ねているもの……。

しかし彼らには共通した特徴があった。

それは彼らが見に包む服だ。闇をそのまま染みこませたような黒い、得体の知れない質感の軽装鎧。それらの肩には金と黒で配色された蛇が剣に絡みついたマークが記されている。

それは彼らが頭部　おおそ頭部と呼べる箇所にとりつけた奇妙な装置だ。二つの先が塞がった円筒に輪を付けたような代物、それは人間の技術にはない“光を遮断する眼鏡”だ。

そして彼らの瞳は全て黄色に光り輝いていた。金色とは呼べない。人に不安と危険の感情を呼び起こす、警戒色としての黄色。

それが鬼火のように砂海の中を動き回っている。幾つも幾つもの目的と意思によってひとつの方向へと迷いなく動いていく。数十の光の線を残して。

『そう、これこそが我らが真にとらねばならぬ任務だ。回りくどい戦術やらなど不要……そんなものは軟弱者がとるべき術よ、そう、人間のような』

闇に潜む群れの中心に一際大きな影があつた。黒い軍装に身を包んだ、馬に乗った騎士。

しかしその背中からは阿修羅のように長い手が6本飛び出し、二つの剣と二つの盾、そして二つの通信球を握り締めている。

その異形な騎士の影が、砂の海に潜む影たちの………リーグの首魁のように見えた。

爛々と輝く一対の黄色い瞳が闇の中に浮かぶキャンプを捉え続けている。

言葉にならない怒りと復讐の意思を籠めて。

『さあ、先王と共に死んだ友たちの仇を執ろうではないか、諸君。行動を開始せよ』

年数・日時共に詳細不明

ミドガルズオルムの領域、あるいは封印された海淵

「へえー、なになに、なにそれいつの間にそんな面白いことになっちゃったの？ねえ？」

『申し訳ありません、国王様………っ！』

そのフロアには多くの人物　異形の民、ミズガルズの魔族たちが立ち尽くしていた。

その誰の表情にも焦りと緊張が見え隠れし、目の前にいる王
チヒロの言葉を恐れていた。

チヒロ一人だけが玉座のようなデザインの椅子に座り、頬杖をつ

いて笑みを浮かべている。

その格好はいつもの黒いドレス姿ではなく縦縞の入ったパジャマにナイトキャップ。ベッドからそのまま飛び出してきたような格好だ。

「状況を説明しますわ、チヒロ様。砂の箱庭をご覧ください」

立ち尽くすミズガルズの士官の間を縫ってミズガルズ軍第2軍団“レヴィアタン”の長、デアシュが現れる。

「あらデアシュ、どうしたの？なんか気合の入った格好しちゃって」チヒロは驚いた　ようなフリをしながらデアシュを指差す。

そう指摘されたデアシュの身体はチヒロの側に控えていたときのドレス姿ではなく、戦闘服然とした黒い装束に包まれている。

きめ細かな魚鱗で作られた軽装のスケイル・アーマーに長い手足を包む光沢のあるアンダーウェア。

その後ろ腰に奇怪な形状をした小剣が束になって挟みこまれ、さらには妖術を施したとおぼしき巨大な剣を背中に担いでいる。

それは“レヴィアタン”魔族軍の最精鋭だけで編成されたエリート集団の戦士の軍装だ。

「茶化さないで下さいまし、チヒロさま……ソーサラー、砂の箱庭を俯瞰図に」

『はっ』

黒い衣に身を包んだソーサラーが呪文を囁き、円卓の中心に置かれた箱庭が生物のように動き始める。

『リンドブルムの魔物使いの部隊が独断で動きだしました　他の

部隊は無力化、あるいはモンスターの群れによって行動を阻害されている模様です」

砂の箱庭にはメルカトル大砂海の立体図と、幾つかのマークが再現されている。

上から見下ろした形のそれには1つの火種　キャンプと白いマーク。そしてそれを取り囲むような動きをした緑色のマークが輝いている。

白いマークは「勇者」、緑色のマークは命令を無視して動きだした「魔物使い」たちの部隊を示していた。

「魔物使い？ああ、出来るだけあの子たちの動きを止めておいてつて頼んだ子達？なんで勝手に動いてるの？」

「彼らは先王たちの信奉者　つまりまだあなたのことを王として受け入れていない連中だったようすわね」

それを聞き、ちらり、とチヒロは周囲の士官たちを見る。

ヒッ、と声をあげて第1軍団“リンドブルム”の隊章を付けた者が身を固くした。

それを特に気にすることなくチヒロはにやにや笑いながら砂の箱庭に向き直った。

「あー、そんな子達いたねー、もういなくなっと思ったのにんで？どうすんの？」

「我々“レヴィアタン”の部隊が事態の沈静にあたります。数は少数、既に幾つかのスラッド部隊を現地に投下しております」

「ルナテイクは？本来ならあの子がやるべきお仕事なんじゃないの？」

ルナテイクは第1部隊“リンドブルム”を率いる魔族の名前だ。魔族軍の正規部隊の長というポジションでもある。

デアシュは淡々と、人形めいた表情のまま続ける。

「ルナティークは先王の近衛にいた男です。今回のようなケースでは信頼に値しませんし、何よりこのような状況では私の方が的確ですわ」

「まあ確かにそうかもねー、デアシュってモロに暗殺ユニットだもんね。」

コストが高いのが難点だよなあ、と口の中で呟きながらチヒロは考えるようなそぶりを見せる。

しかしそのうちまるで子供が面白い暇つぶしを思いついたような表情になって、微笑みを見せた。

愛らしい、そして生きてるもの全てを魅惑するようなインモラルな笑みだ。

「デアシュー、私面白いこと思いついちゃった。部隊の進軍はなし。あ、でもスラッド兵はそのまま残しておいてね」

「彼らを放置するのですか？しかしそれではチヒロさまの計画が……」

「大丈夫大丈夫、結果はデアシュがやることとそれほど変わらないよ。ただ過程がちよつと“たのしい”だけ」

チヒロは椅子から飛び跳ね、円卓の前に降り立つ。羽根のように軽く、重力を無視した動きだ。

突然の王の行動に士官たちは動揺し、後ずさる。円卓の近くにはチヒロ、デアシュだけが残された。

「混乱はね、もっと大きな混乱で押し潰されるの。もとの形がわからなくなるくらい　混乱していたことがわからなくなっちゃうくらい」

チヒロが天に向けて手を伸ばし、ぱちん、と音を立てて指を弾いた。

「そうすれば誰も困らないし、誰も気にしない。だって誰もが自分が何をしていたかなんてわからなくなっちゃうもの。あとに残るのは結果だけ」

静謐な砂の箱庭がざわざわと揺れ、巨大な波が生じる。

箱庭を操作していたソーサラーが必死で制御するがなんの入力も受け付けない。

その変化は現実で起こった、妖術を介さないチヒロの“力”で巻き起こった出来事だ。

『あれは何だ………？』

『砂が宙に浮かびあがって……何かを作っていく』

『………これが現実の出来事なのか？信じられない………』

・！？』

ざわざわと混乱の波が群衆と化した士官たちに広がっていく。その輪の中で、ひとりだけ冷静にデアシュがチヒロに尋ねる。

「一体何を　今度は何を“お創り”になられているのです？」

“砂の箱庭”の上空に浮かび上がったフィギアが幾度かの成型を重ね、その姿を現す。

一対の、鳥ではない直線的な翼　それに取り付けられた4つの回転する羽の機構。そして翼の裏側に配置された奇妙なフォルムの物体。

鈍重な鯨のような胴体からは凶暴な鯨の背びれと、それと直角になるように突き出た一対の小さな翼がある。

顔にあたる部分には瞳は存在せず、虚ろな内部を保護する透明な何か月明かりを反射している。

それはまるでよく出来た模型のように砂海の上空をゆっくりと飛び、火種へと向かっていく。

「これが何かって？でもまあ説明しても面倒くさいしなあー、名前だけでもいい？」

くすくす、といたずらっこのように笑ってチヒロはデアシュに向き直る。

「これはね　人が作り出した何もかもまっ平らにしちゃう空飛ぶバケモノ。どんな人でも戦争に勝てちゃうお手軽チートユニット」

轟、と闇を切り裂いて、怪物が空を航過していく。

「米空軍御達、ロッキード社製局地制圧対地爆撃機AC-130
0　別名“死の天使”」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4347p/>

バッドエンド・ファンタジー・ワールド

2011年8月31日12時30分発行